

# 京都府遺跡調査概報

## 第 62 冊

### 1. 国道478号バイパス関係遺跡

- (1) 今林古墳
- (2) 沢ノ谷遺跡
- (3) 八木城跡第2・3次

### 2. 京都縦貫自動車道関係遺跡

- (1) 桑飼上遺跡
- (2) 山根古墳
- (3) 神宮谷4号墳
- (4) ジンド古墳
- (5) 池ノ谷遺跡
- (6) 木坂古墓
- (7) 七百石遺跡

1995

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。発掘調査については、『京都府遺跡調査報告書』・『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』などの各種刊行物によってその成果を公表するとともに、毎年、展覧会や埋蔵文化財セミナーを開催し、各遺跡の調査内容や出土遺物などを広く府民に紹介し、普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成5年度に実施した発掘調査のうち、建設省近畿地方建設局、京都府道路公社の各機関の依頼を受けて行った、国道478号バイパス関係遺跡の今林古墳、沢ノ谷遺跡、八木城跡第2・3次、京都縦貫道自動車関係遺跡の桑飼上遺跡、山根古墳、神宮谷4号墳、ジンド古墳、池ノ谷遺跡、木坂古墓、七百石遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、園部町教育委員会、八木町教育委員会、綾部市教育委員会、舞鶴市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 国道478号バイパス関係遺跡      2. 京都縦貫自動車道関係遺跡

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 国道478号バイパス関係遺跡			建設省近畿地方建設局	
(1) 今林古墳	船井郡園部町内林	平5.4.26～ 7.15		柴 暁彦
(2) 沢ノ谷遺跡	船井郡八木町玉ノ井沢ノ谷	平5.7.19～ 9.10		柴 暁彦
(3) 八木城跡第2・3次	船井郡八木町本郷	平4.5.18～ 平5.9.24		引原茂治
2. 京都縦貫自動車道関係遺跡			京都府道路公社	
(1) 桑飼上遺跡	舞鶴市桑飼上	平5.6.16～ 6.28		三好博喜
(2) 山根古墳	舞鶴市地頭	平5.7.9～ 10.22		三好博喜
(3) 神宮谷4号墳	綾部市別所町神宮谷	平5.4.19～ 5.14		野島 永
(4) ジンド古墳	綾部市内久井町、金河内町	平5.5.12～ 10.14		野島 永
(5) 池ノ谷遺跡	綾部市七百石町池ノ谷	平5.12.21～ 平6.1.21		尾崎昌之
(6) 木坂古墓	綾部市七百石町木坂	平6.1.18～ 1.21		野島 永
(7) 七百石遺跡	綾部市七百石町東中野	平5.8.2～ 平6.3.4	尾崎昌之	

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

# 目 次

1. 国道478号バイパス関係遺跡平成5年度発掘調査概要-----	1
(1) 今林古墳-----	2
(2) 沢ノ谷遺跡-----	13
(3) 八木城跡第2・3次-----	20
2. 京都縦貫自動車道関係遺跡平成5年度発掘調査概要-----	65
(1) 桑飼上遺跡-----	66
(2) 山根古墳-----	70
(3) 神宮谷4号墳-----	85
(4) ジンド古墳-----	111
(5) 池ノ谷遺跡-----	140
(6) 木坂古墓-----	141
(7) 七百石遺跡-----	142

# 挿 図 目 次

## 1. 国道478号バイパス関係遺跡

### (1) 今林古墳

第1図	調査地位置図	2
第2図	地形測量図(上)及び墳丘測量図(下)	3
第3図	墳丘土層断面図	4
第4図	主体部実測図	5
第5図	主体部及び下層遺構配置図	6
第6図	墳丘下層遺構平面図	7
第7図	土坑実測図	7
第8図	土器棺墓(S K05)実測図	8
第9図	出土土器実測図	10
第10図	S K05土器棺実測図	11

### (2) 沢ノ谷遺跡

第11図	調査地位置図	13
第12図	トレンチ及び遺構配置図	14
第13図	竪穴式住居跡(S H04)実測図	15
第14図	土壙墓(S K02)実測図	16
第15図	出土遺物実測図	17
第16図	石製品実測図	17

### (3) 八木城跡第2・3次

第17図	調査地位置図	21
第18図	調査地地形図	22
第19図	第1・6地点平面図	24
第20図	第1・6地点石垣実測図	25
第21図	第1・6地点S E33実測図	26
第22図	第3地点平面図	27
第23図	第3地点遺構実測図	28

第24図	第7地点平面図	30
第25図	第7地点石垣実測図	31
第26図	第8地点平面図	32
第27図	出土遺物実測図(1) 第1・6地点	35
第28図	出土遺物実測図(2) 第1・6地点	36
第29図	出土遺物実測図(3) 第1・6地点	37
第30図	出土遺物実測図(4) 第1・6地点	38
第31図	出土遺物実測図(5) 第3地点	40
第32図	出土遺物実測図(6) 第3地点	41
第33図	出土遺物実測図(7) 第3地点	42
第34図	出土遺物実測図(8) 第3地点	43
第35図	出土遺物実測図(9) 第7地点	44
第36図	出土遺物実測図(10) 第8地点	45
第37図	出土遺物実測図(11) 第5地点	46
第38図	出土遺物実測図(12) 石製品	47
第39図	出土遺物実測図(13) 木・金属・石製品	48
第40図	出土遺物実測図(14) 春日神社跡	49
第41図	堂山2号窯実測図	52
第42図	出土遺物実測図(15) 堂山2号窯	53

## 2. 京都縦貫自動車道関係遺跡

### (1) 桑飼上遺跡

第43図	調査地位置図	66
第44図	桑飼上遺跡調査トレンチ配置図	67
第45図	1～16トレンチ土層柱状図	67
第46図	トレンチ位置図	68
第47図	土層柱状図	68
第48図	出土遺物実測図	69

### (2) 山根古墳

第49図	掘削終了後地形図	70
第50図	石室及び墓壇掘形平面図	71
第51図	石室主軸方向縦断・横断面図	72
第52図	石室実測図	73

第53図	遺物出土状況図	74
第54図	装身具出土状況図	74
第55図	出土土器実測図(1)	76
第56図	出土土器実測図(2)	77
第57図	出土土器実測図(3)	78
第58図	出土土器実測図(4)	79
第59図	出土土器実測図(5)	79
第60図	出土玉類実測図(1)	80
第61図	出土玉類実測図(2)	81
第62図	耳環実測図	81
第63図	出土鉄器実測図	82
<b>(3) 神宮谷4号墳</b>		
第64図	調査地周辺遺跡分布図	86
第65図	調査地位置図	87
第66図	神宮谷4号墳測量図	88
第67図	神宮谷4号墳石室実測図	89
第68図	神宮谷4号墳石室内遺物出土状況図	90
第69図	遺物出土状況対応図	91
第70図	出土土器実測図(1) 蓋杯・高杯	92
第71図	出土土器実測図(2) 提瓶・甕・椀・壺	93
第72図	出土土器実測図(3) 鉄鏃・刀子	95
第73図	出土玉類実測図(1)	96
第74図	出土玉類実測図(2)	97
第75図	銀耳環	97
第76図	木棺配置想定図	98
<b>(4) ジンド古墳</b>		
第77図	調査地周辺地形とトレンチ配置図	112
第78図	ジンド古墳(A地区)調査前測量図	113
第79図	ジンド古墳(A地区)墳丘測量図	114
第80図	ジンド古墳墳丘断面図	115
第81図	ジンド古墳石室及び墓道実測図	117
第82図	ジンド古墳石室内遺物出土状況図	119

第83図	遺物出土状況対応図-----	120
第84図	奥壁左隅・左袖部遺物出土状況図-----	121
第85図	墓道部遺物出土状況図-----	121
第86図	出土土器実測図(1) 蓋杯-----	122
第87図	出土土器実測図(2) 蓋杯・高杯・壺-----	123
第88図	拓本(タタキ痕・ヘラ記号)-----	124
第89図	出土土器実測図(3) 甗・壺-----	125
第90図	出土土器実測図(4) 提瓶・平瓶-----	126
第91図	出土鉄器実測図(1) 刀・鐔-----	127
第92図	出土鉄器実測図(2) 鉄鏃-----	128
第93図	出土鉄器実測図(3) 鉄鏃・刀子・馬具-----	129
第94図	出土鉄器実測図(4) 轡-----	130
第95図	出土鉄器実測図(5) 鏡-----	131
第96図	銀耳環実測図-----	131
第97図	棺配置想定図-----	132
第98図	蓋杯法量図-----	132
第99図	D地区南トレンチ実測図-----	133
第100図	D地区南トレンチ土坑S K02実測図-----	134
第101図	綾部市域における前期・中期古墳-----	135
第102図	綾部市域における後期古墳-----	135
(5) 池ノ谷遺跡		
第103図	トレンチ配置図-----	140
(6) 木坂古墓		
第104図	祠跡平面図-----	141
(7) 七百石遺跡		
第105図	調査地及び周辺遺跡分布図-----	143
第106図	トレンチ配置図-----	144
第107図	A-1地区遺構配置図-----	145
第108図	A-2地区遺構配置図-----	147
第109図	S H201実測図-----	148
第110図	S H202実測図-----	149
第111図	S H204実測図-----	151



第112図	S H 205実測図-----	152
第113図	S H 206・207実測図-----	153
第114図	S H 212実測図-----	154
第115図	A - 2 地区 S K 02(左)・S K 01(右)実測図-----	154
第116図	A - 3 地区遺構配置図-----	155
第117図	S H 308実測図-----	156
第118図	S H 308竈実測図-----	156
第119図	B 地区遺構配置図-----	157
第120図	S H B 10実測図-----	158
第121図	S H B 11実測図-----	159
第122図	S H B 01実測図-----	159
第123図	A - 1 地区出土遺物実測図-----	160
第124図	A - 2 地区包含層遺物実測図-----	160
第125図	A - 2 地区住居跡出土遺物実測図(1) 須恵器-----	161
第126図	A - 2 地区住居跡出土遺物実測図(2) 土師器-----	162
第127図	A - 2 地区溝出土遺物実測図(1) 須恵器-----	163
第128図	A - 2 地区溝出土遺物実測図(2) 土師器-----	164
第129図	S H 212出土遺物実測図-----	165
第130図	A - 3 地区住居跡出土遺物実測図-----	166
第131図	A - 3 地区溝出土遺物実測図-----	167
第132図	B 地区出土遺物実測図-----	168
第133図	外周溝を伴う住居跡参考図-----	169
第134図	A - 2 地区南包含層石鏃実測図-----	170

## 付 表 目 次

1. 国道478号バイパス関係遺跡	
(2) 沢ノ谷遺跡	
付表1 京都府内における木棺墓出土地地名表-----	18
(3) 八木城跡第2・3次	
付表2 八木城跡出土土器・陶磁器観察表-----	57
2. 京都縦貫自動車道関係遺跡	
(2) 山根古墳	
付表3 山根古墳出土遺物観察表-----	83
(3) 神宮谷4号墳	
付表4 神宮谷4号墳出土土器法量表-----	99
付表5 神宮谷4号墳出土鉄器法量表-----	100
付表6 神宮谷4号墳出土玉類-----	100
(4) ジンド古墳	
付表7 ジンド古墳出土土器法量表-----	136
付表8 ジンド古墳出土鉄器法量表-----	139

# 図 版 目 次

## 1. 国道478号バイパス関係遺跡

### (1) 今林古墳

- 図版第1 (1)調査前全景(北東から) (2)伐採後全景(北東から)  
図版第2 (1)集石検出状況(西から) (2)主体部検出状況(西から)  
図版第3 (1)主体部検出状況(西から) (2)主体部全景(西から)  
図版第4 (1)下層遺構検出状況(西から) (2)土坑(S K05)検出状況(南から)  
図版第5 (1)上面土器取り上げ後の状況(西から)  
(2)土坑(S K05)完掘状況(西から)  
図版第6 出土遺物(1)  
図版第7 出土遺物(2)

### (2) 沢ノ谷遺跡

- 図版第8 (1)遺跡遠景(北東から) (2)調査前の状況(北西から)  
図版第9 (1)調査地全景(北西から) (2)遺構検出状況(上から)  
図版第10 (1)竪穴式住居跡(S H04)検出状況(北から)  
(2)竪穴式住居跡(S H04)検出状況(南から)  
図版第11 (1)土壙墓(S K02)遺物出土状況(北西から)  
(2)土壙墓(S K02)完掘状況(北西から)  
図版第12 出土遺物

### (3) 八木城跡第2・3次

- 図版第13 (1)調査前全景(南東から) (2)調査前全景(右下が北)  
図版第14 (1)調査前全景(北西から) (2)調査地遠景(北から)  
図版第15 (1)第1・6地点 調査前全景(南東から)  
(2)第6地点 全景(左下が北)  
図版第16 第6地点(北東から)  
図版第17 (1)第1地点 全景(北西から) (2)第6地点 土坑群(北から)  
図版第18 第6地点 検出遺構(東から)  
図版第19 第6地点 検出遺構(北から)

- 図版第20 (1)第6地点 土坑S K07(北東から)  
(2)第6地点 土坑S K06(南西から)
- 図版第21 (1)第6地点 井戸S E33(北東から)  
(2)第6地点 井戸S E33(北東から)
- 図版第22 (1)第6地点 石垣54(北西から) (2)第6地点 石垣54(北東から)
- 図版第23 (1)第3地点 全景(北西から) (2)第3地点 全景(北東から)
- 図版第24 (1)第3地点 井戸S E501(北東から)  
(2)第3地点 井戸S E801(北東から)
- 図版第25 (1)第3地点 石臼状石製品(南東から)  
(2)第3地点 曲輪8・9(北から)
- 図版第26 (1)第3地点(北東から) (2)第3地点(北から)
- 図版第27 (1)第7地点 調査前全景(北西から)  
(2)第7地点 調査地全景(右下が北)
- 図版第28 第7地点(北東から)
- 図版第29 (1)第7地点 石垣(北から) (2)第7地点 曲輪4(東から)
- 図版第30 (1)第7地点 曲輪4(南東から) (2)第7地点 曲輪4礎石(北東から)
- 図版第31 (1)第8地点 調査前全景(南東から) (2)第8地点 全景(左下が北)
- 図版第32 (1)堂山2号窯全景(北から) (2)堂山2号窯遺物出土状況(北から)
- 図版第33 (1)堂山2号窯(北から) (2)堂山2号窯窯体断面(北東から)
- 図版第34 出土遺物(1)
- 図版第35 出土遺物(2) 播鉢
- 図版第36 出土遺物(3) 瀬戸・美濃
- 図版第37 出土遺物(4) 青磁
- 図版第38 出土遺物(5) 白磁
- 図版第39 出土遺物(6) 青花
- 図版第40 (1)出土遺物(7) 春日神社跡 (2)出土遺物(8) 堂山2号窯

## 2. 京都縦貫自動車道関係遺跡

### (1) 桑飼上遺跡

- 図版第41 (1)調査地遠景(北から) (2)調査地全景(北から)

### (2) 山根古墳

- 図版第42 (1)調査地遠景(南から) (2)横穴式石室検出状況(南東から)

- 図版第43 (1)石室奥壁部遺物検出状況(南東から)

- (2) 石室奥壁部玉類検出状況(南東から)
- 図版第44 (1) 石室奥壁部遺物検出状況(上から)  
(2) 石室右袖部遺物検出状況(北から)
- 図版第45 (1) 石室左袖部遺物検出状況(南から)  
(2) 石室羨道部遺物検出状況(南から)
- 図版第46 (1) 石室羨道部遺物検出状況(西から)  
(2) 石室羨道部遺物検出状況(南から)
- 図版第47 (1) 墳丘北側墓壇内裏込め土堆積状況(西から)  
(2) 墳丘南側墓壇内裏込め土堆積状況(西から)
- 図版第48 (1) 横穴式石室及び外護列石検出状況(上から)  
(2) 横穴式石室及び外護列石検出状況(西から)
- 図版第49 出土遺物(1) 蓋杯
- 図版第50 出土遺物(2) 杯蓋・杯身
- 図版第51 出土遺物(3) 杯身
- 図版第52 出土遺物(4) 杯身・高杯
- 図版第53 出土遺物(5) 高杯・椀
- 図版第54 出土遺物(6) 提瓶・耳環
- 図版第55 (1) 出土遺物(7) 須恵器甕・土師器高杯 (2) 出土遺物(8) 玉類
- 図版第56 出土遺物(9) 刀子・鉄鏃

### (3) 神宮谷4号墳

- 図版第57 (1) 神宮谷古墳群近景(平成4年度調査時)  
(2) 調査開始状況(平成4年度調査時)
- 図版第58 (1) 石室内遺物出土状況 (2) A4区須恵器出土状況(1)(南西から)
- 図版第59 (1) A4区須恵器出土状況(2)(北西から)  
(2) B4区鉄鏃出土状況(北西から)
- 図版第60 (1) B4区玉類出土状況(北西から) (2) B4区鉄鏃出土状況(南東から)
- 図版第61 (1) B1区土製練玉出土状況(1)(南東から)  
(2) B1区土製練玉出土状況(2)(北東から)
- 図版第62 (1) 石室内棺台出土状況(1) (2) 石室内棺台出土状況(2)
- 図版第63 (1) 袖石抜き取り痕跡 (2) 石室完掘状況
- 図版第64 (1) 奥壁部墓壇裏込め土 (2) 西壁部墓壇裏込め土
- 図版第65 (1) 石室東壁基底部 (2) 石室西壁基底部

- 図版第66 出土遺物(1) 須恵器蓋杯  
 図版第67 出土遺物(2) 須恵器杯身・高杯蓋  
 図版第68 出土遺物(3) 高杯・提瓶  
 図版第69 出土遺物(4) 玉類  
 図版第70 出土遺物(5) 鉄鏃・刀子

#### (4) ジンド古墳

- 図版第71 (1)調査地全景(西から) (2)ジンド古墳(A地区)近景(西から)  
 図版第72 (1)石室内掘削状況(北から) (2)石室壁体出土状況(西から)  
 図版第73 (1)石室近景(北から) (2)石室内遺物出土状況(北から)  
 図版第74 (1)石室奥壁遺物出土状況(北から)  
 (2)奥壁東側A1区遺物出土状況(北から)  
 図版第75 (1)B4区須恵器出土状況(東から)  
 (2)B3・B4区鉄刀出土状況(東から)  
 図版第76 (1)B4区須恵器出土状況(東から) (2)A3区遺物出土状況(西から)  
 図版第77 (1)B2区馬具出土状況(北から) (2)A4区鉄器出土状況(東から)  
 図版第78 (1)墓道部土層堆積状況(東から) (2)閉塞石出土状況(西から)  
 図版第79 (1)墳丘東側断ち割り(盛り土堆積状況(北から))  
 (2)墳丘南側断ち割り(墓壙検出状況(西から))  
 図版第80 (1)墳丘東側断ち割り(裏込め土検出状況(北から))  
 (2)墳丘西側断ち割り(裏込め土検出状況(北から))  
 図版第81 (1)石室内棺台検出状況 (2)石室内排水施設出土状況  
 図版第82 (1)奥壁東隅石室構築状況 (2)墳丘北東部杭跡検出状況  
 図版第83 (1)ジンド古墳石室完掘状況(北西から) (2)ジンド古墳近景(南東から)  
 図版第84 (1)C地区遺構検出状況(1)(東から)  
 (2)C地区遺構検出状況(2)(南東から)  
 図版第85 (1)D地区トレンチ(北西から) (2)SK01遺物出土状況  
 図版第86 (1)B地区トレンチ配置状況(南から) (2)調査地近景(東から)  
 図版第87 出土遺物(1) 杯蓋  
 図版第88 出土遺物(2) 杯蓋  
 図版第89 出土遺物(3) 杯蓋・杯身  
 図版第90 出土遺物(4) 杯身  
 図版第91 出土遺物(5) 杯身・高杯・甕・壺

- 図版第92 出土遺物(6) 甕・長頸壺  
 図版第93 出土遺物(7) 長頸壺・広口壺・直口壺・平瓶・耳環  
 図版第94 出土遺物(8) 提瓶・壺  
 図版第95 出土遺物(9) 鉄鍬  
 図版第96 出土遺物(10) 鉄鍬・刀子・馬具  
 図版第97 出土遺物(11) 轡  
 図版第98 出土遺物(12) 鉄刀・鐸・鏡

(5) 池ノ谷遺跡

- 図版第99 (1)調査前全景(南から) (2)Bトレンチ全景(東から)

(6) 木坂古墓

- 図版第100 (1)調査前風景 (2)調査地内祠跡石組検出状況

(7) 七百石遺跡

- 図版第101 (1)調査前全景(南から) (2)調査前全景(東から)  
 図版第102 (1)A-1地区全景(右が北)  
 (2)A-1地区SD101土層断面(南東から)  
 図版第103 (1)A-2地区全景(右が北) (2)A-2地区北半部(右が北)  
 図版第104 (1)A-2地区SH204(手前)・201(中)・202(奥)全景(北から)  
 (2)A-2地区SH202(手前)・201(奥)全景(南から)  
 図版第105 (1)A-2地区SH202竈全景(東から) (2)A-2地区SK01完掘状況  
 図版第106 (1)A-2地区SK02完掘状況  
 (2)A-2地区SH212土器出土状況(南から)  
 図版第107 (1)A-2地区SH205土器出土状況  
 (2)A-2地区SD12土器出土状況(北から)  
 図版第108 (1)A-3地区全景 (2)SH308(左)・SH309(右)全景  
 図版第109 (1)A-3地区SH308全景(西から)  
 (2)A-3地区SH308竈近景(西から)  
 図版第110 (1)B地区全景(右が北) (2)B地区SHB10全景(北から)  
 図版第111 (1)B地区SDB02甗出土状況(東から)  
 (2)B地区落とし穴状土坑SKB01(東から)  
 図版第112 出土遺物(1)  
 図版第113 出土遺物(2)  
 図版第114 出土遺物(3)

# 1. 国道478号バイパス関係遺跡 平成5年度発掘調査概要

## はじめに

国道478号バイパス(京都縦貫自動車道)建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和50年に京都府教育委員会によって着手された。以後、継続的に実施され、昭和56年以降は財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターに調査業務が移管されて現在に至っている。平成5年度末現在、路線内に存在する遺跡のうち、今回報告する今林古墳の調査中にその付近で新たに確認された園部インターチェンジ予定地内の古墳を除いて、そのほとんどの調査業務を完了した。

今回、調査内容を報告するのは、今林古墳、沢ノ谷遺跡、八木城跡の3遺跡である。今林古墳の調査は、平成5年4月26日から7月15日まで、古墳1基を対象として実施した。古墳に伴う主体部及び古墳の下層から土器棺墓などを検出した。沢ノ谷遺跡は、当初、古墳として調査を始めた。調査の結果、弥生時代中期の竪穴式住居跡や奈良時代の古墓などを検出したため、名称を沢ノ谷遺跡と改めた。調査期間は、平成5年7月19日から9月10日である。八木城跡については、平成3年度に実施した試掘調査の結果をもとに平成4・5年度に本調査を実施した。平成4年度に実施した第2次調査については、「国道478号バイパス関係遺跡平成2・4年度発掘調査概要」で略報したが、平成5年度実施した第3次調査の成果とともに改めて報告する。第3次調査では、八木城に関連する遺構・遺物とともに、古墳時代後期の須恵器窯である堂山2号窯を検出した。また、道路建設に伴い移転した春日神社跡も調査した。調査期間は、平成5年4月7日から9月24日までである。

平成5年度調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同主任調査員引原茂治、同調査員八木政明、柴 暁彦である。

発掘調査は、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施したもので、調査経費は全額同省の負担による。調査実施にあたり、京都府教育委員会、園部町建設課、園部町教育委員会、八木町教育委員会、各地元自治会などの関係諸機関の協力を得た。また、地元有志の方々及び学生諸氏には現地調査及び整理報告業務に参加協力していただいた<sup>(注1)</sup>。感謝の意を表したい。なお、この調査概要は、引原茂治・柴 暁彦が分担して執筆した。

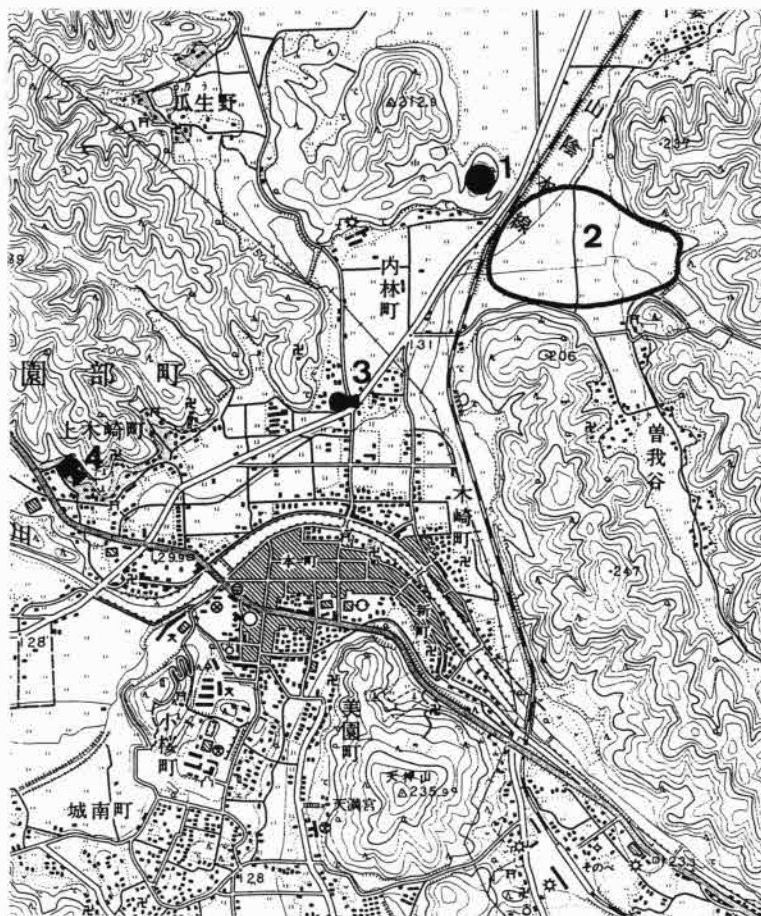
(引原茂治)



## (1) 今林古墳

### 1. 調査経過

今林古墳は、京都府船井郡園部町内林に所在し、J R山陰線園部駅の北側約2.2kmに位置している。調査地付近には古墳時代前期の前方後円墳である園部垣内古墳<sup>(注2)</sup>がある。また、今林古墳の立地する丘陵南東側の眼下の水田地帯には弥生時代終末から古墳時代前期にかけての集落跡である、曾我谷遺跡<sup>(注3)</sup>が所在している。今回の調査地周辺には古墳時代前期の遺跡が比較的まとまっている場所でもある。調査は、平成5年4月26日に開始し、同7月15日に終了した。調査面積は約600m<sup>2</sup>である。

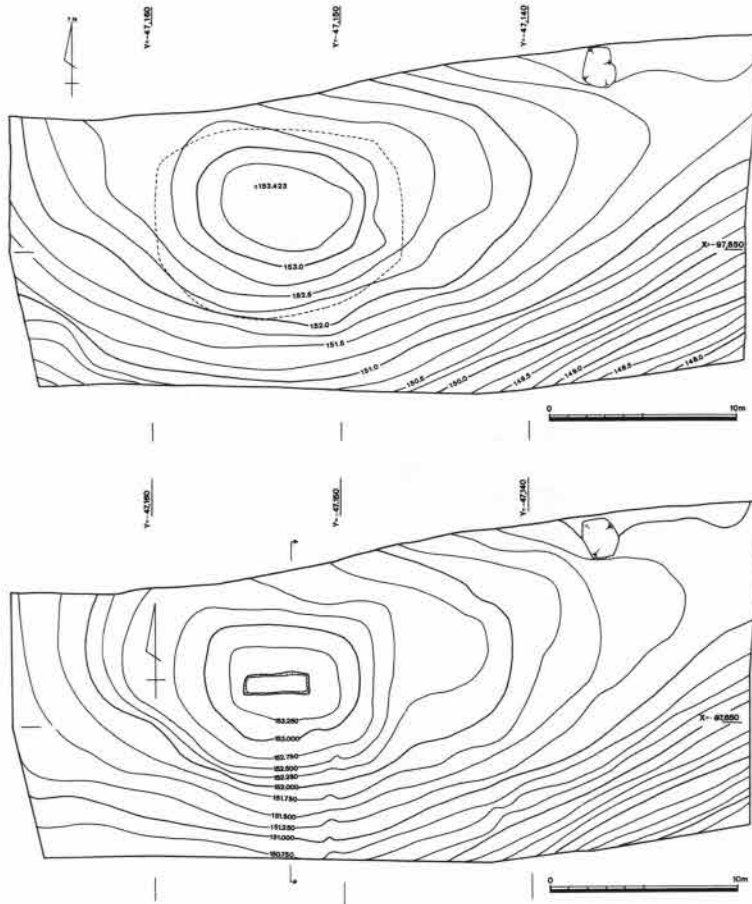


第1図 調査地位置図(1/50,000)

1. 今林古墳    2. 曾我谷遺跡    3. 園部垣内古墳    4. 中綴古墳

## 2. 調査概要

今林古墳は、『京都府遺跡地図』にも登録された古墳であるが、当初は古墳かあるいは古墳状隆起かを確認する目的で調査を開始した。現地形測量の後、墳頂部に設定したトレンチでは、腐植土層を除去した段階で拳大の礫の集石が見られ、これに混じって古式土師器の壺底部などの破片の出土があった。この時点で古墳の可能性が見られたため、試掘から発掘調査へと移行した。作業は、表土及び墳丘流土を除去した後、主体部確認のため、墳頂部に東西約5m・南北約4mのトレンチを設定し掘削した。掘削に伴って拳大の礫の集石を確認し、この集石に伴って破碎された土器が出土した。集石の調査後、これを除去し、主体部を検出した。確認した主体部は木棺直葬である。墓壇内には副葬品などの遺物は何も見られなかった。墳丘及び主体部の調査後、墳丘に断ち割りを入れたところ、墳丘



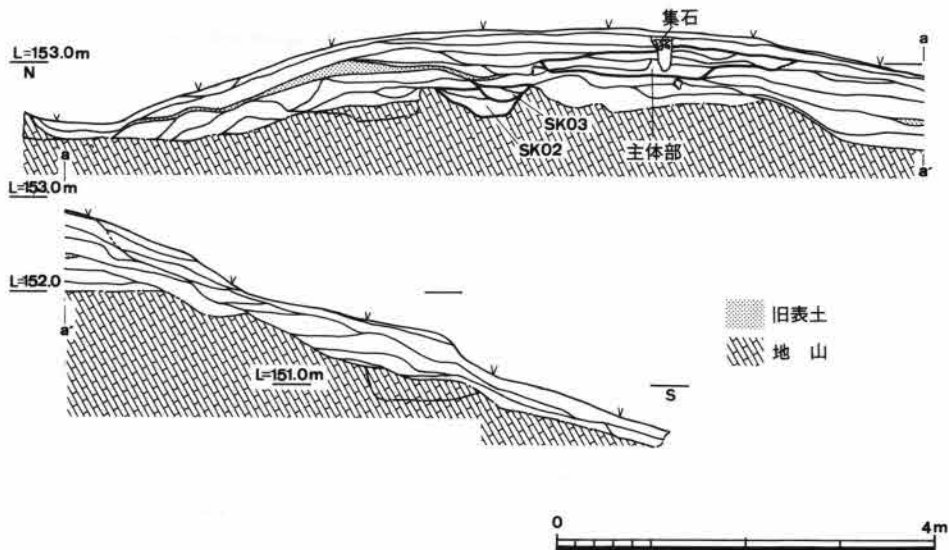
第2図 地形測量図(上)及び墳丘測量図(下)  
(下図の矢印は、第3図土層断面作成位置を示す。)

下層にも遺構の存在が確認されたため、引き続き下層遺構を調査した。これにより確認された遺構は、土坑墓3基及び土器棺墓1基などである。以下に古墳と墳丘下層遺構を詳述する。

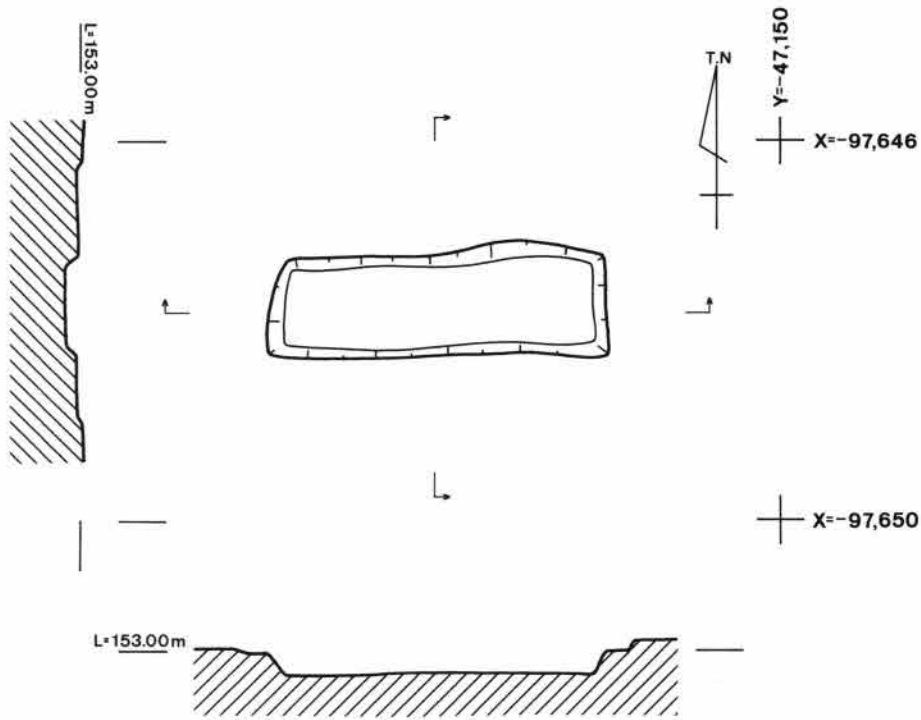
①墳丘及び主体部の調査

a) 墳丘(第2図) 地形測量の結果、墳丘の規模は東西約12m・南北約9m、墳裾と墳頂部との比高差約1mを測る、きわめて整った墳形を呈する長方形墳である。墳丘は、地山上面に約0.4mの盛り土を施した盛り土墳である。盛り土は、赤味を帯びた黄褐色砂質土(地山土)である。調査の最終段階で墳丘に断ち割りを入れたところ、地山直上には約5cmの厚さで暗褐色の旧表土が堆積していることを確認した。墳丘の築造は、この旧表土面から行われている。盛り土の厚さは墳頂部で約0.4mを測る。盛り土は、土層の変化から数段階に分けて行われたことを確認したが、版築したような堅牢さはなかった。しかし、墳丘表面には盛り土の流失を防ぐ意味で粘性の強い土を使用したものと思われる。

b) 集石(図版第2) 墳頂トレンチ腐植土直下で検出した。墳頂部では幅約0.5m・東西約2mの範囲で拳大の礫の集石を確認した。礫は、墓壙の周囲に限定して見られ、墓壙内埋土に含まれるものはなかった。アゼの断面観察による集石の堆積状況は、わずかに「U」字形に落ち込んでいた。集石の埋土は、砂質の締まりのない土であった。この集石の礫間には、古式土師器の壺口縁、底部、高杯脚部などの破片が伴っており、おそらくこれらの土器片は死者の葬送儀礼として破砕供献されたものと思われる。これらの土器の個体間の接合と復原は不可能であった。



第3図 墳丘土層断面図



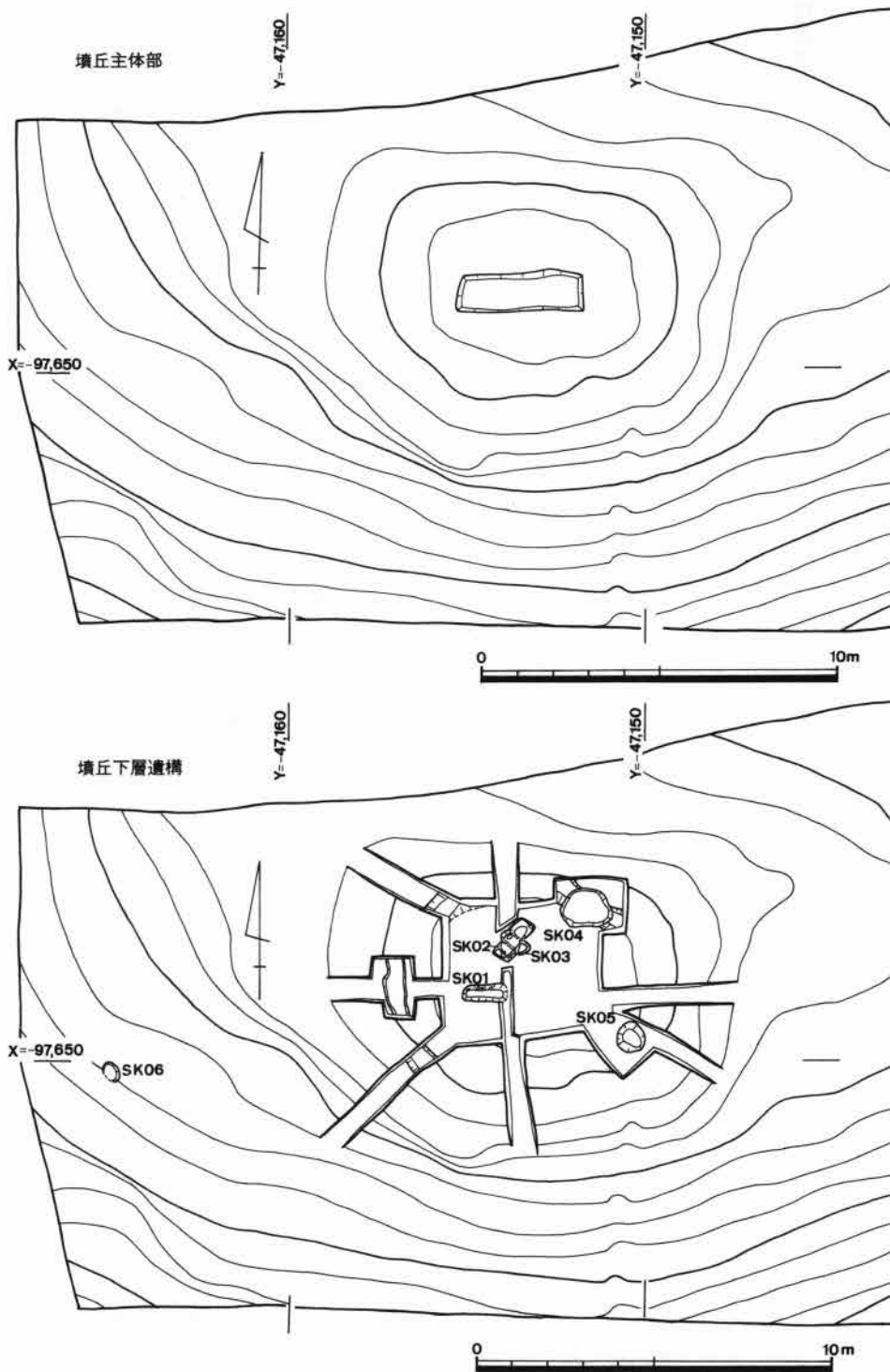
第4図 主体部実測図

c)主体部(第5図) 主体部はこの集石に沿って、ほぼ墳丘中央部で確認した。主体部の規模は長さ約3.5m・幅約1.1m・深さ約0.15mを測る。主軸はN-95°-Wである。墓壇内の埋土は暗褐色粘質土であった。主体部内に副葬品は見られなかった。主体部は、木棺直葬と思われるが、木棺の形状は不明である。

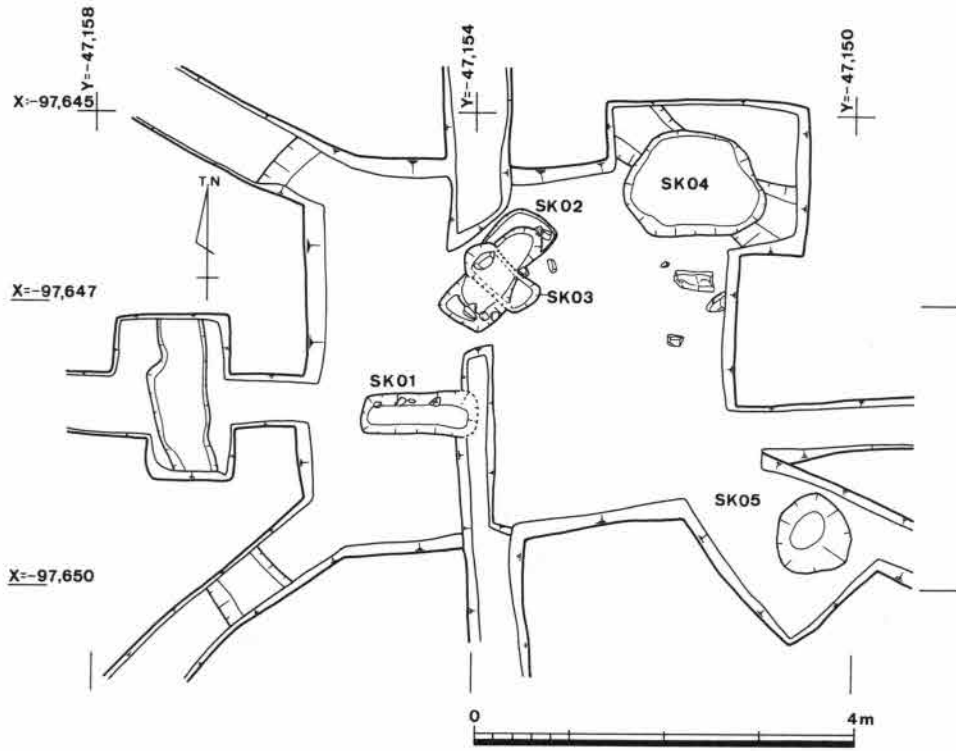
e)遺物の出土状況 遺物の出土地点は、墳頂部集石内及び墳裾部分に限定される。器種には、二重口縁の壺形土器、甕、高杯などがある。壺形土器は口縁部片、甕は体部片、高杯は脚部片のみである。また、墳裾北側では壺形土器の口縁部、甕体部及び底部など個体数にして6個体以上あるものと思われる。これらは、墳裾部に置かれた供献土器の可能性が高い。

#### ②墳丘下層遺構(第5～7図)

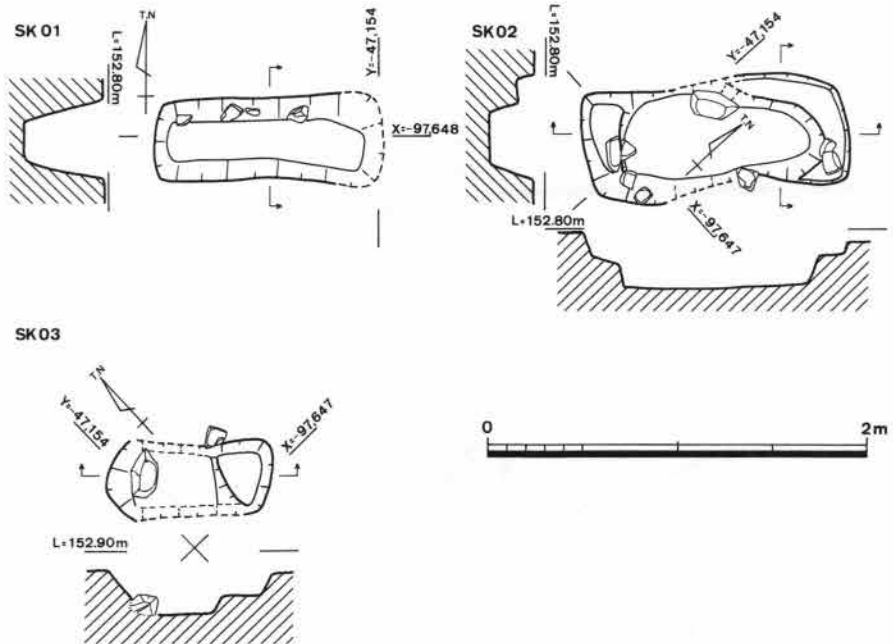
盛り土を除去した地山面では、4基の主体部を確認した。そのうち3基は、長さ約1～1.2m・幅約0.4～0.5m・深さ約0.3～0.4mの隅丸長方形を呈する。残りの1基は土器棺墓で、径約0.8mの円形の掘形内に甕が南側に口縁を向けて横向きに埋め置かれたもので、口縁部には器台の口縁(受け部)部を転用した蓋が口縁部を内面にして被せてあった。この4基の土坑は主体部と思われるが、規模から見て、いずれも幼児用と思われる。以下、各遺構の概要を述べる。



第5図 主体部及び下層遺構配置図



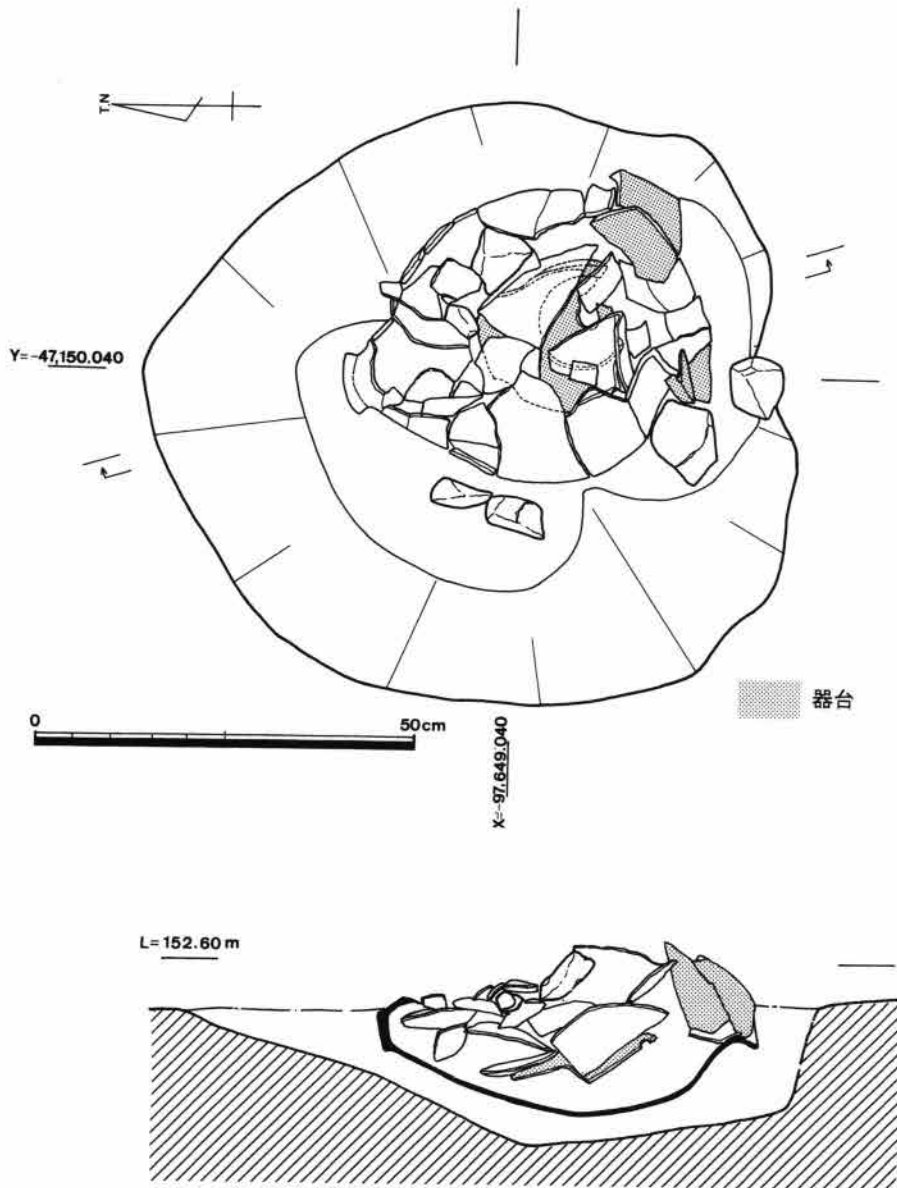
第6図 墳丘下層遺構平面図



第7図 土坑実測図

土坑S K 01 長さ約1.3m・幅約0.6m・深さ約0.4mを測る。平面形は、隅丸長方形である。埋土は、上下2層に分層できた。上層は赤褐色砂質土、下層は暗赤褐色砂質土である。この遺構からの出土遺物はなかった。

土坑S K 02 長さ約1.2m・幅約0.5m・深さ約0.3mを測る。平面形は隅丸長方形である。土坑S K 03を切っている。埋土は暗茶褐色砂質土である。S K 01同様、出土遺物は見られなかった。



第8図 土器棺墓(S K 05)実測図

土坑SK03 この土坑の規模は、長さ約1.4m・幅約0.6m・深さ約0.3mを測る。平面形は、同じく隅丸長方形を呈する。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物はなかった。

土坑SK04 長軸約1.5m・短軸約1.2m・深さ約0.3mを測り、断面形が浅い皿状を呈し、平面形が楕円形の土坑である。埋土は暗褐色砂質土である。埋土上面から土師器片が出土した。

土器棺墓SK05(第8図) 検出面での土坑掘形は、径約0.8m・深さ約0.3mを測る。土坑の断面形状は皿状を呈する。土坑内では、甕が口縁部を南側に向けて横倒しになった状態で検出された。甕の口縁には加飾器台の口縁(受け部)部を破碎して、蓋として転用していた。甕自体は、体部上面が潰れた状態で検出された。甕の中には器台の口縁(受け部)部の一部と土が入り込んでいた。甕を検出した時点で、甕が地表に露出したことから、土坑自体の本来の掘形はさらに上面から掘削されていたものと思われる。

### ③墳丘周辺の遺構

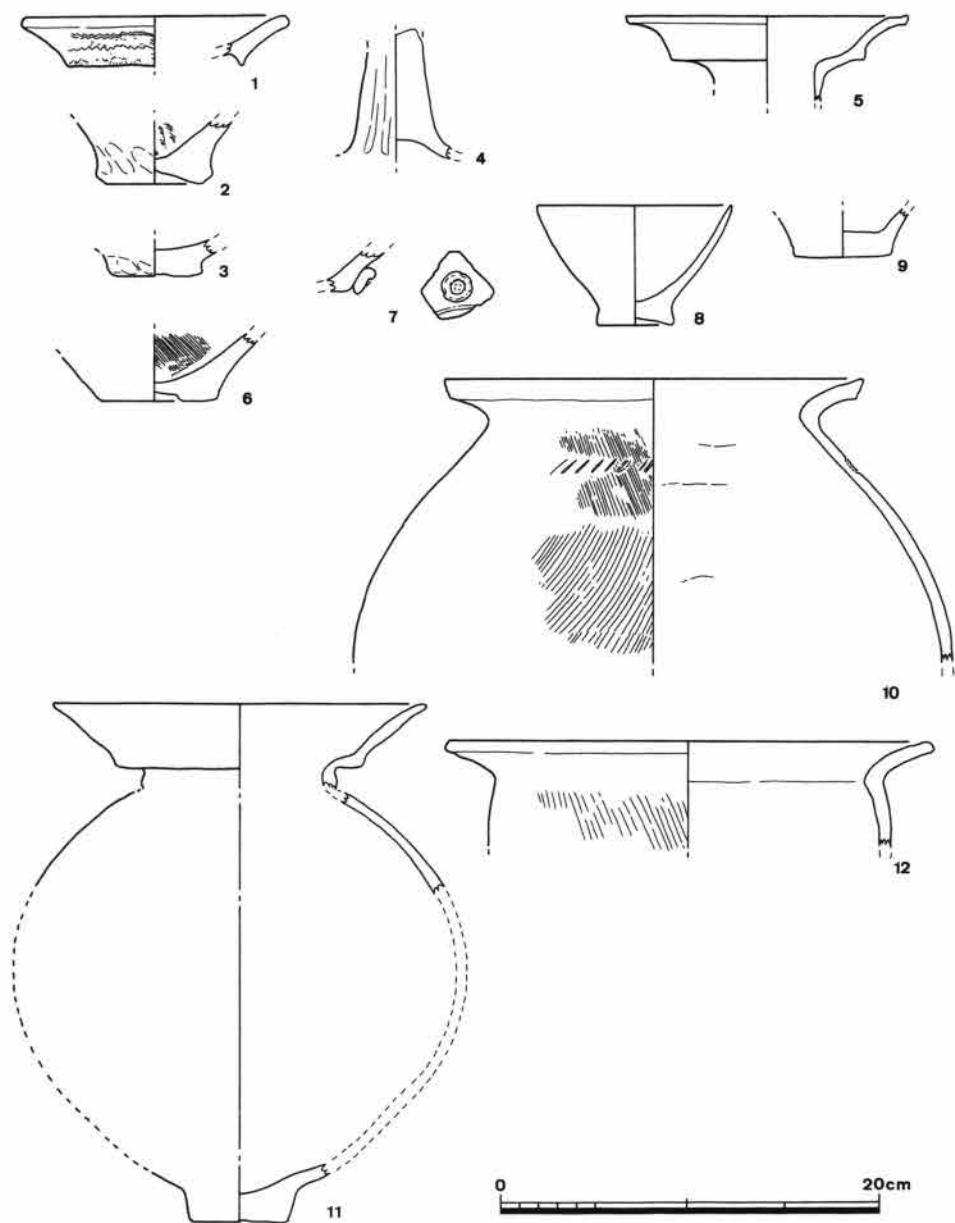
土坑SK06 墳裾の北西側で単独で検出された土坑である。土坑の径は、約0.3m・深さ約0.15mを測る。この土坑は、植林された檜の根元部分にあり、植林に伴い削平を受けていた。出土遺物には簡略化した二重口縁の壺型土器がある。

## 3. 出土遺物(第9・10図)

1～4は、墓壙上面の集石内埋土中から出土したものである。1は、二重口縁壺形土器の口縁部片である。復原口径は約13.8cmを測る。斜め上方に開き、口縁端部はわずかに外反する。そして、端部は丸くおさめる。口縁部外面に施された櫛描き波状文は稚拙であり、単位、条数とも不明である。胎土の色調は赤褐色を呈する。2・3は、壺形土器あるいは甕の底部である。いずれも底径は約5cmを測る。2は、底部を叩いて上げ底となっている。色調は、内面が黒褐色、外面が淡褐色を呈する。3は、いわゆるドーナツ底である。色調は内面が黒灰色、外面が淡茶褐色である。4は、高杯の脚部片である。脚は中実であるが、縦半分に割れている。外面の調整はヘラミガキの後ナデである。色調は明茶褐色を呈する。5は、二重口縁壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。口径は約14.9cmを測る。胎土は精良で、色調は内外面とも赤褐色を呈する。6は、壺あるいは甕の底部である。底径は約6.6cmを測る。内面にはハケ目が密に施される。色調は、内面が黒灰色、外面が淡黄褐色である。7は、二重口縁壺形土器の口縁部の加飾部分である。比較的大きなボタン状の円形浮文が貼り付く。色調は淡赤褐色を呈する。8は、鉢である。土坑SK04埋土上面から出土した。口径約10.2cm・器高約6.45cm・底径約3.9cmを測る。底部から内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。色調は明黄褐色を呈する。10は、甕上半部で



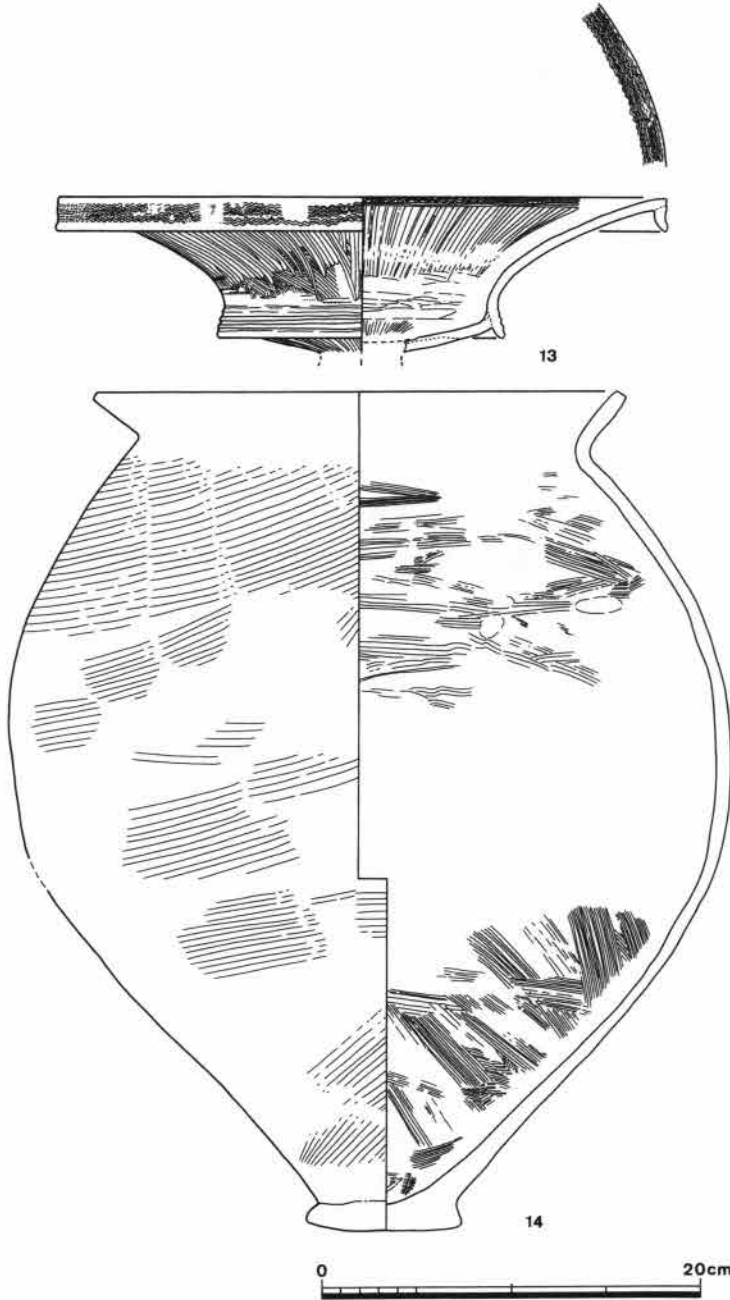
ある。復原口径約22cmを測る。肩部にヘラ状工具による右上がりの刺突が施される。色調は淡褐色である。11は、壺形土器である。二重口縁を意識したものであるが、かなり簡略化されている。復原口径は約19.6cmを測る。土坑S K06から出土した。1個体分であるが、体部下半と底部との接合関係は不明である。底部は平底で、底径約5cmである。色調は明褐色を呈する。12は、甕である。口径約23.4cmを測る。13は、加飾器台である。口縁部口



第9図 出土土器実測図

1~4. 上面集石内 5・9. 墳丘盛り土内 8. S K04 6・7・10・12. 墳裾部 11. S K06

径約32.4cmを測る。口縁部に12条、また、垂下する端面に9条の繊細な櫛描き波状文が施される。胎土は精良で、色調は明褐色を呈している。14は、甕である。口径約27.5cm・器高約44.3cm、底部は平底で、径約8.2cmを測る。口縁部は短く外反し、端部は方形におさ



第10図 S K 05土器棺実測図

めている。調整は、外面がやや磨滅しているため不明瞭であるが、タタキを施しているものと思われる。内面は横方向のハケである。色調は黄灰褐色である。胎土に砂粒を含んでいる。

#### 4. 小結

園部盆地における今林古墳の時期的位置付けについて 今回調査を行った今林古墳は、古墳時代前期初頭に位置付けられる古墳であることが明確になった。以下、発掘調査による事実関係にもとづいて若干の考察をする。墳形は、東西方向を長辺とした約12m×9mの長方形墳である。主体部は、墳丘規模と比較すると、長辺約3.5m・幅約1.1mのやや小規模なものである。主体部内は無遺物であった。この古墳に伴う出土遺物は、主体部墓壇上面の集石内と墳裾部分で出土した土師器がある。器種は、二重口縁壺形土器、甕、高杯などがあり、個体数は6個体以上あるものと思われる。しかし、これらの土器は、ほとんどが口縁部、胴部、底部などの部分的な破片となり、器形を復原できるものはない。こうした出土状況は葬送儀礼に伴い破碎供献されたものと考えられる。この出土土器から、この古墳の所属時期は、庄内式併行であると推察される。また、墳丘下層では、地山削り出し整形されたマウンド上に平面形が隅丸長方形を呈する土壇墓や甕棺墓を検出した。土壇墓は、3基とも同様の規模を示している。長辺は1.2m前後、短辺は0.6m、深さは0.3mで、いずれも小さなものである。土器棺墓も同一面で検出されている。これらの遺構は、幼児用の墳墓群と考えられる。また、明確ではないが、墳丘の断ち割りの状況から土壇墓に伴って周溝がめぐっていた可能性も考えられる。遺構の時期については甕棺墓に使用された土器から、庄内式併行のものとして捉えたい。特に、土器棺の蓋に転用された加飾器台は、畿内第V様式の影響が残るものである。類例は、大阪府の崇禪寺遺跡に見られる<sup>(注5)</sup>。甕については、京都府綾部市の青野西遺跡竪穴式住居跡S H41出土土器に類例がある<sup>(注6)</sup>。最後に、この古墳と曾我谷遺跡との関連について触れたい。曾我谷遺跡は、古墳時代前期初頭の環濠集落である。今林古墳との直線距離は約250mと近接しており、位置関係では集落と墳墓といった関連が考えられる。しかし、一般的に集落内と墳墓とでは出土する土器が異なると提唱されているが、土器を見るかぎり、今林古墳と曾我谷遺跡の土器は胎土、色調とも共通点は見られない。近年の園部盆地内の調査では、園部黒田古墳が庄内式併行期に所属することが判明している<sup>(注7)</sup>。今林古墳は、この盆地における古墳出現期の状況を知る貴重な資料を追加することとなった。

(柴 暁彦)

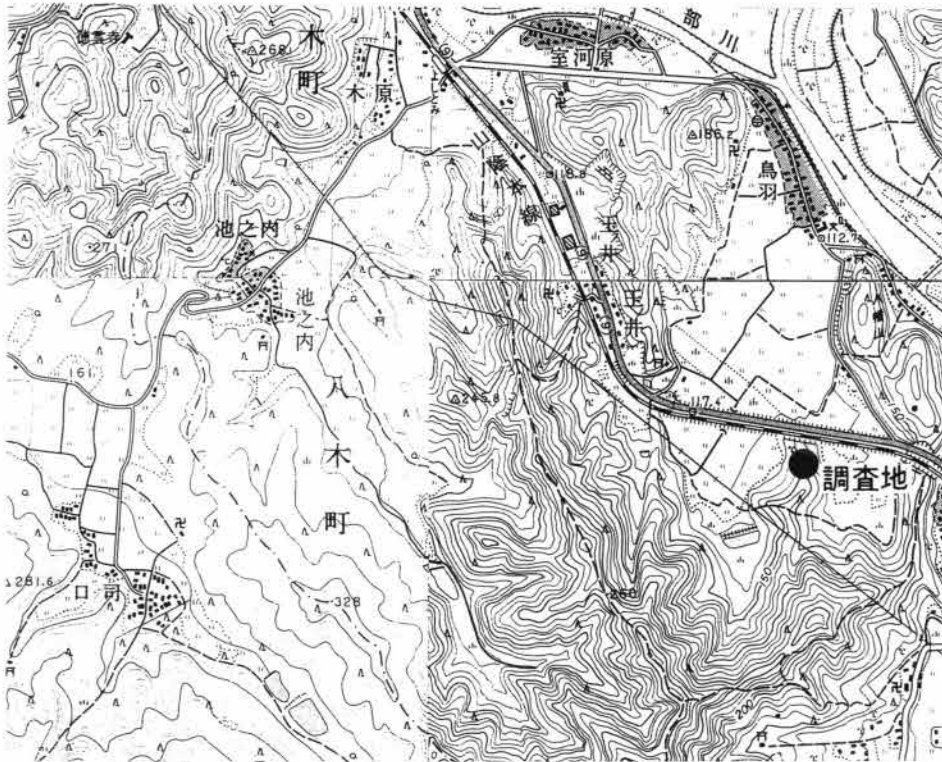
## (2) 沢ノ谷遺跡

### 1. 調査経過

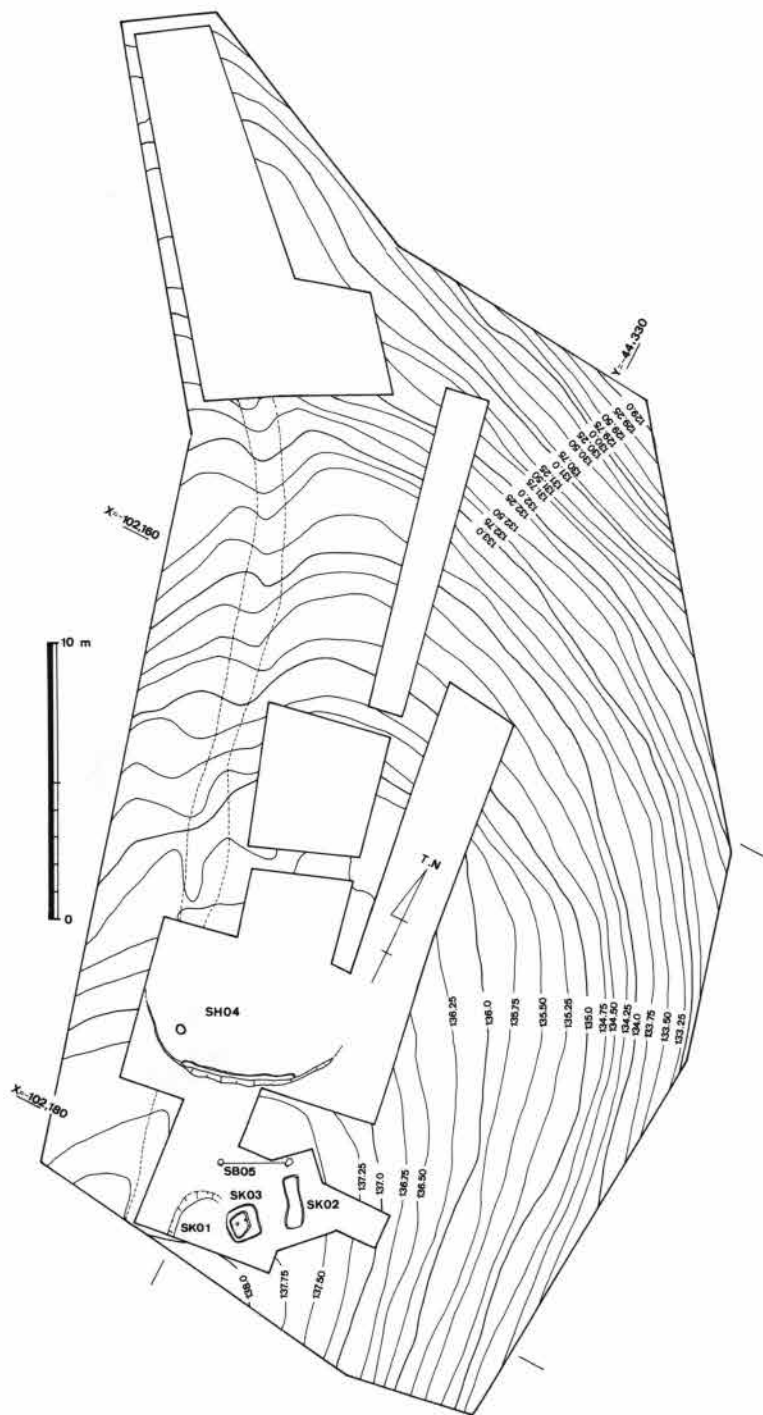
沢ノ谷遺跡は、船井郡八木町大字玉ノ井小字沢ノ谷に所在する。『京都府遺跡地図』には、大鳥羽池古墳の名称で登録されている<sup>(注8)</sup>。調査は、平成5年7月19日に開始し、9月10日に終了した。調査面積は約200㎡である。また、調査当初、この遺跡は沢ノ谷古墳として発掘調査を開始したが、調査前半の試掘の段階で古墳の可能性はなくなり、新たにその他の遺構が確認されたため、遺跡名称は「沢ノ谷遺跡」と改称した。

### 2. 調査概要

調査は、地形測量の後、地形にあわせてトレンチを設定した(第12図)。現地形では2か所に古墳状の地形が確認されたが、断ち割りの結果、現地表下約30cmで岩盤にあたり、古墳状隆起であることを確認した。また、その他の部分では地表下約10cmで、暗褐色土の埋



第11図 調査地位置図(1/50,000)



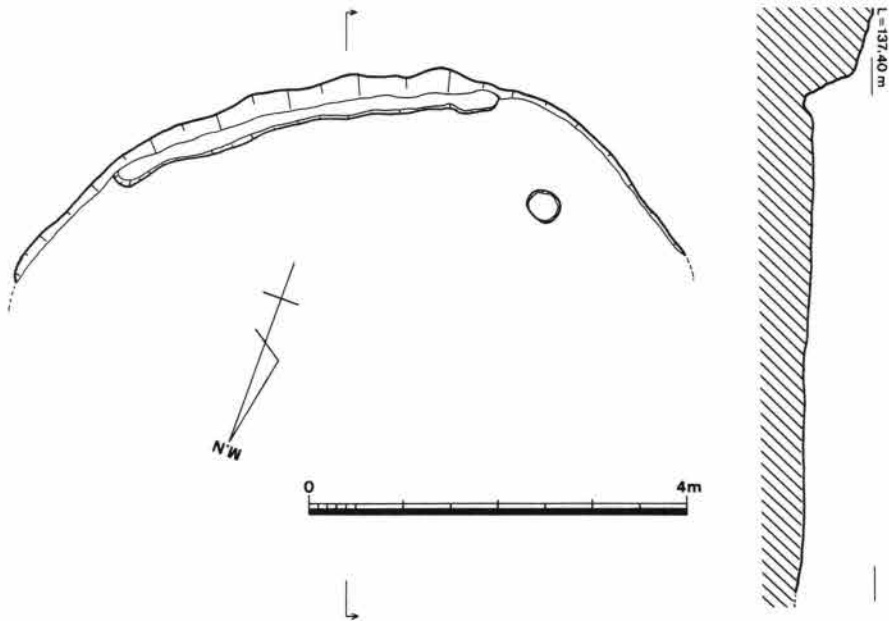
第12図 トレンチ及び遺構配置図

土の入る遺構及び遺物を確認した。引き続き、トレンチの深掘りで、岩盤の著しい段差を確認したため、トレンチを拡張して遺構か否かの確認を行った。その結果、岩盤の段差は、弥生時代の竪穴式住居跡の周壁部分であることが判明し、この住居跡周辺でも奈良時代の土壌墓、時期不明の礎石建物跡の礎石を検出した。その他の調査範囲も、トレンチを設けて掘削したが、顕著な遺構及び遺物は確認されなかった。以下、遺構の概要を述べる。

### 3. 検出遺構(第12図)

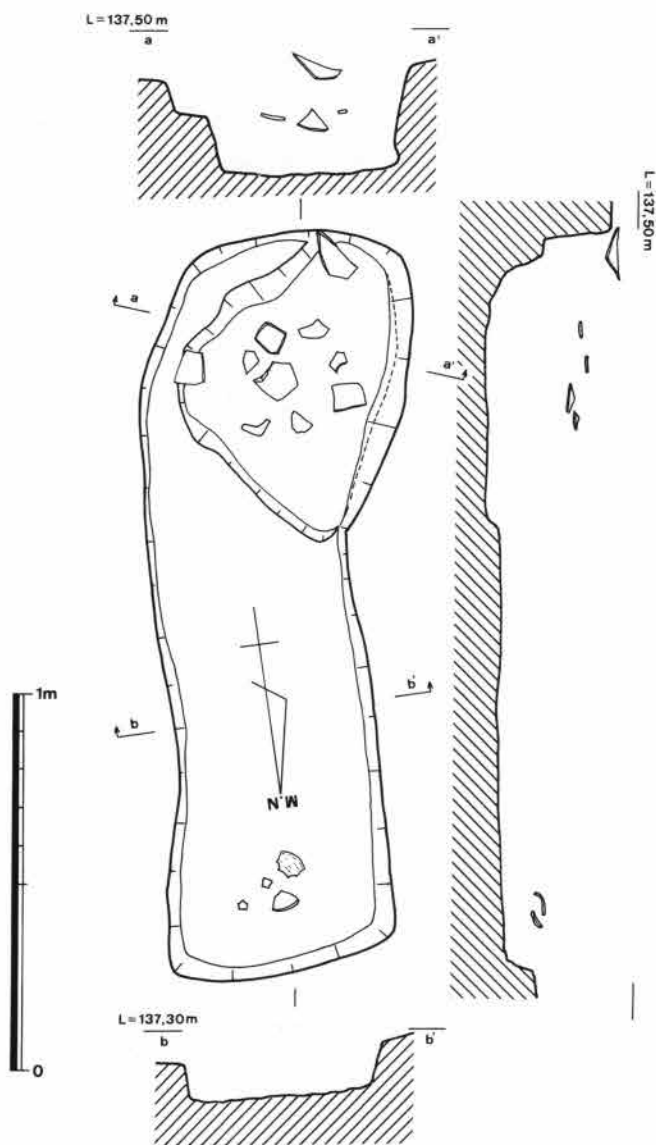
**竪穴式住居跡 S H04(第13図)** トレンチ南端で確認した。直径約8mの円形の住居跡である。斜面上部にあたる南側半分は、床面を含めて遺存していた。南側は岩盤を削り出して、周壁としているが、北側半分は床面から流出しており、遺存していなかった。周壁の高さは約0.5mを測る。また、南側の周壁沿いで、周壁溝の一部を確認した。幅は約0.15m、深さは床面から約0.1m前後である。一方、床面で主柱穴となるピットは確認できなかった。埋土の状況は、上面では周辺の黄褐色の礫混じりの土層で区別がつかなかったが、断面で確認すると、住居跡内に流入した炭化物混じりの暗褐色土層が帯状に見られた。出土遺物には凹線の入る短頸壺の口縁部破片、高杯、把手などの弥生土器がある。

**土壌墓 S K02(第14図)** 長さ約2m・幅約0.5m・深さ約0.4mを測る。墓壇は、岩盤の節理面を利用して掘削されている。墓壇の主軸方向はN-18°-Wである。墓壇南側の西



第13図 竪穴式住居跡(S H04)実測図

側壁は、底部からの立ち上がり部分がわずかにオーバーハングしていた。墓壙南西隅には攪乱のためかやや幅が広く、底部も一段深くなっていた。墓壙内面の状況は、墓壙底面に約3cmの厚さに塊状の木炭を敷き詰め、上面には岩盤の碎石を混入させていた。また、墓壙の長軸両側面には形を留めた木炭が並べられていた。埋土は、多量の炭化物を含む、小礫混じり黄褐色土であった。出土遺物には底面の木炭上に鉄鉢形須恵器が見られた。出土状況は、長辺両端部分に破碎され、内面を上にして埋納された状況を呈していた。しかし、その他の遺物は見られなかった。現存する土壌の深さから見て、後世に削平を受けたもの



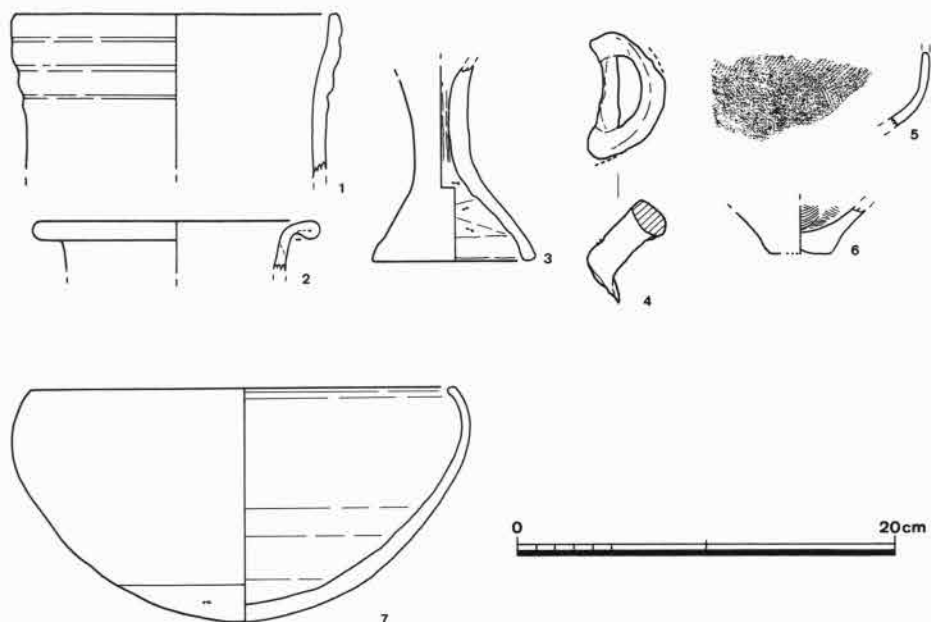
第14図 土壙墓(S K02)実測図

と思われる。墓壙の規模は木棺が入る大きさであったが遺存しておらず、埋葬方法は不明である。

**礎石建物跡 S B05** 人頭大のチャートの川原礫を礎石として用いた礎石建物跡である。柱間寸法は約2.5mを測る。東西方向の1間分を検出したのみで、建物跡の規模は不明である。礎石は表土直下で検出しており、その他の礎石は後世の削平で失われたものと思われる。時期は不明である。

#### 4. 出土遺物

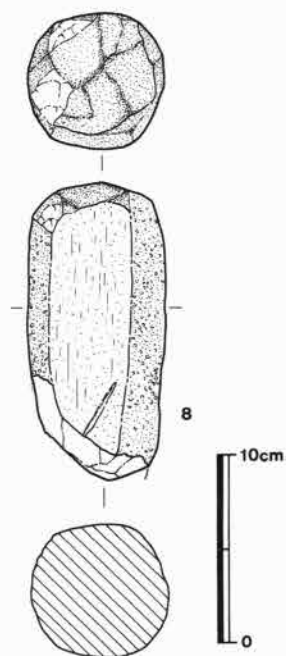
**土器 (第15図)** 1は、凹線の入る短頸壺である。軟質のため内外面とも磨耗が激しい。胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。復原口径約17.2cmを測る。2は、無



第15図 出土遺物実測図

頸壺の口縁である。口縁端部は折り返している。復原口径約14.8cmを測る。胎土は精良で、色調は褐色を呈する。丹波地域では亀岡市千代川遺跡<sup>(注9)</sup>で出土している。3は、高杯である。杯部はわずかに漏斗状に開く。口縁部は尖り気味におさめている。杯部の口径は、脚底部径より若干大きい程度である。脚底部は直線的にのび、端部はやや内側に入り込む。胎土には砂粒を含み、焼成はやや軟質である。色調は淡褐色を呈する。4は、水差し形土器の把手である。全体に黒化している。5は、壺形土器の体部である。外面に綾杉状の文様が見られる。胎土には砂粒、金雲母を含み、色調は内外面とも暗黄褐色を呈する。他の土器と胎土、色調とも異質であり、河内系の搬入土器と思われる。6は、壺形土器の底部である。底部がわずかに欠失している。内面はハケ調整が見られるが、外面は磨耗のため調整は不明である。

石器(第16図) 8は、敲石である。残存長約15.6cm・最大幅約7.2cmを測る。頂部は、堅果類などの磨り潰しに使用されたと思われ、数か所面を持っている。また、側面も磨かれた平坦面を有するが、他の部分は敲打痕様の痘痕状整形痕を残している。石質は砂岩である。



第16図 石製品実測図



## 5. 小結

竪穴式住居跡について 当初調査地は地形から、古墳あるいは山城の可能性もあったが、調査の結果、いずれも自然地形であることが判明した。しかし、この丘陵上では、新たに弥生時代中期(畿内第Ⅳ様式)の住居跡が存在することが確認された。この時期の遺構及び遺物は、亀岡市の千代川遺跡でも確認されているが、これは平地の集落跡であり、丘陵上に立地する住居跡が確認されたのは今回がはじめてである。また、これより時期が下った弥生時代後期(畿内第Ⅴ様式)の住居跡は、園部町の川向北1号墳下層の川向北遺跡で確認している。<sup>(注10)</sup>八木、園部を含めた南丹波の盆地では、大堰川の氾濫による後背湿地の影響で、集落跡が丘陵上に普遍的に存在する可能性も考えられる。この点については、南丹波での調査事例が少ないため、今後資料の増加を待って再度触れたい。

土壌墓について この遺跡で検出した土壌墓は盛り土などの痕跡もなく、偶然発見したものである。ここでは、現在までに確認されている、近畿地方、特に京都府内の類例に触れながら、若干の考察をしてみたい(付表1)。最近の研究では、黒崎直氏が近畿地方を中心にまとめられた論考がある。<sup>(注11)</sup>当遺跡の土壌墓は後世の削平を受けたためか、土壌内出土の遺物は鉄鉢形須恵器のみである。土壌の規模から見て、木棺を納めるのに可能な大きさであると思われるが、棺材や釘の出土はなく、木棺痕跡も確認できなかった。ただ、時期的には出土土器から8世紀後半に比定できる資料である。しかし、奈良時代の墓には一般的に盛り土が存在しないこともあり、確認される事例はきわめて少ない。<sup>(注12)</sup>こうした状況のもとで、事実関係が比較的明確なものに限定してあげると、京都府内では現在までに、当遺跡例を含めて7例が確認されている。8・9世紀の墓の立地にも関係があるためか、丘陵状地形が発達する京都市内の東山丘陵や、同市内の西京区、向日市のある西山丘陵に集中しているように思われる。いずれも、造成中あるいは竹林の開墾中に偶然発見されている

付表1 京都府内における木棺墓出土地地名表

No.	遺跡名	所在地	構造	共伴遺物	年代
1	鳥取古墓	竹野郡弥栄町鳥取字中地岡	木炭敷上に棺を埋置	銅鏡、垂飾、石帯など	9世紀前
2	沢ノ谷遺跡	船井郡八木町玉ノ井小字沢ノ谷	岩盤を墓壙に利用し、木炭を充填	鉄鉢形須恵器	8世紀後
3	杏掛古墓	京都市西京区大枝杏掛町伊勢講山	木炭で棺を覆う	銅水瓶、銅小鏡、丸玉など	9世紀前
4	長野古墓	向日市物集女町長野	木炭で棺を覆う	銅鏡、丸玉、筭、瓶子	9世紀前
5	西野山古墓	京都市山科区梅ヶ谷町	木炭で棺を覆う	銅鏡、鉄板、太刀、石帯、硯など	9世紀前
6	安祥寺下寺跡推定地	京都市山科区	木炭で棺を覆う	銅鏡、土師器椀	9世紀前か
7	郷ノ口古墓	綴喜郡宇治田原町郷ノ口	木炭の充填する壙あり	須恵器、和同開珎	8世紀後

ることからも明らかなように、この時期の墳墓は盛り土が伴わないようである。これらの古墓の共通点は、墓壙内に顕著に木炭を充填することである。ただ、伸展葬と見られる長方形の墓壙を持つものは、近畿地方を概観してみても、奈良県内の2例3基にとどまり、その大半は京都府に集中している。今回、当遺跡で検出した土壙墓は、墓壙上面を削平されていたとしても、墓壙内の共伴遺物が極端に乏しい。出土した鉄鉢形須恵器を蔵骨器と推定し、火葬墓と考えると、火葬骨の出土がないこと、墓壙が大きすぎる点で矛盾をきたす。それに蔵骨器として鉄鉢形須恵器を用いている例は見られない。また、墓壙の規模から木棺墓としても、墓壙両短辺に意図的に破碎されたと思われる行為が埋葬時に伴うものか後世のものか不明であり、鉄鉢形須恵器だけが副葬されていた点も疑問である。次に、時期の問題であるが、今回出土した須恵器は、ほぼ器形全体を把握できる破片があり、8世紀後半に比定できるものである。これを近畿地方の類例と照合すると、京都市西京区の京都沓掛古墓の年代に近いものと思われる。しかし、この古墓から副葬品の土器の出土はなく、年代決定の基準は、銅製水瓶及び小鏡によっているようである<sup>(注13)</sup>。時期及び類例の少なさの問題は、8・9世紀の古墓が古墳時代までの墓制のありかたとかなり異なり、集団墓ではなく、単独墓であることから、当該期の墓制の理解を一層むずかしくしている。しかし、近年確実に類例は増え続けており、今後8世紀段階の古墓の類例の増加を待って検討する必要がある。

(柴 暁彦)



説明会風景(北東から)

## (3) 八木城跡第2・3次

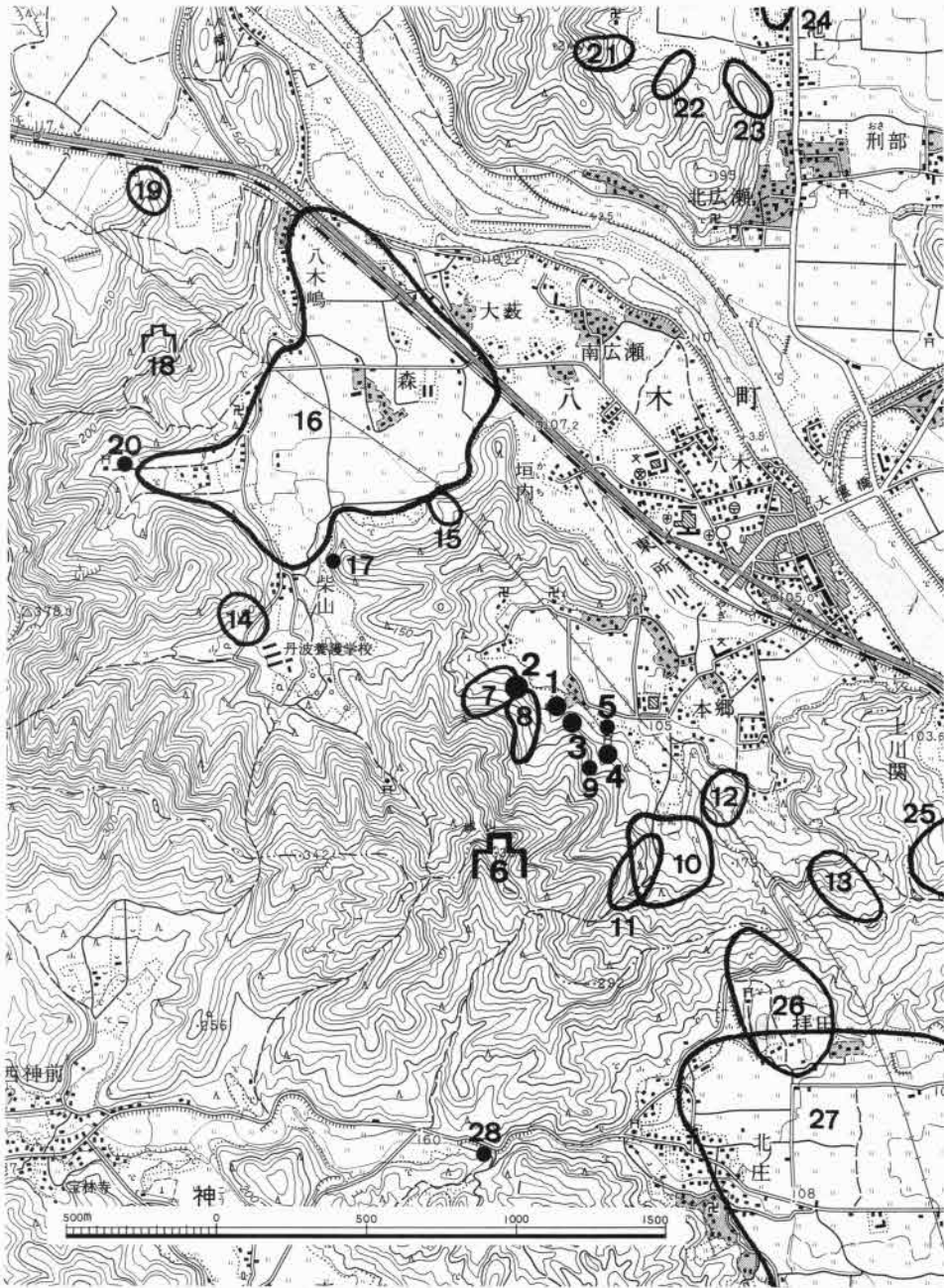
## 1. 調査経過

八木城跡は、京都府船井郡八木町本郷に所在し、八木町と亀岡市の境の城山に位置する山城跡である。室町時代の丹波守護代内藤氏の居城として、京都府の中世山城跡の中でも著名な城跡である。また、キリシタン武将内藤ジョアンゆかりの城跡としても知られている。標高約330mの山頂に主郭を置き、派生する尾根に曲輪などを配して、全山を要塞化した大規模な山城跡である。調査地は、城山の北東麓部分である。平成3年度に実施した工事用道路部分の試掘調査(第1次調査)で八木城跡に関係すると考えられる遺構・遺物を検出しており、平成4年度に第2次調査として道路建設予定地全体にわたって試掘調査及び本調査を実施した。<sup>(注14)</sup>平成5年度も第3次調査として引き続き本調査を実施した。

第2次調査は、平成4年5月18日から着手し、遺構・遺物が残存している可能性が高い8地点について実施した。まず、調査範囲の南西部にあたる第8地点から試掘を始め、第7・第5・第3・第4・第6地点の順に試掘を行った。その結果をもとに順次拡張調査を行った。また、第1次調査の結果から本調査・追加調査が必要と考えられた第1・第2地点についても調査を行った。第1・6地点からは、石垣で護岸された屋敷地跡を確認し、石組土坑や石組井戸などを検出した。第7地点では、尾根の背や腹を削り出して造成した段々状の平坦地やそれに伴う石垣や礎石の一部を確認した。第8地点では、狭い谷を埋めて造成した段々状の平坦地を確認した。第2・4・5地点では、明確な遺構は残存していなかった。平成5年3月5日に第3地点以外の調査を終了した。調査面積は約4,000m<sup>2</sup>である。この間、平成4年10月29日に現地説明会を開催した。

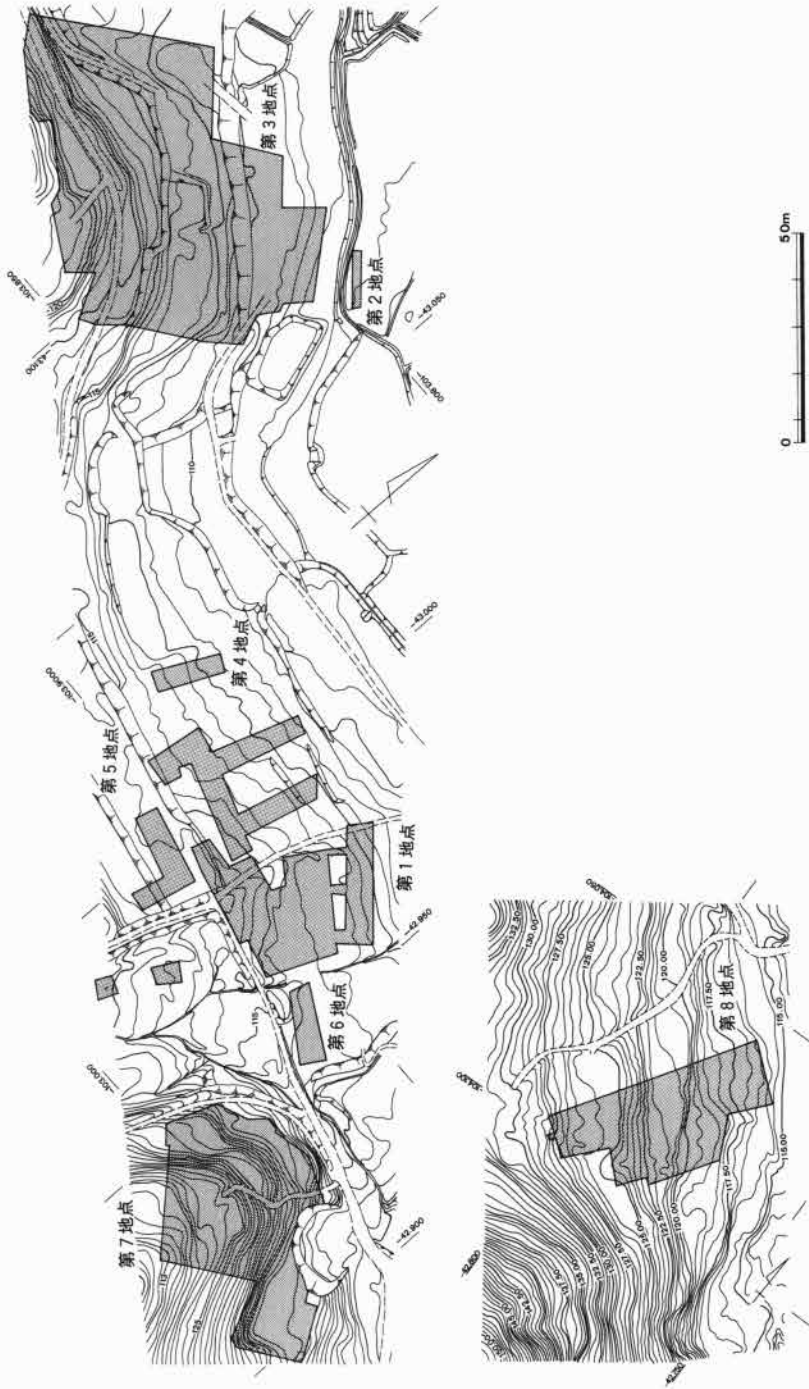
第3次調査は、平成5年4月7日から着手し、第3地点について実施した。なお、第7・8地点の間の山裾部に位置する春日神社は道路建設に伴って移転されたが、その跡地についても、八木城関連の遺構がある可能性が考えられるので、調査を行った。第3地点では、尾根の先端部を段々状に造成した平坦地とそれに伴う井戸や石垣の一部などを検出した。また、古墳時代後期に須恵器を焼成していた窯跡を検出し、堂山2号窯と名付けた。春日神社跡からは土師皿が多数出土したが、顕著な遺構はなかった。9月24日に調査を終了した。調査面積は約3,100m<sup>2</sup>である。この間、8月26日に現地説明会を開催した。

この概報では、第2・3次調査についてあわせて報告する。このうち、第2次調査の第2・4・5地点については、前年度の概報に略報している<sup>(注15)</sup>ので、今回は省略する。



第17図 調査地位位置図

- |            |           |            |           |            |
|------------|-----------|------------|-----------|------------|
| 1. 第1・6地点  | 2. 第3地点   | 3. 第7地点    | 4. 第8地点   | 5. 春日神社跡   |
| 6. 八木城跡    | 7. 堂山窯跡群  | 8. 古谷窯跡    | 9. 西所古墳群  | 10. 小谷古墳群  |
| 11. 内山窯跡   | 12. 内山古墳群 | 13. 大法寺古墳群 | 14. 坊田古墳群 | 15. 森古墳群   |
| 16. 八木嶋遺跡  | 17. 柴山古墳  | 18. 八木城出城跡 | 19. 沢ノ谷遺跡 | 20. 神田古墳   |
| 21. 寺内西古墳群 | 22. 寺内古墳群 | 23. 寺内東古墳群 | 24. 狐塚古墳群 | 25. 上川関古墳群 |
| 26. 拝田古墳群  | 27. 千代川遺跡 | 28. 北ノ庄古墳  |           |            |



第18図 調査地地形図

## 2. 調査概要

### (1) 第1・6地点

この地点の調査は、工事の都合で第6地点から実施し、その終了後に工事用道路を付け替えて第1地点の調査を行った。この地点は、絵図に「天神口」と記され一説では大手口と言われている部分にあたり、平成3年度の試掘調査で石積遺構や地山削り出しの階段状遺構などを検出した地点に隣接する。

溝状遺構S D 01は、調査地北側から検出した。南東から北西に向かってのびる。幅約80cm・深さ約30cmを測り、その北西端部は、ほぼ直角に南西側に屈曲する。埋土から、16世紀後半頃のものと考えられる土師器皿などが出土した。

土坑S K 03は、調査地ほぼ中央で検出した。約4.3m×約3.4mの方形竪穴状土坑である。北東と南西の辺にピットがある。

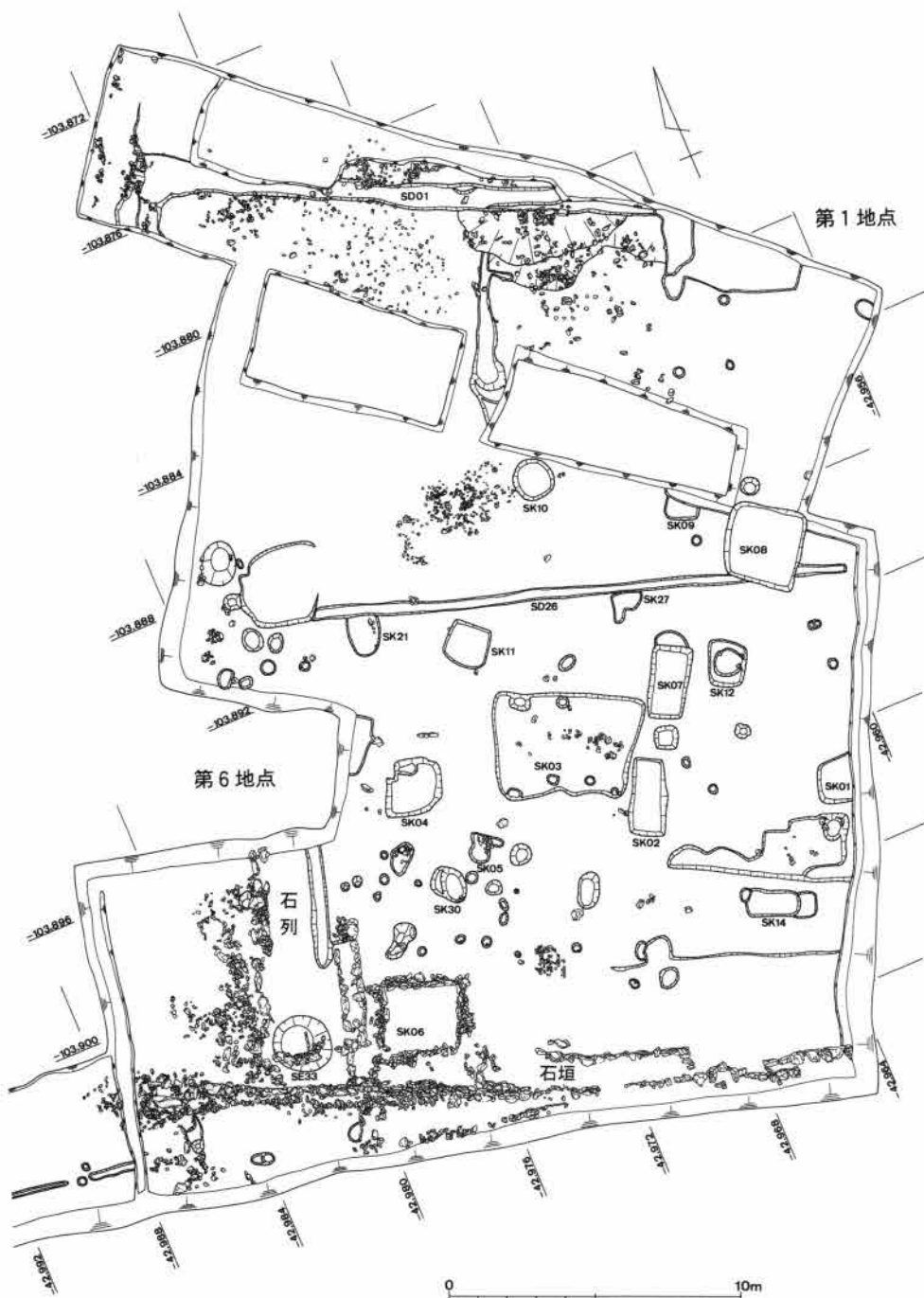
土坑S K 02・S K 07は、土坑S K 03の東側から南北に並んだ状態で検出した。S K 02は約2.4m×1m・深さ約60cm、S K 07は約2.5m×1.2m・深さ約90cmの長方形土坑である。埋土中には人頭大前後の石が多数含まれており、元は石組であった可能性もある。これらの土坑はその形状などから、地下式貯蔵穴と考えられる。なお、これらの土坑の埋土中には焼土層がみとめられた。

石組井戸S E 33は、調査地南西隅部から検出した。深さ約80cmで、石組はほとんど崩れているが、円形の石組であったとみられる。底部には2本の丸太材が端部を重ねて直交して置かれており、その上に石を積み上げている。この丸太材は、元は4本が「井」の字形に置かれて、胴木になっていたものと考えられる。

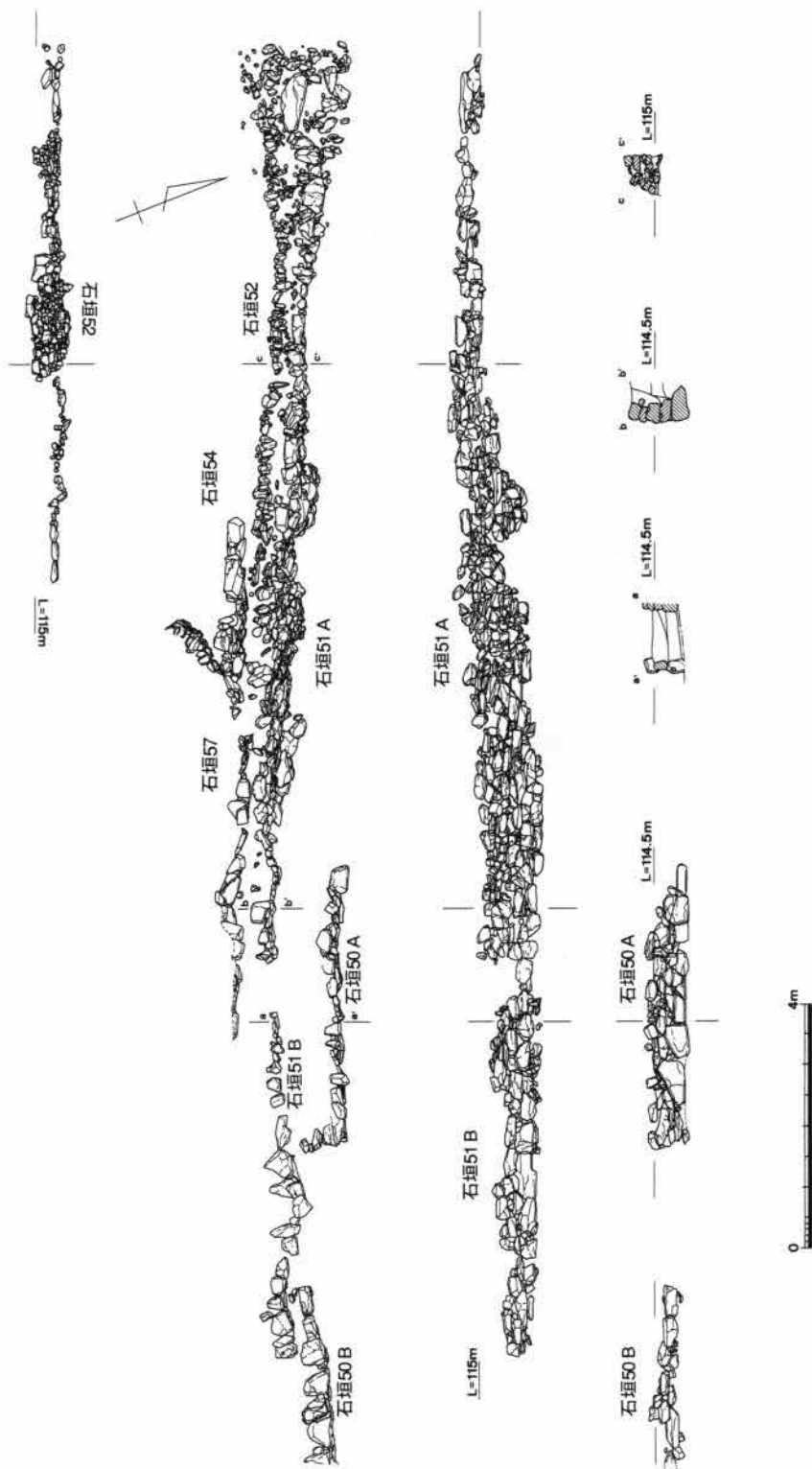
方形石組土坑S K 06は、石組井戸S E 33の東側で検出した。約2.4m×1.8m・深さ約1mで、南側の石組がかなり崩れている。池もしくは水を溜める施設と考えられる。底部付近から、自然木片などとともに木製品が出土した。

調査地南側から、南東から北西方向にのびる石垣を検出した。この石垣は、数回造り替えられている。最初に、石垣57が築かれる。この石垣は、角礫で裏込めされており、弧を描いて南西側に曲がる。この時点では南西側に開口していたものと考えられる。次に、開口部をふさぐように石垣54が築かれ、石垣51Bが石垣57の一部を残してその南東側前面に築かれる。石垣54・石垣51B築造の時間差の有無は不明である。さらに、石垣51Aが石垣51Bに続けて石垣54の前に築かれる。その後、石垣50A・50Bが石垣51の前に築かれる。なお、石垣51北西側の裏側にも石垣52が築かれ、土塀の基礎のようにになっている。

この調査地では、礎石状の石も検出しているが、建物として復原できるものはない。しかし、以上のような状況から、この部分は屋敷地跡と考えられる。調査地北側の溝状遺構

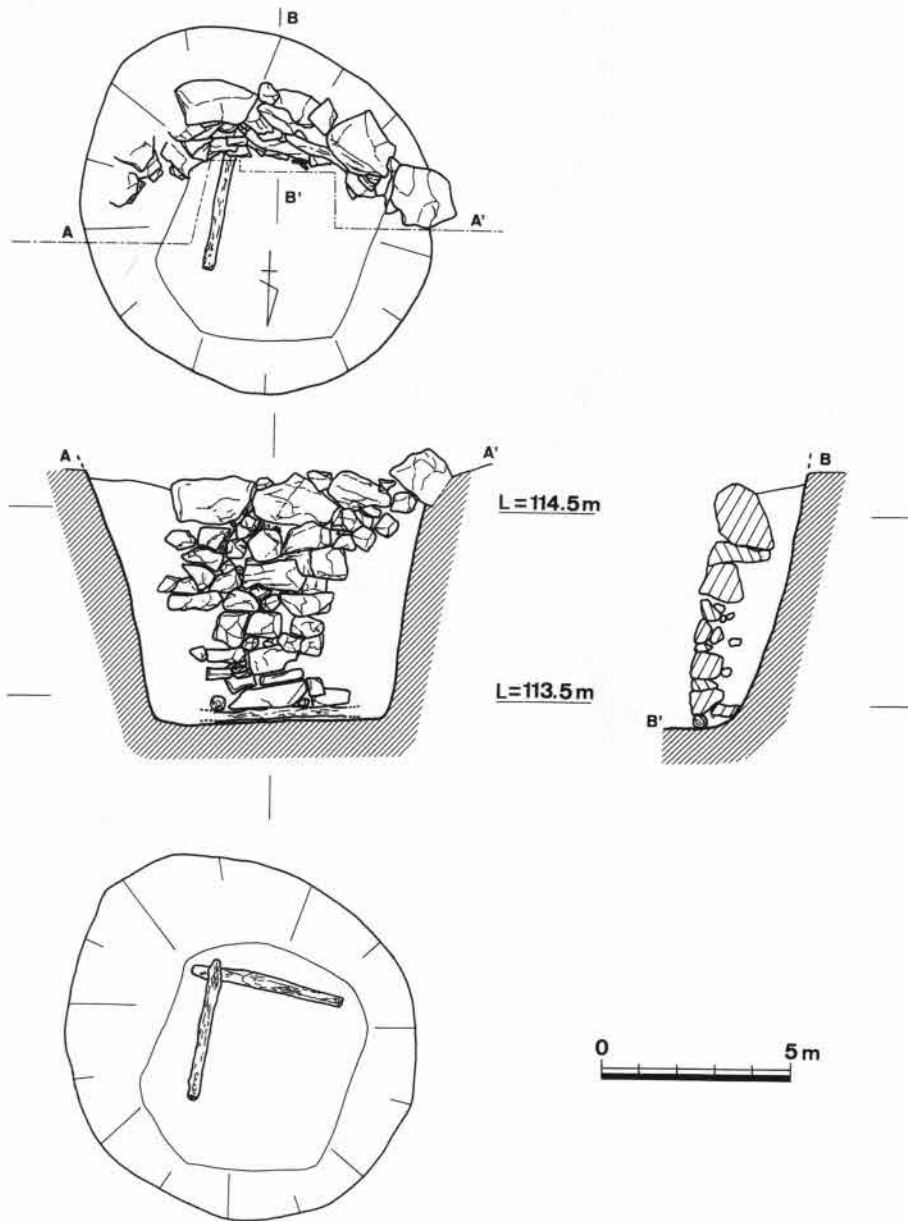


第19図 第1・6地点平面図



第20図 第1・6地点石垣実測図



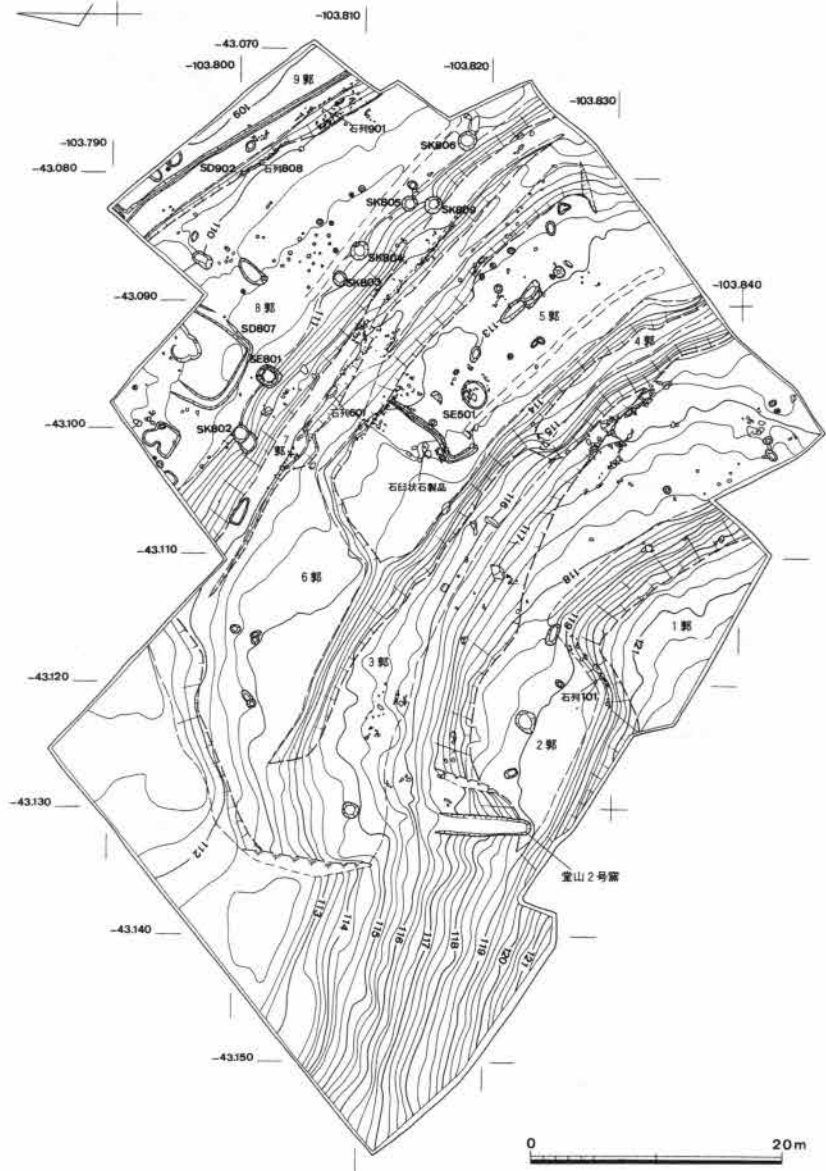


第21図 第1・6地点SE33実測図

SD01と調査地南側の石垣はほぼ並行しており、これが屋敷地の南北を限るものとも考えられる。そのように考えると、この屋敷地の南北幅は約30mとなる。なお、この調査地からは、16世紀頃の土師皿や瀬戸美濃系陶器・中国製磁器などが出土した。

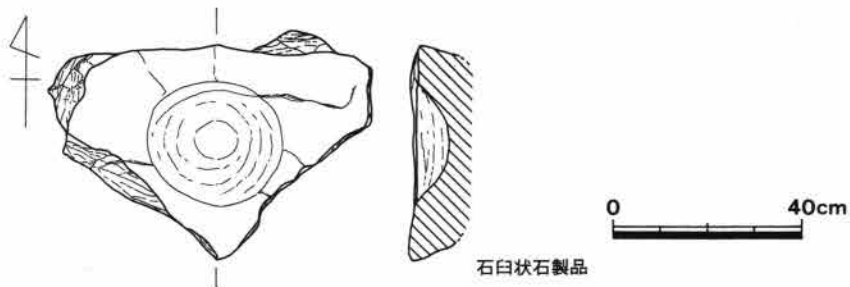
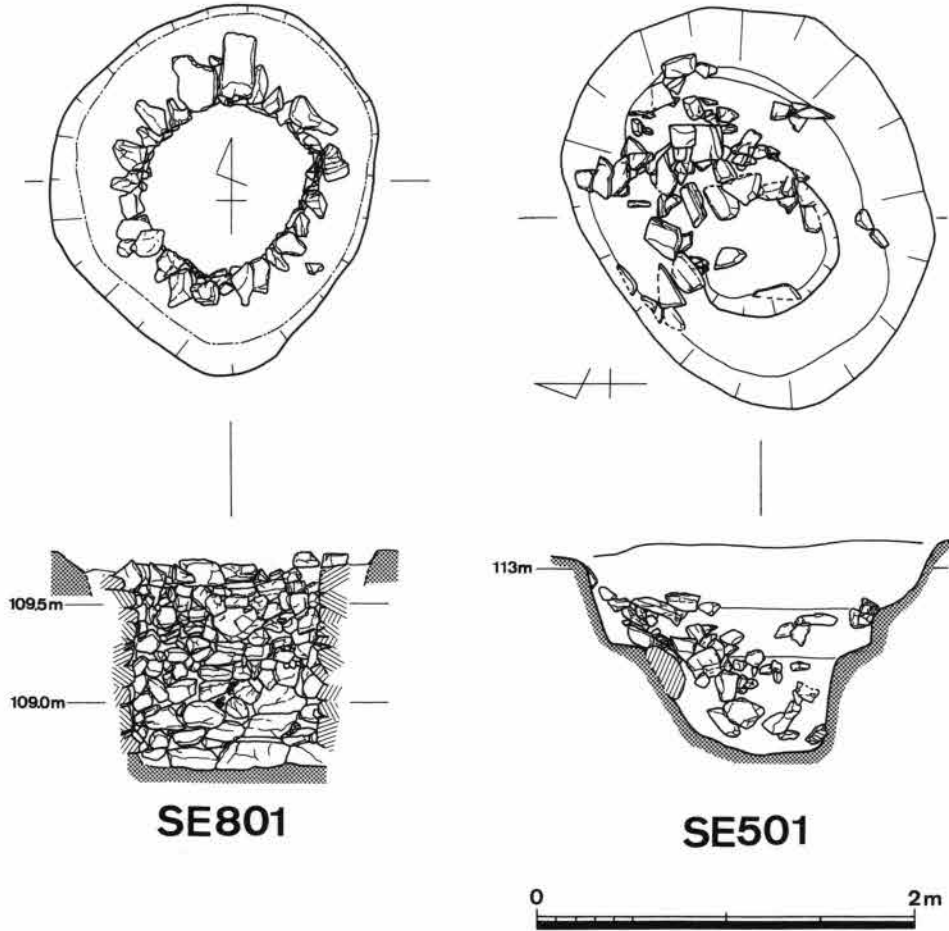
(2)第3地点

第1・6地点北西側に張り出す尾根の先端部に位置し、人工的に造成されたとみられる段々状の平坦地形が見られる。これらの平坦地を高い方から順に1郭から9郭と仮称する。調査地外のさらに高い尾根続きにも数段の平坦地が認められるが、これは除外する。なお、2郭の西側で古墳時代後期の窯跡を検出したが、これについては後で報告する。



第22図 第3地点平面図

1 郭北西側斜面では、石列101を検出した。この石列は、ほとんど崩落しており、数石が残るのみであった。残存している石のうち、一石のみ高さ約70cm・幅約1mの大きい石が含まれる。2 郭・3 郭では敷石状の遺構を検出したが、断片的であり用途は不明である。5 郭ほぼ中央で井戸 S E 501を検出した。掘形は、直径約2mの円形で、深さは約1.1mで



第23図 第3 地点遺構実測図

ある。埋土中に人頭大前後の石が多数含まれており、石組の可能性もある。井戸S E 501北西側で、長さ約66cm・厚さ約15～20cmの二等辺直角三角形形状の花崗岩の石材を検出した。この石材は、中央が直径約27cm・深さ約7cm窪んでいる。石臼状石製品と仮称するが、用途は不明である。亀岡市並河城跡から同様のものが<sup>(注16)</sup>検出されている。

6郭の東隅斜面から南東側にかけて拳大から人頭大の石を積んだ石列601がのびる。石列状であるが、一石のみ高さ約1m・幅約80cmの大きい石が残存しており、本来はその高さ程度まで積まれていたものと考えられる。7郭は、礫を盛って造成された犬走り状の平坦地で、6郭及び石列601に沿う。

8郭南西側の斜面裾部には数基の円形土坑が並ぶ。そのうちの1基は、石組井戸S E 801である。掌大の比較的小さい石を積み上げている。直径約0.9m・深さ約1.1mである。この井戸に伴う出土遺物はなかった。8郭北西側で、「コ」の字状にめぐる溝状遺構S D 807を検出した。小規模な建物に伴う雨落ち溝か。また、この郭では多数のピットを検出したが、明確に建物としてまとまるものはなかった。8郭から9郭にかけての斜面で、石列808を検出した。人頭大の石を並べる。

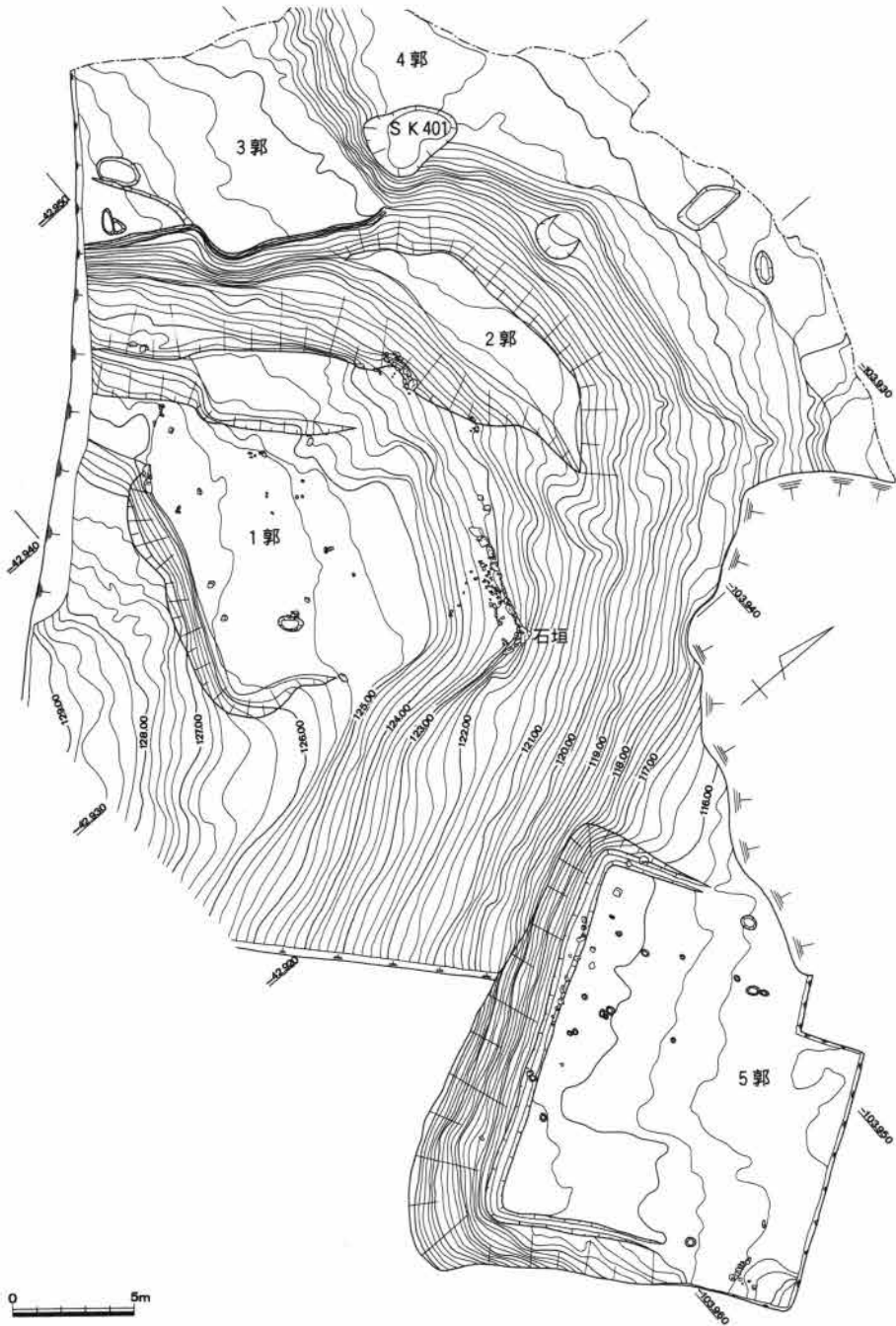
9郭斜面裾部から石列901を検出した。掌大の小さい石材を並べる。石列の間から16世紀頃の丹波焼播鉢片が出土した。また、この郭からは「T」字状にのびる暗渠S D 902を検出した。暗渠内から18世紀頃の肥前磁器染付皿が出土しており、近世の遺構とみられる。

この地点の郭を比高差から見ると、1・2郭、5・6郭、8・9郭に区分できる。その間に、2郭と6郭をつなぐような3郭・行き止まりの4郭・犬走り状の7郭を配し、複雑な様相を見せる。反面、5郭から8郭にかけての平坦地及び斜面からの出土遺物は比較的多く、遺構も何らかの生活が行われていた形跡を示す。防御機能と日常生活。この相反するような様相が、この地点からはうかがえる。

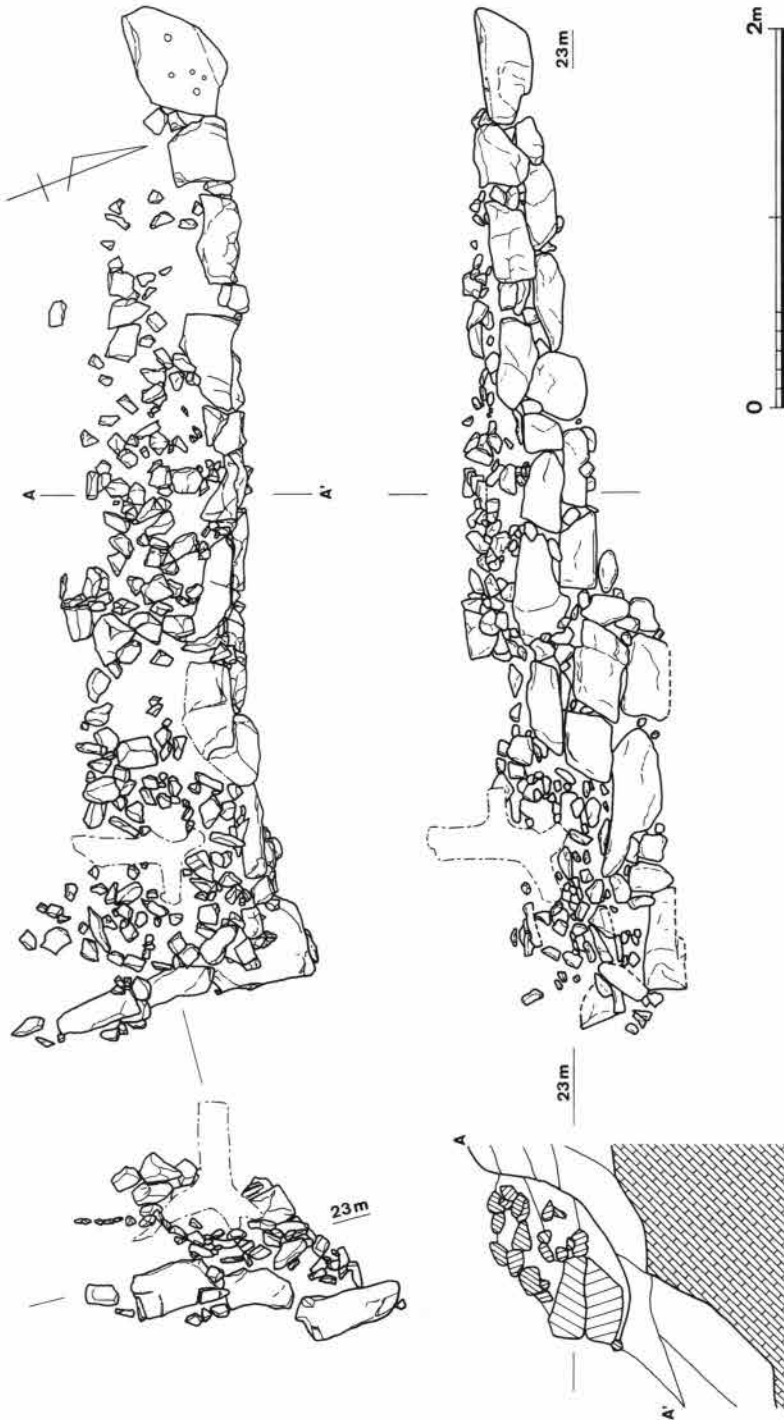
### (3)第7地点

第1・6地点の南東側に隣接する尾根の先端部に位置する。「天神口」を見下ろす位置にある。ここでは、尾根の背や腹を岩盤まで削り出し、前面に盛り土して造成した段々状の平坦地を検出した。仮に、1郭から5郭とする。調査地外のさらに高い側にも数段の平坦地があるが、除外する。

今回調査した最上部の平坦地の1郭では礎石状の石を検出しており、何らかの建物があったと考えられるが、その規模や形態は不明である。また、1郭から2郭にかけての斜面部では石垣の一部を検出した。よく残っているところで3段の石積みが残る。大石の間に小石を配して小口積みした野面積みで、角礫を用いた裏込めがなされている。ていねいに積まれており、当初はかなり高く積まれていたものと思われる。位置的にみて、1郭に伴



第24図 第7地点平面図

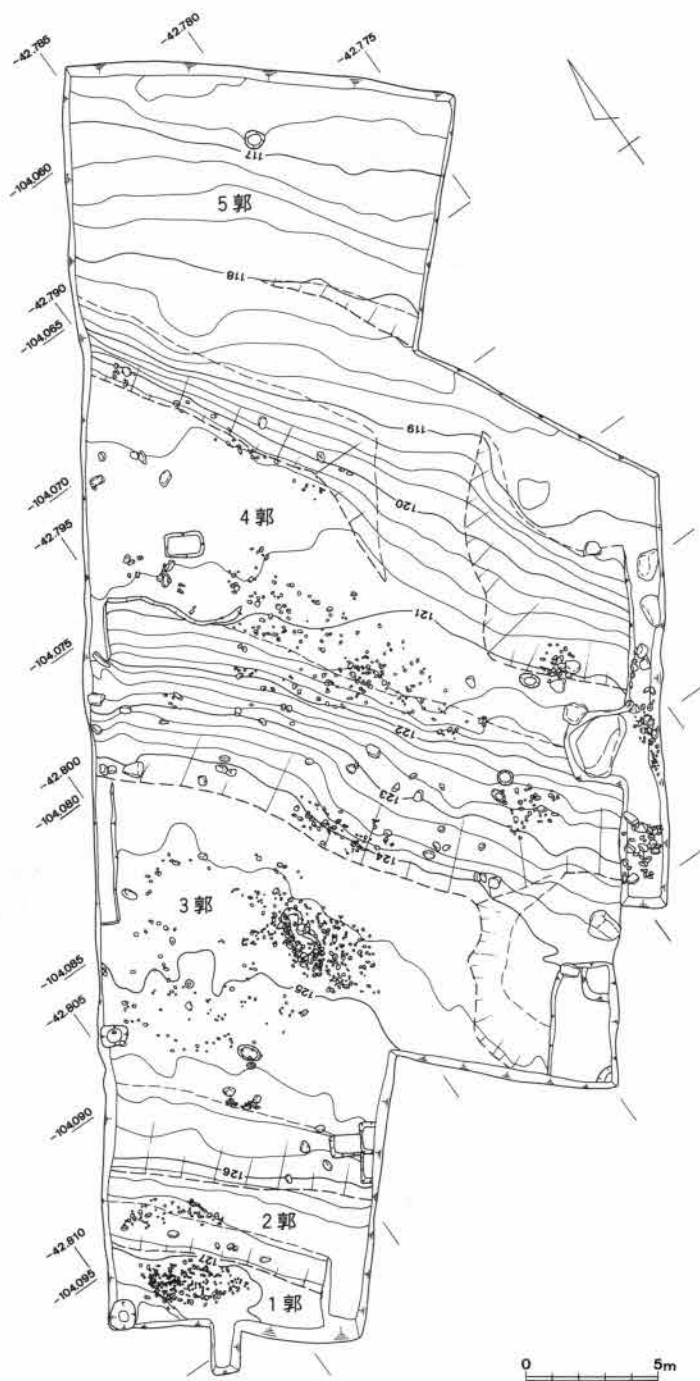


第25図 第7地点石垣実測図

う隅櫓の基礎とも考えられる。

1郭の西側には3郭が位置する。1郭と3郭の間の斜面は、その中位で急激に切り落とされる。これは、3郭を広げると同時に、3郭から1郭への侵入を妨ぐためとみられる。斜面裾には排水溝がある。4郭には、3郭裾の排水溝の直下に岩盤を掘り込んだ土坑SK401がある。この土坑は溜め井戸と考えられる。

この地区の東側では、尾根の腹を上部幅約18.5m・下部幅約14.5mにわたって大規模に削り出して造成した広い5郭を検出した。削り出した高さは最高3m以上に及ぶ。斜面側には「コ」の字状に排水溝をめぐる。排水溝の平坦地側には礫が散乱しており、石組があったと考えられる。西隅部には宝篋印塔の基礎を転用した礎石が残存している。ほかにも礎石とみられる石が認められるので、建物があつたと



第26図 第8地点平面図

考えられるが、規模・形態は不明である。これらの礎石の位置から、削り出した平地地いっばいに建物が建てられていたものと考えられる。排水溝は、雨落ち溝としても機能していたものと思われる。なお、この郭の東隅部には階段状の石列と道状の落ち込みが認められることから、西側にある1～4郭とは関連しない郭とも考えられる。高度は4郭とほぼ同じであるが、その間が大きく削り取られているため、両郭の関係は不明である。

この地点からは、16世紀頃の土師皿や中国製磁器などが出土したが、その出土数は第3地点に比べると少ない。堅固に積まれた石垣や岩盤を削り出した急な斜面部など、防御拠点としての様相を示す。位置的にも「天神口」に隣接しており、八木城全体からみても重要な防御拠点の一つと考えられる。なお、この地点からは、「梅田社」の刻銘がある鰐口と考えられる銅製品の破片が出土した。

#### (4)第8地点

第7地点から南東側約100mに位置する。狭い谷部に段々状の地形がみられる。これは、谷部に盛り土して造成されたものであることがわかった。建物跡などは確認できなかった。土師皿が多数出土したが、そのほかには中国製白磁片や国産陶器片が少量出土したのみである。3郭のようなやや広い平地もあり、何らかの建物があった可能性もあるが、日常的に使用されたものではないと考えられる。あるいは、護岸施設の可能性もある。この地点下方の調査地外となる平地部分に重要な施設があったことも考えられる。

#### (5)春日神社跡

本殿基壇部分の調査を行った。基壇の盛り土中から多量の近世の土師皿が出土した。土師皿のほとんどは口縁部に煤が付着しており、燈明皿として使用されたことがわかる。このほか、肥前染付磁器網目文椀などが出土しており、基壇は江戸時代に造られたものと考えられる。明確な地鎮施設などはなかった。盛り土下は、岩盤及び青灰色粘質土層であり、八木城に関連する遺構・遺物はなかった。なお、盛り土中から11世紀頃の土師皿が多数出土したのが注目される。

### 3. 出土遺物

#### (1)土器・陶磁器

出土遺物の大部分を占めるのが土器・陶磁器である。土器では土師皿が最も多い。その他、瓦質の製品がある。陶磁器では、青磁・白磁・青花などの中国製磁器、瀬戸美濃・丹波・備前・信楽などの国産陶器がある。また、少量ではあるが、肥前陶器が含まれる。

なお、土師皿には、平坦な底部から口縁部が斜め上方に立ち上がるものと、底部から丸味をもって内湾気味に立ち上がるものがある。前者は、内面及び外面上半がナデ、外面下



半には指押さえの痕が残る。後者は、内面はナデ、外面には指押さえの痕が残り、胎土はやや粗い。仮に、前者をA類、後者をB類とする。

A. 第1・第6地点(第27～30図)

溝状遺構SD01 土師皿1～10は、A類である。1～4のような16世紀後葉のものともみられるものと、6のように、底部と口縁部の境に強い横ナデによる窪みがあり、やや時期の下がるものがある。土師皿11～22は、B類である。天目碗23は、瀬戸美濃焼で、高台内に「廿三日」の朱漆書きがある。外面体部下方以下は露胎である。青磁皿24は、口縁部が稜花になるもので、15世紀頃のものともみられる。

土坑SK02 図示できたものは、土師皿のみで25～34がそれにあたる。25は厚手で異相を示すが、その他はA類である。26・27のような口縁端部を外反させる16世紀後葉頃のもの、28～30・32のように底部と口縁部の境が明瞭に窪むやや時期が下がるものがある。

土坑SK03 土師皿35は、A類である。土師器36は、台付皿の脚部ともみられる。

土坑SK05 土師皿37・38は、A類で、口縁端部が外反するものである。

土坑SK06 土師皿39は、A類である。

土坑SK07 土師皿40～44は、A類である。42のように底部と口縁部の境が窪むものが含まれる。播鉢45は、丹波焼で、一本引きの播目をもつ。土錘46も出土している。

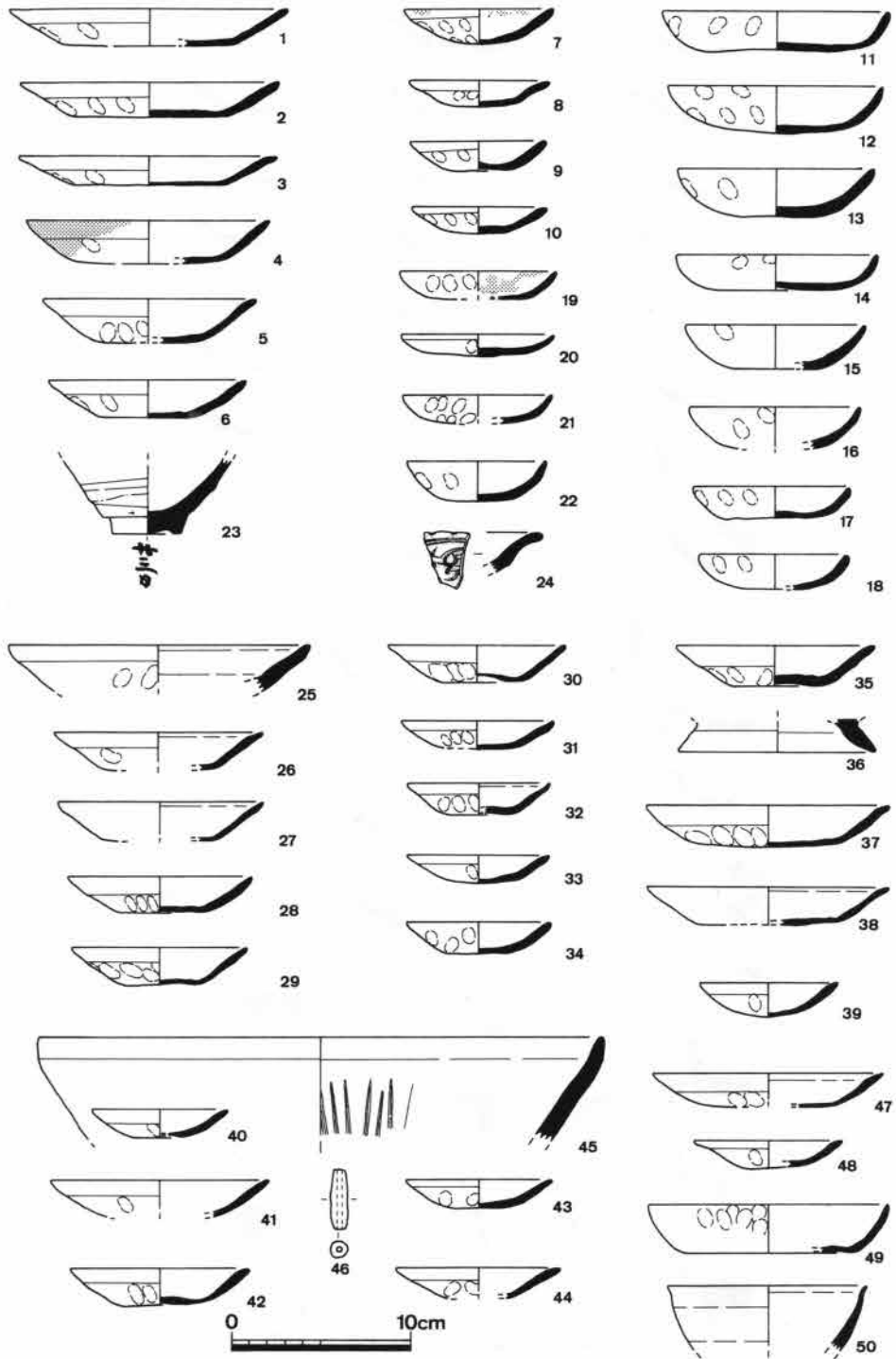
土坑SK54 土師皿47・48は、A類で、47は口縁端部が外反する。土師皿49は、口縁部の形態や調整からB類ともみられる。天目碗50は、瀬戸美濃焼である。

包含層 土師皿51～76は、A類で、口縁端部を外反させるものと、底部と口縁部の境が窪むものがある。土師皿77～83は、B類である。土師器84は、台付皿の脚部である。香炉85は、瓦質で、体部外面に印花文を施す。

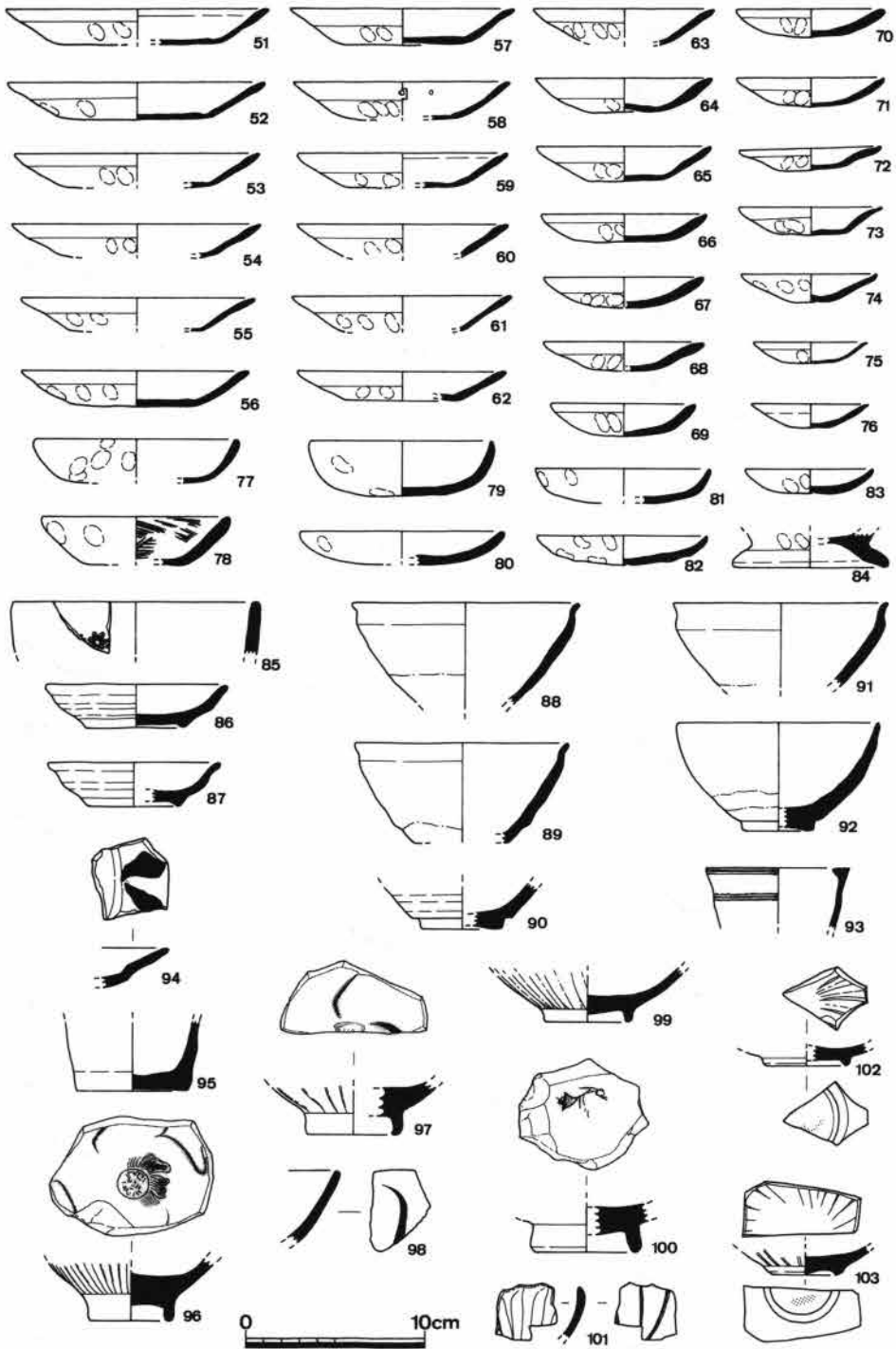
灰釉皿86・87は、瀬戸美濃焼で、口縁端部を外反させる。天目碗88～92は、瀬戸美濃焼で、88～90は外面体部下方から高台にかけて鬼板化粧し、91・92は露胎である。灰釉香炉93は、瀬戸美濃焼である。皿94は、肥前陶器で、いわゆる「絵唐津」である。16世紀末から17世紀初頭頃のものともみられる。陶器95は、瓶もしくは壺ともみられる。産地は不明である。

青磁碗96・97は、細線の蓮弁文碗とみられ、内面に花卉文をもつ。青磁碗98は、蓮弁文碗である。青磁碗99は蓮弁文碗で、釉は青みがかかり、高台内にも施釉する。高台畳付は褐色に発色している。青磁碗100は、内面見込みに印花文をもつ。これらの青磁碗は、13世紀頃～16世紀前葉頃にかけてのものともみられる。

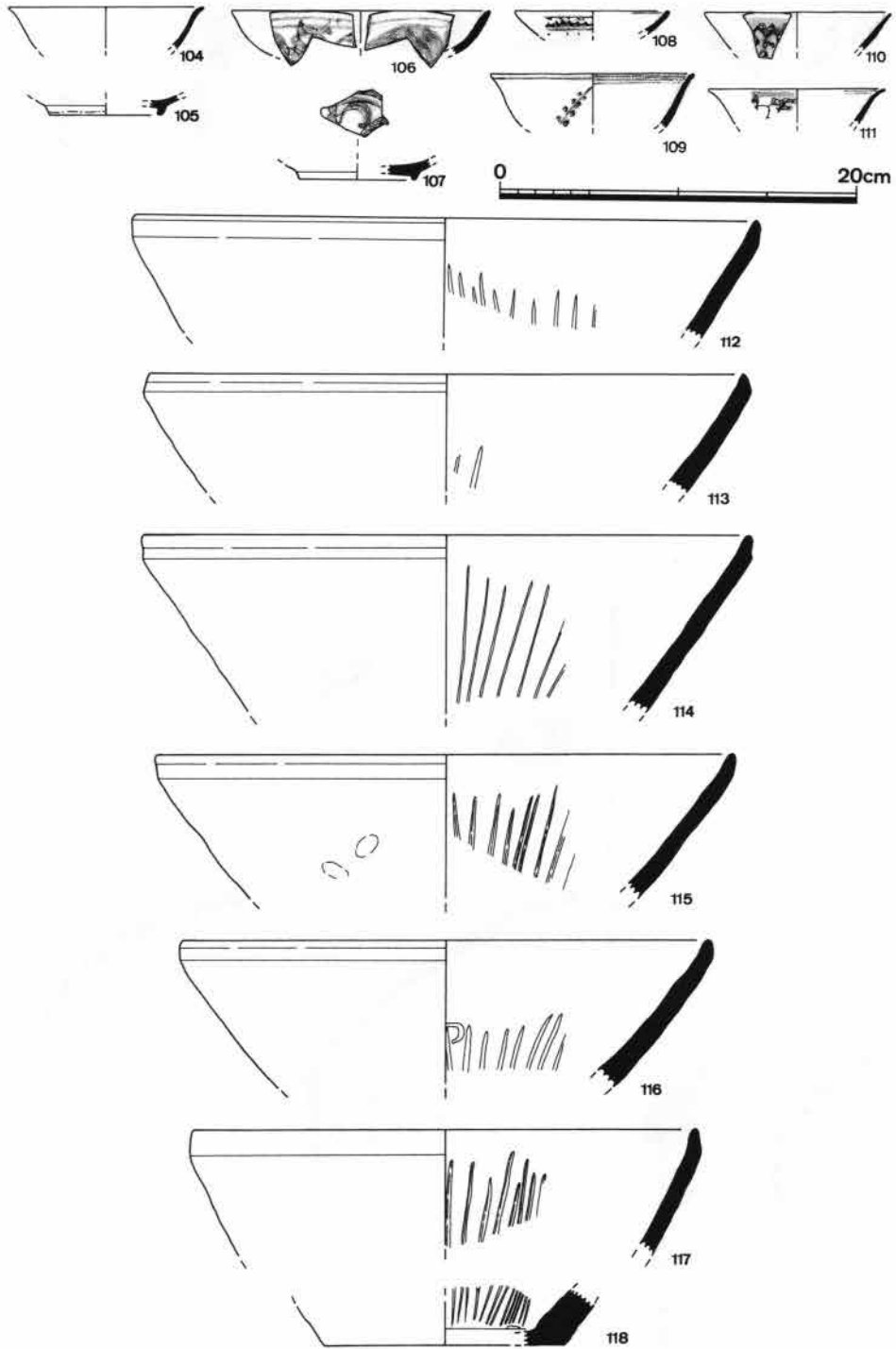
白磁皿101～103は、いわゆる菊花皿である。16世紀中葉～後葉頃のものともみられる。高台内に朱漆書きをもつものがある。白磁皿104・105は、口縁端部が外反するものである。15世紀末～16世紀前葉頃のものであろう。



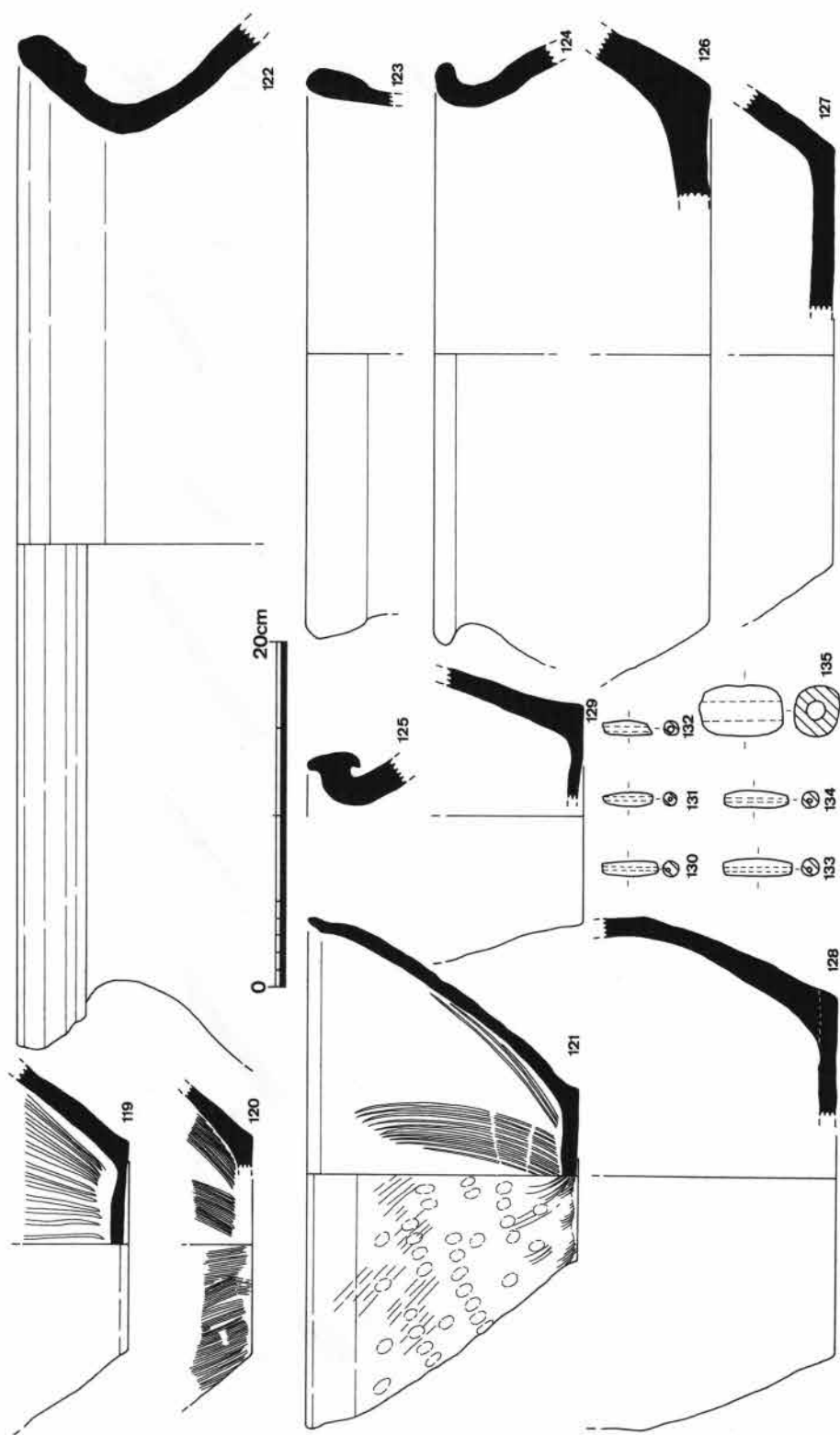
第27図 出土遺物実測図(1) 第1・6地点



第28図 出土遺物実測図(2) 第1・6地点



第29図 出土遺物実測図(3) 第1・6地点



第30図 出土遺物実測図(4) 第1・6地点

青花磁器皿106～108・青花磁器碗109～111は、いずれも小片のため詳細は不明であるが、15～16世紀頃のものと思われる。

播鉢112～119は、丹波焼で、一本引きの播目をもつ。播鉢120・121は、瓦質で、櫛引きの播目をもつ。甕122・123・126は、備前焼である。甕124・127・128・129は、丹波焼か。甕125は、常滑焼と考えられる。130～135は土錘である。

### B. 第3地点(第31～34図)

2 郭 土師皿136は、A類である。土師皿137は、B類である。138は、瀬戸美濃焼天目碗の底部である。白磁皿139は、口縁端部が外反する。皿140・141は、青花磁器である。141は、15世紀後葉から16世紀にかけての頃のものである。播鉢142は、信楽焼で、播目は摩滅している。播鉢143・144は、丹波焼である。143は、一本引きの播目をもつ。144は、17世紀に下る頃のものである。壺145は、瓦質である。

3 郭 土師皿146は、A類である。香炉147は、瓦質で、外面に印花文をもつ。碗148は、白磁である。

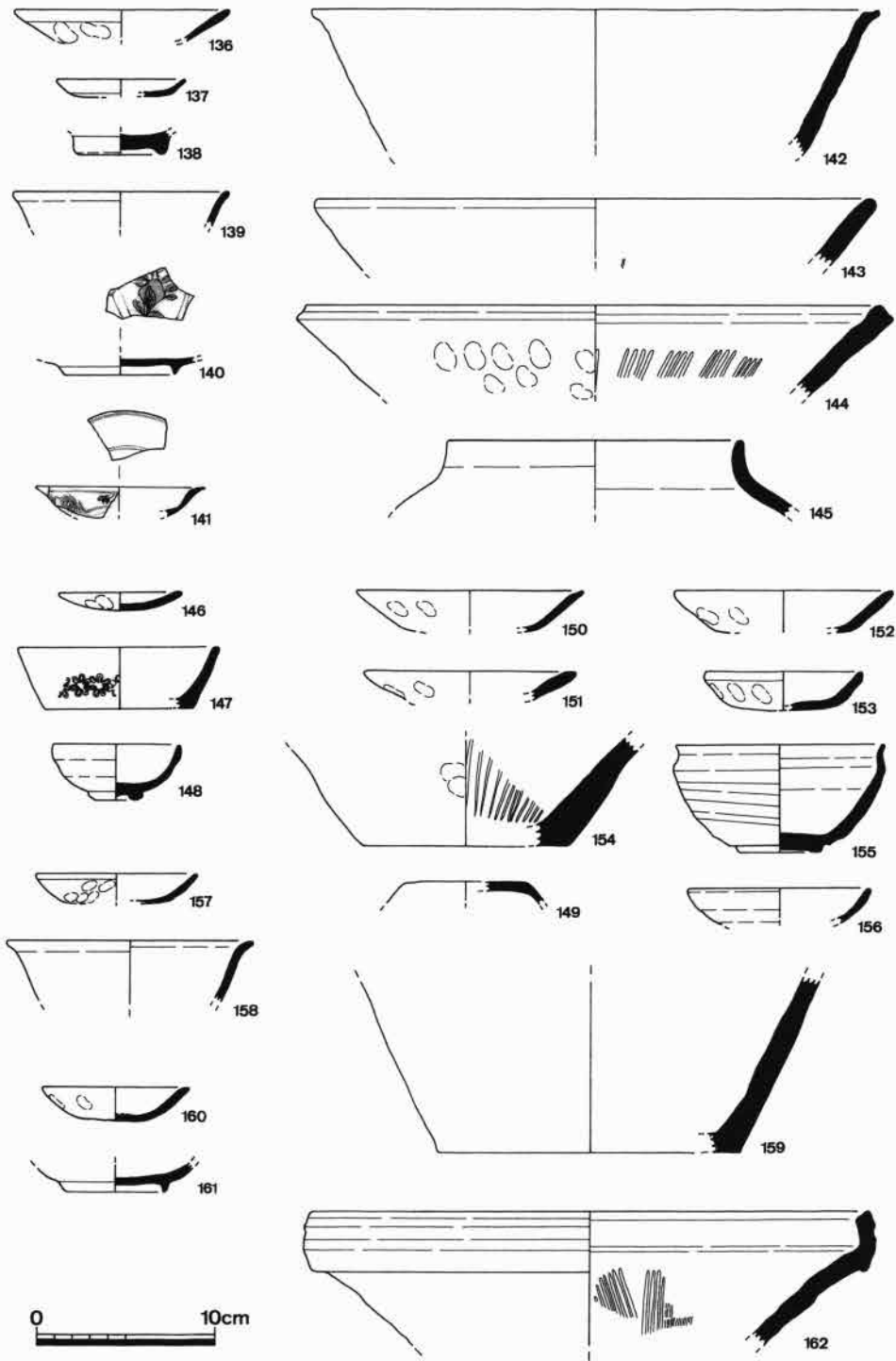
4 郭 土師皿157は、A類である。碗158は、青磁である。甕159は、丹波焼である。

5 郭 土師皿150・151・152はA類、土師皿153はB類である。播鉢154は、丹波焼で、一本引きの播目をもつ。天目碗155は、瀬戸美濃焼で、外面下方以下は露胎である。灰釉皿156は、瀬戸美濃焼で、口縁部は丸く立ち上がる。白磁149は、蓋とみられる。

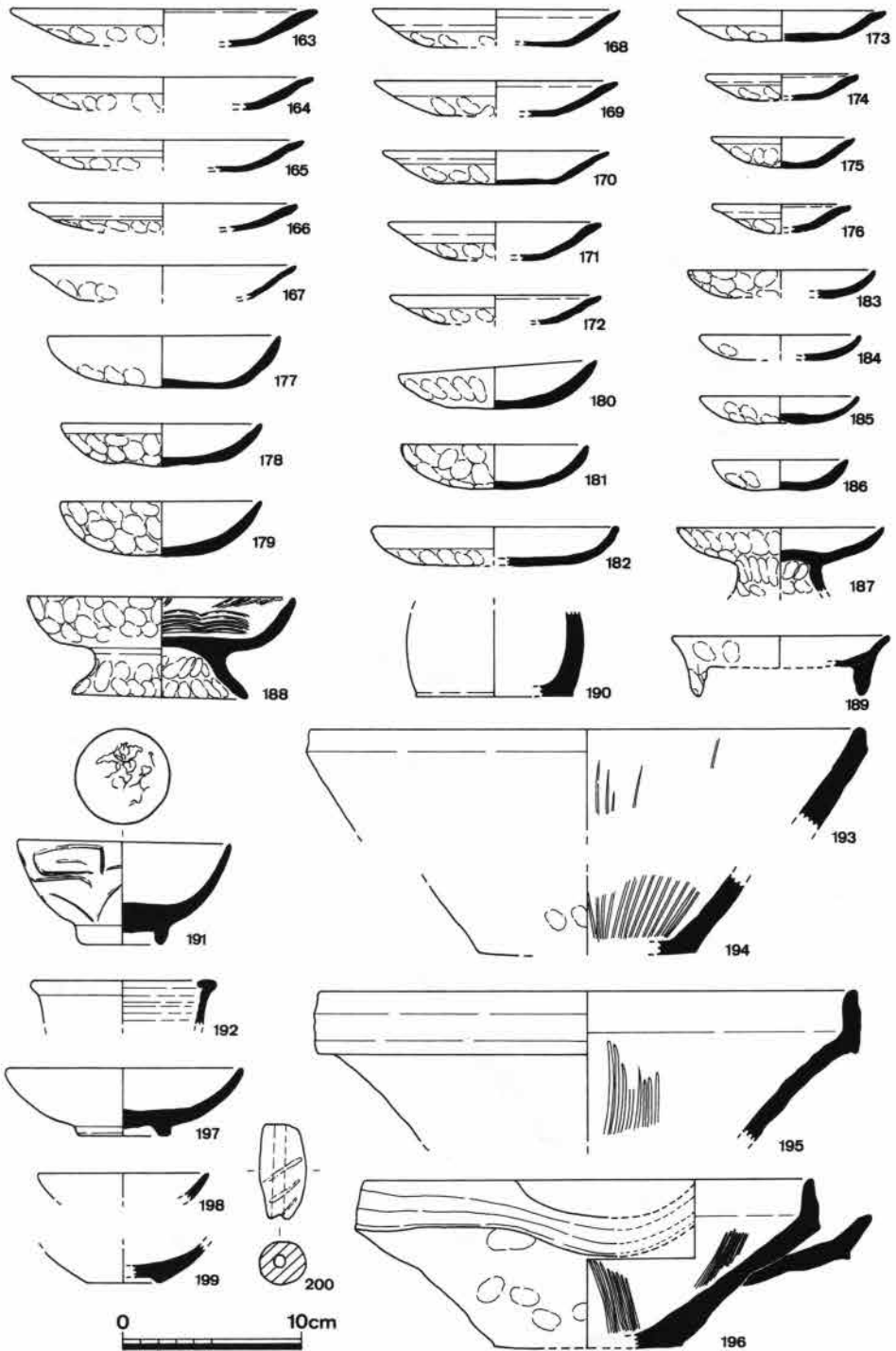
6 郭 土師皿163～176は、A類である。口縁端部が外反するものが多い。土師皿177～186は、B類である。土師器台付皿187・188は、B類の形態・調整であるが、188の皿部内面にはハケ目状の調整がみられる。脚付皿189は、調整からみてB類である。脚の数は不明である。壺190は、丹波焼とみられる。青磁碗191は、雷文碗である。15世紀前後の頃のものである。青磁192は、香炉とみられる。播鉢193・194は、丹波焼で一本引きの播目をもつ。播鉢195・196は、備前焼である。皿197～199は、肥前陶器で、西暦1600年を前後する頃のものであろう。200は、土錘である。

7 郭 土師皿160は、A類である。白磁皿161は、口縁端部が外反するものであろう。播鉢162は、備前焼である。

8 郭 土師皿201～207は、B類である。土師皿208～213は、A類である。天目碗214～216は、瀬戸美濃焼である。灰釉皿217～219は、瀬戸美濃焼である。217は折れ縁、218は端反り、219は見込みに印花文をもつ。灰釉碗220は、瀬戸美濃焼で、細線蓮弁文をもつ。瀬戸美濃焼皿221・222は、いわゆる志野で、222は菊皿である。白磁223は、器形は不明であるが、口縁端部が強く外反する。224は、白磁小碗である。青磁碗225は、内面の印花文からみて雷文碗と考えられる。青磁碗226は無文である。青磁碗227は、雷文碗である。青

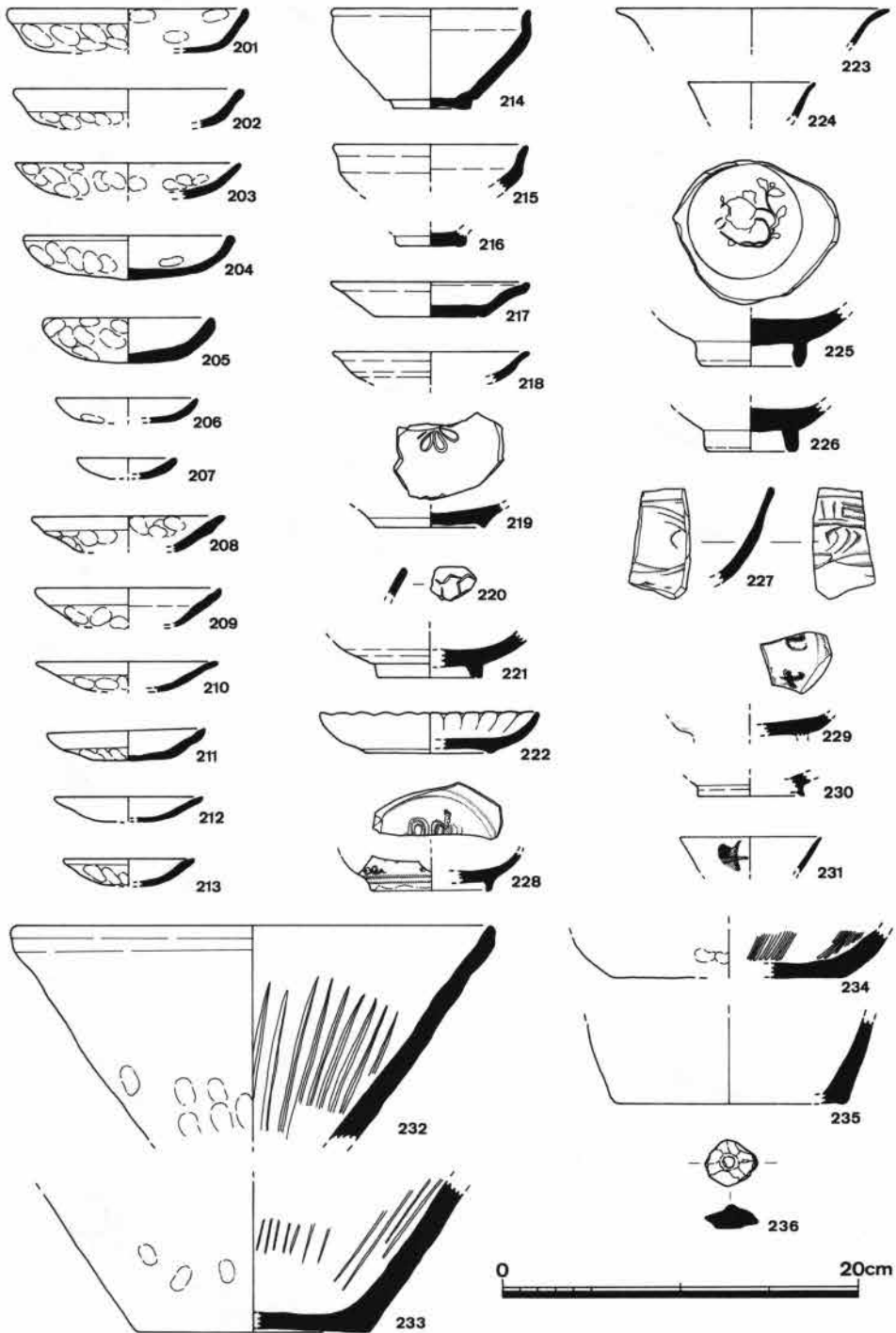


第31図 出土遺物実測図(5) 第3地点

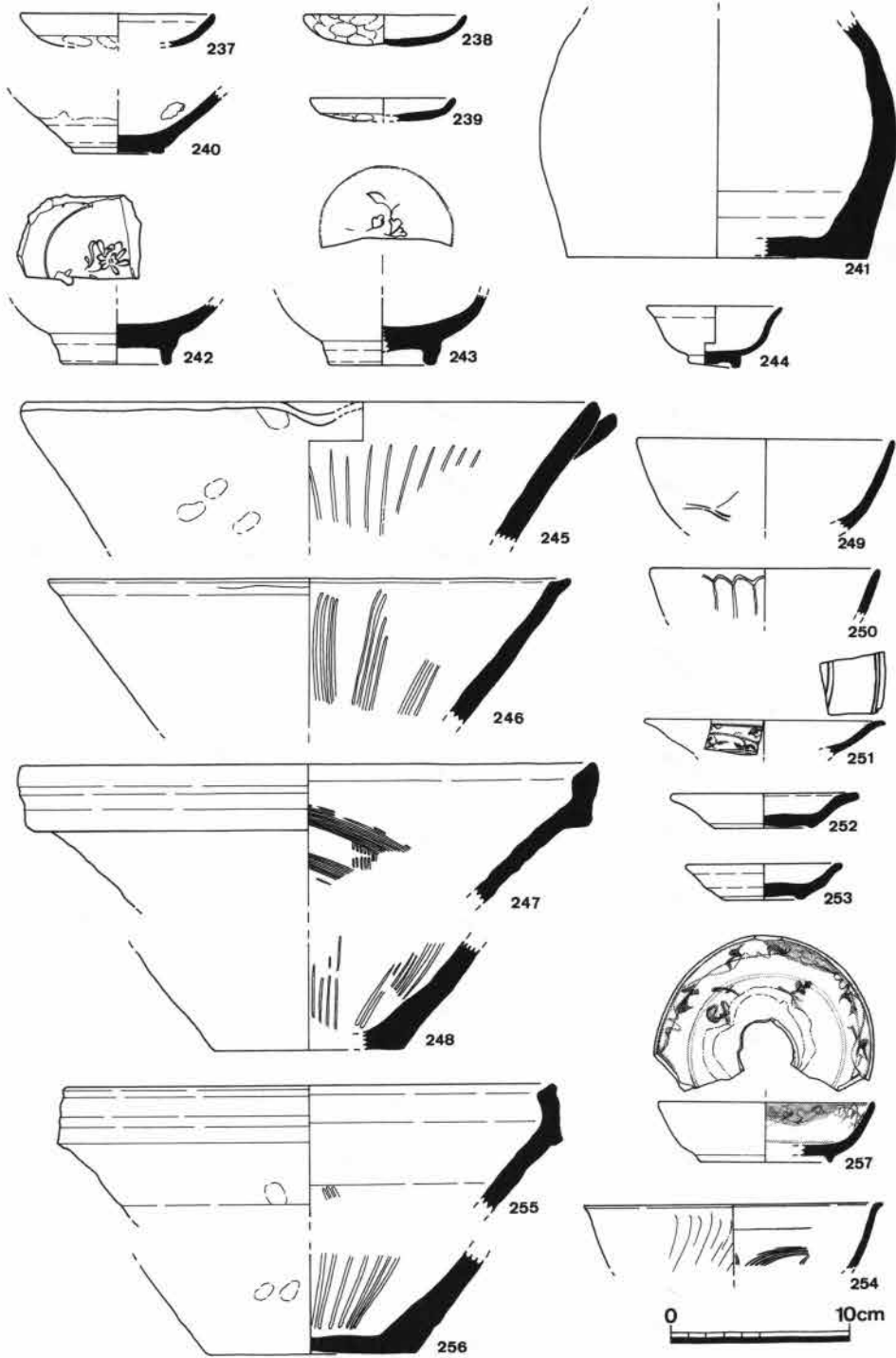


第32図 出土遺物実測図(6) 第3地点





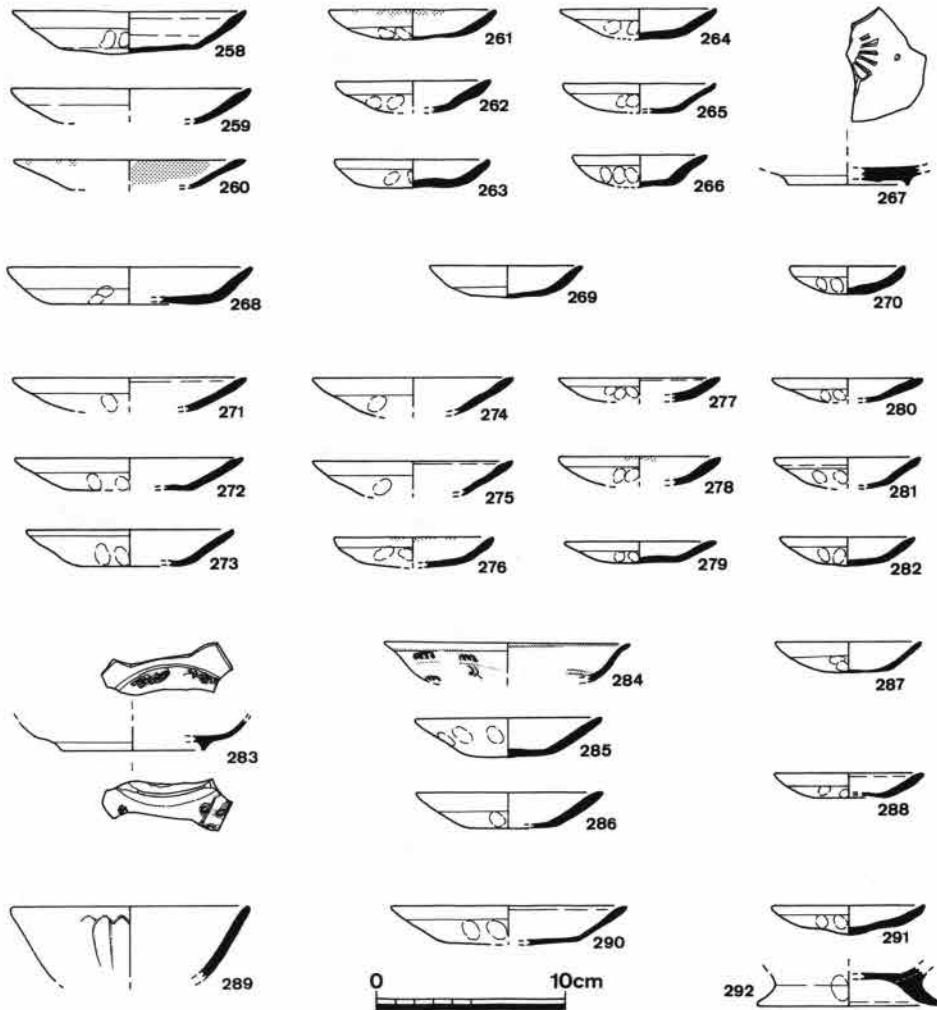
第33図 出土遺物実測図(7) 第3地点



第34図 出土遺物実測図(8) 第3地点

花磁器皿228は、見込みに十字花文・外面に唐草文が描かれる。15世紀後葉から16世紀にかけての頃のものである。229～231は、青花磁器である。播鉢232・233は、一本引きの播目をもつ丹波焼である。播鉢234は、備前焼である。甕235は、産地不明である。236は、外面に緑釉が施される。器形・産地ともに不明である。

8郭と9郭の間の斜面 土師皿237はA類、土師皿238・239はB類である。灰釉碗240は、瀬戸美濃焼で、室町時代中期頃までさかのぼるものとみられる。壺241は、丹波焼か。青磁碗242は、見込みに印花文をもつもので、15世紀頃のものであろう。青磁碗243は、見込みの印花文から雷文碗とみられる。白磁小碗244は、高台に抉り込みがある。播鉢245は一本引きの播目をもつ丹波焼、播鉢246は信楽焼、播鉢247・248は備前焼である。



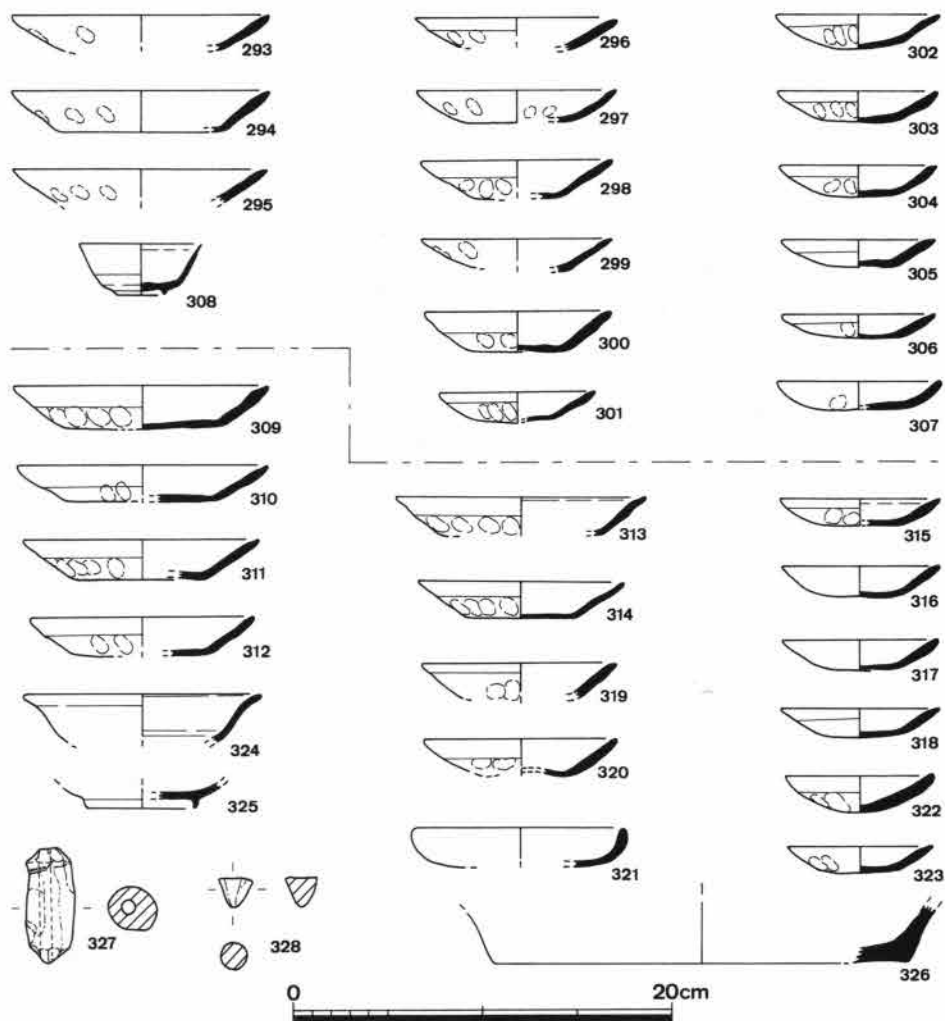
第35図 出土遺物実測図(9) 第7地点

9 郭 249・250は青磁碗で、250は細線蓮弁文をもつ。青花磁器皿251は、外面に唐草文が描かれる。15世紀後葉から16世紀にかけてのものである。灰釉皿252・253は瀬戸美濃焼で、252は折れ縁・253は端反りである。播鉢255は備前焼、播鉢256は丹波焼である。皿257は肥前磁器で、18世紀後半頃のものと思われる。S D902から出土した。青磁碗254は、猫掻きの施文がある。表採遺物である。

C. 第7地点(第35図)

1 郭 土師皿258～266は、A類で、底部と口縁部の境が窪むものが含まれる。灰釉皿267は、見込みに印花文をもつ。

2 郭 土師皿268・269はA類、土師皿270はB類である。



第36図 出土遺物実測図(10) 第8地点

4 郭 青花磁器皿283は、見込みに花文が描かれる。青花磁器皿284は、外面に唐草文が描かれる。土師皿285～288は、A類である。288は、土坑S K401から出土した。

5 郭 土師皿271～282は、A類である。底部と口縁部の境が窪むものが含まれる。

1 郭斜面 青磁碗289は、細線蓮弁文をもつ。土師皿290・291は、A類である。292は、台付皿の脚部である。

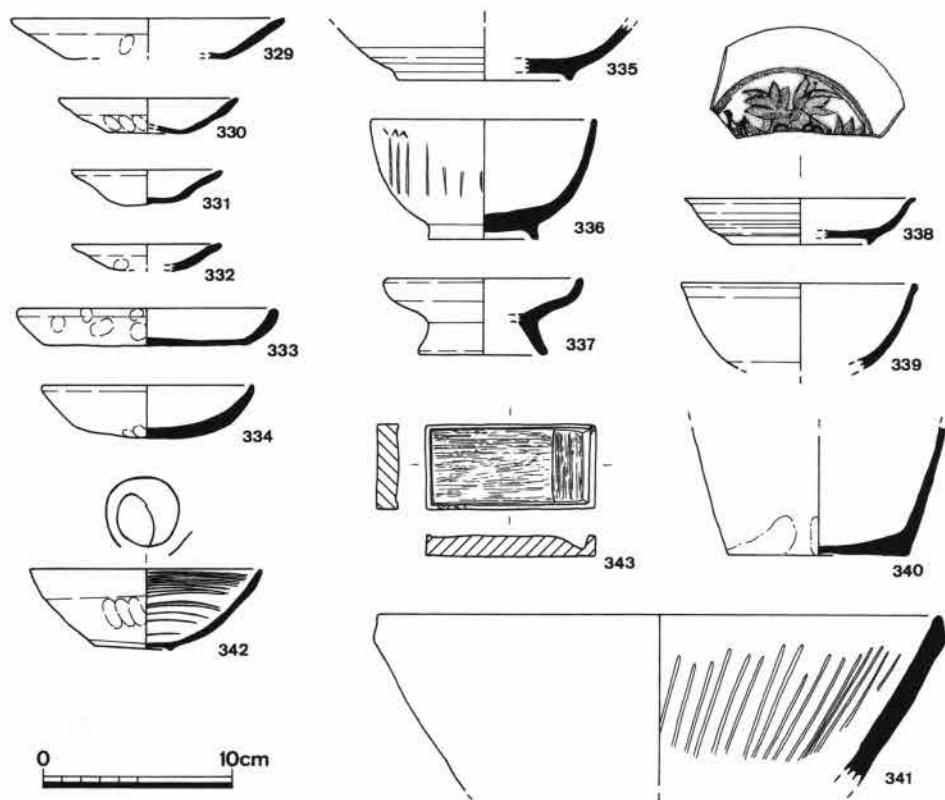
D. 第8地点(第36図)

2 郭 土師皿293～306は、A類である。289・300のように、底部と口縁部の境が窪むものがある。土師皿307は、B類である。308は、白磁小碗である。

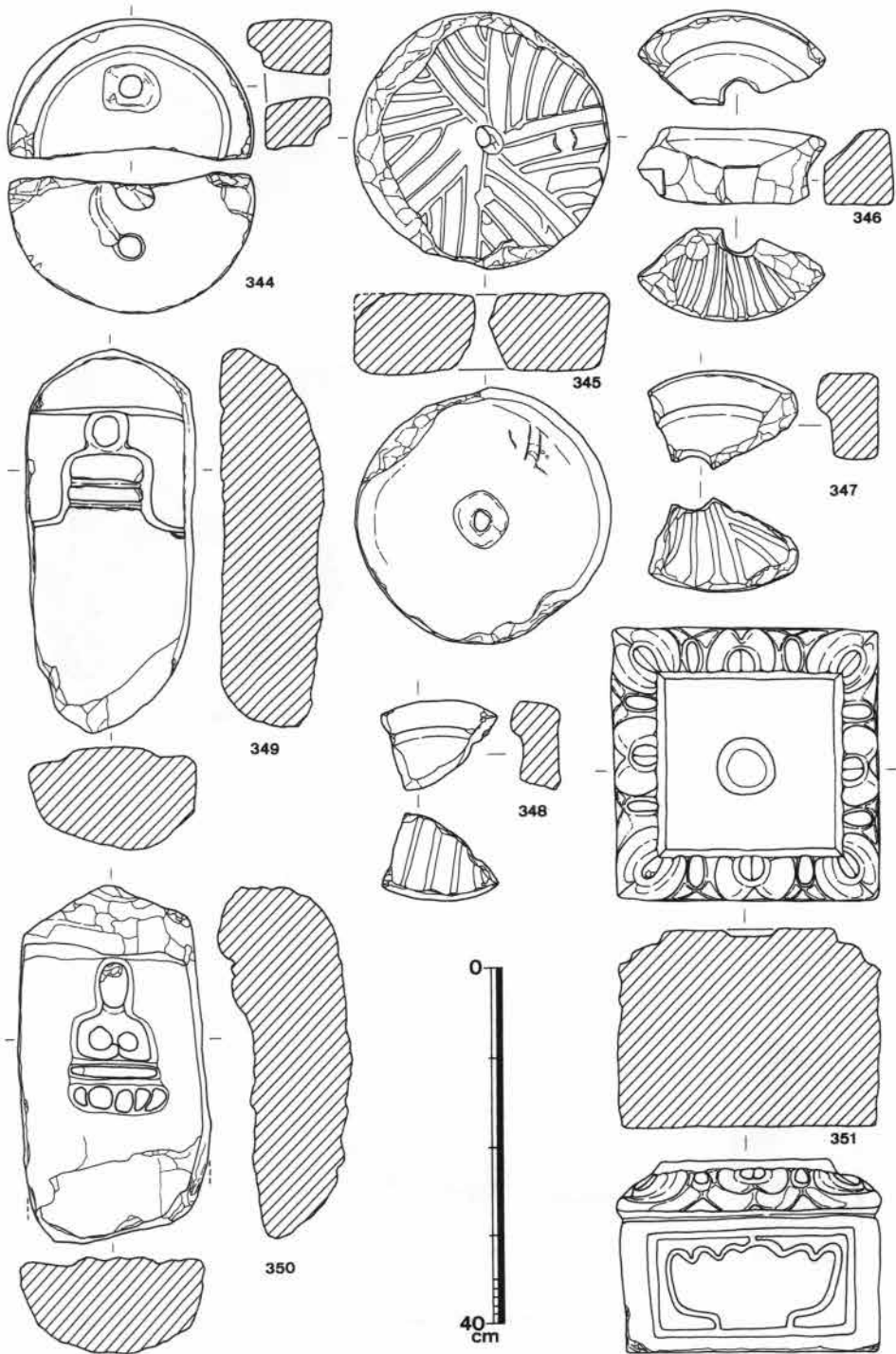
3 郭 土師皿309～320は、A類である。底部と口縁部の境が窪むものがある。土師皿321～323は、B類である。白磁皿324は、口縁端部が外反するもので、白磁325も、同様の皿とみられる。甕326は、備前焼とみられる。327は土錘、328は、脚付皿の脚部であろう。

E. 第5地点(第37図)

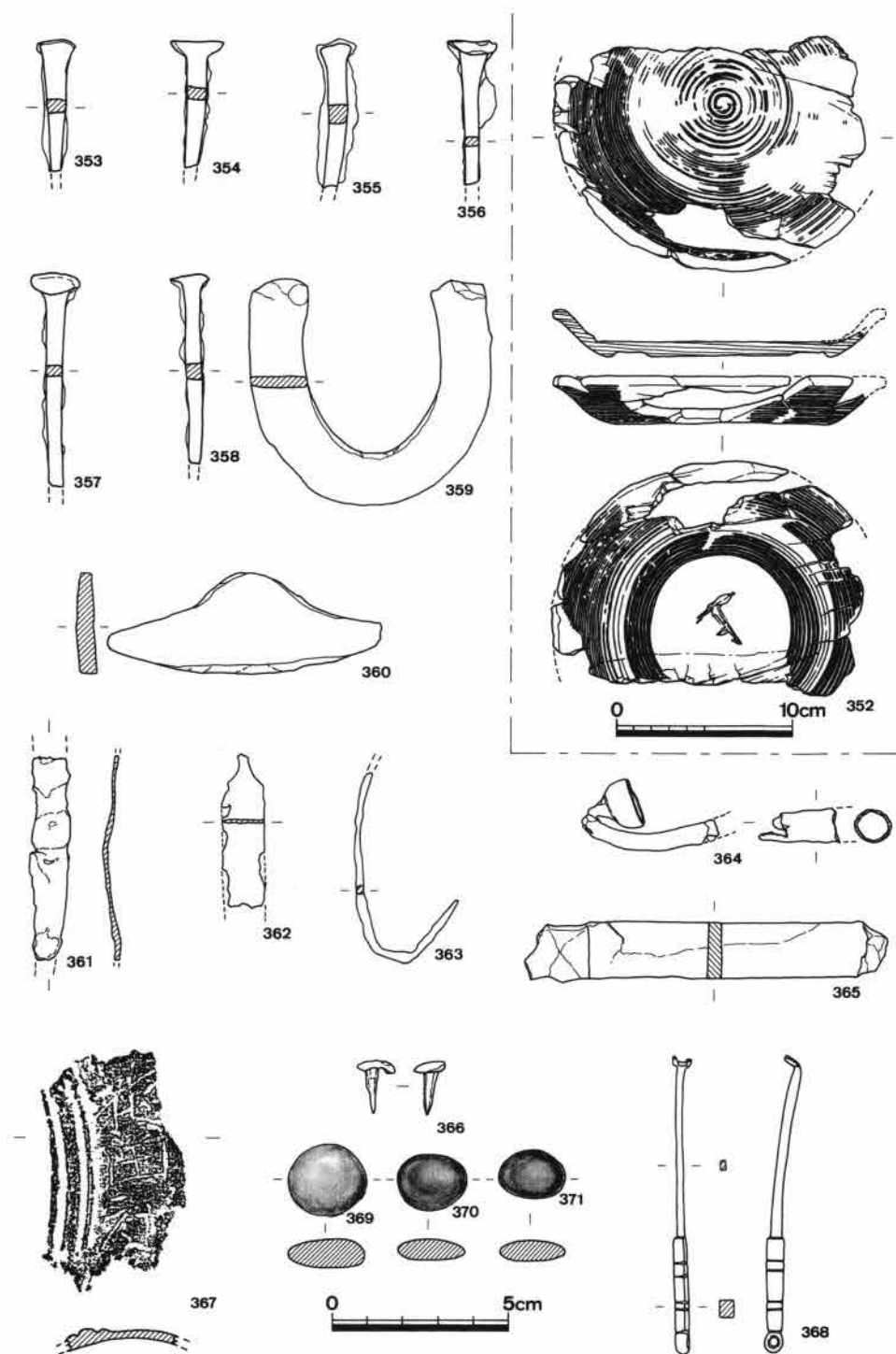
土師皿329～332は、A類である。口縁端部が外反するものと、底部と口縁部の境が窪むものがある。土師皿333・334は、B類である。灰釉皿335は、瀬戸美濃焼である。灰釉碗



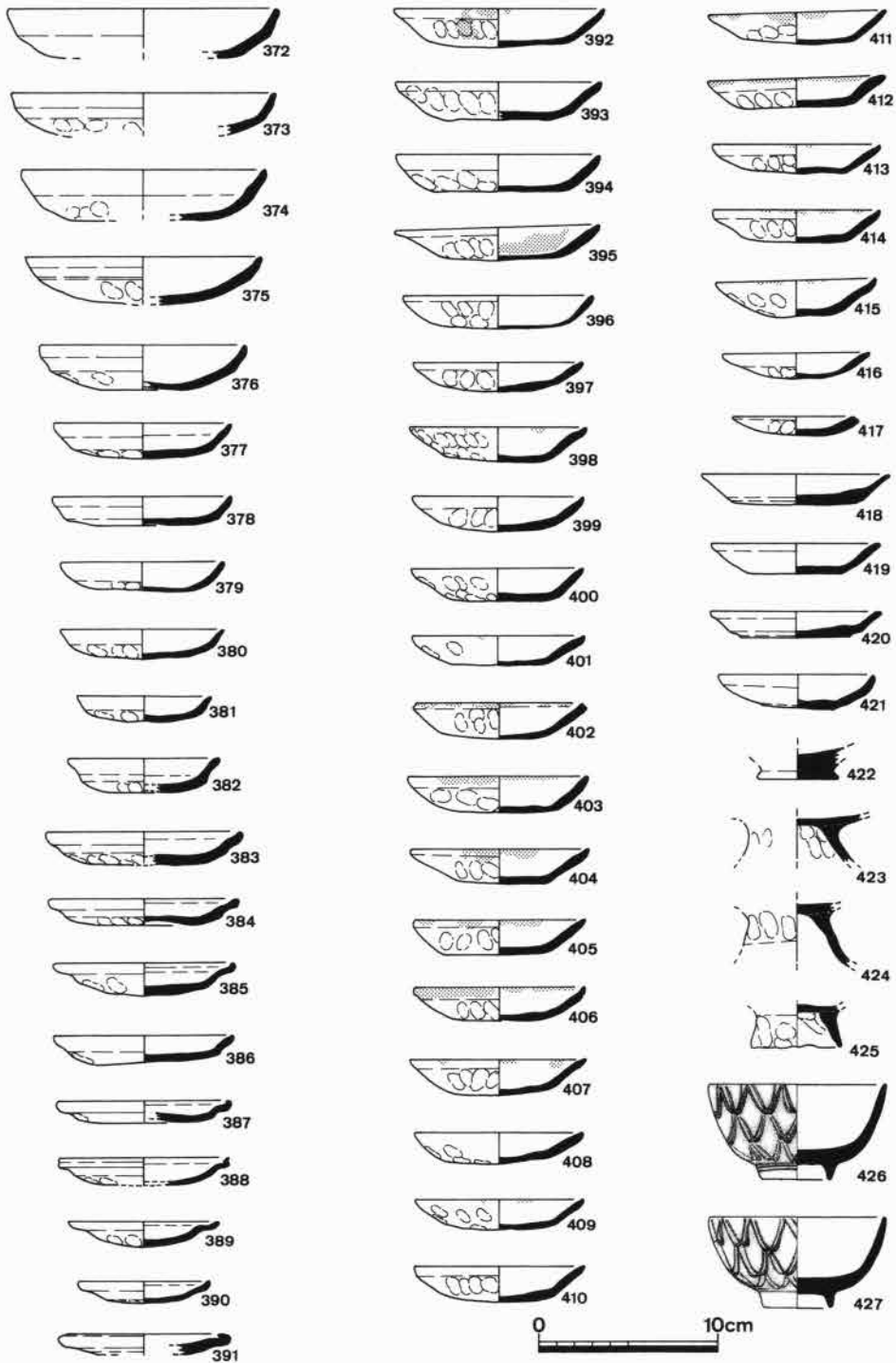
第37図 出土遺物実測図(11) 第5地点



第38図 出土遺物実測図(12) 石製品



第39図 出土遺物実測図(13) 木・金属・石製品



第40図 出土遺物実測図(14) 春日神社跡



336は、瀬戸美濃焼で、細線蓮弁文をもつ。337は、土師器台付皿である。青花磁器皿338は、見込みに花文を描き、口縁端部は外反する。青磁椀339は、口縁端部が玉縁状になる。瓶340は、白灰色釉が施される。器胎は薄く、底部と体部の境は鋭い。中国製の陶器か。播鉢341は、一本引きの播目をもつ丹波焼である。瓦器椀342は、内面のミガキが粗く、外面はミガキ調整しない。13世紀頃のものか。

#### F. 春日神社跡(第40図)

土師皿372～379は2段ナデ調整を施す。土師皿380～382は、外面を強くナデ調整し、口縁端部を外反させる。土師皿383～391は、「て」の字口縁のものである。以上の土師皿は、11世紀頃のものともみられる。

土師皿392～416は、A類である。底部から口縁部が明瞭に立ち上がる。17世紀頃のものか。土師皿417は、型当てで整形する。土師皿418～421は、ロクロ整形で底部糸切りである。422～425は、台付皿の脚である。椀426・427は、肥前染付磁器で、二重網目文を描く。18世紀前～中葉頃のものか。

#### (2) 石製品(第37～39図)

硯343は、第5地点出土で、小形のものである。石臼344・345は、第1・6地点の土坑SK06と井戸SE33からそれぞれ出土した。口径から、一對のものと思われる。石臼346～348は、第3地点出土である。346は8郭から、347・348は7郭から出土した。石仏349・350は、第1・6地点の石垣付近から出土した。石垣用材として用いられていたものか。349は、未製品か。宝篋印塔基礎351は、第7地点5郭の礎石として転用されていたもので、室町時代の様式を示す。碁石369～371は、第1・6地点から出土した。黒石である。

#### (3) 木製品(第39図)

盆352は、第1・6地点土坑SK06出土で渦状の沈線がめぐり、底部に「上」と彫る。

#### (4) 金属製品(第39図)

釘353～355は第1・6地点出土、釘357・358は春日神社跡出土である。長さは不明である。不明鉄製品359は、第3地点出土で「U」字形である。火鑽金360は、第3地点出土である。銅製品361～363は、形状が不明であるが、362は筭の一部か。第1・6地点出土である。キセル364は、第7地点出土である。365は、小柄の一部か。第3地点出土である。銅鋌366は、第1・6地点出土である。銅製品367は鰐口の一部とみられ、「梅田社」の刻銘がある。第7地点出土。鍵368は、銅製で、春日神社跡出土。

#### 4. 堂山2号窯

第3次調査において、第3地点の調査中に、調査地西側の2郭から3郭にかけての斜面部で、古墳時代後期の須恵器窯を検出した。付近では、昭和39年頃に古墳時代後期の須恵器窯である堂山窯跡が確認されている。今回検出した窯跡も時期的にそれに関係するものと考えられるので、あわせて堂山窯跡群とし、今回検出した窯を堂山2号窯と名付けた。なお、この窯の灰原の広がり及びこれ以外の窯跡の有無の確認のため、開発対象地内で範囲を広げて掘削したが、このほかに窯跡はなく、灰原も八木城の郭造成で削り取られたためか残存していなかった。

堂山2号窯は、地山をくり抜いて構築された窖窯と考えられる。窯壁下半及び床面は岩盤であるが、窯壁上半及び天井部は黄色粘質土層である。天井部は陥没しており残存していない。また、煙道も2郭造成のために削り取られている。

窯体の残存長は約6.8m・床面最大幅は約1.4mである。主軸方向はN-2°-Eで、ほぼ南北方向であり、北に向かって開口する。窯壁には部分的に粘土を貼った痕跡が残る。

##### (1) 焚き口部及び燃烧部

床面の焼土が途切れるあたりから上方約1.5mの床面傾斜が変わる部分までが、焚き口部及び燃烧部にあたると考えられる。床面はほぼ水平である。

##### (2) 烧成部

燃烧部との境となる床面傾斜角度変換点から上方約4.9mの、さらに床面傾斜が急になる部分までが烧成部とみられる。上方では、窯壁や床面の還元焼土層が薄くなる。床面傾斜角度は、約13-30°である。

##### (3) 煙道部

烧成部との境の床面角度変換点以上が煙道部にあたると考えられる。床面には還元焼土がほとんど見られず、薄く黒変している。床面傾斜角度は、約40°である。

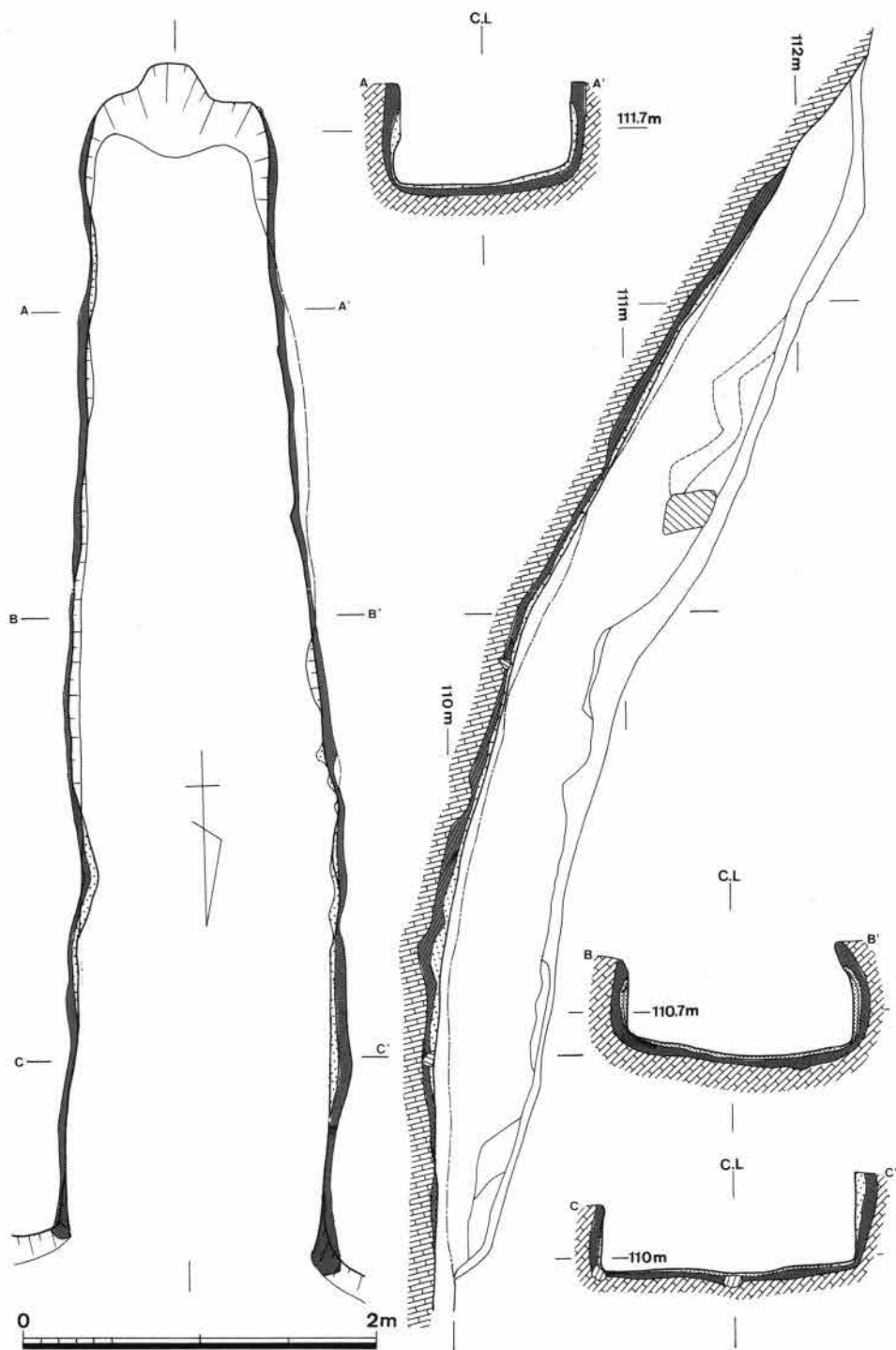
##### (4) 灰原

焚き口部前の前庭部状の平坦地にわずかに残存していたのみである。八木城の造成によって、ほとんど削り取られたものとみられる。

##### (5) 出土遺物(第42図)

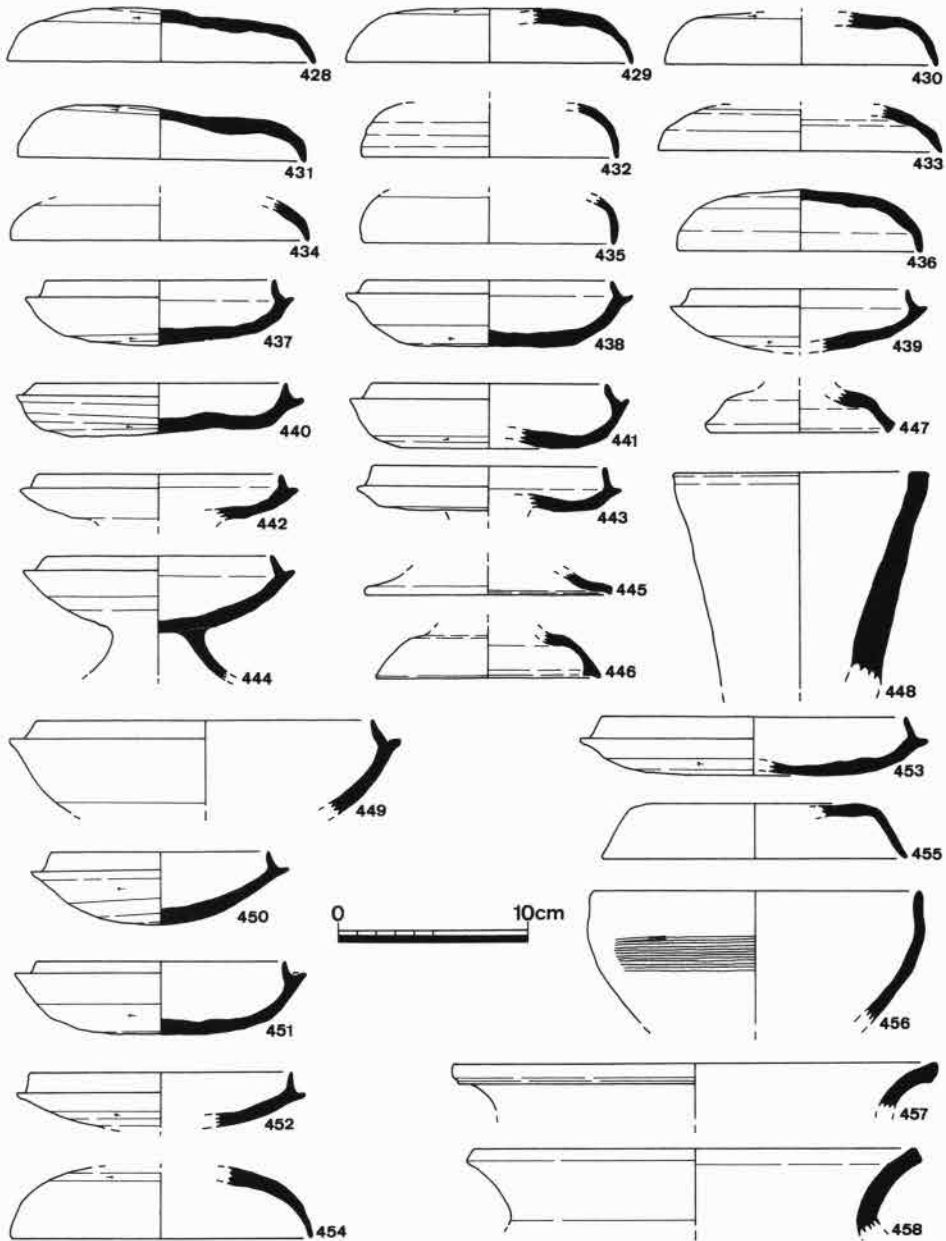
灰原がほとんど残っておらず、須恵器の出土数は少ない。製品としては、蓋杯(428-441・450-454)・高杯(442-445)・播鉢形須恵器(448)・甕(457・458)などがある。その他、台付長頸壺の脚部と考えられるもの(446・447)や壺蓋とみられるもの(455)などもある。

杯蓋は天井部が丸味をもっており、稜はない。杯身は、口縁部の立ち上がりが低く、口径もやや小さくなる。陶邑編年のⅡ期・TK209型式期に併行するものとみられ、6世紀



第41図 堂山2号窯実測図

末から7世紀にかけてのものと思われる。なお、428～447までは窯体内から、それ以外は灰原出土である。窯体内出土のものの中には何度も火を受けた形跡があるものがあり、焼台として使用されていたものかもしれない。



第42図 出土遺物実測図(15) 堂山2号窯

## 5. 小結

八木城の始まりについては諸説あるが、実情は不明としかいいようがない。ただ、この城は、室町時代の丹波守護代内藤氏の居城であり、その意味では、丹波で最も重要な城と言える。戦国期には、黒井城の荻野氏・八上城の波多野氏などの西丹波の在地勢力の台頭により、内藤氏の勢力範囲は船井・桑田両郡周辺に限られていたとしても、丹波における重要拠点の一つであることには変わりない。戦国期後半には織田信長が台頭し、その配下の明智光秀が丹波に侵攻してくる。このような状況の中で八木城は落城し、内藤氏は城主の地位を追われる。この落城の時期についても諸説あるが、ほぼ天正7(1579)年前後とみてよい。このように、重要な城であるにもかかわらず不明な点が多い。これは、内藤氏一族がキリスト教と係わりがあったため、後のきびしい禁教令の中で後難を避けるため、故意に記録が書き換えられたり抹殺されたりしていることにもよる。このような状況ではあるが、発掘調査を通しての若干の留意点を列記して小結としたい。

八木城に係わる調査地点のうち、出土遺物が多い地点は、第1・6地点、第3地点である。第1・6地点では、井戸や地下式貯蔵穴と考えられる土坑などの生活関連遺構も検出している。この地点に隣接する第5地点でも、顕著な遺構はなかったものの、遺物は比較的多くまた種類も多い。第3次調査中に、これらの地点付近のさらに低い場所で、八木町教育委員会によって第4次調査が行われた。この調査でも井戸とみられる遺構が検出され、一本引きの播目をもつ丹波焼の播鉢(注18)などが出土している。この付近一帯が日常生活の場であったことがうかがえる。

第3地点では、郭ごとに出土遺物の多少がある。多いのは2郭・6郭・8郭である。これらは、比較的広い平坦地部分である。ことに8郭では石組井戸などを検出している。8郭から9郭の間の斜面部からの出土遺物も8郭から流出したものと考えられる。このように、第3地点でも、ある程度の防御施設を兼ねた中で生活がおこなわれていたことがうかがえる。

第7地点・第8地点では、遺物出土数が少なく、内容としては土師皿がそのほとんどである。第7地点については、位置的にみて「天神口」を守る防御拠点と考えられる。ここは、非常時に使用される場であり、機密保持のため出入りが制限されていたことも想定される。第8地点については、生活や防御の場というより護岸施設としての機能が優先されていたものとも考えられる。

生活関連遺物のうち、播鉢には、丹波・備前・信楽・瓦質のものがある。このうち、信楽の播鉢は、京都などでは多く出土しているが、丹波ではまれである。また、焼物の煮炊具がない。これは、綾部市平山城跡や福井県一乗谷朝倉氏遺跡と同様に、鉄鍋を使用して

いたためと考えられる。<sup>(注19)</sup>

出土遺物から時期的なものをみれば、まず、土師皿では16世紀後葉から末頃のものが多いが、これは、使い捨てするものではないことにもよるのであろう。土師皿が示す年代観は、八木城落城時及びそれ以後にあたる。

福島克彦氏は、八木城の山城部分に明智氏による改造がなされていることを指摘されている。<sup>(注20)</sup>内藤氏滅亡以後、丹波南半部の経営の中心は明智光秀によって築城された現亀岡市の亀山城に移るが、八木城は廃棄されることなく存続しているのである。内藤氏の八木城の大手口は、<sup>(注21)</sup>絵図によると現亀岡市側である。福島氏によって指摘される明智氏の八木城は、まさに調査地側の本郷地区方面を意識している。もっとも、調査地周辺には丹波守護細川勝元が建立したといわれる龍興寺があり、内藤氏の時期にもなんらかの施設などがあったとは思われる。ただ、調査地周辺は、明智氏の手が大幅に加えられている可能性が高い。出土遺物の様相からみて、今回検出した状況は、明智氏によって手を加えられた以後のものである可能性が高い。

堂山2号窯は、南丹地域において、古墳時代の須恵器窯としては窯体のほぼ全容が明らかになった初例といえる。これまで、<sup>(注22)</sup>園部町大向窯跡の調査が行われているが、灰原のみの調査である。ただ、堂山2号窯では、灰原が残存していないため、焼成器種の全容やその組成などが充分把握できない。とはいえ、周辺には豪族居館と考えられる建物跡群が検出された八木嶋遺跡<sup>(注23)</sup>や古墳など、時期をほぼ同じくする遺跡が散在している。これらの遺跡との関連及び周辺の古墳時代を考える上で、興味深い窯跡と言えよう。

(引原茂治)

注1 調査参加者(敬称略)

明田安男・浅井義久・石橋愛子・井上洋子・今西敬子・今西文子・今西八千代・上西ミサヲ・梅井ゆき子・大内清美・大槻益子・岡本和代・岡本かよ子・岡本美和子・香川友子・片山八重子・木村恵子・木村隆之・黒田美代子・小松佳彦・斉藤澄代・佐々木理・佐々木直・荏林ハツエ・関口睦美・高田真由美・竹上美代子・竹上てる・田中寛治・谷口明子・田村喜美子・田村周治・田村順子・田村末雄・田村信子・田村ユキエ・寺田あき・土井正文・栃下富江・栃下緑・中川君代・中川真理子・中西セツ・西田笑子・波部京子・人羅キミ・人羅幸子・広瀬辰次・広瀬伝治・広瀬友次・福島鈴代・福島佳子・福田博・堀源一・牧野當子・松下道子・松本末野・松本辰雄・松本芳雄・見須俊介・村上典子・八木英子・八木知子・八木美鈴・山田きん子・湯浅彭朗・湯浅義雄・横山成巳・吉岡嘉代子・吉田八重子・吉田靖・吉原淑子

注2 森 浩一ほか『園部垣内古墳』同志社大学文学部 1990

注3 平良泰久ほか「曾我谷遺跡発掘調査概報」(『園部町埋蔵文化財調査報告書』第2集 園部町

教育委員会) 1977

- 注4 「京都府遺跡地図」第2版 京都府教育委員会 1981
- 注5 大野 薫『崇禪寺遺跡発掘調査概要』I 大阪府教育委員会 1982、「百間川原尾高遺跡」2(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56—旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査V—』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会) 1984、「和爾・森本遺跡」II(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第58冊 奈良県立橿原考古学研究所) 1989
- 注6 中村孝行「青野西遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第16集 綾部市教育委員会) 1989
- 注7 森下 衛ほか「船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報」(『園部町文化財調査報告書』第8集 園部町教育委員会) 1991
- 注8 注4に同じ。
- 注9 森下 衛ほか「千代川遺跡6・7次」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注10 柴 暁彦「川向北1号墳」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注11 黒崎 直「近畿における8・9世紀の墳墓」(『研究論集』VI 奈良国立文化財研究所) 1980
- 注12 平成5年度に(財)京都市埋蔵文化財研究所で調査された京都市高速鉄道東西線の建設工事に伴う発掘調査で、9世紀の古墓が確認された(安祥寺下寺跡推定地発掘調査の概要1993年8月29日)。内部構造は墓壇を掘削したのち、木槨を据え、その中に木棺をおさめている。木槨と木棺の間には木炭と土の混合物を充填した構造の木槨墓である。沢ノ谷遺跡では木槨及び木棺の痕跡は未確認であるが、少なくとも墓の規模から伸展葬にされていたことは、事実であろう。
- 注13 a. 梅原末治「山城大枝の奈良時代の一古墓」(『史迹と美術』第41輯418号) 1971  
b. 『京都大学文学部博物館考古資料目録』第2冊 京都大学文学部 1968
- 注14 柴 暁彦ほか「国道9号バイパス関係遺跡平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注15 柴 暁彦・引原茂治「国道478号バイパス関係遺跡平成2・4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注16 「丹波並河城跡第3次発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第27集 亀岡市教育委員会) 1993
- 注17 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966
- 注18 谷口 梯「八木城跡発掘調査概要」(『八木町文化財調査報告』第1集 八木町教育委員会) 1994
- 注19 森島康雄ほか『京都府遺跡調査報告書』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990、「よみがえる中世」6 平凡社 1990
- 注20 福島克彦「織豊系城郭の地域的展開 —明智光秀の丹波支配と城郭—」(『中世城郭研究論集』新人物往来社) 1990
- 注21 八木城の絵図は、『郷土史八木』第5号(八木史談会編 1992)によると、数種あるが、ほとんどが現亀岡市側を大手口としている。ただ、これらの絵図については内容的に充分検討する必要がある。
- 注22 堤圭三郎「大向窯跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1971)』 京都府教育委員会) 1971
- 注23 注15に同じ。

付表2 八木城跡出土土器・陶磁器観察表

番号	種類	器形	出土地	法量(cm)			備考
				口径	底径 (高台径)	器高	
1	土師器	皿	第1・6地点SD01	15.8	—	2.1	A類
2	〃	〃	〃	14.9	—	1.9	〃
3	〃	〃	〃	14.5	—	1.6	〃
4	〃	〃	〃	13.6	—	2.4	〃
5	〃	〃	〃	11.8	—	2.5	〃
6	〃	〃	〃	11.3	—	2.1	〃
7	〃	〃	〃	8.3	—	2.0	〃
8	〃	〃	〃	7.6	—	2.4	〃
9	〃	〃	〃	7.7	—	1.6	〃
10	〃	〃	〃	7.6	—	1.5	〃
11	〃	〃	〃	12.8	—	2.2	B類
12	〃	〃	〃	12.2	—	2.6	〃
13	〃	〃	〃	11.1	—	2.6	〃
14	〃	〃	〃	11.2	—	2.0	〃
15	〃	〃	〃	10.2	—	2.5	〃
16	〃	〃	〃	9.4	—	2.3	〃
17	〃	〃	〃	8.7	—	1.7	〃
18	〃	〃	〃	8.4	—	2.0	〃
19	〃	〃	〃	8.6	—	1.6	〃
20	〃	〃	〃	8.4	—	1.2	〃
21	〃	〃	〃	8.3	—	1.6	〃
22	〃	〃	〃	7.8	—	2.1	〃
23	瀬戸美濃陶器	椀	〃	—	3.9	—	天目椀、底部朱漆 銘「廿三日」
24	中国製青磁	皿	〃	—	—	—	稜花皿
25	土師器	〃	第1・6地点SK02	16.8	—	—	器胎厚い
26	〃	〃	〃	11.7	—	2.1	A類
27	〃	〃	〃	11.6	—	2.2	〃
28	〃	〃	〃	10.2	—	2.1	〃
29	〃	〃	〃	9.8	—	2.1	〃
30	〃	〃	〃	9.9	—	2.1	〃
31	〃	〃	〃	8.4	—	1.6	〃
32	〃	〃	〃	7.8	—	1.8	〃
33	〃	〃	〃	8.0	—	1.6	〃
34	〃	〃	〃	8.0	—	1.8	〃
35	〃	〃	第1・6地点SK03	11.0	—	2.2	〃
36	〃	台付皿	〃	—	10.8	—	脚部のみ
37	〃	皿	第1・6地点SK05	13.6	—	2.3	A類
38	〃	〃	〃	13.4	—	2.2	〃
39	〃	〃	第1・6地点SK06	7.6	—	1.9	〃



40	〃	〃	第1・6地点SK07	7.6	—	1.6	〃
41	〃	〃	〃	12.2	—	—	〃
42	〃	〃	〃	10.0	—	2.1	〃
43	〃	〃	〃	8.0	—	1.6	〃
44	〃	〃	〃	9.2	—	—	〃
45	丹波陶器	播鉢	〃	31.6	—	—	一本引き播目
47	土師器	皿	第1・6地点SK54	12.8	—	1.9	A類
48	〃	〃	〃	8.2	—	1.6	〃
49	〃	〃	〃	13.4	—	2.8	B類
50	瀬戸美濃陶器	椀	〃	11.2	—	—	天目椀
51	土師器	皿	第1・6地点包含層	14.6	—	1.9	A類
52	〃	〃	〃	14.4	—	2.1	〃
53	〃	〃	〃	13.6	—	2.0	〃
54	〃	〃	〃	13.8	—	—	〃
55	〃	〃	〃	13.0	—	1.9	〃
56	〃	〃	〃	12.5	—	2.0	〃
57	〃	〃	〃	12.6	—	2.0	〃
58	〃	〃	〃	12.1	—	2.1	〃、口縁端部穿孔
59	〃	〃	〃	11.8	—	2.1	A類
60	〃	〃	〃	11.8	—	—	〃
61	〃	〃	〃	12.3	—	—	〃
62	〃	〃	〃	12.6	—	1.6	〃
63	〃	〃	〃	10.2	—	—	〃
64	〃	〃	〃	9.8	—	1.8	〃
65	〃	〃	〃	9.6	—	1.9	〃
66	〃	〃	〃	9.2	—	1.6	〃
67	〃	〃	〃	8.8	—	1.7	〃
68	〃	〃	〃	8.8	—	1.6	〃
69	〃	〃	〃	8.0	—	1.8	〃
70	〃	〃	〃	8.0	—	1.5	〃
71	〃	〃	〃	8.2	—	1.6	〃
72	〃	〃	〃	7.8	—	1.3	〃
73	〃	〃	〃	8.0	—	1.6	〃
74	〃	〃	〃	7.7	—	1.5	〃
75	〃	〃	〃	6.2	—	1.2	〃
76	〃	〃	〃	6.5	—	1.3	〃
77	〃	〃	〃	11.4	—	2.5	B類
78	〃	〃	〃	10.6	—	2.8	〃
79	〃	〃	〃	10.8	—	3.1	〃
80	〃	〃	〃	11.6	—	1.9	〃
81	〃	〃	〃	9.9	—	1.9	〃
82	〃	〃	〃	9.6	—	1.6	〃
83	〃	〃	〃	7.6	—	1.4	〃
84	〃	台付皿	〃	—	8.7	—	脚部のみ

国道478号バイパス関係遺跡平成5年度発掘調査概要

85	瓦質土器	香炉	〃	13.6	—	—	体部外面に印花文
86	瀬戸美濃陶器	皿	〃	10.3	5.2	2.5	灰釉皿・端反り
87	〃	〃	〃	9.6	4.9	2.5	〃
88	〃	椀	〃	12.8	—	—	天目椀・鬼板化粧
89	〃	〃	〃	12.0	—	—	〃
90	〃	〃	〃	—	4.6	—	〃
91	〃	〃	〃	12.0	—	—	天目椀
92	〃	〃	〃	11.2	3.2	6.1	〃
93	〃	香炉	〃	8.0	—	—	灰釉
94	肥前陶器	皿	〃	—	—	—	絵唐津
95	陶器	瓶?	〃	—	6.2	—	産地不明、褐釉
96	中国製青磁	椀	〃	—	4.4	—	細線蓮弁文か
97	〃	〃	〃	—	5.1	—	〃
98	〃	〃	〃	—	—	—	片刃彫蓮弁文
99	〃	〃	〃	—	4.8	—	鎬蓮弁文
100	〃	〃	〃	—	5.6	—	見込みに印花文
101	中国製白磁	皿	〃	—	—	—	菊皿
102	〃	〃	〃	—	4.4	—	菊皿・高台内に朱漆痕跡
103	〃	〃	〃	—	3.5	—	菊皿・高台内に朱漆銘「一」
104	〃	〃	〃	11.2	—	—	端反り
105	〃	〃	〃	—	6.2	—	端反りか
106	中国製青花	〃	〃	14.6	—	—	
107	〃	〃	〃	—	6.6	—	
108	〃	〃	〃	8.6	—	—	
109	〃	椀	〃	11.4	—	—	
110	〃	〃	〃	10.6	—	—	
111	〃	〃	〃	10.0	—	—	
112	丹波陶器	播鉢	〃	35.0	—	—	一本引き播目
113	〃	〃	〃	33.6	—	—	〃
114	〃	〃	〃	34.2	—	—	〃
115	〃	〃	〃	32.4	—	—	〃
116	〃	〃	〃	29.6	—	—	〃
117	〃	〃	〃	28.2	—	—	〃
118	〃	〃	〃	—	13.4	—	〃
119	〃	〃	〃	—	12.2	—	〃
120	瓦質土器	〃	〃	—	12.6	—	
121	〃	〃	〃	29.4	10.0	15.6	
122	備前陶器	甕	〃	58.0	—	—	
123	〃	〃	〃	31.2	—	—	
124	陶器	〃	〃	33.4	—	—	丹波か
125	〃	〃	〃	—	—	—	常滑か
126	備前陶器	〃	〃	—	30.6	—	

127	陶器	〃	〃	—	24.0	—	丹波か
128	〃	〃	〃	—	20.6	—	〃
129	〃	〃	〃	—	12.6	—	〃
136	土師器	皿	第3地点2郭	12.1	—	—	A類
137	〃	〃	〃	7.2	—	1.0	B類
138	瀬戸美濃陶器	椀	〃	—	4.5	—	天目椀
139	中国製白磁	皿	〃	11.8	—	—	端反り
140	中国製青花	〃	〃	—	6.2	—	
141	〃	〃	〃	9.4	—	—	外面唐草文
142	信楽陶器	播鉢	〃	32.0	—	—	播目磨減
143	丹波陶器	〃	〃	31.2	—	—	一本引き播目
144	〃	〃	〃	32.2	—	—	櫛引き播目
145	瓦質土器	壺	〃	16.5	—	—	短頸壺
146	土師器	皿	第3地点3郭	7.0		1.1	A類
147	瓦質土器	香炉	〃	10.8	8.4	3.5	体部外面に印花文
148	中国製白磁	小椀	〃	6.9	2.4	3.0	
149	〃	蓋?	第3地点5郭	—	—	—	
150	土師器	皿	〃	12.6	—	—	A類
151	〃	〃	〃	11.8	—	—	〃
152	〃	〃	〃	12.3	—	2.4	〃
153	〃	〃	〃	8.8	—	2.2	B類
154	丹波陶器	播鉢	〃	—	11.6	—	一本引き播目
155	瀬戸美濃陶器	椀	〃	11.6	4.6	6.0	天目椀
156	〃	皿	〃	10.5	—	—	灰釉皿
157	土師器	皿	第3地点4郭	9.0	—	—	A類
158	中国製青磁	椀	〃	14.0	—	—	
159	丹波陶器	甕	〃	—	17.2	—	
160	土師器	皿	第3地点7郭	8.4	—	1.9	A類
161	中国製白磁	皿	〃	—	5.4	—	端反り皿か
162	備前陶器	播鉢	〃	31.2	—	—	
163	土師器	皿	第3地点6郭	17.2	—	2.1	A類
164	〃	〃	〃	17.0	—	1.9	〃
165	〃	〃	〃	15.8	—	1.8	〃
166	〃	〃	〃	15.0	—	—	〃
167	〃	〃	〃	15.0	—	—	〃
168	〃	〃	〃	13.8	—	2.1	〃
169	〃	〃	〃	13.6	—	2.0	〃
170	〃	〃	〃	12.6	—	1.8	〃
171	〃	〃	〃	11.8	—	2.1	〃
172	〃	〃	〃	11.8	—	1.5	〃
173	〃	〃	〃	11.6	—	1.7	〃
174	〃	〃	〃	8.4	—	1.4	〃
175	〃	〃	〃	8.1	—	1.7	〃
176	〃	〃	〃	7.6	—	1.5	〃

国道478号バイパス関係遺跡平成5年度発掘調査概要

177	〃	〃	〃	13.2	—	3.0	B類
178	〃	〃	〃	11.2	—	2.5	〃
179	〃	〃	〃	11.2	—	2.5	〃
180	〃	〃	〃	11.4	—	2.5	〃
181	〃	〃	〃	10.5	—	2.5	〃
182	〃	〃	〃	13.8	—	2.2	〃
183	〃	〃	〃	10.6	—	1.6	〃
184	〃	〃	〃	9.1	—	1.3	〃
185	〃	〃	〃	9.0	—	1.6	〃
186	〃	〃	〃	7.6	—	1.8	〃
187	〃	台付皿	〃	11.8	—	—	
188	〃	〃	〃	15.8	9.6	5.8	皿部内面ハケ目状調整
189	〃	脚付皿	〃	12.2	—	3.4	脚数不明
190	丹波陶器	壺	〃	—	8.6	—	
191	中国製青磁	椀	〃	12.0	4.5	5.8	雷文椀
192	〃	香炉	〃	10.0	—	—	
193	丹波陶器	播鉢	〃	30.6	—	—	一本引き播目
194	〃	〃	〃	—	9.6	—	〃
195	備前陶器	〃	〃	30.0	—	—	
196	〃	〃	〃	25.0	10.6	9.5	
197	肥前陶器	皿	〃	13.6	4.5	3.8	唐津
198	〃	〃	〃	9.6	—	—	〃
199	〃	〃	〃	—	3.8	—	〃、基筋底
201	土師器	〃	第3地点8郭	13.4	—	2.5	B類
202	〃	〃	〃	13.0	—	—	〃
203	〃	〃	〃	12.8	—	—	〃
204	〃	〃	〃	11.9	—	2.6	〃
205	〃	〃	〃	9.4	—	2.6	〃
206	〃	〃	〃	8.0	—	1.4	〃
207	〃	〃	〃	5.6	—	1.2	〃
208	〃	〃	〃	12.0	—	—	A類
209	〃	〃	〃	10.4	—	—	〃
210	〃	〃	〃	10.3	—	—	〃
211	〃	〃	〃	9.0	—	1.7	〃
212	〃	〃	〃	8.4	—	1.4	〃
213	〃	〃	〃	7.4	—	1.5	〃
214	瀬戸美濃陶器	椀	〃	11.0	4.3	5.7	天目椀
215	〃	〃	〃	14.8	—	—	〃
216	〃	〃	〃	—	3.2	—	〃
217	〃	皿	〃	11.2	6.2	2.0	灰釉折縁皿
218	〃	〃	〃	11.0	—	—	灰釉端反り皿
219	〃	〃	〃	—	6.2	—	見込みに印花文
220	〃	椀	〃	—	—	—	灰釉椀、細線蓮弁文

221	〃	皿	〃	—	6.0	—	志野
222	〃	〃	〃	12.2	6.8	2.3	〃
223	中国製白磁	皿?	〃	14.4	—	—	端反り
224	〃	小椀	〃	7.0	—	—	
225	中国製青磁	椀	〃	—	5.5	—	見込みに印花文、 雷文椀か
226	〃	〃	〃	—	5.0	—	無文
227	〃	〃	〃	—	—	—	雷文椀
228	中国製青花	皿	〃	—	6.8	—	見込みに十字花文
229	〃	〃	〃	—	—	—	
230	〃	皿?	〃	—	6.0	—	
231	〃	小椀	〃	8.0	—	—	
232	丹波陶器	播鉢	〃	26.8	—	—	一本引き播目
233	〃	〃	〃	—	13.6	—	〃
234	備前陶器	〃	〃	—	13.0	—	
235	国産陶器	甕	〃	—	12.6	—	産地不明
236	緑釉陶器	不明	〃	—	—	—	〃
237	土師器	皿	第3地点8郭斜面	10.8	—	—	A類
238	〃	〃	〃	9.1	—	1.8	B類
239	〃	〃	〃	8.0	—	1.3	〃
240	瀬戸美濃陶器	椀	〃	—	5.0	—	室町中期
241	丹波陶器	壺	〃	—	16.8	—	
242	中国製青磁	椀	〃	—	5.8	—	見込みに印花文
243	〃	〃	〃	—	5.7	—	見込みに印花文、 雷文椀か
244	中国製白磁	小椀	〃	7.7	2.9	3.3	高台挟り込み
245	丹波陶器	播鉢	〃	31.8	—	—	一本引き播目
246	信楽陶器	〃	〃	29.2	—	—	
247	備前陶器	〃	〃	32.0	—	—	
248	〃	〃	〃	—	10.6	—	
249	中国製青磁	椀	第3地点9郭	14.4	—	—	
250	〃	〃	〃	12.6	—	—	細線蓮弁文
251	中国製青花	皿	〃	13.4	—	—	外面唐草文
252	瀬戸美濃陶器	〃	〃	10.2	5.4	2.0	灰釉、折縁皿
253	〃	〃	〃	8.4	4.4	2.0	〃、端反り皿
254	中国製青磁	椀	〃	16.8	—	—	猫搔施文、表採
255	備前陶器	播鉢	〃	27.2	—	—	
256	丹波陶器	〃	〃	—	11.6	—	一本引き播目
257	肥前磁器	皿	〃	12.0	7.4	3.5	内面焼き付け文字
258	土師器	皿	第7地点1郭	12.4	—	2.3	A類
259	〃	〃	〃	12.6	—	—	〃
260	〃	〃	〃	12.4	—	—	〃
261	〃	〃	〃	9.0	—	1.6	〃
262	〃	〃	〃	8.2	—	—	〃

国道478号バイパス関係遺跡平成5年度発掘調査概要

307	〃	〃	〃	8.6	—	1.5	B類
308	中国製白磁	小椀	〃	6.6	2.4	2.7	
309	土師器	皿	第8地点3郭	13.6	—	2.3	A類
310	〃	〃	〃	13.4	—	1.9	〃
311	〃	〃	〃	12.6	—	2.1	〃
312	〃	〃	〃	11.8	—	2.0	〃
313	〃	〃	〃	13.2	—	—	〃
314	〃	〃	〃	10.8	—	1.9	〃
315	〃	〃	〃	8.6	—	1.5	〃
316	〃	〃	〃	8.5	—	1.7	〃
317	〃	〃	〃	8.3	—	1.6	〃
318	〃	〃	〃	8.4	—	1.6	〃
319	〃	〃	〃	10.4	—	—	〃
320	〃	〃	〃	10.2	—	2.0	〃
321	〃	〃	〃	11.0	—	2.1	B類
322	〃	〃	〃	7.8	—	2.0	〃
323	〃	〃	〃	7.8	—	1.5	〃
324	中国製白磁	〃	〃	12.6	—	—	端反り皿
325	〃	〃	〃	—	5.8	—	端反り皿か
326	備前陶器	甕	〃	—	21.9	—	
329	土師器	皿	第5地点	14.4	—	2.1	A類
330	〃	〃	〃	9.6	—	1.9	〃
331	〃	〃	〃	7.8	—	1.9	〃
332	〃	〃	〃	7.8	—	—	〃
333	〃	〃	〃	13.6	—	1.9	B類
334	〃	〃	〃	11.2	—	2.8	〃
335	瀬戸美濃陶器	皿	〃	—	9.2	—	灰釉
336	〃	椀	〃	11.8	5.8	6.4	灰釉、細線蓮弁文
337	土師器	台付皿	〃	10.2	6.6	4.0	
338	中国製青花	皿	〃	12.2	7.2	2.5	見込みに花文
339	中国製青磁	椀	〃	12.6	—	—	
340	陶器	瓶	〃	—	9.6	—	中国製か
341	丹波陶器	播鉢	〃	30.0	—	—	一本引き播目
342	瓦器	椀	〃	12.2	4.1	4.3	内面のみミガキ

307	〃	〃	〃	8.6	—	1.5	B類
308	中国製白磁	小椀	〃	6.6	2.4	2.7	
309	土師器	皿	第8地点3郭	13.6	—	2.3	A類
310	〃	〃	〃	13.4	—	1.9	〃
311	〃	〃	〃	12.6	—	2.1	〃
312	〃	〃	〃	11.8	—	2.0	〃
313	〃	〃	〃	13.2	—	—	〃
314	〃	〃	〃	10.8	—	1.9	〃
315	〃	〃	〃	8.6	—	1.5	〃
316	〃	〃	〃	8.5	—	1.7	〃
317	〃	〃	〃	8.3	—	1.6	〃
318	〃	〃	〃	8.4	—	1.6	〃
319	〃	〃	〃	10.4	—	—	〃
320	〃	〃	〃	10.2	—	2.0	〃
321	〃	〃	〃	11.0	—	2.1	B類
322	〃	〃	〃	7.8	—	2.0	〃
323	〃	〃	〃	7.8	—	1.5	〃
324	中国製白磁	〃	〃	12.6	—	—	端反り皿
325	〃	〃	〃	—	5.8	—	端反り皿か
326	備前陶器	甕	〃	—	21.9	—	
329	土師器	皿	第5地点	14.4	—	2.1	A類
330	〃	〃	〃	9.6	—	1.9	〃
331	〃	〃	〃	7.8	—	1.9	〃
332	〃	〃	〃	7.8	—	—	〃
333	〃	〃	〃	13.6	—	1.9	B類
334	〃	〃	〃	11.2	—	2.8	〃
335	瀬戸美濃陶器	皿	〃	—	9.2	—	灰釉
336	〃	椀	〃	11.8	5.8	6.4	灰釉、細線蓮弁文
337	土師器	台付皿	〃	10.2	6.6	4.0	
338	中国製青花	皿	〃	12.2	7.2	2.5	見込みに花文
339	中国製青磁	椀	〃	12.6	—	—	
340	陶器	瓶	〃	—	9.6	—	中国製か
341	丹波陶器	播鉢	〃	30.0	—	—	一本引き播目
342	瓦器	椀	〃	12.2	4.1	4.3	内面のみミガキ

## 2. 京都縦貫自動車道関係遺跡 平成5年度発掘調査概要

### はじめに

京都府では、綾部市と宮津市間を結ぶ自動車専用道路、京都縦貫自動車道の建設事業を鋭意推進しているところである。この事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成4年度に行われた綾部市別所町所在の神宮谷3号墳の調査を嚆矢とし、以後継続的に(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって推進している。

各年度の調査対象遺跡の確定にあたっては、原因者である京都府道路公社と京都府教育委員会との間における事前協議、詳細分布調査を経て検討された後、当調査研究センターと京都府道路公社との間において委託契約を締結した段階で確定される。実施した調査の結果については、『京都府埋蔵文化財情報』、『京都府遺跡調査概報』などで逐次報告している。

平成5年度は、綾部市別所町所在の神宮谷4号墳、同七百石町所在の七百石遺跡・木坂遺跡・池ノ谷遺跡、同内久井町所在のジンド古墳、舞鶴市桑飼上所在の桑飼上遺跡、同地頭所在の山根古墳の計7遺跡で発掘調査を実施した。調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同主任調査員引原茂治、同調査員三好博喜、同尾崎昌之、同野島 永の5名が担当した。

調査を行うにあたり、京都府道路公社には調査経費を全額負担していただいたほか、現地で調査を実施する段階においても、種々便宜をはかっていただいた。また、京都府教育委員会、京都府中丹教育局、綾部市教育委員会、舞鶴市教育委員会の各機関には、適切な指導・助言・援助を賜った。このほか、地元関係者各位には作業員として、各大学学生及び卒業生諸氏には調査補助員として、真夏の炎天下はもとより、真冬の70cmに及ぶ積雪の中でも、現地での調査業務に参加・協力していただいた<sup>(注1)</sup>。ここに記して厚く御礼申し上げます。らしいである。

なお、本概要は調査担当者が各々分担して執筆したものをまとめたものである。文責は文末に示した。

(奥村清一郎)

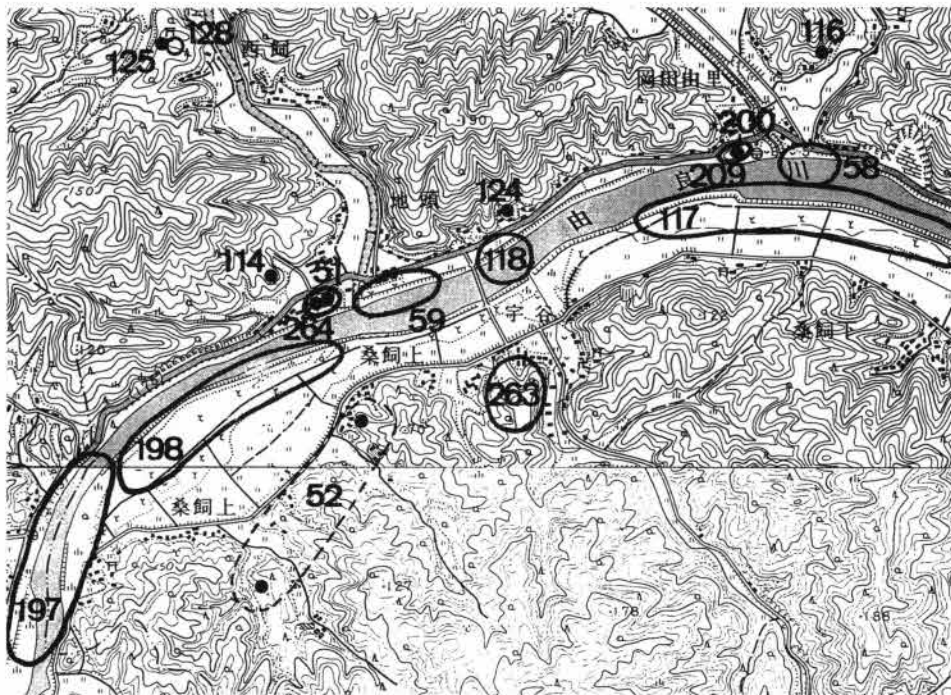


## (1) 桑 飼 上 遺 跡

### 1. 位置と環境

桑飼上遺跡は、京都府舞鶴市桑飼上に所在する。遺跡は、由良川によって形成された標高6 m程度の自然堤防上に立地している。付近では、河川改修に伴う発掘調査が昭和62年度から平成2年度まで継続して行われ、弥生時代中期から奈良時代まで断続的に営まれた集落遺跡として周知されている<sup>(注2)</sup>。

調査地は、昭和62年度試掘調査地の2トレンチ南側に位置している<sup>(注3)</sup>(第44図)。このトレンチでは、南側が青灰色粘土の堆積層となっており、沼状地形を呈していることが予測された。青灰色粘土は2層に分かれ、古墳時代後期から奈良時代の遺物が出土する層と、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土している。



第43図 調査地位置図(1/25,000 内宮・河守 - 『京都府遺跡地図』第2分冊1987より抜粋)

- |            |             |            |             |             |
|------------|-------------|------------|-------------|-------------|
| 51. 城1・2号墳 | 52. 上村1・2号墳 | 58. 岡田由里遺跡 | 59. 地頭遺跡    | 114. 山根古墳   |
| 116. 枝宮古墳  | 117. 桑飼下遺跡  | 118. 地頭東遺跡 | 124. ニヤ古墳   | 125. 西飼古墳   |
| 128. 二の宮経塚 | 197. 高津江遺跡  | 198. 桑飼上遺跡 | 200. 水無月山古墳 | 209. 水無月山城跡 |
| 263. 宇谷城跡  | 264. 地頭城跡   |            |             |             |

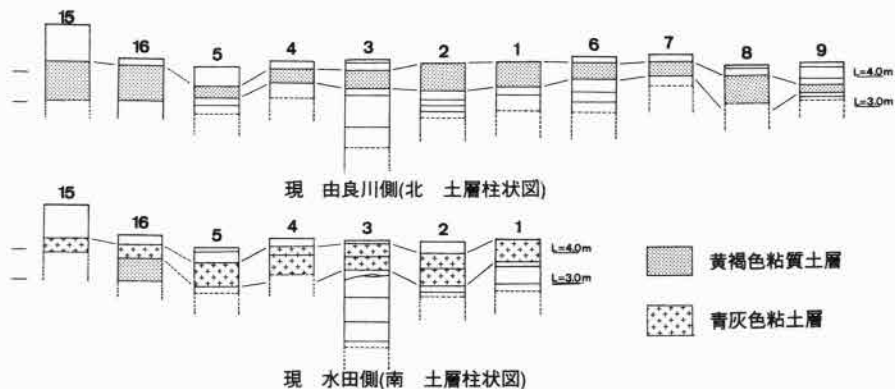


第44図 桑飼上遺跡調査トレンチ配置図

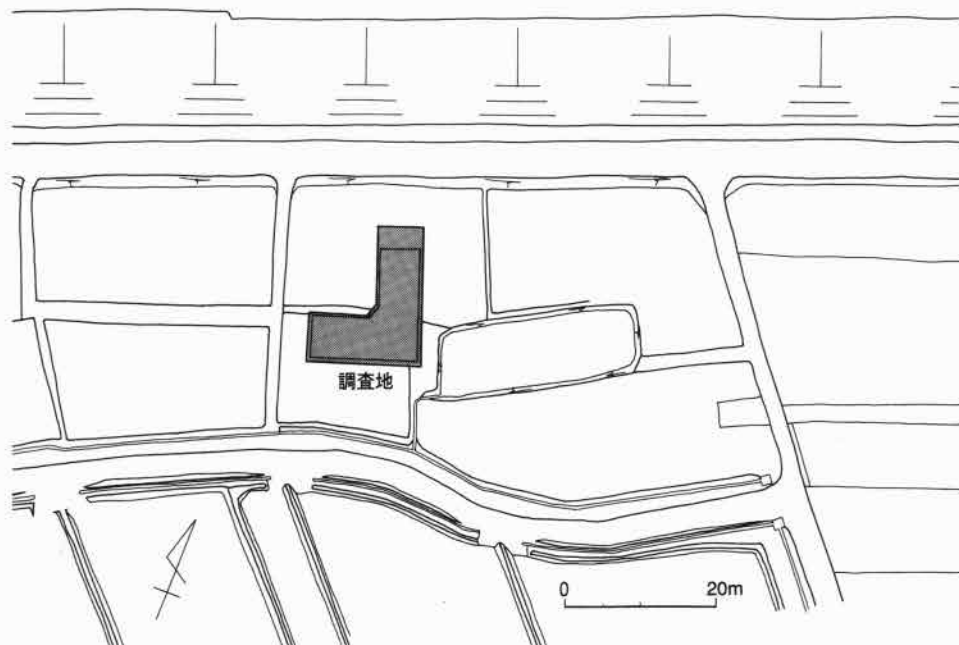
## 2. 調査概要

試掘トレンチの設定に当たっては、地盤が砂質土壌で崩落しやすく、周辺に影響を及ぼしてはならない施設も存在したため、約200㎡の掘削に留まった。

現地調査は、まず重機による表土掘削を平成5年6月16日の一日で行った。即日人力掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。これら人力による掘削作業は、平成5年6月28日に終了した。写真撮影、測量・実測作業はその都度行い、平成5年7月5日にはすべての現地作業を終了し、撤収した。また、重機による部分的な埋め戻しを平成5年6月28日に行い、その後万全を期すため、平成5年8月7日にすべての埋め戻しを行った。



第45図 1～16トレンチ土層柱状図



第46図 トレンチ位置図

耕作土	5 m
淡茶褐色土	
茶褐色土	
暗茶褐色土	—
明青灰色砂	
青灰色粘質土	—
暗灰色粘質土	
淡緑灰色粘質土	—
最終掘削位置	
	1 m

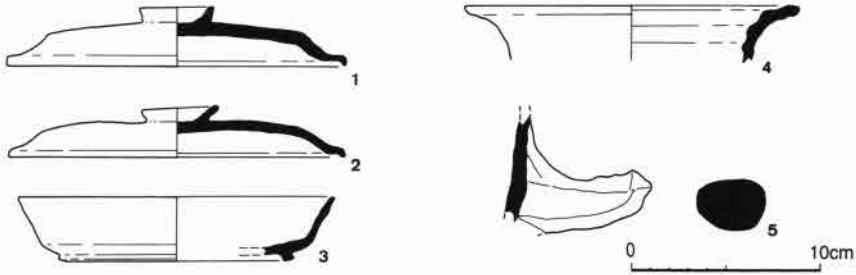
第47図 土層柱状図

トレンチは、標高5.675m地点から標高1.733m地点までの約4mの掘削を行った。土層の堆積は、耕作土(30cm)・淡茶褐色土(25cm)・茶褐色土(43cm)・暗茶褐色土(67cm)・明青灰色砂(35cm)・青灰色粘質土(90cm)・暗灰色粘質土(65cm)・淡緑灰色粘質土(40cm以上)という順である(第47図)。明瞭な遺構面は検出できなかった。

遺物は、明青灰色砂層から須恵器や土師器が多量に出土した。奈良時代前後のものが大半で、ほかに古墳時代後期のものが若干みられる。

### 3. 出土遺物(第48図)

出土遺物のほとんどは、明青灰色砂層から出土した。大半が磨滅した破片で、流れ込んできた状況を示している。1・2は、須恵器の杯蓋である。いずれも口縁部付近を強く屈曲させるもので、天井部は平坦で輪状摘みをもつ。1は、復原口径18cm・器高3.2cmを測る。口縁部付近の屈曲は明瞭で鋭く、輪状摘みは直線的に立ち上がる。2は、復原口径17.8cm・器高2.7cmを測る。口縁部付近の屈曲は丸味を帯びて鈍く、輪状摘みは外反して立ち上がる。3は、須恵器の杯身である。復原口径16.8cm・器高3.3cmを測り、口縁部は



第48図 出土遺物実測図

外反して立ち上がる。高台は、底側縁から中に入れて貼り付けられており、内側が接地する。4は、土師器の甕の口縁部で、復原口径18cmを測り、強いナデで成形されている。5は、土師器の把手である。いずれも奈良時代後半期のものである。

#### 4. 小結

今回の調査では遺構面を確認することはできなかった。これまでの調査では、微高地が由良川沿いに形成されており、集落が営まれていたことを確認している。調査地付近では沼状の地形となり、後背湿地を形成していたと予想されていた。今回の調査成果は、沼状の地形がさらに南側に向けて広がっていくことを物語っている。出土遺物から奈良時代にも後背湿地が存在していたことが確認できた。

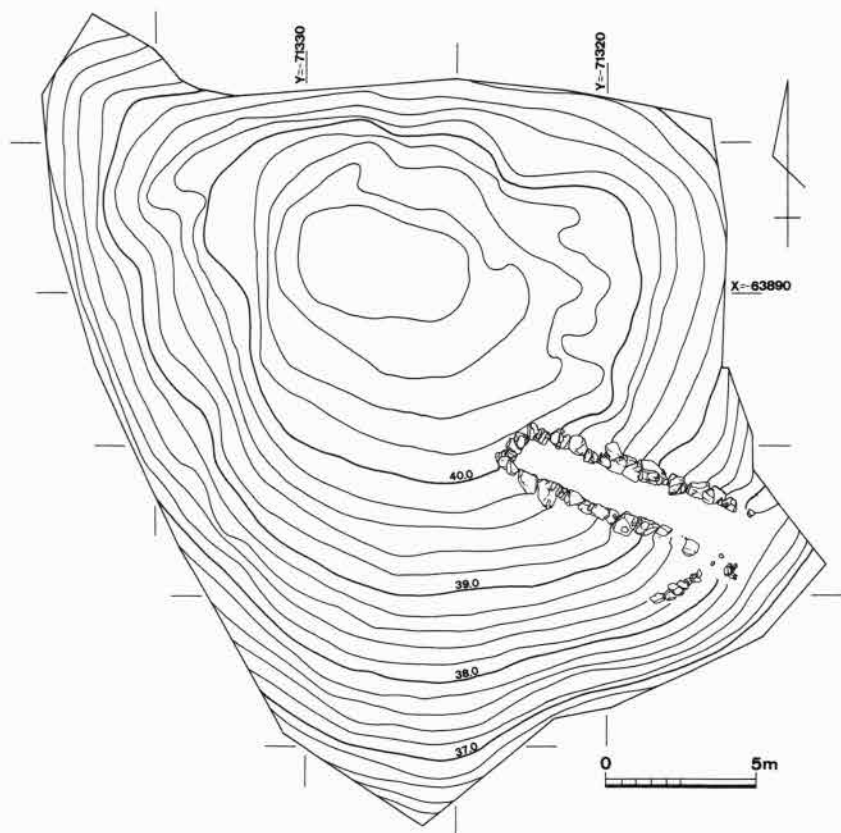
(三好博喜)

## (2) 山根古墳

### 1. 調査経過

山根古墳は、京都府舞鶴市地頭に所在する。由良川に臨む小高い丘陵の頂に単独で位置する古墳である(第43図参照)。「京都府遺跡地図」第2分冊によると、「山根古墳は径20m・高さ1mの円墳で南向きの横穴式石室をもち、石材の一部が露出しているが完存している」とある。標高は約40mで、平地との標高差は30m程度を測る。最終の掘削面積は、周辺部分の試掘調査をも含めて約500m<sup>2</sup>である。

発掘調査は、平成5年7月9日から同10月22日の間に実施した。同10月20日には現地説明会を行い、約140名の参加者を得た。また、岡田上・岡田中・岡田下の各小学校の児童の皆さんには随時、現地の参観をしていただいている。



第49図 掘削終了後地形図(1/250)

調査の結果、横穴式石室を1基確認した。周辺部分も表土を掘削し、遺構・遺物などの検出に努めたが、顕著な遺構・遺物はなかった。

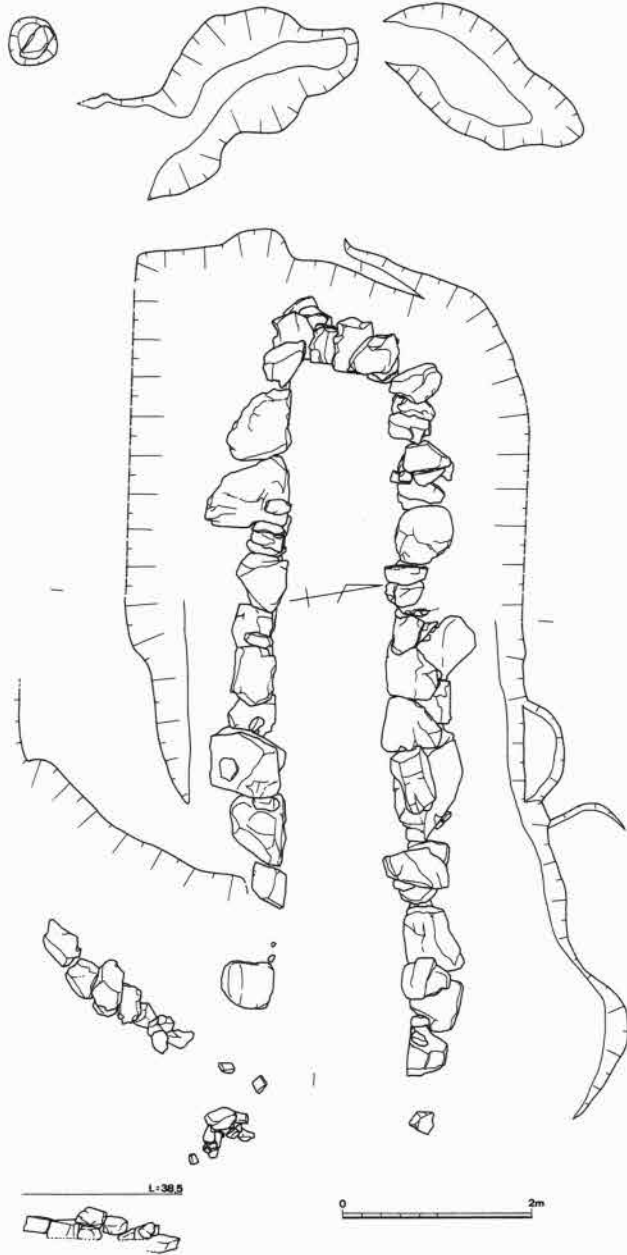
本概要の本文は、調査員三好博喜が執筆し、図面・図版の作成など、調整は主に同野島永が行った。

## 2. 調査概要

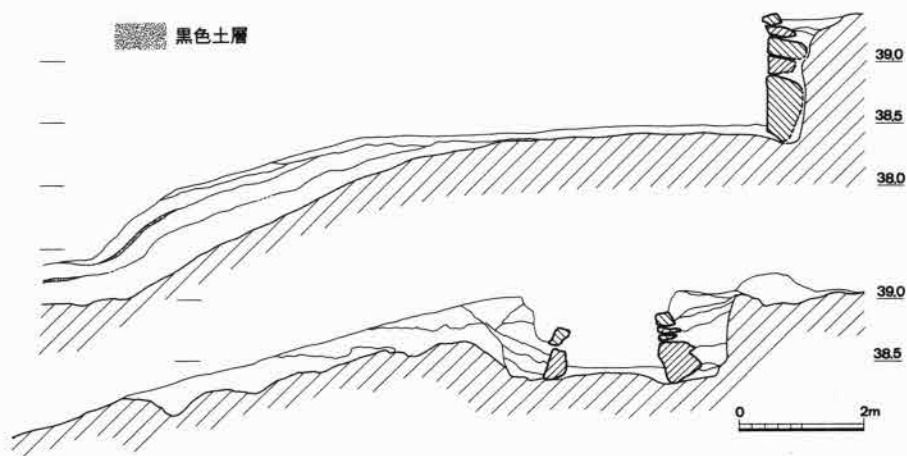
①墳丘 山根古墳の位置する丘陵は、道路敷設などの現代の開発によって南側と東側を大きく開削されている。現状は、檜林であり、以前は畑地として利用されていたといわれている。こうした事情から、墳丘は旧状を留めていない。

表土を掘削すると、北側から西側にかけてが礫混じりの山土となっており、地山と確認した。南側には盛り土が認められ、旧表土と考えられる黒色土層が存在した。また、石室裏側の北側及び西側は、地山が垂直に落ち込んでおり、石室を構築するために「L」字状の開削が行われたことを示している。

石室南側の墳丘裾部と思われる地点では、側壁に取り付いて8石の石材



第50図 石室及び墓壇掘形平面図(1/80)



第51図 石室主軸方向縦断・横断面図(1/120)

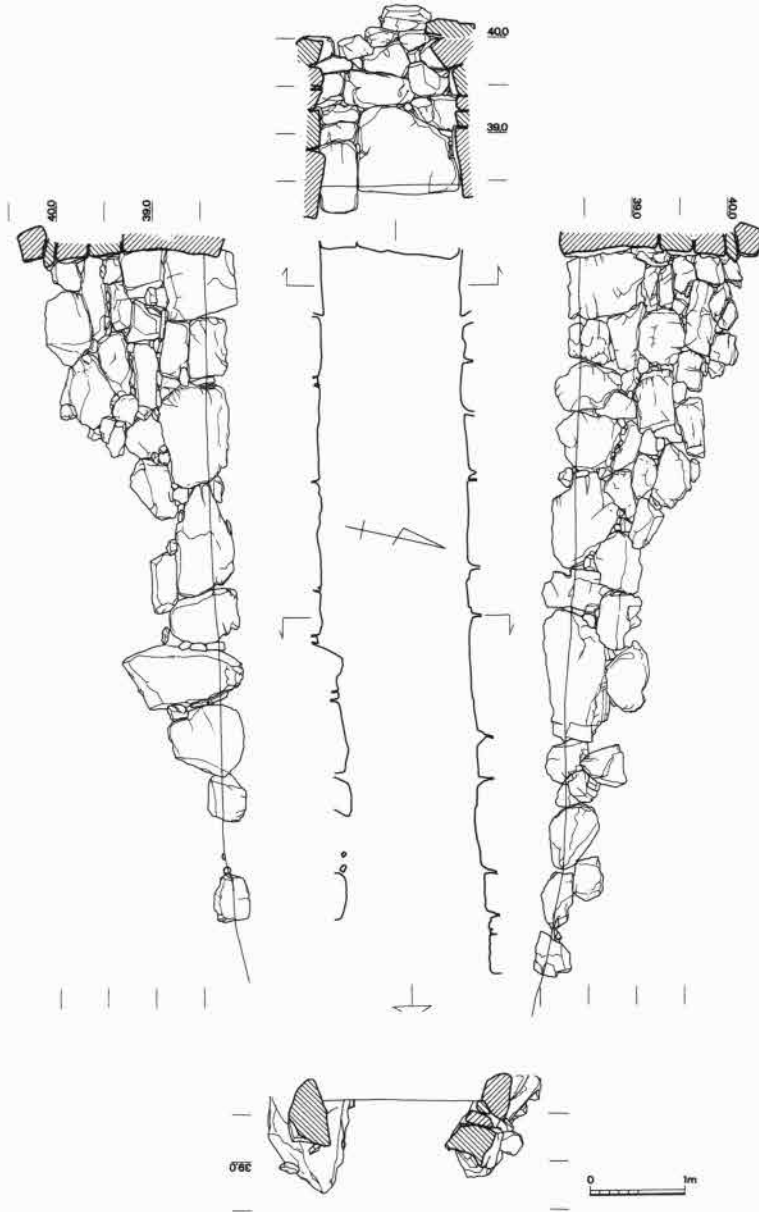
が墳丘裾に沿って並んでおり、外護列石の残欠と考えられる。また、石室西側には、不明瞭ながら溝状の落ち込みが認められ、墳丘裾部にめぐらされた溝と思われる。これら墳丘の基底部に設けられたと認められる施設から墳丘の規模を復原すると、径10m・高さ2.5m程度の円墳となる(第49図)。

②石室 石室自体は、表土を掘削した段階では検出できなかった。石室全体が山土によって覆われた状況にあったからである。石室の天井石は、旧状を留めるものではなく、玄室内が30～40cm程度埋没した段階で落ち込んだとみられる1石のみ確認した。側壁の石材も奥壁側の残りはよいが、羨道部に向かうに従って旧状を留める石材は少なくなる。この状況は、現在の地勢と合致しており、おそらく山林開発に伴って埋没したのであろう。

石室主軸方向の縦断面をみると、石室内床面の貼り土は羨門部付近までほぼ水平に推移し、羨門部から急激に傾斜する。一方、地山面は玄門部付近から急激に傾斜していく。床面の貼り土と地山の間には薄い黒色土が認められ、古墳築造前の表土と考えられる。奥壁裏側は、地山が垂直に切り開かれている。奥壁の石材と掘形とは極めて接近している(第51図)。また、石室の横断面をみると、左側壁の裏側は垂直に切り開かれている。右側壁の裏側は、地山が若干隆起するものの、ほどなく下降線をみせて傾斜していく。縦断面にみられた黒色土は、この部分では確認できなかったが、盛り土によって掘形を構築している。以上の状況から、石室を構築するに際して、玄室部分が安定した地盤上に構築できるよう配慮しているようすがうかがえる。掘削残土は、羨道部付近の盛り土としたものと思われる。左右の裏込め土は、水平に堆積しており、石材を積みながら裏込めを行っている。石室内の貼り土は20cmほどの厚さで行われている。

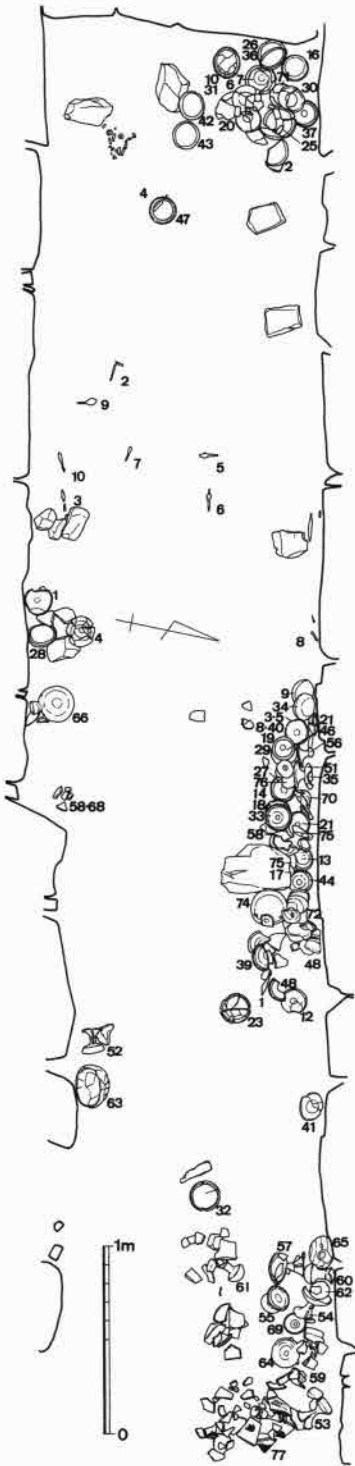
石室は、右片袖式の横穴式石室で、南東方向に開口する(第52図)。石室は全長約7.5m

を測る。玄室の規模は、右側壁の袖石から奥壁までの長さが約4.2m、幅は約1.5mを測る。高さは、奥壁部分で約1.9m残存している。羨道部は、右側壁の袖石から外護列石の取り付け部分までで長さ約3.3m、幅は袖石付近で約1.4m、羨門部付近で約1.5mを測る。石材は、花崗岩である。天井石は崩落、移動しており、原位置を留めていない。奥壁付近の残存状況は比較的良好であるが、羨道部では基底石から一または二段程度しか遺存していない。左側壁の中央付近は、土圧によって石室内部へ傾斜している。基底石は、奥壁が2



第52図 石室実測図(1/80)





第53図 遺物出土状況図(1/80)

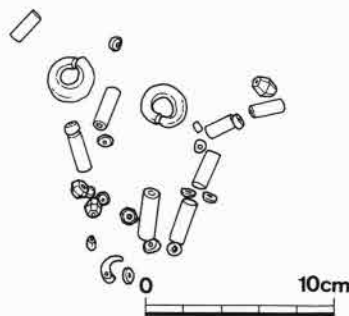
石、玄室部右側壁が5石、石室左側壁が11石で構築されている。羨道部右側壁は、4石しか残存していないが、全体の状況から6石で構成されていたと考えられる。

玄室内にはレベルの似た直方体形の石材が6石あり、棺台として使用された可能性が高い。

石室を構成する石材には花崗岩が用いられている。

### 3. 出土遺物

副葬品には、須恵器・土師器や鉄製品・装身具などがある。遺物は、羨道部、玄門部、奥壁部の大きく3か所に分かれて出土した(第53図)。装身具は、右側壁の奥壁寄りにあり、棺は頭を奥壁に向けて玄室右側に置かれていた。装身具には、金環が4点、勾玉1点・管玉8点・ガラス玉17点・水晶丸玉2点・水晶切子玉2点がある。また、練玉も400点程度出土した。玉類の出土の状況から、管玉と管玉の間にガラス玉を2点並べるのが基本で、要所要所に勾玉や水晶製の切子玉や丸玉を配しているようである(第54図)。鉄製品は、13点出土した。金環2点は、他の玉類とともに検出しており、同一の遺体に帰属するものと考えられる。1点は、奥壁寄りに集積した須恵器の一群のなかから出土したもので、最下層に置かれた杯身のなかにあった。残る1点は、出土位置が特定できないが、杯身内出土の金環と対になるものと思われる。後者は、比較的遺



第54図 装身具出土状況図

存状況が悪く、前者に先行する可能性がある。須恵器に伴って出土していることから、追葬時に整理されたものであろう。

短刀1点、鉄鎌2点、刀子8点がある。しかし、鉄刀などの大型武器や馬具は出土していない。他の遺物の出土状況を見る限り、攪乱されたようすはなく、もともと副葬されていなかったものと考えられる。

須恵器は、80点余り出土した。杯身・杯蓋、椀、壺、高杯、甕、提瓶、平瓶、甗などがある。土師器は、高杯が2点あるだけであった。これらの土器の出土状況から、石室は少なくとも2回は使用されたことが予測される。

①須恵器(第55～59図) 須恵器は、67点を図示した。杯身25点・杯蓋20点、椀2点、壺1点、高杯11点、甕1点、提瓶4点、平瓶1点、甗3点、底部1点などがある。

杯身(第55・56図22～48) 27点あり、玄門部遺物溜まりから10点、奥壁部遺物溜まりから8点、玄室内から4点、羨道部から5点出土した。口径は13～14cm、器高は3.6～4.6cmを測る。

杯蓋(第55図1～21) 21点あり、玄門部遺物溜まりから11点、奥壁部遺物溜まりから7点、玄室内から2点、羨道部から1点出土した。口径は11～13cm、器高は3.5～4.6cmを測る。口縁端部を強くなでるものと、なでないものがある。

椀(第58図70・71) 奥壁部遺物溜まりと玄門部遺物溜まりから2点出土した。底部から口縁部がまっすぐに立ち上がる。器壁は薄い。

壺(第58図72) 台付壺が1点玄門部土器溜まりから出土した。脚は短く、長方形の透かし穴が3か所にある。体部下半にはカキ目が施されている。体部中央と頸部とに櫛歯状工具による列点文がめぐらされている。

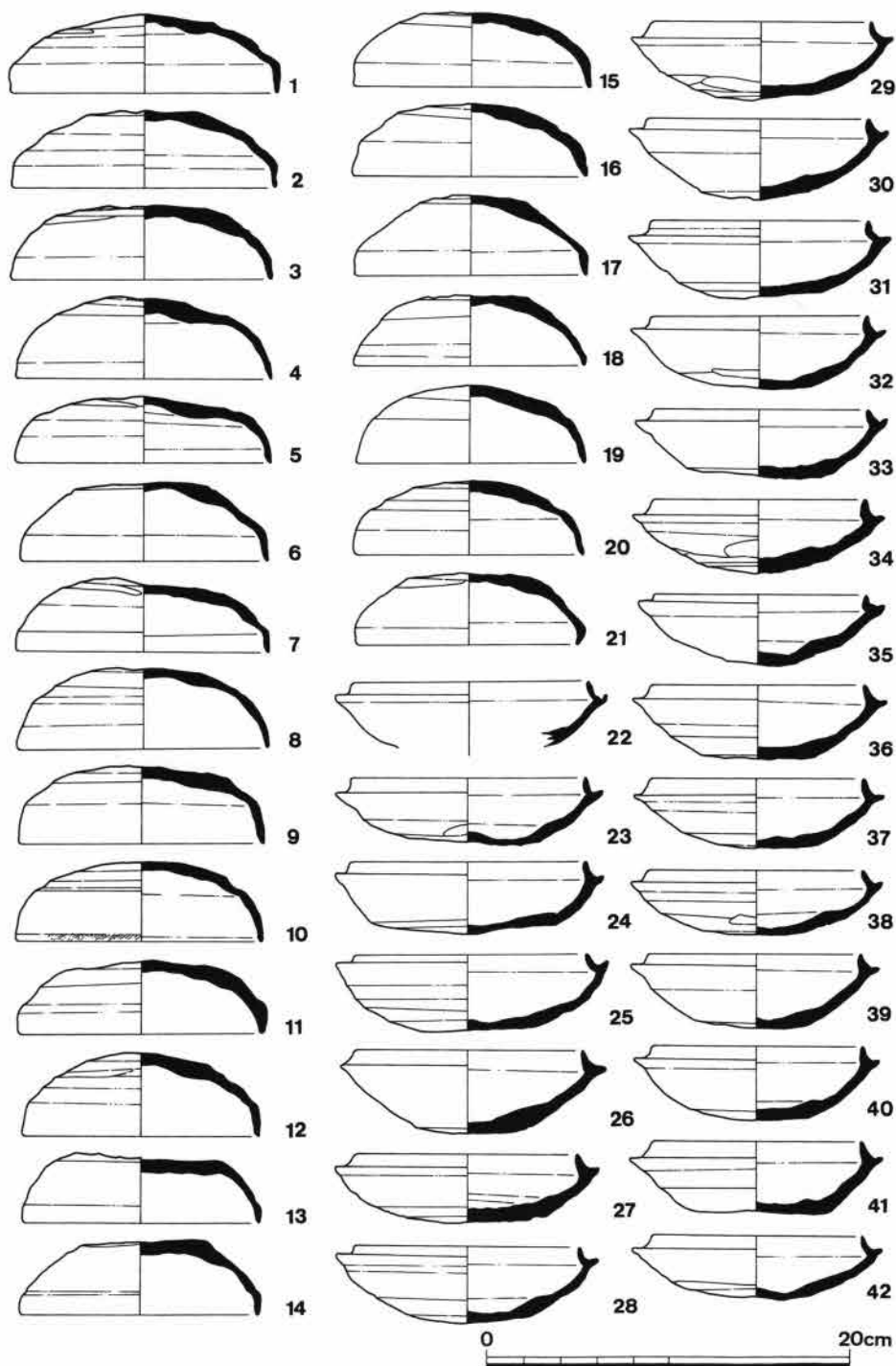
高杯(第56図49～59) 長脚二段透かしの高杯5点、短脚の高杯4点、杯部2点がある。玄門部と羨道部から出土した。玄門部遺物溜まりからは短脚の高杯3点が出土し、他は羨道部である。

甕(第58図67・68、第59図77) 77のみほぼ完形に近く復原できた。羨道部から出土した。67は、体部上半のみで、玄門部の左右の側壁付近から分かれて出土した。68は、口縁部のみで羨道部から出土している。

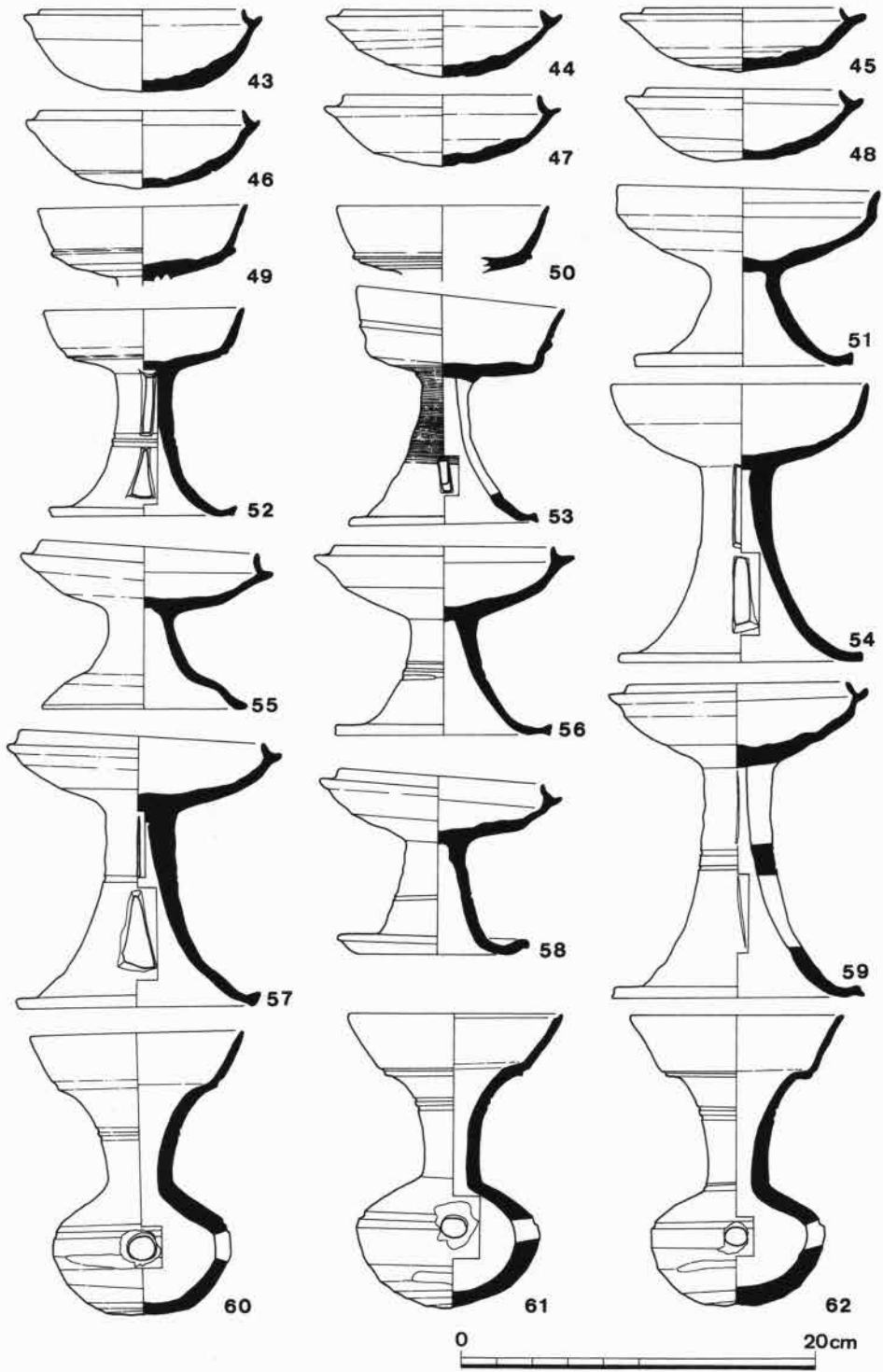
提瓶(第57図63～66) 4点出土した。羨道部3点、玄室内1点である。把手が若干屈曲し、カキ目を明瞭に残すタイプ(63・64)と、貼り付けただけの把手で、カキ目が入らないタイプ(65・66)とがあり、いずれのタイプにも大型品と小型品とがある。

平瓶(第58図74) 1点出土した。体部にカキ目を明瞭に残し、把手が若干屈曲する。提瓶と似た成形を行っている。

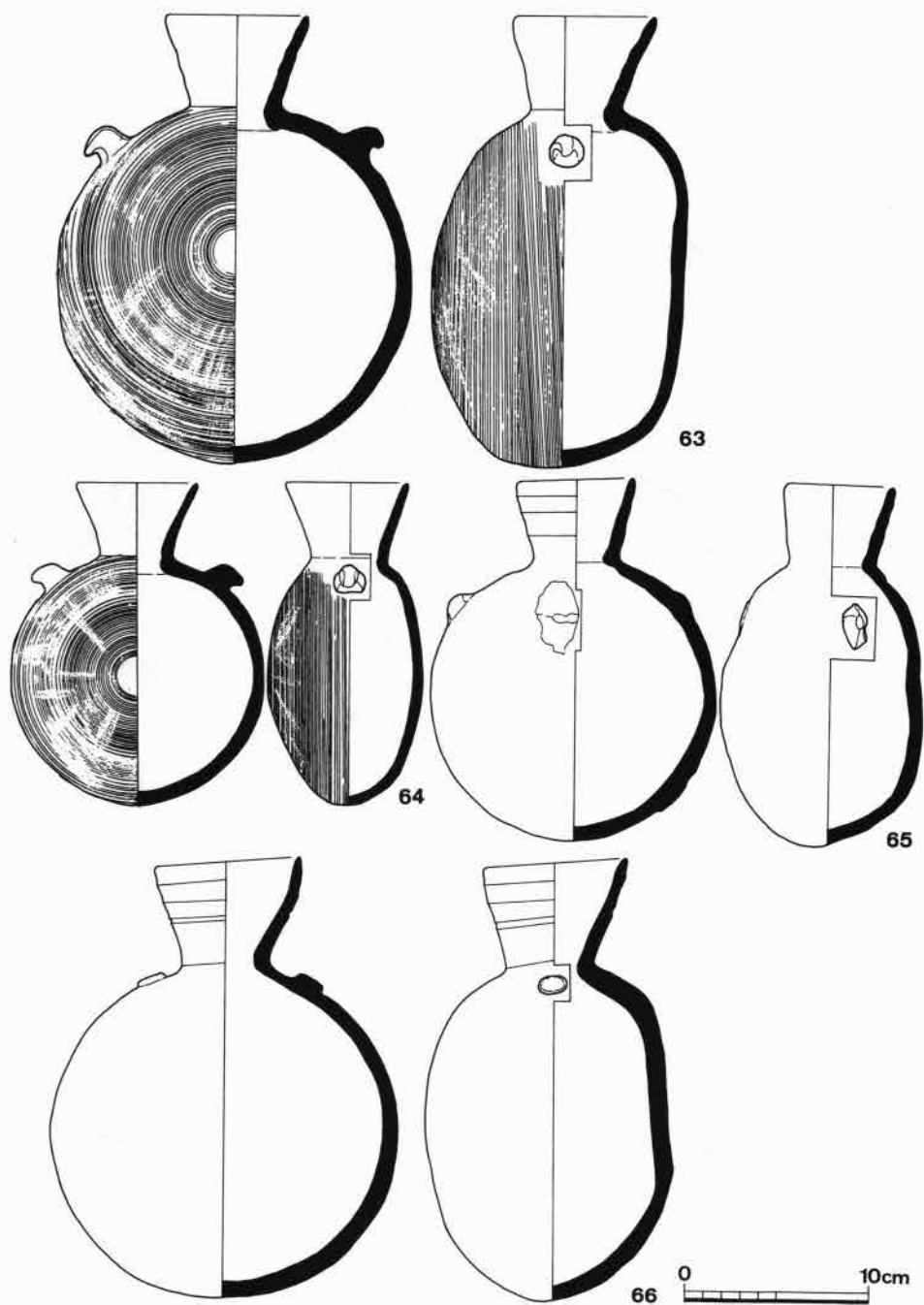
甗(第56図60～62) 羨道部から3点が出土した。頸部が細くしまり、そこから口縁部が大きく開く。



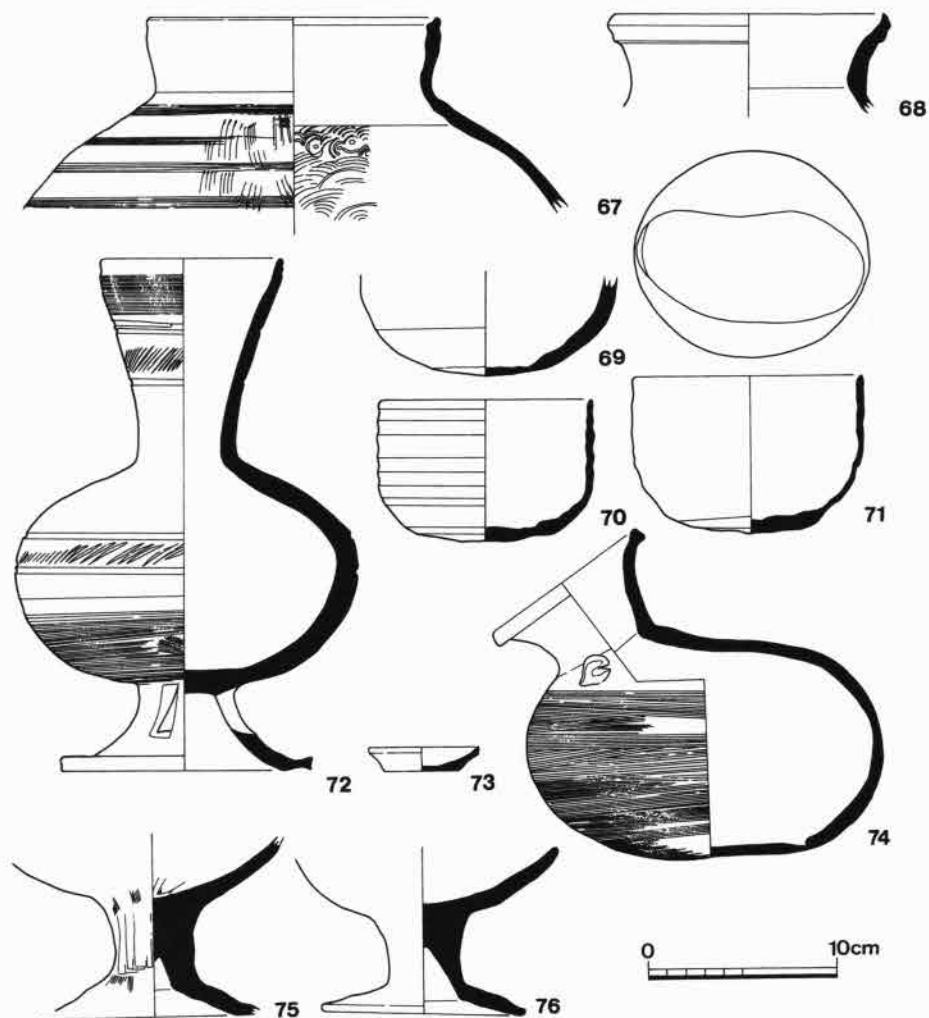
第55図 出土土器実測図(1)



第56図 出土土器実測図(2)



第57図 出土土器実測図(3)

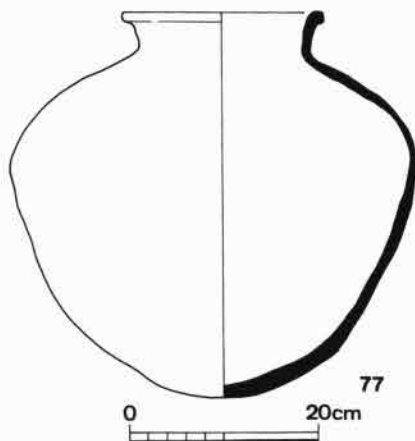


第58図 出土土器実測図(4)

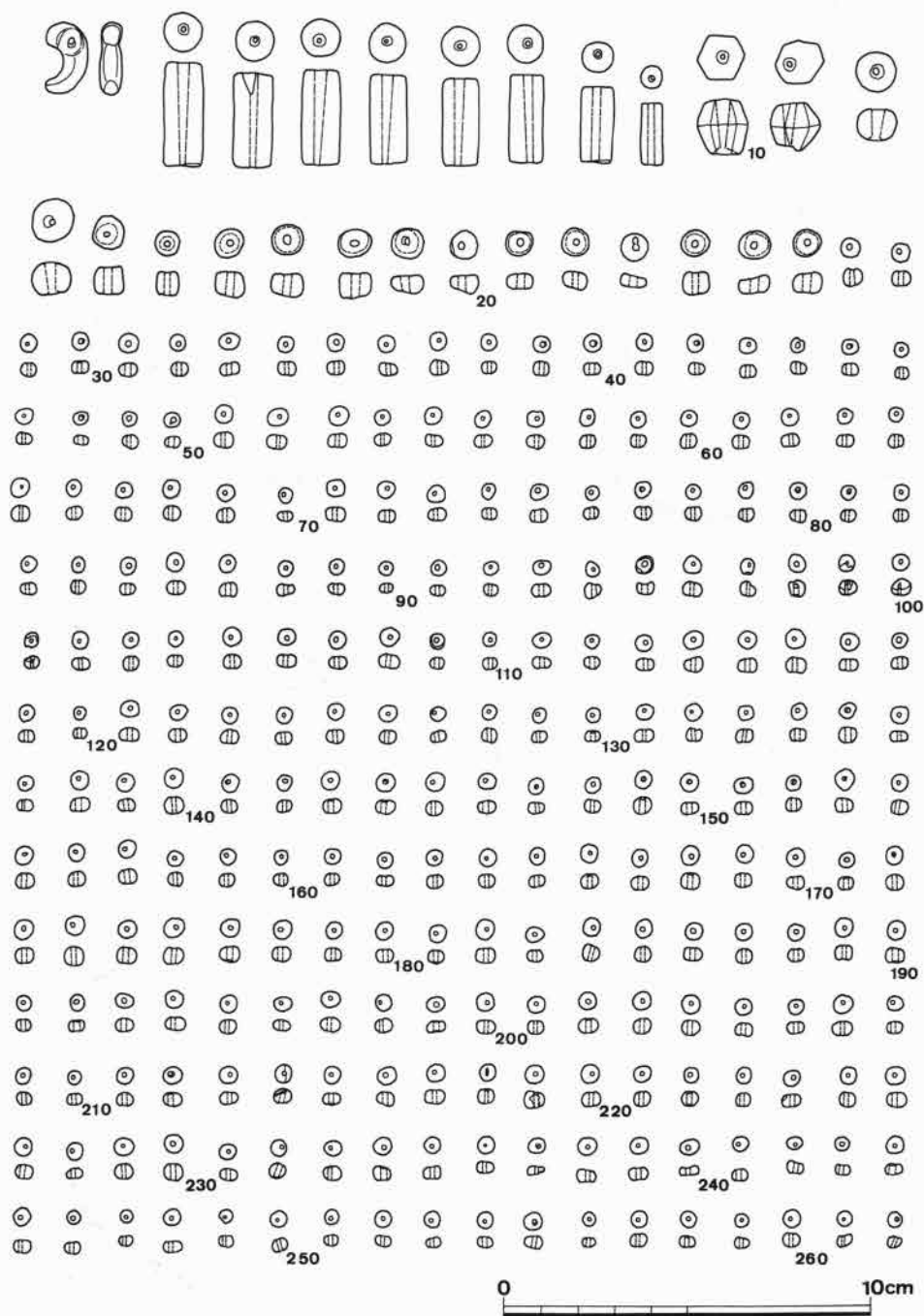
底部(第58図69) 69は、壺類の底部と考えられる。羨道部から出土した。

②土師器(第58図73・75・76) 土師器は、高杯2点が出土した。玄門部の遺物溜まりから出土している。脚部は柱状であり、裾部が「く」の字状に開いている。杯部は、皿状を呈している。73の土師皿は、墳丘掘削時に出土したものであって、石室とは直接の関係はない。

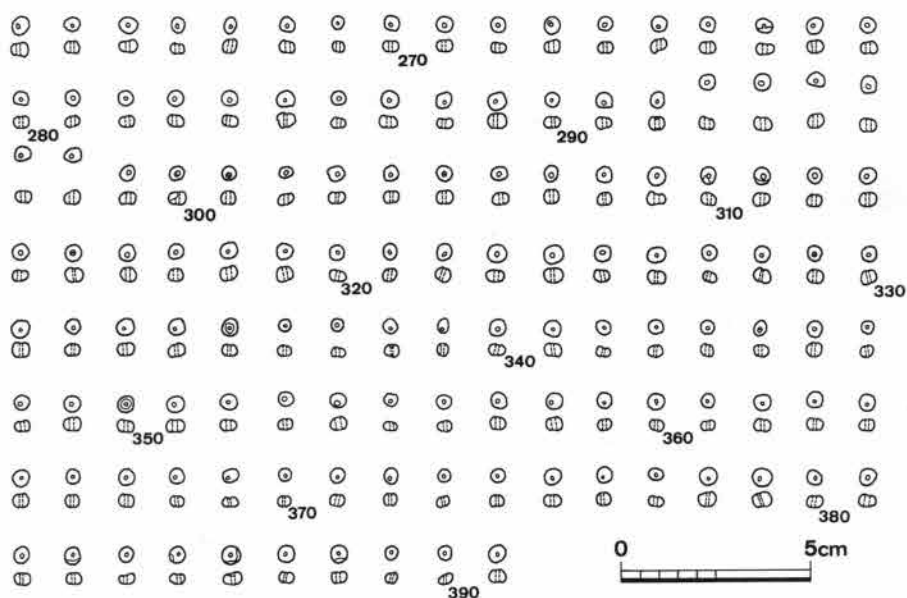
③装身具類(第60・61図1～391、第62図)



第59図 出土土器実測図(5)



第60図 出土玉類実測図(1)



第61図 出土玉類実測図(2)

装身具には、金環が4点、勾玉1点・管玉8点・ガラス玉17点・水晶丸玉2点・水晶切子玉2点がある。また、練玉も400点程度出土した。

勾玉(第60図1) 淡青灰色を呈する勾玉が1点出土した。長さ20mm・厚さ6mm。両面穿孔されている。

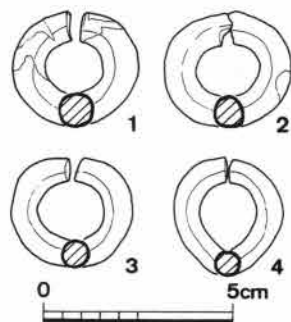
管玉(第60図2～9) 碧玉製の8点出土した。直径9～11mm・長さ21～29mmのものがほとんどで、1点だけ直径6mm・長さ18mmのものがある。ほとんどが片面穿孔であるが、2点に両面穿孔が認められる。

切子玉(第60図10・11) 水晶製の切子玉が2点出土した。横断面六角形のものと7角形のものがある。片面穿孔がなされている。

丸玉(第60図12・13) 水晶製の丸玉が2点出土した。いずれも直径11mm・長さ9mmを測る。片面穿孔がなされている。

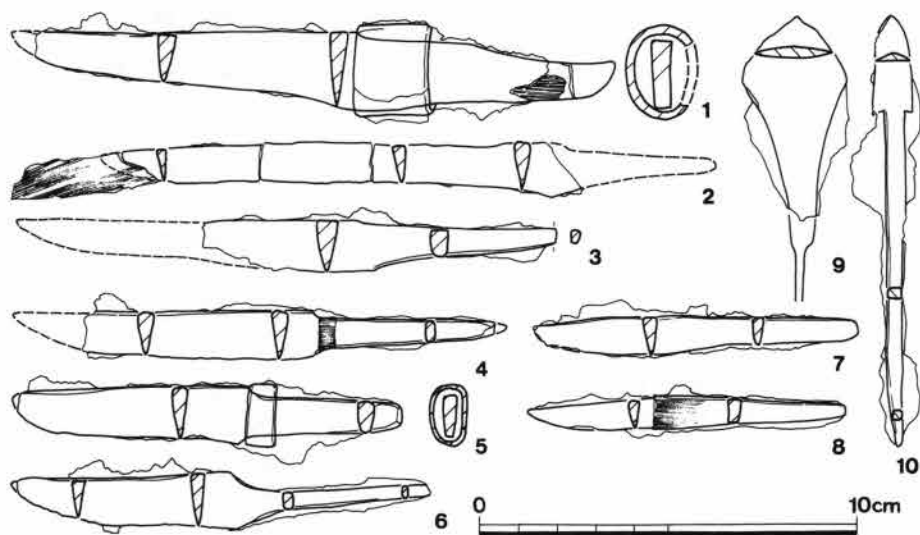
ガラス玉(第60図14～26) 藍色を呈するガラス玉が16点出土した。直径7～9mm・長さ4～8mm程度で収まる。

練玉(第60・61図27～391) 土製の練玉が400程度出土した。黒褐色を呈する。直径5mm程度の球に穿孔したものである。出土位置は、奥壁寄りの玄室右よりである。特に、集中する部分が2地点ある。遺体でいえば、頭部付近と、脚部の付近に当たる位置である。



第62図 耳環実測図





第63図 出土鉄器実測図

金環(第62図1~4) 銅芯金箔貼りの金環が4点出土した。2次埋葬に伴うものは、銅芯径9mm程度でやや太めであり(1・2)、1次埋葬に伴うものは、径7mm程度で若干細めである(3・4)。

④鉄製品(第63図1~10) 鉄製品は11点出土した。刀子9点、鉄鏃2点である。1~3は、刃部が比較的長い。1は、玄門部遺物溜まりから出土した。握り部分に鉤金具が残る。4~8は、刃部が比較的短い。5は、握り部分に鉤金具が残る。9・10は、鉄鏃と思われる。

#### 4. 小結

山根古墳は、土器の年代から陶邑編年のTK209前後の時期に構築されたものと考えられる。出土遺物のなかに金環が2対あり、1対は玉類とともに出土し、1対は須恵器の集積内から出土したこと。遺物が壁寄りに集積されており、片づけの行為が認められること。以上のことから、この石室では、少なくとも2度の埋葬が行われていた。その時期差は、出土遺物の特徴からすれば、あまりないものと思われる。出土した土器の数量や内容に比べて、鉄製品の数量や内容は非常に貧弱である。石室内の状況から攪乱を受けているとは考えにくく、埋葬時の状況を示しているものと思われる。

この地域では横穴式石室をもつ古墳は多くない。したがって、山根古墳はこの辺りを支配していた有力者の墓と思われる。当時の大きな集落として桑飼上遺跡<sup>(注4・5)</sup>が対岸に位置する。山根古墳からは、真下に見下ろす位置に当たり、当時の「ムラ」と「墓」という関係が予想される。

(三好博喜)

付表3 山根古墳出土遺物観察表

概報 番号	遺物 番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	焼成	胎土	出土位置
1	No. 62	須恵器	杯蓋	14.7	4.4	堅緻	密1~6mm礫含む	玄室右
2	No. 81	須恵器	杯蓋	14.6	4.3	堅緻	密	玄室奥
3	No. 43	須恵器	杯蓋	14.4	4.2	堅緻	密1~2mm礫含む	玄門部左
4	No. 64	須恵器	杯蓋	14.2	4.6	堅緻	密1~4mm礫含む	玄室右
5	No. 44	須恵器	杯蓋	14.0	3.7		密	玄門部左
6	No. 79 No. 88	須恵器	杯蓋	13.9	4.4		密	玄室奥
7	No. 84 No. 85	須恵器	杯蓋	13.9	4.1	やや堅緻	密	玄室奥
8	No. 38 No. 53	須恵器	杯蓋	13.8	4.5	堅固	密	玄門部左
9	No. 46	須恵器	杯蓋	13.6	4.2	堅緻	密1~3mm礫含む	玄門部左
10	No. 86	須恵器	杯蓋	13.5	4.4	堅緻	密1~3mm礫含む	玄室奥
11	No. 88	須恵器	杯蓋	13.5	4.1	堅緻	密1~2mm礫含む	玄室奥
12	No. 22	須恵器	杯蓋	13.2	3.6	堅緻	密	玄門部左
13	No. 33	須恵器	杯蓋	13.1	3.9	堅緻	密1~6mm礫含む	玄門部左
14	No. 35	須恵器	杯蓋	13.1	4.2	堅緻	密	玄門部左
15		須恵器	杯蓋	13.1	4.1	堅緻	密1~3mm礫含む	羨道部
16	No. 75	須恵器	杯蓋	13.0	4.0	堅緻	密	玄室奥
17	No. 31 No. 32	須恵器	杯蓋	12.8	4.4	堅緻	密	玄門部左
18	No. 36	須恵器	杯蓋	12.8	3.9	堅緻	密1~4mm礫含む	玄門部左
19	No. 41	須恵器	杯蓋	12.6	4.3	堅緻	密	玄門部左
20	No. 78	須恵器	杯蓋	12.6	4.0	堅固	密	玄室奥
21	No. 37 No. 38 No. 53	須恵器	杯蓋	12.1	4.0	堅緻	密	玄門部左
22		須恵器	杯身	13.0	3.7		密	羨道部
23	No. 19	須恵器	杯身	12.9	3.5	堅緻	密	玄門部左
24	No. 85	須恵器	杯身	12.9	4.0	堅緻	密	玄室奥
25	No. 82 No. 88	須恵器	杯身	12.7	4.3	堅緻	密	玄室奥
26	No. 74	須恵器	杯身	12.5	4.6	軟	密	玄室奥
27	No. 47	須恵器	杯身	12.3	3.9		密	玄門部左
28	No. 63	須恵器	杯身	12.3	4.4	堅緻	密	玄室右
29	No. 42	須恵器	杯身	12.2	4.4	堅緻	密	玄門部左
30	No. 76	須恵器	杯身	12.1	4.6	ややあまい	密	玄室奥
31	No. 87	須恵器	杯身	12.0	4.2		密	玄室奥
32	No. 15	須恵器	杯身	11.9	4.1	堅緻	密	羨道部左3
33	No. 34	須恵器	杯身	11.8	3.9	堅緻	密	玄門部左
34	No. 45	須恵器	杯身	11.8	4.1	堅緻	密	玄門部左
35	No. 52	須恵器	杯身	11.8	4.0	堅緻	密	玄門部左
36	No. 73	須恵器	杯身	11.8	4.2	やや軟	密	玄室奥

37	No. 77	須恵器	杯身	11.8	3.8	堅緻	密	玄室奥
38	No. 88	須恵器	杯身	11.8	3.5	堅緻	密	玄室奥
39	No. 23	須恵器	杯身	11.7	4.2	ややあまい	密	玄門部左
40	No. 53	須恵器	杯身	11.7	4.1	堅緻	密	玄門部左
41	No. 16	須恵器	杯身	11.5	4.1	堅緻	密	羨道部左 4
42	No. 72	須恵器	杯身	11.5	3.7	堅緻	密	玄室奥中央
43	No. 71	須恵器	杯身	11.5	4.6	ややあまい	密	玄室奥中央
44	No. 28	須恵器	杯身	11.2	3.7	堅緻	密	玄門部左
45		須恵器	杯身	11.0	3.5		密	羨道部
46	No. 40	須恵器	杯身	11.4	4.5		密	玄門部左
47	No. 70	須恵器	杯身	11.0	4.1	堅緻	密	玄室奥中央
48	No. 21 No. 26	須恵器	杯身	10.8	4.1	堅緻	密	玄門部左
49		須恵器	高杯	11.9	4.5		密	羨道部
50		須恵器	高杯	12.0			密	羨道部
51	No. 50	須恵器	高杯		10.3	軟	密	玄門部左
52	No. 18	須恵器	高杯	11.3	11.9	堅緻	密	羨道部右
53	No. 2	須恵器	高杯	11.8	13.5	堅緻	密	羨道部左 1
54	No. 7	須恵器	高杯	14.6	15.8	軟	密	羨道部左 2
55	No. 9	須恵器	高杯	12.3	9.5	堅緻	密	羨道部左 2
56	No. 51	須恵器	高杯	12.2	10.7	やや軟	密	玄門部左
57	No. 12	須恵器	高杯	13.9	15.7	軟	密	羨道部左 2
58	No. 30 No. 38 No. 66	須恵器	有蓋高杯	11.5	10.6	堅緻	密	玄門部左
59	No. 3	須恵器	高杯	12.3	17.9	堅緻	密	羨道部左 1
60	No. 11	須恵器	甕		16.2	やや軟	密	羨道部左 2
61	No. 13	須恵器	甕	12.2	16.9	堅緻	密	羨道部左 3
62	No. 8	須恵器	甕	12.2	16.6	堅緻	密	羨道部左 2
63	No. 17	須恵器	提瓶	7.6	24.7	やや軟	やや粗	羨道部右
64	No. 4	須恵器	提瓶	6.7	17.7	堅緻	密	羨道部左 2
65	No. 10	須恵器	提瓶	6.2	19.8	堅緻	密	羨道部左 2
66	No. 65	須恵器	提瓶			堅緻	密	玄室右
67		須恵器	壺	15.4	10.3		密	羨道部
68	No. 32 No. 66	須恵器	壺	14.3	5.0	堅緻	密	玄門部左
69	No. 6	須恵器	底部			堅緻	密	羨道部左 2
70	No. 39	須恵器	椀	11.2	7.4	堅緻	密	玄門部左
71	No. 83	須恵器	椀	12.0	8.3	堅緻	密	玄室奥
72	No. 24	須恵器	脚付長頸壺	9.6	27.2		密	玄門部
73		土師器	土師皿	5.9	1.4		良好	羨道部
74	No. 25	須恵器	平瓶	9.2	17.6	堅緻	密	玄門部左
75	No. 29 No. 54	土師器	高杯		9.5	堅固	密	玄門部左
76	No. 48	土師器	高杯	14.3	8.8	あまい	良好	玄門部左
77	No. 1	須恵器	甕	21.5	40.3	堅緻	密	羨道部左 1

### (3) 神宮谷4号墳

#### 1. 調査経過

神宮谷4号墳は、京都府綾部市別所町大字神宮谷にある。平成4年度から平成5年度にかけて神宮谷古墳群の発掘調査を実施した。<sup>(注6)</sup>今回調査した神宮谷4号墳は、3号墳の南側に位置している。平成4年度には3号墳の調査を行い、4号墳は確認のための調査が行われたのみであったため、翌年度の平成5年度に横穴式石室の主体部床面の調査を行った。調査期間は、平成5年4月19日～同5月14日で、調査面積は約170m<sup>2</sup>である。

#### 2. 位置

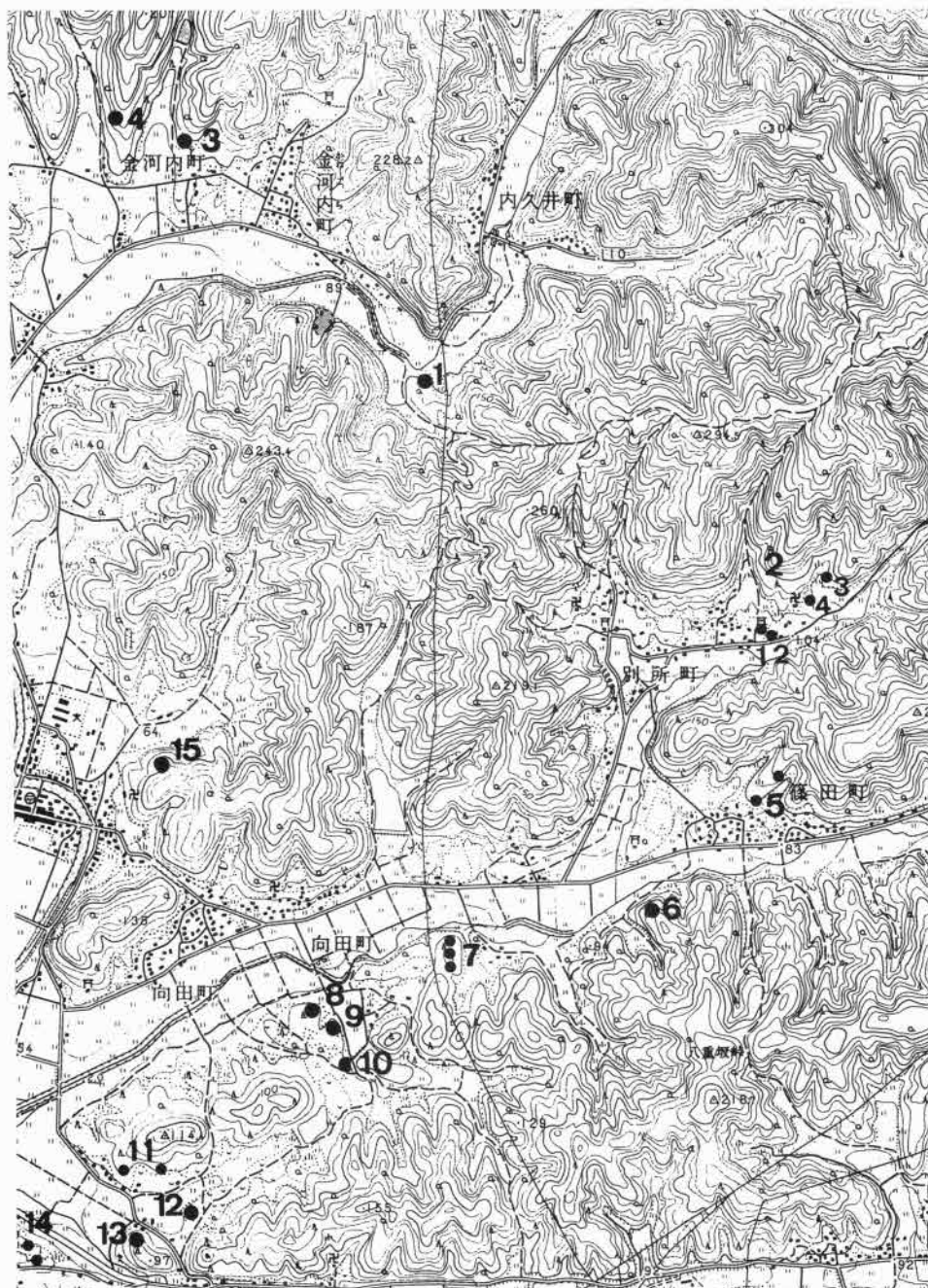
綾部市北西の山塊から流れ出る小河川が集まり、蛇行しながら南下する犀川は、綾部市南西部で由良川に合流する。その犀川上流域では、多くの細長い矮小な谷地形が枝分かれするようにのび、それにかみ合うように細長い尾根状の丘陵を形成する。神宮谷古墳群の位置する別所町は、この犀川の最上流左岸域にあり、神宮谷古墳群は、南西にのびる丘陵南側の傾斜変換点付近に所在する。現在、確認されているのはいずれも横穴式石室を主体部として持つ後期古墳で、周辺には五反田古墳群を除けば、単独墳か、多くとも数基程度の石室墳である(第64・65図)。

#### 3. 調査概要

##### (1) 神宮谷4号墳の石室

神宮谷4号墳は、平成4年度に当調査研究センターが行った神宮谷3号墳の調査中にその存在が確認され、埋土の除去が行われていた。調査当初から基底石と思われる石材が露出していたため、石室内も後世の開墾や石取りによって、副葬品などは、ほとんど遺存しないものと危惧されたが、玄室内の遺物の遺存状況は良好であった。主体部東側では舗装された農道によって、墳丘の遺存状況の確認はできなかった。主体部から見て、北側と北西側に墳丘盛り土の有無を確認するためのトレンチを掘削したが、人為的な盛り土や掘削の痕跡は認められなかったため、外表施設を含め、墳丘は遺存しないものと判断した(第66図)。このため、調査内容は、玄室床面の基底石とその掘形や墓壙プランの検出、副葬品の検出とそれらの記録に集約された。

まず、表出していた基底石によって囲まれた部分が、石室内部の玄室と想定できた。こ

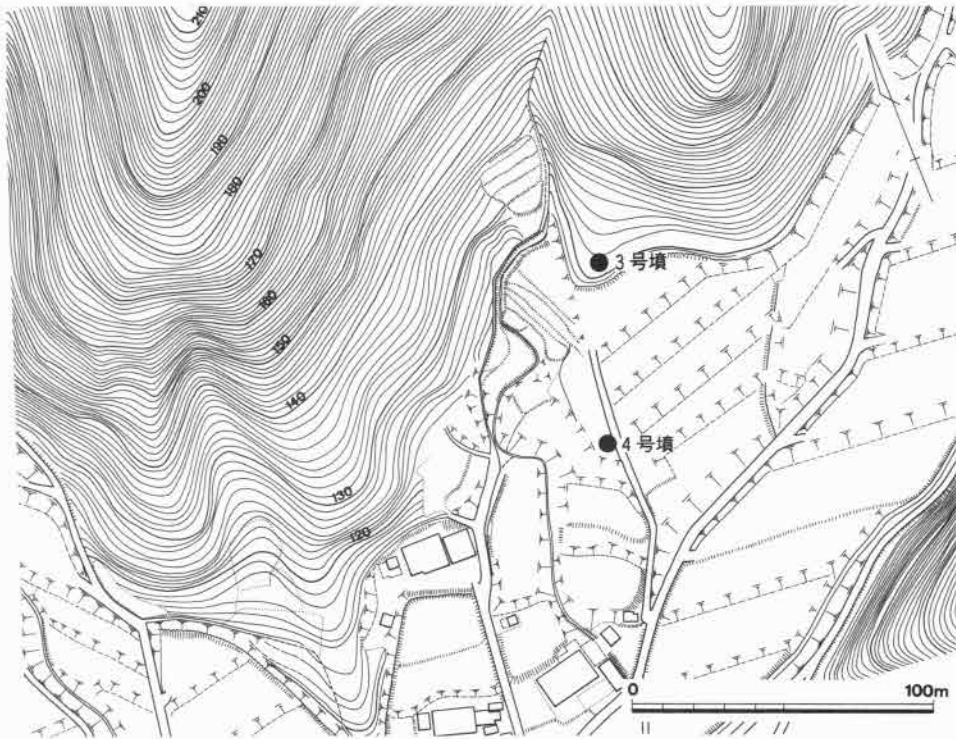


第64図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

- |            |             |          |            |          |
|------------|-------------|----------|------------|----------|
| 1. ジンド古墳   | 2. 神宮谷古墳群   | 3. 八幡古墳  | 4. 山尾古墳    | 5. 篠田古墳群 |
| 6. 八重坂古墳群  | 7. 井尻古墳群    | 8. 稲荷山古墳 | 9. 小狭間古墳   | 10. 松原古墳 |
| 11. 白道路古墳群 | 12. ニワトリ塚古墳 | 13. 狭間古墳 | 14. 五反田古墳群 | 15. 志賀古墳 |

のため、床面の遺存状況の確認のために、この石室内部の埋土を除去していったが、奥壁及び石室南半部の基底石は遺存せず、石取りの際の攪乱が奥壁西側や墓壙西側掘形肩部で認められた。奥壁では攪乱の東側に幅30cm前後の布掘り状の基底石掘形を検出した。この基底石掘形内の中央付近には小児頭大の石が置かれており、左右に2石の奥壁石材が立て並べられたと推測できる(第67図)。また、石室南半では、左右の袖石の掘形を検出した。左右ともにいびつな楕円形のプランを呈している。袖石の安定をはかるために、細長い石を袖石の周りに「コ」の字状に配し、袖石材の尖った部分をこの小土坑にあわせるようにして設置していたことが判明した。掘形の平面プランから、石室は、右袖部の方が左袖部より若干突出した両袖式の横穴式石室であると判断した。玄室の幅は、奥壁に接する両側壁で1.6m程度、玄室長は、奥壁掘形から袖石掘形までで3.2m内外を測る。玄室比(玄室長/玄室幅)は2.0に近い値となる。

基底石の石材は、直方体に近く、長い側面を横にして布掘り状の掘形底部に置き並べられていた(第67・68図)。基底石の裏込め土は、地山土の固い橙褐色礫土を利用しており、版築状に分層されうるものではなかった。この地山土でも、粒子の細かいものを玄室内の床面の整地土として用いていた。床面は排水を考慮して、南西方向にゆるやかに傾斜してい



第65図 調査地位置図(1/2,500)

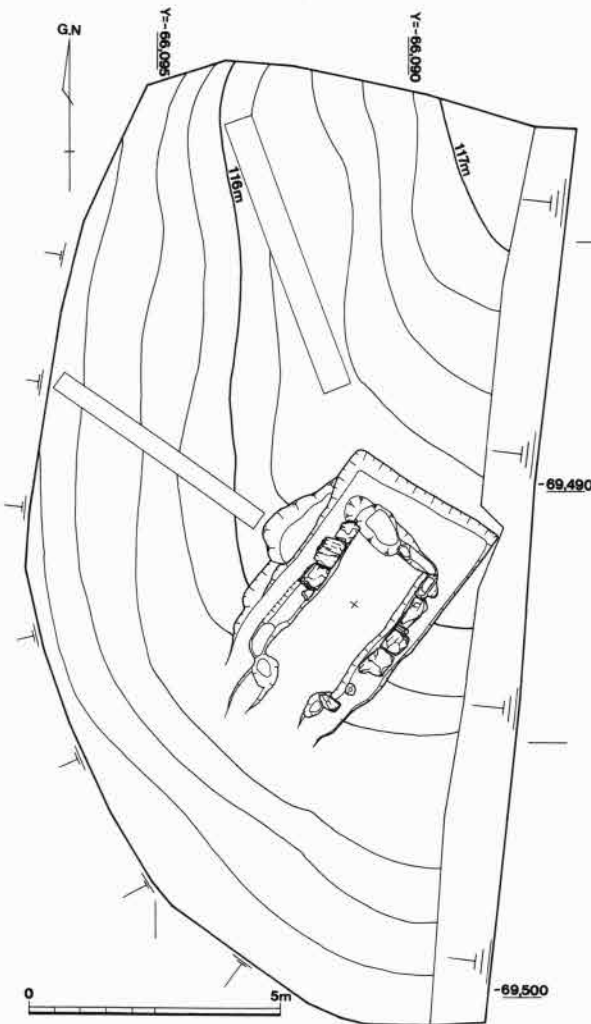
る。床面では玄室主軸に平行して南北に走る石列を検出し、玄室右袖部分で須恵器蓋杯をはじめ、多くの遺物が出土した(第68図)。

(2)遺物の出土状況

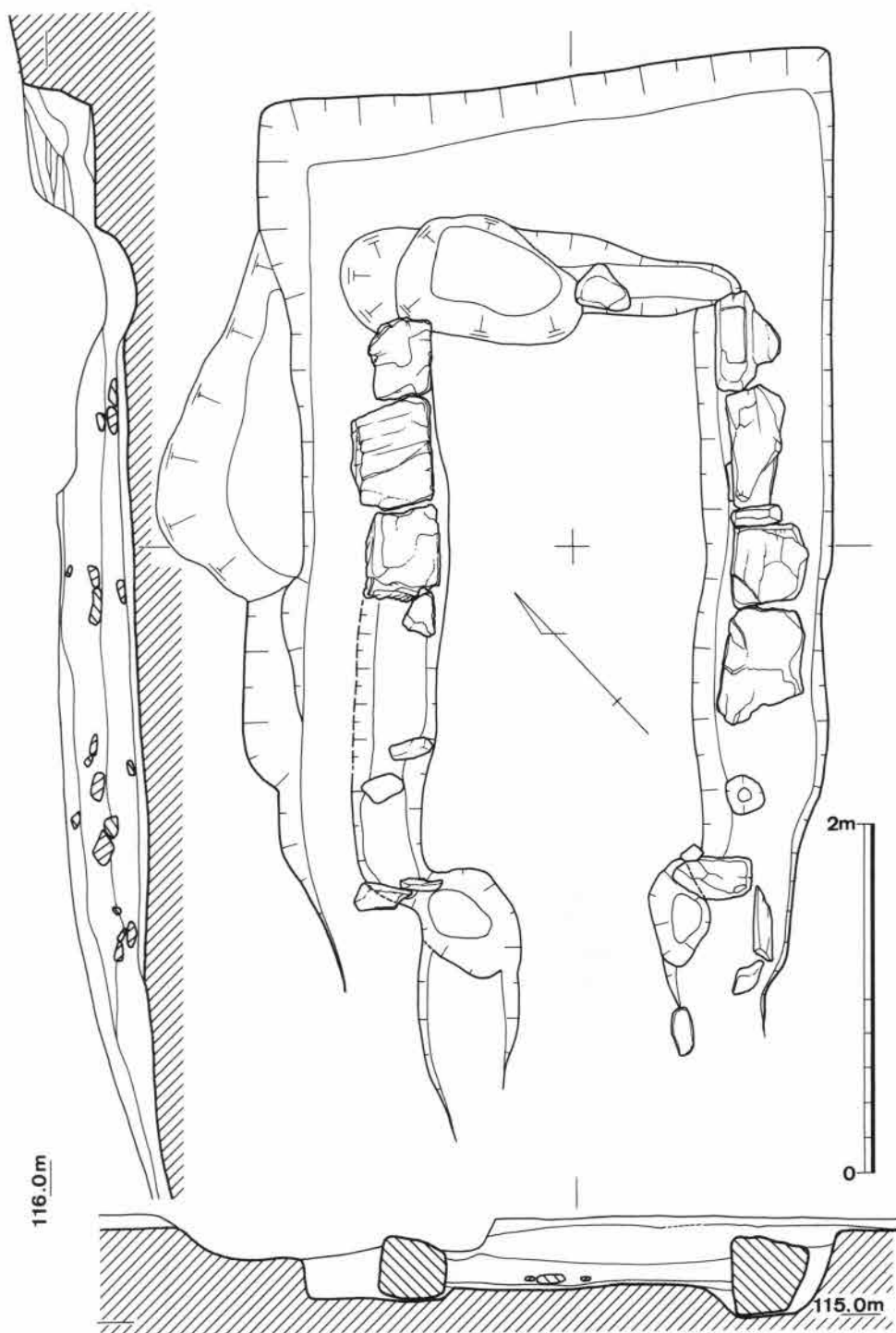
玄室及び羨道と考えられる場所から出土した遺物は、須恵器43点以上、土師器5点、鉄鏃23点以上、刀子6点、土製練玉を含む玉類総数440点以上にのぼる。調査当初に想像された点数を越えるものであった。遺物実測に際し、便宜的に区割りを行った。つまり、玄室中軸線とその直交する線で区画を設定し、玄室西側(右側)をA区、東側(左側)をB区とし、北東方向から1区、2区、3区とした(第69図)。奥壁からは提瓶(42)、高杯脚(40)などの須恵器が出土したほか、B1区、B2区境界付近では土製練玉400点以上が出土した。

B3区では、玄室床面より10cm高い位置で碧玉製の管玉が出土した。A4区、B4区では須恵器の蓋杯や鉄鏃を中心として多くの遺物が出土した。杯身・杯蓋は、ほとんどが内面を上に向けて出土しており、外面を上に向けての例は高杯蓋33以外なかった。片付けられたような状態ではなく、副葬時の状況を示すと考えられた。また、B4区では、広根鏃と長頸鏃が束になって出土した。B1区、B2区で出土した土製練玉よりも一周り大きい土製練玉が22点出土した。土製勾玉2点や水晶製切子玉とともに一連のものが見られ、杯身20の中からも6点見つかった。

羨道部では基底石や袖石の抜き取りによって、床面自体が削平されており、原位置を保つ遺物は比較的少なかった。検出位置も遊離して埋土内で出土した。

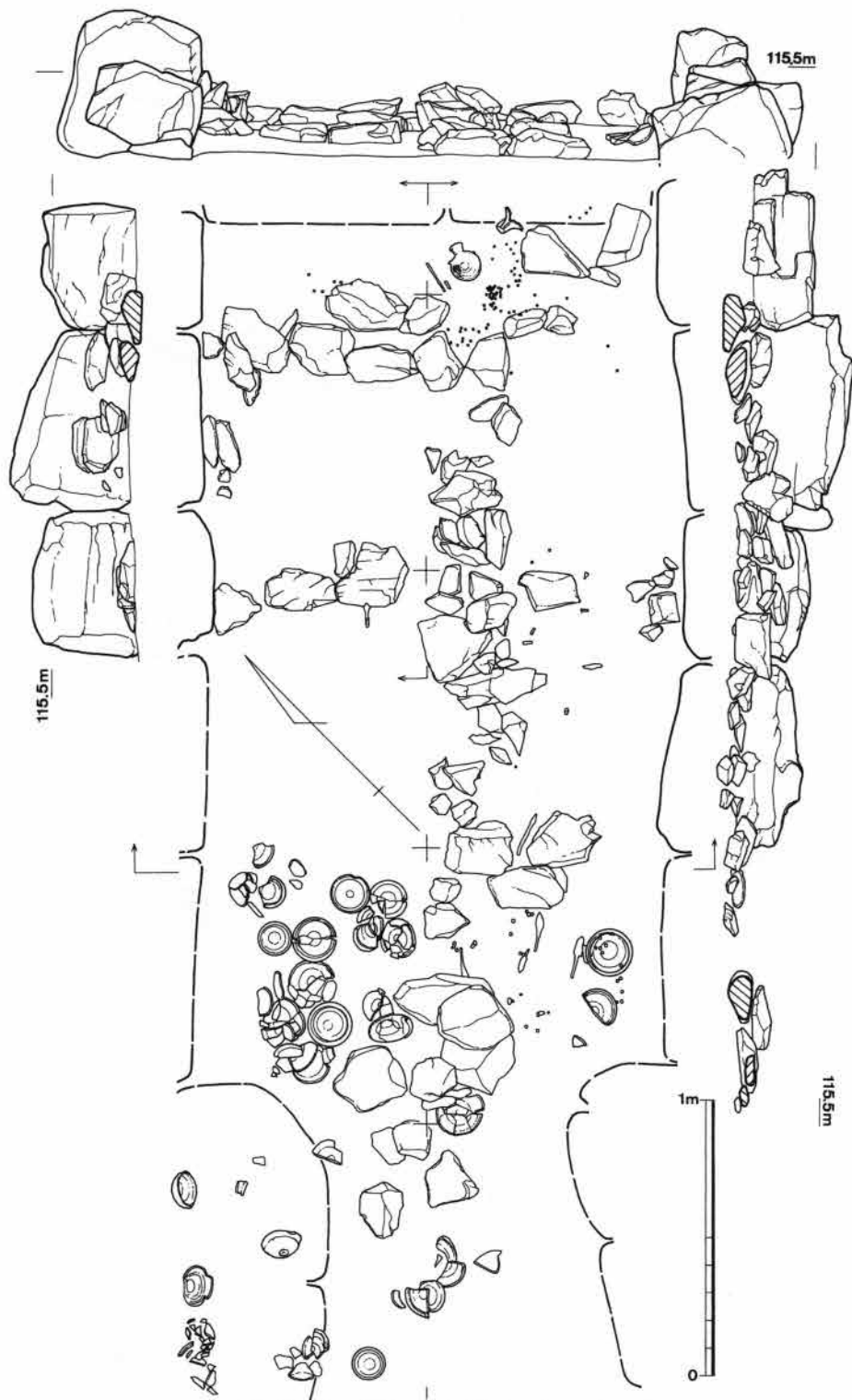


第66図 神宮谷4号墳測量図(1/150)



第67図 神宮谷4号墳石室実測図(1/40)





第68図 神宮谷4号墳石室内遺物出土状況図(1/50)

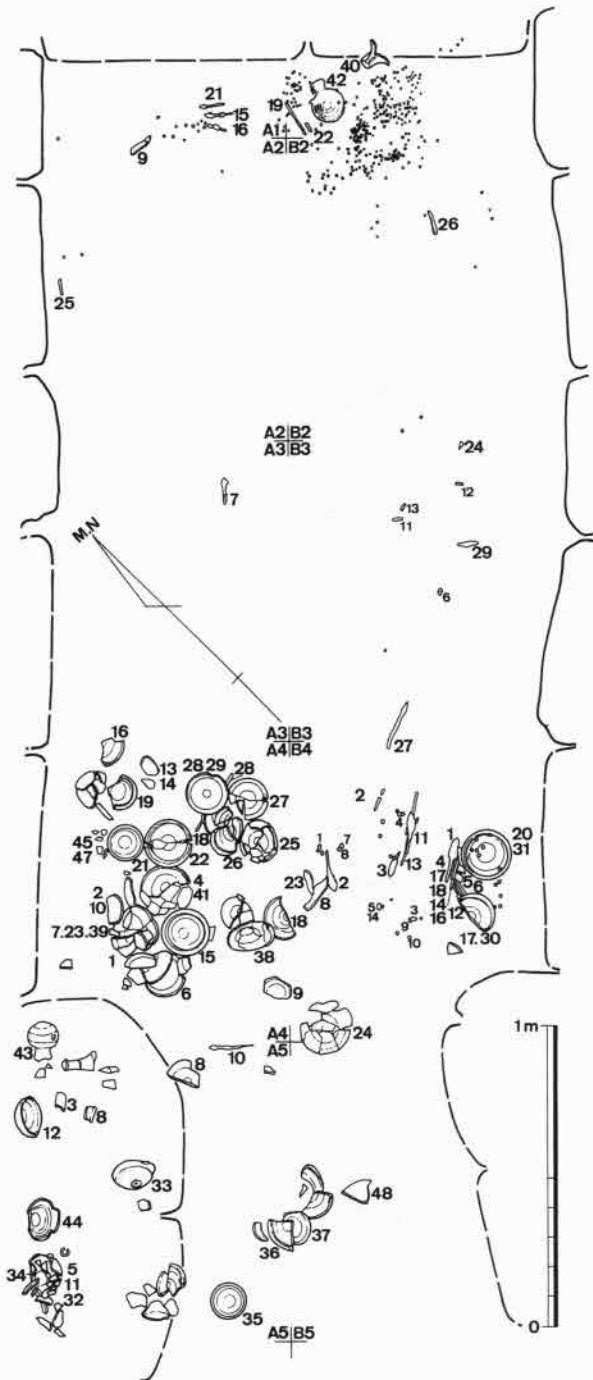
(3)出土遺物

a. 土器

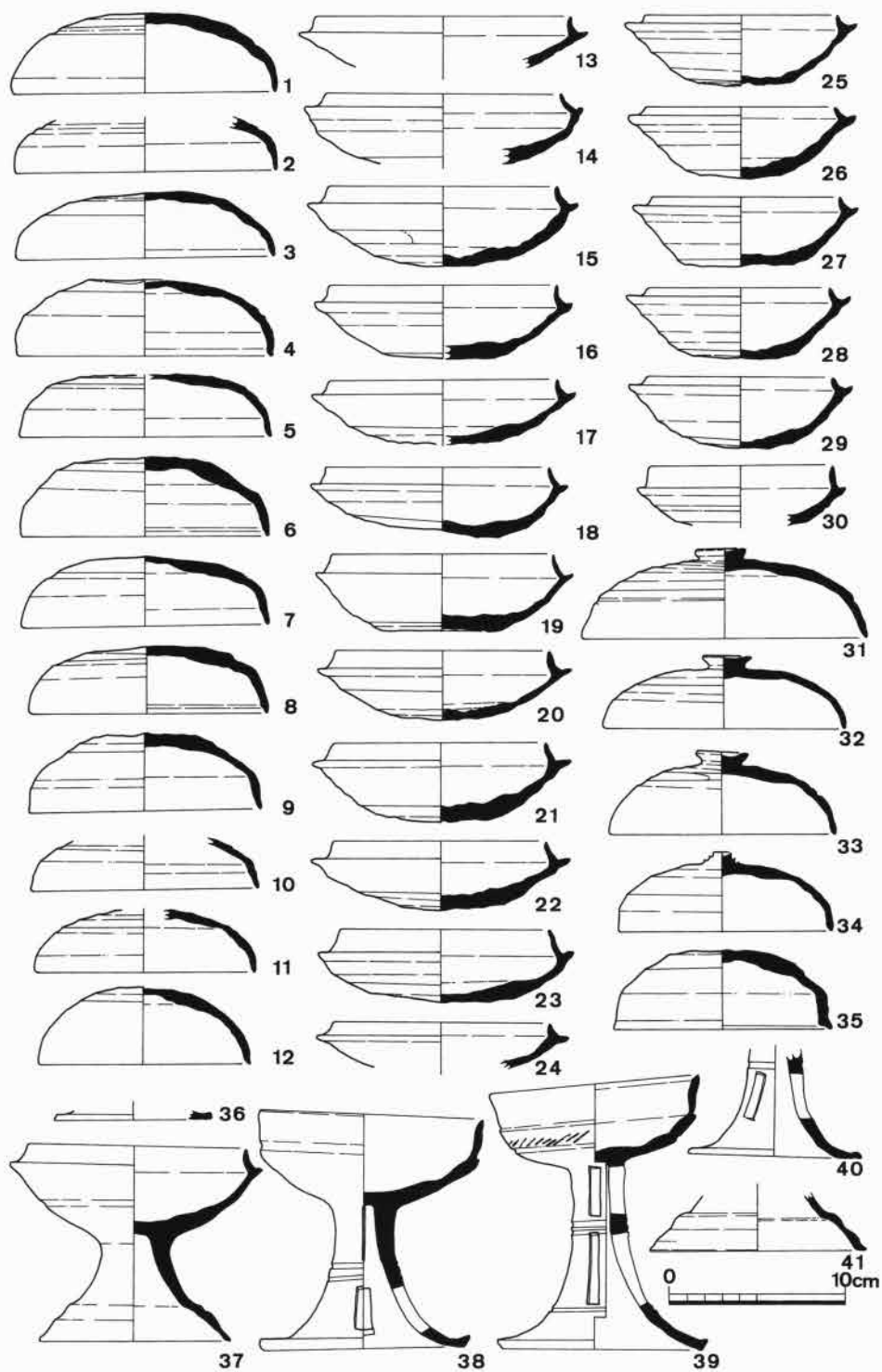
蓋杯(第70図1~30)

口径は、15~12.2cmとかなりの開きがある。ヘラ削りが口縁部の2分の1以下になり、口縁部と天井部の明瞭な境界は認められない。形態の特徴は、口縁部径が大きく、口縁部と天井部の境がなく、全体として丸みを帯びるもの(a類; 1~5)が一群として抽出できる。なかには、口縁部内面端部に内傾面をもつもの(3・4)がある。次に、口縁部と天井部の間に強い屈曲が見られるもの(b類; 6~10)がある。これには厚手のもので外表面が強いなでによって波打つものが多い。最後に口径が小さくなり、矮小化して半球状になるもの(c類; 12)があり、ほぼ三者に大別できる。

杯身も形態的特徴をあげれば、内傾した口縁部が長く外反して立ち上がり、受け部との間に明瞭な溝がはいるもの(a類; 14・15・23)。口縁部と受け部の間の凹みが浅くなるもの(b類; 13・16~22・24・30)。口径が小さくなり、



第69図 遺物出土状況対応図(番号は図版番号に対応)



第70図 出土土器実測図(1) 蓋杯・高杯

口縁部に受け部の高さが近づくもの(C類; 25~29)となる。

肉眼観察によって、胎土の特徴を観察表に示したが、一概に器形による分類と対応するものではない。ただ、乳白色の角礫(1~2mm)を非常に多く含み、青灰色で焼成良好な胎土a群と、黒色の光沢のある微粒子を含み、緑がかった青灰色を呈する胎土b群が最も多く存在し、この胎土a群とb群は、杯身・杯蓋のa・b類に多く認められるのに対して、杯身c類は白色や乳白色の微粒子を含み、灰褐色で焼成不良な胎土e群のみである点が指摘できる(付表4、胎土参照)。

#### 高杯(第70図31~34・36~41)

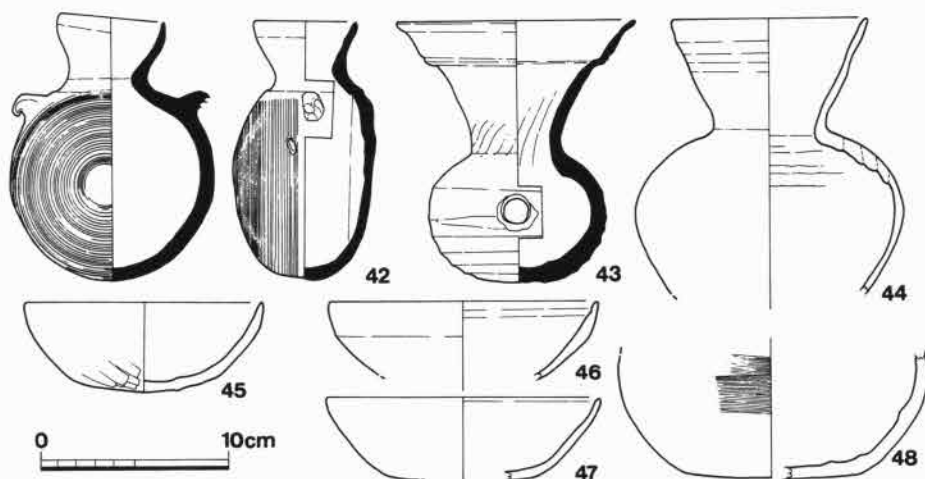
有蓋高杯1点(蓋4点)、無蓋高杯2点、脚2点がある。37は、甕の口縁部を倒立させたような脚部をもつ。透かしはない。38は、脚部が2条の凹線によって、二段に区画され、二段、二方向の透かしをもつが、上段のものは切り込みを入れるのみである。39は、脚部が2条と1条の凹線によって、三段に区画され、二段、二方向の透かしが施される。杯部も2条の凹線によって三区分され、中央部位に木口板の圧痕による斜位の文様が施される。40は無蓋高杯、41は有蓋高杯の脚部と思われる。

#### 提瓶(第71図42)

小形のもので、鉤状の把手をもつ。カキ目は明瞭で緻密。

#### 甕(第71図43)

口縁部が大きく広がり、一段をなす。胴部下半にはヘラ削りが施され、穿孔部の下側周囲には注口の装着に伴う器壁表面の剝落が顕著である。



第71図 出土土器実測図(2) 提瓶・甕・碗・壺

直口壺(第71図44)

外反し、まっすぐのびる口縁部をもつ。胴部は、やや偏平で最大径が中位を上回る。胴部上半内面には粘土紐の巻き上げ痕跡が顕著に認められる。

椀(第71図45~47)

3点ともA4区出土。磨耗が著しいが、下半部にはハケ目調整が施される。

b. 鉄器

鉄鎌(第72図1~22)

広根鎌(1~9)と長頸鎌(10~23)に大別できる。広根鎌は重ね腸袂をもつもの(1~7・9)と直角の関をもつもの(8)があり、長頸鎌には鎌身が片丸造りで、篋被のように直角に短く突出する関部をもつもの(10~16)が主体的である。一部、切刃造りの鎌身(20)や小さな腸袂をもつもの(21)などがある。篋被は、台形状のものが大半を占め、棘篋被は10のみである。

刀子(第72図24~29)

すべて背関をもつ。錆のため、明確ではないが、背関は撫角になるもの(26・27)と直角のもの(28・29)がある。26・27は、茎に把木が遺存している。26と28は、鉤が装着される。28は鑄造りに近い刀身で、小刀とってよい。

c. 装身具

玉類(第73・74図)

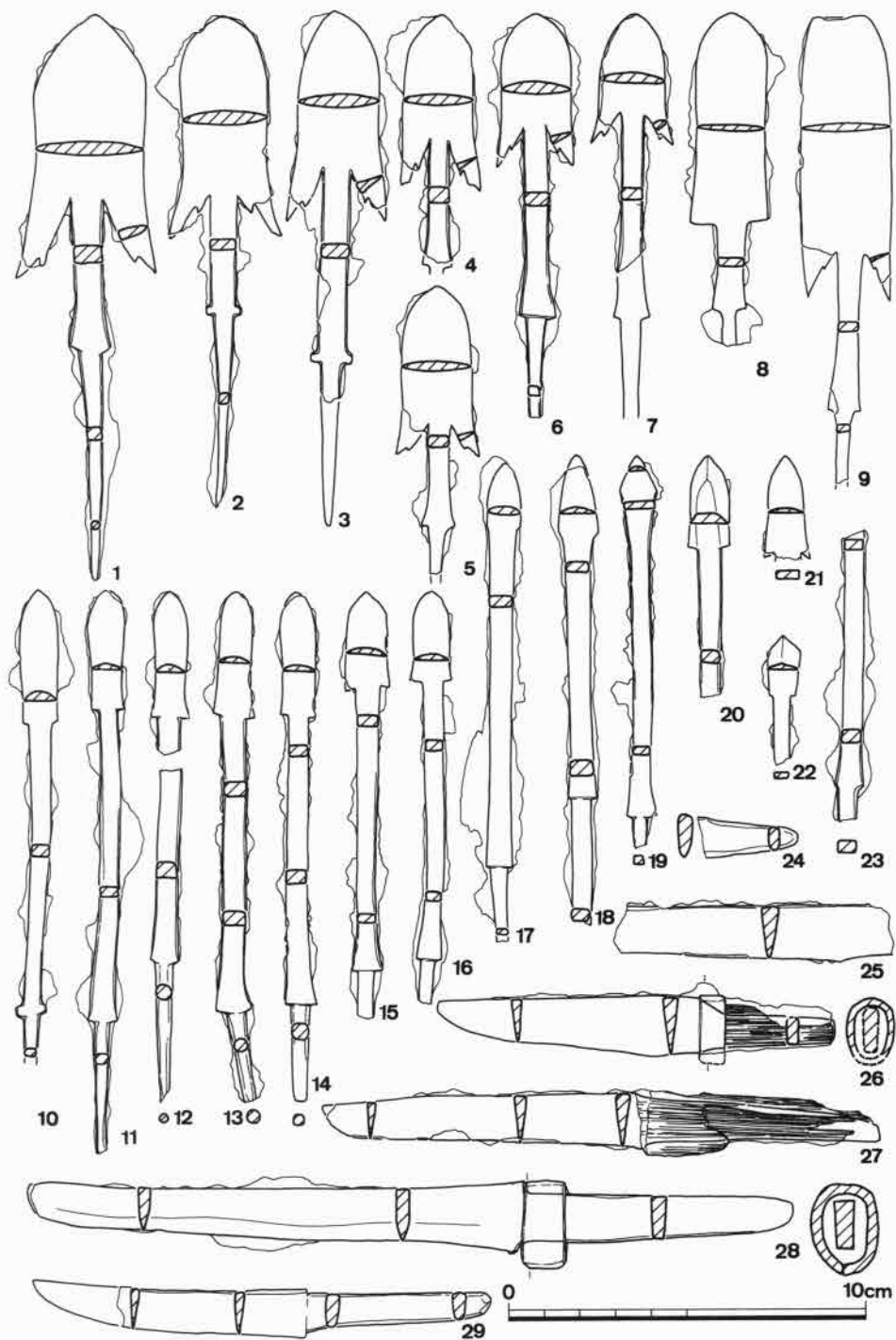
勾玉2点、切子玉8点、管玉4点のほか、420点を越す土製練玉が出土した。破片を含めれば、土製練玉の総数は450点を越えるものと思われる。これらは、出土地点からみると、B1区・B2区の小形土製練玉、B3区の管玉、B4区の勾玉、切子玉、大形土製練玉の三群に分けられる。

勾玉(1・2)は、土製練玉と同様に粘土を固めたもので、焼成されてはいない。色調は、黒灰色で漆か黒色の顔料などが含まれるものと思われる。

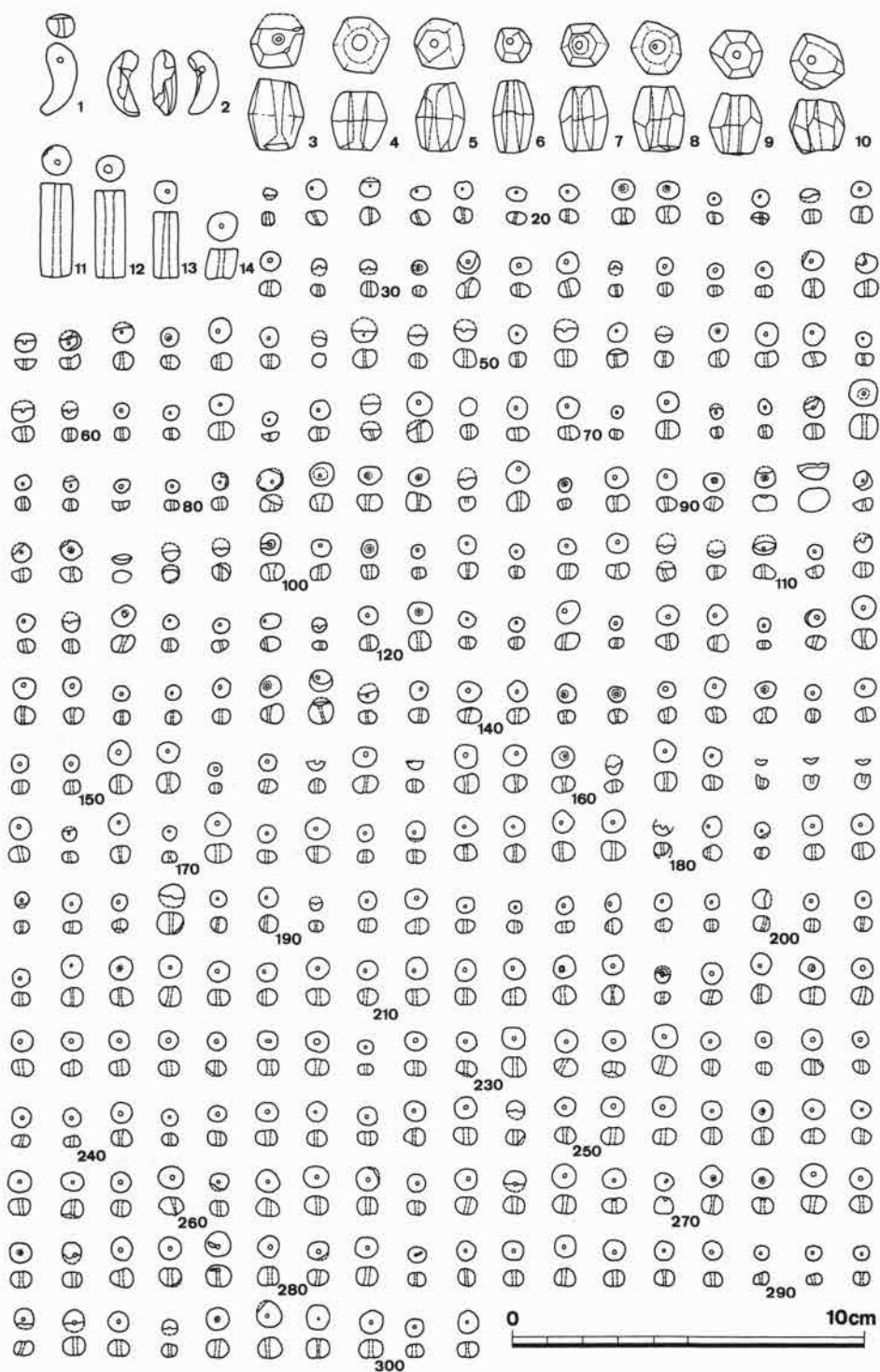
切子玉(3~10)は、いずれも透明度が低く、白濁色に濁っている。水晶結晶の六角柱を利用して上下に研ぎ分けるが、8~10は全体に寸づまりで、六角柱の側面稜線を無視して研がれるため、稜線が上下方向にそろわない。

管玉(11~14)は、すべてB3区から出土。他に関連する玉類はなく、環としたか疑問である。11~13は、濃緑色で碧玉製であるが、14は白緑色で砂糖菓子のように脆い。11・13・14は片側穿孔だが、12は両側穿孔である。

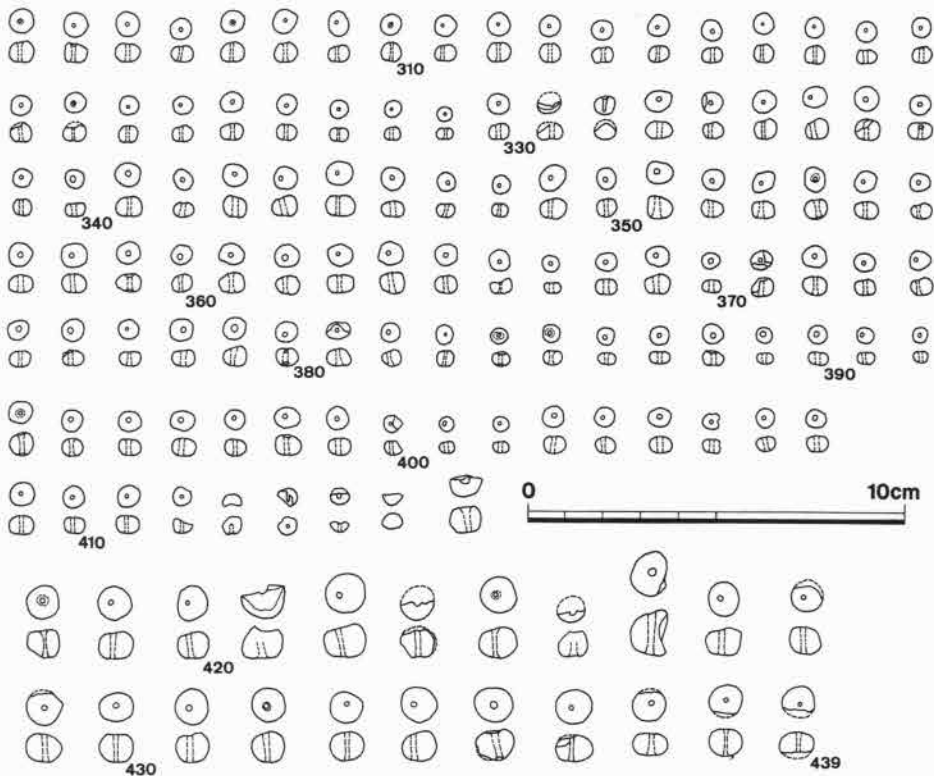
土製練玉(15~439)は、直径5~6mmほどの小形の一群(15~416)と、直径9mm前後の大形の一群(417~439)に分けられる。小形練玉群は、B1・B2区で出土し、大形練玉群は



第72図 出土土器実測図(3) 鉄・刀子



第73図 出土玉類実測図(1) (1・2. 勾玉、3~10. 切子玉、11~14. 管玉、15~439. 土製練玉)

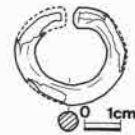


第74図 出土玉類実測図(2)

B4区で勾玉、切子玉の付近から出土した。破片を観察すると内部まで黒灰色で、焼成されたようすがない。未貫通のもの(270・413)もあることから、粘土状の素材を細かく丸め、針などでさして穿孔したと思われる。

銀耳環(第75図)

銅芯銀貼耳環で、1点しか出土しなかった。一方の端部の銀箔が剥がれ、銅芯が腐蝕して先細りになっている。断面は円形で、銀箔は端部で銅芯断面にあわせて円形に切り出され、小口部分を覆うように、精巧に仕上げられる。

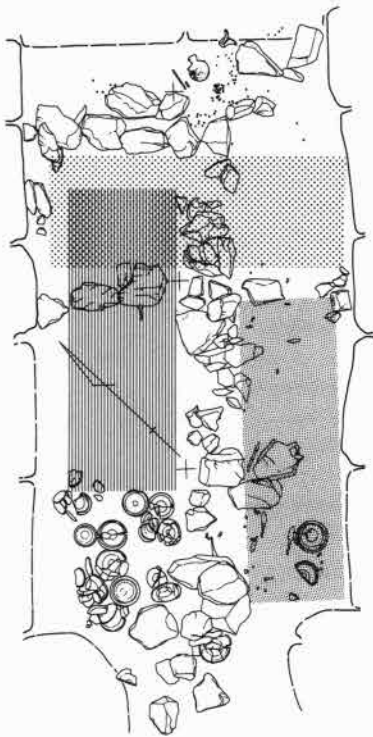


第75図 銀耳環

4. 棺配置

玄室床面内には、木棺作成に使用される鉄釘などが出土しなかったため、安置された棺数や追葬回数などは確定できない。ただ、玄室床面に置かれていた石の配置状況によって木棺の位置を推定復原してみたい。まず、奥壁に平行して走る二列の石列は、玄室中軸線に平行して走る中央石列よりもレベルが低いため(第68図)、最初の納棺に伴うものと思われる。しかし、棺台とするには幅が1m以上の木棺を想定しなければならず、石室にそぐ





第76図 木棺配置想定図

わない。また、棺台として棺を支えていたとするには各石のレベルが不ぞろいすぎる。このため、石列は木棺の長側板を倒れないように支えるための置石であったと考えたい。これなら、各石の頂点のレベルが不ぞろいでも、長側板に沿っていれば用は足りることになる。つまり、幅60cm・長さ150cm余りの木棺が推定でき、これを初葬の施設とみなせる(第1被葬者)。

次に、玄室中軸線に平行に石列が配置される。これによって、棺の方向が玄室中軸線に平行になるように規定される。玄室左側では、管玉や勾玉、切子玉などの玉類を棺内被葬者装身具と考えれば、左袖部隅角にあわせた棺配置を考えざるを得ない(第2被葬者)。また、玄室右側では右袖部付近の須恵器の蓋杯類が木棺の小口部分に副葬されたと考えれば、左側の棺より若干奥壁によったところに配置されたと見るのが妥当であろう(第3被葬者)。これら

のことを考えあわせれば、3つの木棺が存在したと考えたい(第76図)。出土した土器類から、追葬の期間は、それほど長期にわたるものではなかったはずであるが、各被葬者の副葬品はそれぞれ異なる。この推測が正しければ、第1被葬者は提瓶や高杯とともに多量の土製練玉を棺外に配置する。第2被葬者は、頭部に鉄鏃や玉類、足元に管玉を持つ。第3被葬者は玉類を持たず、須恵器のみの多量副葬を棺外に行うといった被葬者像が想定できる。

## 5. 小結

今回の調査では、墳丘と横穴式石室の大半は遺存していなかったが、玄室床面の保存状態は、良好なものであった。横穴式石室は、玄室比2に近く、羨門部に向かってやや開く羨道が敷設される両袖式のものと同推定できた。閉塞石などは削平のため、全く遺存しなかった。古墳の築造された時期は、出土遺物などから6世紀後葉と考えられる。石室は、神宮谷3号墳とよく似た平面プランが想定される。しかし、その規模が小さく、使用される基底石石材が小型化していることから、3号墳に追行するものとできよう。

また、玄室床面に置かれた石列から、3つ以上の木棺が安置されたものと見られ、副葬遺物が各々異なるものと考えられた。

(野島 永)

付表4 神宮谷4号墳出土土器法量表

番号	器種	口径	器高	胎土・色調・焼成	出土位置	残存率	記録番号	備考
1	杯蓋	15.00	4.60	b・淡青灰色・良好	A4区	8/8	35・36	
2	杯蓋	14.90	2.90	b・淡緑灰色・良好	A4区	7/8	30	
3	杯蓋	14.80	3.70	暗灰色・良好	B4区	4/8	51・55	
4	杯蓋	14.60	4.35	淡青灰色・不良	A4区	8/8	29・31	
5	杯蓋	14.40	3.55	b・淡青灰色・良好	A5区	1/8	13	
6	杯蓋	14.20	4.45	c・暗青灰色・良好	A4区	8/8	37	
7	杯蓋	14.20	4.00	a・暗青灰色・良好	A4区	7/8	34	
8	杯蓋	13.90	3.80	a・黒灰色・良好	A5区	7/8	10	
9	杯蓋	13.40	4.40	a・黒灰色・良好	A4区	1/8	50	
10	杯蓋	13.00	2.90	淡灰色・不良		1/8	30	
11	杯蓋	12.60	3.55	b・淡緑青灰色・良好	A5区	8/8	13・44	
12	杯蓋	12.20	4.25	e・灰褐色・良好	A5区	8/8	9	
13	杯身	14.40	3.55	淡青灰色・良好	A4区	1/8	13	
14	杯身	13.40	4.95	暗青灰色・良好		1/8	19	
15	杯身	13.00	4.50	c・明青灰色・良好	A4区	8/8	32	
16	杯身	13.00	4.20	a・暗青灰色・良好	A4区	3/8	17	
17	杯身	13.00	3.55	b・緑青灰色・良好	B4区	4/8	5	
18	杯身	12.80	4.00	b・緑青灰色・良好	A4区	8/8	41・49	
19	杯身	12.70	4.45	c・淡青灰色・良好	A4区	7/8	18	
20	杯身	12.30	3.90	b・暗緑青灰色・良好	B4区	8/8	4	
21	杯身	12.20	4.40	b・明白色・良好	A4区	8/8	21	
22	杯身	12.15	4.00	d・淡青灰色・良好	A4区	8/8	26	
23	杯身	11.80	4.20	d・淡青灰色・良好	A5区	7/8	34	
24	杯身	12.30	2.3~	f・乳白色・不良	A4区	7/8	6	
25	杯身	11.00	4.10	e・灰茶褐色・不良	A4区	8/8	28	
26	杯身	10.80	3.80	e・淡灰褐色・不良	A4区	8/8	27	
27	杯身	10.70	4.00	e・淡灰褐色・不良	A4区	8/8	25	
28	杯身	10.40	4.10	e・淡灰褐色・不良	A4区	6/8	12	
29	杯身	10.30	4.00	e・淡灰褐色・不良	A4区	8/8	22	
30	杯身	10.60	3.35	a・暗黒灰色・良好	B4区	1/8	5	
31	高杯蓋	16.30	5.20	a・青灰色・良好	B4区	8/8	3	
32	高杯蓋	13.80	4.10	b・淡緑青灰色・良好	A5区	5/8	13	
33	高杯蓋	12.90	4.80	b・淡緑青灰色・良好	A5区	8/8	12	
34	高杯蓋	12.85	4.60	暗青灰色・良好	A5区	7/8	42	ひずみ大、 内面剥離
35	短頸壺蓋	12.40	4.50	c・青灰褐色・良好	A5区	8/8	15	
36	高杯脚	9.00	0.50	灰色・不良	A5区	1/8	8	
37	高杯	12.50	11.40	c・灰白色・良好	B5区	8/8	8	自然釉付着

38	高杯	12.90	13.80	淡灰褐色・不良	A 4 区	7/8	33	
39	高杯	11.40	15.30	a・暗青灰色・不良	A 4 区	5/8	35・52・ 53・45	
40	高杯脚	10.00	6.10	a・淡灰白色・良好	B 1 区	2/8	1	
41	高杯脚	12.30	3.20	黒灰色・良好	A 4 区	1/8	31	
42	提瓶	5.60	13.60	a・青灰色・良好	B 1 区	8/8	2	
43	甕	12.70	13.80	a・淡青灰色・良好	A 5 区	6/8	17?	
44	長頸壺	10.40	9.80	橙褐色・不良	A 4 区	4/8	16	
45	椀	12.70	4.85	橙褐色・不良	A 4 区	7/8	39	
46	椀	14.20	4.20	橙褐色・不良	A 4 区	3/8	48	
47	椀	14.60	4.40	橙褐色・不良	A 4 区	7/8	39	
48	底部	9.20	6.90	灰色・良好	A 4 区	1/8	7	

付表5 神宮谷4号墳出土鉄器法量表

番号	鉄器名	残存長	出土位置	記録番号	番号	鉄器名	残存長	出土位置	記録番号
1	鉄鏃	15.9	B 4	13	16	鉄鏃	11.5	B 4	30
2	鉄鏃	13.8	B 4	25	17	鉄鏃	13.4	B 4	23
3	鉄鏃	10.9	B 4	12	18	鉄鏃	12.8	B 4	18
4	鉄鏃	6.9	B 4	20	19	鉄鏃	10.9	B 1	4
5	鉄鏃	7.1	B 4	21	20	鉄鏃	6.8	B 4	28
6	鉄鏃	11.3	B 4	22	21	鉄鏃	2.9	A 1	2
7	鉄鏃	7.3	A 3	7	22	鉄鏃	3.5	B 1	5
8	鉄鏃	9.3	B 4	27	23	鉄鏃	8.2	B 4	26
9	鉄鏃	13.1	A 5	1	24	刀子	2.9	B 3	8
10	鉄鏃	13.1	B 4	17	25	刀子	7.9		29
11	鉄鏃	15.8	B 4	11	26	刀子	11.2	B 3	6
12	鉄鏃	13.9	B 4	24・25	27	刀子	15.5	B 4	10
13	鉄鏃	14.2	B 4	11	28	刀子	21.4	B 3	15
14	鉄鏃	14.2	B 4	19	29	刀子	10.5	B 3	9
15	鉄鏃	11.9	A 2	3					

付表6 神宮谷4号墳出土玉類

玉No.	玉名称	幅(mm)	高さ(mm)	色調	出土地区	記録番号	備考
1	勾玉	8.50	20.00	黒灰色	B 4	94	石室内中層(1~14)
2	勾玉			暗灰色	B 4	126	
3	切子玉	15.50	20.00	濁透明	B 4 ?	112	完形
4	切子玉	16.00	17.00	濁透明	B 4	101	完形
5	切子玉	14.00	19.00	濁透明	B 4	107	完形
6	切子玉	11.50	20.50	濁透明	B 3	92	完形
7	切子玉	13.50	18.00	濁透明	B 4	96	完形

京都縦貫自動車道関係遺跡平成5年度発掘調査概要

8	切子玉	14.50	18.50	濁透明	B 4	97	完形
9	切子玉	15.00	16.50	濁透明	B 4	111	完形
10	切子玉	15.50	15.00	濁透明	B 4	114	完形
11	管玉(碧玉)	9.00	27.00	濃緑色	B 3	91	完形
12	管玉(碧玉)	7.50	25.00	濃緑色	B 3	89	完形
13	管玉(碧玉)	7.00	19.00	濃緑色	B 3	90	完形
14	管玉	8.00	8.50	白緑色	B 4	109	完形
15	土玉	4.00	4.10	濃灰色	A 1	1	B 1・B 2区周辺上層(15~98)
16	土玉	5.80	3.90	濃灰色	A 1	2	
17	土玉	6.10	5.20	濃灰色	A 1	3	
18	土玉	5.50	4.20	濃灰色	A 1	5	完形
19	土玉	5.20	4.60	濃灰色	A 1	6	
20	土玉	5.80	3.90	黒灰色	B 1	7	完形
21	土玉	5.40	4.30	黒灰色	B 1	8	完形
22	土玉	6.80	4.80	濃黒灰色	B 1	9	完形
23	土玉	6.60	5.30	黒色	B 1	10	完形
24	土玉	4.40	3.60	灰色	B 2	11	完形
25	土玉	5.30	3.60	濃灰色	B 2	12	
26	土玉	5.40	3.90	黒灰色	B 2	13	
27	土玉	6.50	5.00	黒灰色	B 2	14	完形
28	土玉	6.20	4.80	黒灰色	B 2	15	完形
29	土玉	4.50	3.65	灰色	B 2	16	
30	土玉	5.50	4.60	黒灰色	B 2	17	
31	土玉	4.50	3.60	灰色	B 2	18	完形
32	土玉	6.70	5.30	濃灰色	B 2	19	完形
33	土玉	6.00	4.45	黒灰色	B 2	20	完形
34	土玉	6.25	5.35	濃黒灰色	B 2	21	完形
35	土玉	4.35	4.00	濃灰色	B 2	22	
36	土玉	5.55	4.30	黒灰色	B 2	23	完形
37	土玉	5.10	3.30	黒灰色	B 2	24	完形
38	土玉	5.50	3.80	濃灰色	B 1	25	完形
39	土玉	6.35	5.30	黒灰色	B 1	26	完形
40	土玉	7.00	5.20	黒灰色	B 1	27	
41	土玉	6.50	3.20	黒灰色	B 1	28	
42	土玉	6.50	3.10	濃灰色	B 1	29	
43	土玉	6.05	5.30	黒灰色	B 1	30	完形
44	土玉	5.70	4.20	黒灰色	B 1	31	完形
45	土玉	6.50	4.50	濃灰色	B 1	32	完形
46	土玉	5.55	4.50	黒灰色	B 1	33	完形
47	土玉	3.80	4.50	濃灰色	B 1	34	
48	土玉	6.80	5.50	黒灰色	B 1	35	
49	土玉	5.30	4.65	黒灰色	B 1	36	
50	土玉	6.70	5.15	黒灰色	B 1	37	

51	土玉	5.15	4.50	黒灰色	B 1	38	完形
52	土玉	6.40	5.10	黒灰色	B 1	39	
53	土玉	6.00	3.80	濃灰色	B 2	40	完形
54	土玉	5.15	4.50	濃灰色	B 2	42	
55	土玉	5.90	4.70	濃灰色	B 2	44	完形
56	土玉	6.50	4.40	濃灰色	B 2	45	完形
57	土玉	6.40	4.40	濃灰色	B 2	46	完形
58	土玉	4.80	3.75	濃灰色	B 2	47	完形
59	土玉	6.00	4.60	濃灰色	B 2	48	
60	土玉	4.80	4.00	濃灰色	B 2	50	
61	土玉	4.70	3.40	黒灰色	B 2	51	完形
62	土玉	4.80	3.80	黒灰色	B 2	52	完形
63	土玉	7.00	5.20	黒灰色	B 2	53	完形
64	土玉	4.60	2.60	濃灰色	B 2	54	完形
65	土玉	5.80	3.80	黒灰色	B 2	55	完形
66	土玉	5.30	3.50	黒灰色	B 1	56	
67	土玉	6.70	5.20	黒灰色	B 1	57	
68	土玉	4.90	4.90	黒灰色	B 1	58	完形
69	土玉	6.15	3.70	濃灰色	B 1	59	完形
70	土玉	6.10	3.65	黒灰色	B 2	60	完形
71	土玉	3.90	2.85	濃灰色	B 2	61	完形
72	土玉	6.50	5.55	黒色	B 2	62	完形
73	土玉	4.00	3.50	濃灰色	B 1	63	完形
74	土玉	4.70	4.00	濃灰色	B 1	64	完形
75	土玉	5.85	4.55	濃灰色	B 1	65	
76	土玉	7.80	6.85	黒灰色	B 1	66	完形
77	土玉	4.70	4.10	黒灰色	B 1	67	完形
78	土玉	4.50	3.40	黒色	B 1	68	完形
79	土玉	4.40	3.10	濃灰色	B 1	69	完形
80	土玉	4.20	3.50	濃灰色	B 1	70	完形
81	土玉	4.65	3.90	濃灰色	B 1	71	完形
82	土玉	6.80	4.00	黒灰色	B 1	72	完形
83	土玉	6.90	5.00	黒灰色	B 1	73	完形
84	土玉	6.80	4.80	黒灰色	B 1	74	完形
85	土玉	6.55	5.00	黒灰色	B 1	75	完形
86	土玉	5.05	4.15	灰色	B 1	76	
87	土玉	6.60	5.70	黒色	B 1	77	完形
88	土玉	4.20	3.30	濃灰色	B 1	78	完形
89	土玉	6.40	4.70	黒灰色	B 1	79	完形
90	土玉	5.80	4.40	黒灰色	B 1	80	完形
91	土玉	5.75	4.50	濃灰色	B 1	81	完形
92	土玉	6.10	4.35	濃灰色	B 1	82	完形
93	土玉	8.80	6.70	灰色	B 1	83	
94	土玉	5.60	3.95	濃灰色	B 1	84	完形

京都縦貫自動車道関係遺跡平成5年度発掘調査概要

95	土玉	5.35	4.15	濃灰色	B 2	85	完形
96	土玉	6.50	4.50	濃灰色	B 2	86	完形
97	土玉	5.50	3.45	濃灰色	B 3	88	
98	土玉	4.80	3.60	灰色	A 1	128	B 1・B 2区周辺中層(98~170)
99	土玉	4.60	4.85	灰色	A 1	129	
100	土玉	6.75	5.00	黒灰色	B 2	130	完形
101	土玉	5.55	4.95	黒灰色	B 2	131	完形
102	土玉	5.50	4.35	黒灰色	B 2	132	完形
103	土玉	4.10	3.35	黒褐色	B 2	133	完形
104	土玉	5.70	4.85	黒灰色	B 2	134	完形
105	土玉	4.35	3.85	濃灰色	B 2	135	完形
106	土玉	5.20	4.15	濃灰色	B 2	137	完形
107	土玉	6.75	4.80	黒色	B 2	138	完形
108	土玉	5.25	3.50	濃灰色	B 2	139	
109	土玉	5.50	4.05	濃灰色	B 2	140	
110	土玉	6.00	4.35	黒灰色	B 2	141	
111	土玉	4.55	3.50	黒色	B 2	142	完形
112	土玉	5.75	4.40	黒灰色	B 2	143	
113	土玉	5.40	4.00	黒褐色	B 2	144	完形
114	土玉	5.20	4.20	濃灰色	B 2	145	
115	土玉	6.40	4.50	濃黒褐色	B 2	146	完形
116	土玉	4.90	4.00	黒褐色	B 2	147	完形
117	土玉	4.55	3.40	黒灰色	B 2	148	完形
118	土玉	5.55	4.35	黒灰色	B 2	149	完形
119	土玉	4.00	3.20	黒褐色	B 2	150	
120	土玉	5.40	4.45	黒褐色	B 2	151	完形
121	土玉	6.50	5.10	黒色	B 1	153	完形
122	土玉	5.00	3.85	黒灰色	B 1	154	完形
123	土玉	4.45	3.20	濃灰色	B 1	155	完形
124	土玉	6.75	4.60	黒色	B 1	157	完形
125	土玉	4.40	3.00	濃灰色	B 1	158	完形
126	土玉	6.45	4.85	濃黒褐色	B 1	159	完形
127	土玉	6.60	4.80	黒灰色	B 1	162	完形
128	土玉	4.10	3.20	灰色	B 1	163	完形
129	土玉	5.70	3.85	黒灰色	B 1	164	完形
130	土玉	6.75	5.60	黒色	B 1	165	完形
131	土玉	6.10	5.00	黒灰色	B 1	166	完形
132	土玉	5.90	4.60	黒色	B 1	167	完形
133	土玉	4.85	4.20	灰色	B 2	168	完形
134	土玉	4.60	3.85	黒灰色	B 2	169	完形
135	土玉	5.45	4.65	濃黒褐色	B 1	170	完形
136	土玉	6.40	5.40	濃灰色	B 1	171	完形
137	土玉	6.40	5.70	黒色	B 1	172	

138	土玉	5.80	4.10	濃灰色	B 1	174	
139	土玉	5.40	4.40	灰色	B 1	176	完形
140	土玉	6.90	4.85	黒色	B 1	177	完形
141	土玉	5.80	4.40	灰色	B 1	178	完形
142	土玉	4.95	3.60	濃灰色	B 1	179	完形
143	土玉	5.40	4.10	濃灰色	B 1	180	完形
144	土玉	5.15	4.25	黒灰色	B 1	181	完形
145	土玉	5.45	4.35	濃黒褐色	B 1	182	完形
146	土玉	6.00	4.25	濃灰色	B 1	184	完形
147	土玉	4.45	3.90	濃灰色	B 1	185	完形
148	土玉	6.00	4.60	灰色	B 1	186	完形
149	土玉	5.30	4.25	灰色	B 1	187	完形
150	土玉	5.30	4.00	黒灰色	B 1	188	完形
151	土玉	6.70	5.40	濃黒灰色	B 1	189	完形
152	土玉	6.60	4.80	濃黒褐色	B 1	190	完形
153	土玉	4.05	3.20	濃褐色	B 1	192	完形
154	土玉	5.20	4.10	黒褐色	B 1	193	完形
155	土玉	4.80	4.20	濃灰色	B 1	194	
156	土玉	7.20	5.20	黒色	B 2	195	完形
157	土玉	5.10	4.40	黒色	B 2	196	
158	土玉	6.80	5.55	黒色	B 2	197	完形
159	土玉	6.80	5.25	濃黒褐色	B 2	198	完形
160	土玉	6.40	4.90	濃黒褐色	B 2	199	完形
161	土玉	4.80	3.60	黒灰色	A 1	200	
162	土玉	6.55	5.20	濃黒褐色	B 1	203	完形
163	土玉	5.45	4.60	濃黒褐色	B 1	204	完形
164	土玉	3.56	4.30	灰色	B 1	205	
165	土玉	4.50	4.45	濃灰色	B 1	205	
166	土玉	4.55	4.35	濃黒褐色	B 2	206	
167	土玉	6.40	5.15	黒色	B 2	207	完形
168	土玉	4.15	3.20	黒褐色	B 2	208	
169	土玉	5.85	5.20	黒褐色	B 2	209	完形
170	土玉	4.60	3.80	灰色	B 1	173	完形
171	土玉	7.30	5.95	黒灰色	B 1	211	完形 B 1・B 2区 周辺下層(171~218)
172	土玉	5.20	3.90	黒灰色	B 1	212	完形
173	土玉	7.00	5.00	黒灰色	B 1	213	完形
174	土玉	4.35	3.80	暗灰色	B 1	215	完形
175	土玉	5.25	3.85	黒灰色	B 1	216	完形
176	土玉	6.70	5.00	黒灰色	B 1	217	完形
177	土玉	6.10	5.05	暗灰色	B 1	218	完形
178	土玉	6.30	5.60	黒灰色	B 1	219	完形
179	土玉	7.00	5.60	黒灰色	B 1	220	完形
180	土玉	4.80	3.70	黒灰色	B 1	222	

京都縦貫自動車道関係遺跡平成5年度発掘調査概要

181	土玉	5.50	4.40	黒灰色	B 1	223	完形
182	土玉	4.20	3.55	黒灰色	B 1	224	
183	土玉	6.00	4.70	黒灰色	B 1	225	完形
184	土玉	6.20	5.00	黒灰色	B 1	227	完形
185	土玉	4.30	3.55	暗灰色	B 1	228	
186	土玉	5.40	3.70	暗灰色	B 1	229	完形
187	土玉	4.50	3.10	黒灰色	B 1	230	
188	土玉	7.50	5.90	黒灰色	B 1	231	
189	土玉	5.00	4.50	黒灰色	B 1	232	完形
190	土玉	5.30	5.00	黒灰色	B 1	233	完形
191	土玉	4.00	3.45	黒灰色	A 1	234	
192	土玉	5.30	3.80	黒灰色	B 1	236	完形
193	土玉	6.60	4.80	黒灰色	B 1	237	完形
194	土玉	5.70	4.00	黒灰色	B 1	239	完形
195	土玉	4.60	3.80	暗灰色	B 1	240	完形
196	土玉	5.05	3.70	黒灰色	B 1	241	完形
197	土玉	5.00	4.15	黒灰色	B 1	242	完形
198	土玉	5.00	3.90	暗灰色	B 1	243	完形
199	土玉	4.20	3.80	暗灰色	A 1	244	完形
200	土玉	?	4.40	黒灰色	B 1	245	
201	土玉	4.50	3.70	黒灰色	B 1	246	完形
202	土玉	4.95	4.25	黒灰色	B 1	247	完形
203	土玉	5.00	3.75	暗灰色	B 1	248	完形
204	土玉	6.55	5.60	黒色	B 1	249	完形
205	土玉	6.75	5.00	黒灰色	B 1	250	完形
206	土玉	6.65	5.25	黒灰色	B 1	251	完形
207	土玉	6.10	4.60	暗灰色	B 1	252	完形
208	土玉	5.90	5.00	黒灰色	B 1	253	完形
209	土玉	6.70	4.85	黒灰色	B 1	254	完形
210	土玉	6.05	4.80	黒灰色	B 1	255	完形
211	土玉	6.30	4.60	黒灰色	B 1	256	完形
212	土玉	6.05	5.00	黒灰色	B 1	257	完形
213	土玉	6.20	5.10	黒灰色	B 1	258	完形
214	土玉	6.80	5.10	黒灰色	B 1	259	完形
215	土玉	6.15	5.20	暗灰色	B 1	260	完形
216	土玉	4.20	3.40	暗灰色	B 1	261	
217	土玉	6.20	4.00	黒灰色	B 1	210	完形
218	土玉	5.90	5.60	黒灰色	B 1	235	完形
219	土玉	7.30	5.05	黒灰色	A 2	266	完形 B 1・B 2 区周 辺最下層(219~296)
220	土玉	6.20	4.90	暗灰色	B 2	270	完形
221	土玉	6.20	4.90	暗灰色	B 2	271	完形
222	土玉	6.40	4.80	暗灰色	B 2	272	溝らしき痕あり
223	土玉	6.00	4.70	暗灰色	B 2	273	完形



224	土玉	5.90	4.40	暗灰色	B 2	274	完形
225	土玉	5.90	4.40	暗灰色	B 2	276	
226	土玉	6.10	4.80	暗灰色	B 2	277	完形
227	土玉	6.75	5.00	暗灰色	B 2	279	完形
228	土玉	4.50	3.60	暗灰色	B 2	280	完形
229	土玉	6.10	4.50	暗灰色	B 1	281	完形
230	土玉	6.00	4.60	暗灰色	B 1	282	
231	土玉	7.00	5.60	暗灰色	B 1	283	完形
232	土玉	6.70	5.10	暗灰色	B 1	284	完形
233	土玉	6.70	?	暗灰色	B 1	286	
234	土玉	7.10	5.80	黒灰色	B 1	287	完形
235	土玉	5.50	4.90	暗灰色	B 1	288	完形
236	土玉	4.70	4.10	暗灰色	B 1	289	
237	土玉	6.10	4.50	暗灰色	B 1	290	
238	土玉	4.70	4.10	暗灰色	B 1	291	完形
239	土玉	5.60	3.90	暗灰色	B 1	292	完形
240	土玉	5.50	3.70	暗灰色	B 1	293	完形
241	土玉	6.00	5.00	暗灰色	B 1	294	
242	土玉	4.90	4.00	暗灰色	B 1	296	完形
243	土玉	5.40	4.40	暗灰色	B 1	298	完形
244	土玉	6.50	4.80	暗灰色	B 1	299	完形
245	土玉	5.80	4.80	暗灰色	B 1	300	完形
246	土玉	5.80	4.20	暗灰色	B 1	305	完形
247	土玉	6.20	?	暗灰色	B 1	307	
248	土玉	6.95	5.45	暗灰色	B 1	308	完形
249	土玉	5.30	4.60	黒灰色	B 1	309	
250	土玉	6.20	5.20	暗灰色	B 1	310	完形
251	土玉	6.60	5.10	黒灰色	B 1	311	完形
252	土玉	6.80	4.80	暗灰色	B 1	312	完形
253	土玉	5.70	5.10	暗灰色	B 1	313	完形
254	土玉	6.30	5.05	暗灰色	B 1	315	完形
255	土玉	6.40	4.80	暗灰色	B 1	317	完形
256	土玉	5.60	4.50	暗灰色	B 1	319	
257	土玉	6.70	5.10	黒灰色	B 1	320	完形
258	土玉	6.70	?	黒灰色	B 1	321	
259	土玉	5.95	4.80	暗灰色	B 1	322	完形
260	土玉	7.20	5.50	暗灰色	B 1	323	完形
261	土玉	5.40	4.40	暗灰色	B 1	324	
262	土玉	6.75	5.00	暗灰色	B 1	325	完形
263	土玉	7.00	5.70	暗灰色	B 1	326	完形
264	土玉	6.40	?	暗灰色	B 1	327	
265	土玉	5.45	3.90	暗灰色	B 1	328	完形
266	土玉	6.50	5.10	暗灰色	B 1	330	完形
267	土玉	6.50	5.00	黒灰色	B 1	331	

京都縦貫自動車道関係遺跡平成5年度発掘調査概要

268	土玉	7.00	5.65	暗灰色	B 1	333	完形
269	土玉	6.70	4.60	暗灰色	B 1	334	完形
270	土玉	5.40	4.60	暗灰色	B 1	335	未貫通孔
271	土玉	6.60	5.60	黒灰色	B 1	337	完形
272	土玉	6.10	4.50	暗灰色	B 1	338	完形
273	土玉	7.40	5.25	暗灰色	B 1	339	完形
274	土玉	6.50	5.20	暗灰色	B 1	340	完形
275	土玉	6.40	4.80	暗灰褐色	B 1	341	
276	土玉	5.70	4.40	暗灰色	B 1	343	
277	土玉	6.40	5.30	暗灰色	B 1	344	完形
278	土玉	6.70	5.30	暗灰色	B 1	345	
279	土玉	6.90	6.00	暗灰色	B 1	346	完形 溝痕
280	土玉	6.20	5.50	黒灰色	B 1	347	完形
281	土玉	6.20	4.75	暗灰色	B 1	350	
282	土玉	6.30	5.30	暗灰色	B 3	351	石室内最々下層 完形
283	土玉	5.20	4.10	暗灰色	B 1	352	完形 溝らしき痕
284	土玉	5.50	4.95	暗灰色	B 1	353	完形
285	土玉	6.00	4.40	暗灰色	B 1	354	完形
286	土玉	6.20	5.10	黒灰色	B 1	355	完形
287	土玉	6.30	4.80	黒灰色	B 1	356	完形
288	土玉	5.70	4.70	暗灰色	B 1	357	完形
289	土玉	5.60	4.10	暗灰色	B 1	358	完形
290	土玉	4.70	3.80	黒灰色	B 1	359	完形
291	土玉	4.80	3.50	暗灰色	B 1	360	完形
292	土玉	4.80	3.80	暗灰色	B 1	361	完形
293	土玉	5.70	4.30	暗灰色	B 1	362	
294	土玉	6.60	5.40	暗灰色	B 1	363	
295	土玉	9.00	7.00	暗灰色	B 1	364	南東区 暗黄褐色上層
296	土玉	9.00	?	暗灰色	B 1	365	南東区 暗黄褐色上層
297	土玉	6.95	5.70	黒灰色	B 1 or B 2	1	完形
298	土玉	7.30	6.25	黒灰色	B 1 or B 2	2	完形
299	土玉	6.95	5.45	黒灰色	B 1 or B 2	3	完形
300	土玉	7.20弱	5.05	黒灰色	B 1 or B 2	4	完形
301	土玉	5.25	4.00	暗灰色	B 1 or B 2	5	完形
302	土玉	6.35	4.60	黒灰色	B 1 or B 2	6	完形
303	土玉	6.85	6.00	黒灰色	B 1 or B 2	7	完形
304	土玉	6.50	5.15	黒灰色	B 1 or B 2	8	完形
305	土玉	6.90	5.10	黒灰色	B 1 or B 2	9	完形
306	土玉	6.20	4.40	黒灰色	B 1 or B 2	10	完形
307	土玉	6.85	5.60	黒灰色	B 1 or B 2	11	完形
308	土玉	6.60	5.40	黒灰色	B 1 or B 2	12	完形
309	土玉	6.00	4.70	黒灰色	B 1 or B 2	13	完形
310	土玉	5.90	5.10	暗灰色	B 1 or B 2	14	完形
311	土玉	5.90	4.80	黒灰色	B 1 or B 2	15	完形

312	土玉	6.25	5.15	暗灰色	B 1 or B 2	16	完形
313	土玉	5.85	5.10	黒灰色	B 1 or B 2	17	完形
314	土玉	5.80	4.25	暗灰色	B 1 or B 2	18	
315	土玉	5.75	4.60	黒灰色	B 1 or B 2	19	完形
316	土玉	5.95	4.10	黒灰色	B 1 or B 2	20	完形
317	土玉	5.70	5.15	黒灰色	B 1 or B 2	21	完形
318	土玉	5.60	5.00	黒灰色	B 1 or B 2	22	完形
319	土玉	5.70	3.80	黒色	B 1 or B 2	23	完形
320	土玉	5.40	4.60	黒灰色	B 1 or B 2	24	完形
321	土玉	6.00	5.05	暗灰色	B 1 or B 2	25	
322	土玉	6.00	4.70	暗灰色	B 1 or B 2	26	
323	土玉	5.50	4.70	黒灰色	B 1 or B 2	27	完形
324	土玉	5.90	4.55	暗灰色	B 1 or B 2	28	完形
325	土玉	6.40	4.75	黒灰色	B 1 or B 2	29	完形
326	土玉	5.45	4.40	黒灰色	B 1 or B 2	30	完形
327	土玉	5.15	3.60	黒灰色	B 1 or B 2	31	完形
328	土玉	4.75	3.70	黒灰色	B 1 or B 2	32	完形
329	土玉	4.40	3.20	暗灰色	B 1 or B 2	33	完形
330	土玉	5.95	4.70	黒灰色	B 1 or B 2	34	完形
331	土玉	6.65	4.60	黒灰色	B 1 or B 2	35	
332	土玉	5.80	4.20	黒灰色	B 1 or B 2	36	
333	土玉	7.00	5.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	1	完形
334	土玉	6.00	4.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	2	
335	土玉	6.00	5.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	3	完形
336	土玉	6.00	5.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	4	完形
337	土玉	6.50	5.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	5	
338	土玉	6.00	4.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	6	完形
339	土玉	5.00	4.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	7	完形
340	土玉	6.00	4.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	8	完形
341	土玉	7.50	5.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	9	完形
342	土玉	6.00	4.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	10	完形
343	土玉	7.00	6.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	11	完形
344	土玉	7.00	6.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	12	完形
345	土玉	8.00	6.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	13	完形
346	土玉	6.00	4.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	14	完形
347	土玉	5.00	4.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	15	完形
348	土玉	4.50	4.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	16	完形
349	土玉	7.50	5.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	17	完形
350	土玉	5.50	5.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	18	完形
351	土玉	6.50	6.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	19	完形
352	土玉	6.00	5.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	20	完形
353	土玉	6.00	5.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	21	完形
354	土玉	6.00	5.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	22	完形
355	土玉	6.00	5.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	23	完形

京都縦貫自動車道関係遺跡平成5年度発掘調査概要

356	土玉	5.50	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	24	完形
357	土玉	6.50	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	25	完形
358	土玉	7.00	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	26	完形
359	土玉	6.50	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	27	完形
360	土玉	5.50	5.50	黒灰色	B1・B2区採集	28	完形
361	土玉	7.00	5.50	黒灰色	B1・B2区採集	29	完形
362	土玉	6.50	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	30	完形
363	土玉	7.50	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	31	完形
364	土玉	7.00	6.50	黒灰色	B1・B2区採集	32	完形
365	土玉	6.00	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	33	完形
366	土玉	6.00	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	34	
367	土玉	5.00	3.00	黒灰色	B1・B2区採集	35	完形
368	土玉	5.50	4.00	黒灰色	B1・B2区採集	36	完形
369	土玉	7.00	5.50	黒灰色	B1・B2区採集	37	完形
370	土玉	5.00	4.00	黒灰色	B1・B2区採集	38	完形
371	土玉	6.00	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	39	
372	土玉	7.00	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	40	完形
373	土玉	6.00	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	41	完形
374	土玉	5.50	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	42	完形
375	土玉	6.00	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	43	完形
376	土玉	5.50	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	44	
377	土玉	6.00	4.00	黒灰色	B1・B2区採集	45	
378	土玉	6.50	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	46	完形
379	土玉	6.00	5.50	黒灰色	B1・B2区採集	47	完形
380	土玉	6.00	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	48	完形
381	土玉	7.00	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	49	
382	土玉	5.50	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	50	完形
383	土玉	4.50	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	51	完形
384	土玉	5.00	4.00	黒灰色	B1・B2区採集	52	完形
385	土玉	5.00	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	53	完形
386	土玉	5.00	3.00	黒灰色	B1・B2区採集	54	完形
387	土玉	6.00	3.50	黒灰色	B1・B2区採集	55	完形
388	土玉	6.50	4.00	黒灰色	B1・B2区採集	56	
389	土玉	5.00	3.50	黒灰色	B1・B2区採集	57	完形
390	土玉	5.50	3.50	黒灰色	B1・B2区採集	58	完形
391	土玉	4.50	3.50	黒灰色	B1・B2区採集	59	完形
392	土玉	4.50	3.50	黒灰色	B1・B2区採集	60	完形
393	土玉	6.50	6.00	黒灰色	B1・B2区採集	61	完形
394	土玉	5.00	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	62	完形
395	土玉	6.00	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	63	完形
396	土玉	7.00	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	64	完形
397	土玉	5.50	4.50	黒灰色	B1・B2区採集	65	完形
398	土玉	7.00	5.50	黒灰色	B1・B2区採集	66	完形
399	土玉	6.00	5.00	黒灰色	B1・B2区採集	67	完形

400	土玉	5.00	4.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	68	
401	土玉	4.00	4.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	69	完形
402	土玉	4.50	3.50	黒色	B 1・B 2区採集	70	完形
403	土玉	6.00	5.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	71	完形
404	土玉	5.50	4.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	72	完形
405	土玉	6.00	4.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	73	完形
406	土玉	4.50	4.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	74	
407	土玉	5.50	4.50	黒灰色	B 1・B 2区採集	75	完形
408	土玉	6.00	5.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	76	完形
409	土玉	7.00	5.00	黒灰色	B 1・B 2区採集		完形
410	土玉	6.00	4.50	黒灰色	B 1・B 2区採集		完形
411	土玉	6.50	5.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	351	完形
412	土玉	6.00	4.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	351	
413	土玉	5.00	5.00	黒灰色	B 1・B 2区採集	351	
414	土玉	5.00	4.50	黒灰色	B 1・B 2区採集		
415	土玉	5.50	3.00	黒灰色	B 1・B 2区採集		
416	土玉	5.10	3.90	灰色	B 1・B 2区採集	262	
417	土玉	8.40	7.00	灰色	B 1・B 2区採集	93	
418	土玉	8.50	8.00	黒灰色	B 4	95	完形
419	土玉	9.50	7.50	黒灰色	B 4	98	完形
420	土玉	9.00	7.00	黒灰色	B 4	99	完形
421	土玉	10.70	8.50	灰色	B 4	100	
422	土玉	11.00	9.00	黒灰色	B 4	102	完形
423	土玉	8.90	6.75	灰色	B 4	104	他破折片
424	土玉	10.00	8.50	黒灰色	B 4	106	完形
425	土玉	7.20	6.65	濃灰色	B 4	108	
426	土玉	10.00	12.50	黒灰色	B 4	110	完形
427	土玉	9.00	7.00	濃灰色	B 4	113	完形
428	土玉	8.00	7.50	黒灰色	B 4	115	完形
429	土玉	9.60	7.50	灰色	B 4	47	
430	土玉	9.00	7.50	黒灰色	B 4	118	完形
431	土玉	8.50	8.00	黒灰色	B 4	119	完形
432	土玉	9.00	8.50	黒灰色	B 4	120	完形
433	土玉	9.00	8.00	黒灰色	B 4	121	完形
434	土玉	10.00	8.00	黒灰色	B 4	122	完形
435	土玉	10.00	8.50	濃灰色	B 4	123	完形
436	土玉	10.00	7.00	黒灰色	B 4	124	完形
437	土玉	9.50	6.50	黒灰色	B 4	116	完形
438	土玉	9.50	7.00	黒灰色	B 4	364	
439	土玉	9.50	5.50	黒灰色	B 4	365	

## (4) ジンド古墳

### 1. ジンド古墳の立地

ジンド古墳の位置する内久井町、金河内町は綾部市北部にあり、西方の福知山市に向かう由良川に北側から流れ込む犀川の最上流域である。犀川は、綾部市中部の物部町以北の上流域では大きく蛇行し、かつ葉脈状に支流をのぼし、多くの矮小な谷地形を形成する。ジンド古墳は、犀川本流の最上流にある谷地形の左岸の尾根状の小丘陵先端部に位置する(神宮谷4号墳の項、第64図参照)。犀川上流域の小支流によって分断され、舌状に本流に向かってのびる小丘陵が形成される。これらの尾根先端部には、1基から数基程度の小規模な後期古墳が点在している。付近には鶏塚古墳や山尾古墳など終末期古墳もあり、古墳時代後期後半から終末期にかけての造墓活動を続けた集団の存在を知ることができる。

### 2. 調査概要

今回調査した地点は、すでに横穴式石室を主体部として持つ古墳として確認されていたジンド古墳(A地点)のほかに、古墳状隆起B・D地点と丘陵上の平坦面(C地点)である。B・C・D地点では、細長いトレンチを設定し、遺構の確認と遺物の検出に努めたが、顕著な遺構は少なく、今回の概要報告もジンド古墳について主に述べていきたい(第77図)。調査期間は、平成5年5月12日から10月14日までである。また、調査面積は、試掘調査も含めて約720㎡である。

#### (1) ジンド古墳の墳丘構造と石室

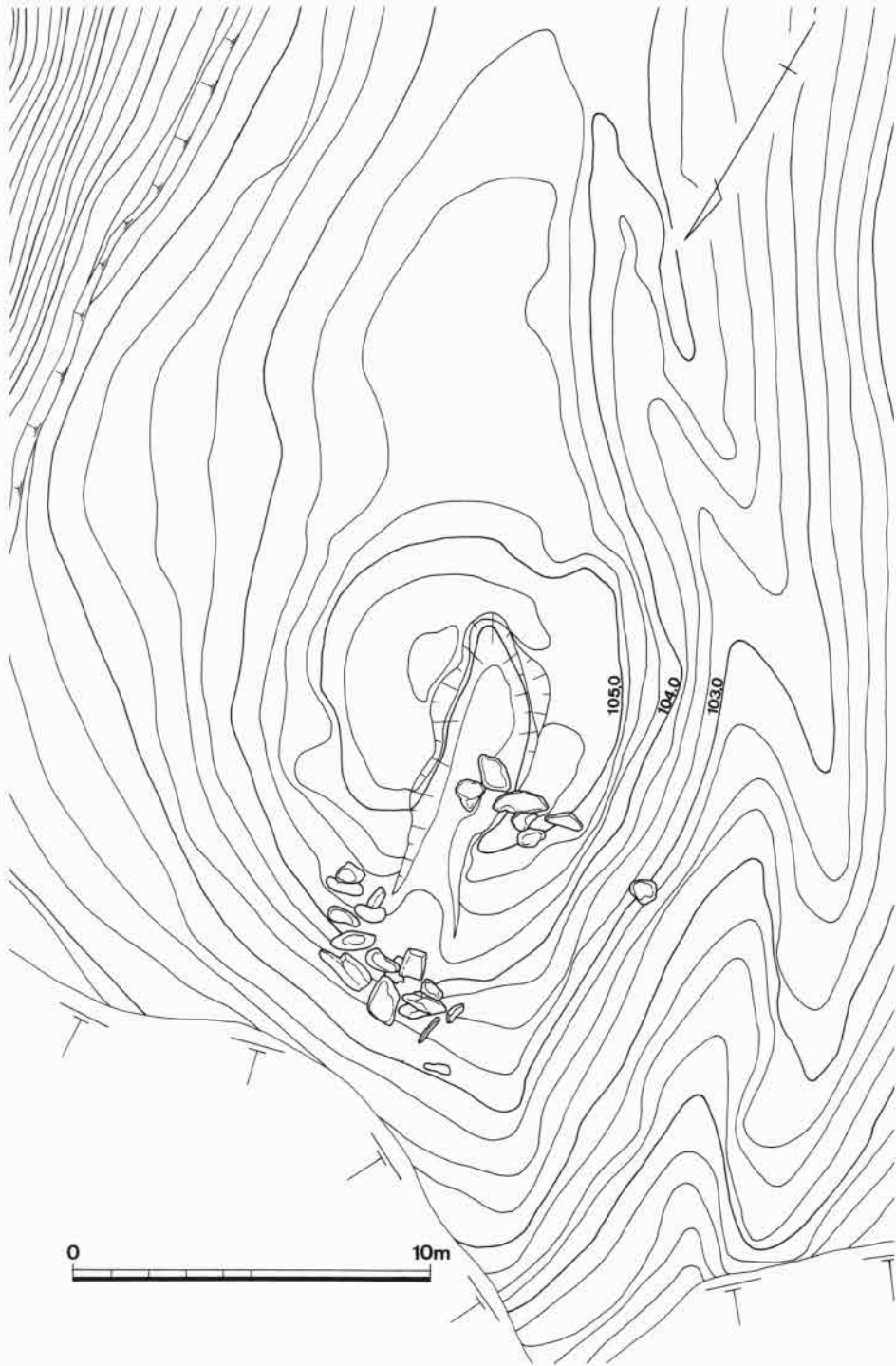
##### a. 墳丘

A地点のジンド古墳は、古墳時代後期に造られた横穴式石室を持つ古墳であることが確認されていた。調査前には、墳丘中央部に石室の石材が周辺に散乱しており、後世、石材が再利用のために抜き取られたものと考えられた。この石材の抜き取り作業に伴う掘り込みが墳丘頂部から北側に向かって開いており、横穴式石室のおよその形態と開口方向を示すものと推定された(第78図)。このため、墳丘頂部から北に向かって長方形のトレンチを設定し、石室の検出を行った(第79図)。また、墳丘部の調査は、石室を検出した後に、玄室中軸線を南に延長する基準線(CC')と玄室中軸線の中点を通り、それと直交する基準線(AA'・BB')を設定し、墳丘を断ち割った。最終的には、基準線によって四分割した墳丘の四分の三区画の墳丘を除去し、地山面を平面的に検出した。

墳丘は、内久井町と金河内町の地境溝によって、西側墳丘部分が一部掘削されており、西側墳丘盛り土の大半が失われていた。墳丘の東半分には幅2mほどの浅い「U」字状の掘り込みの周溝を検出した(第79図)。尾根筋が切断される南側では、周溝の幅は3mに達

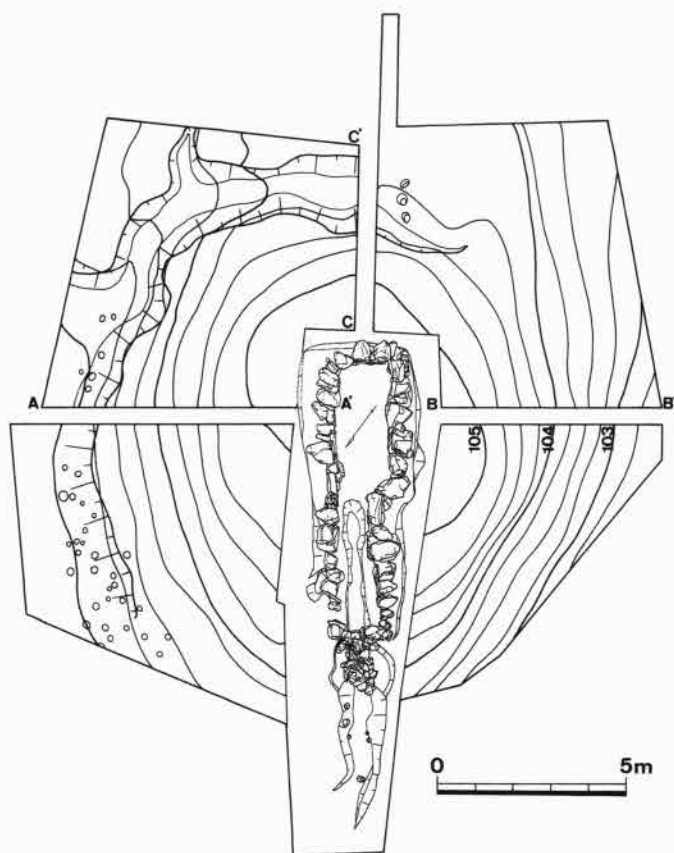


第77図 調査地周辺地形とトレンチ配置図(1/2,000)



第78図 ジンド古墳(A地区)調査前測量図(1/200)



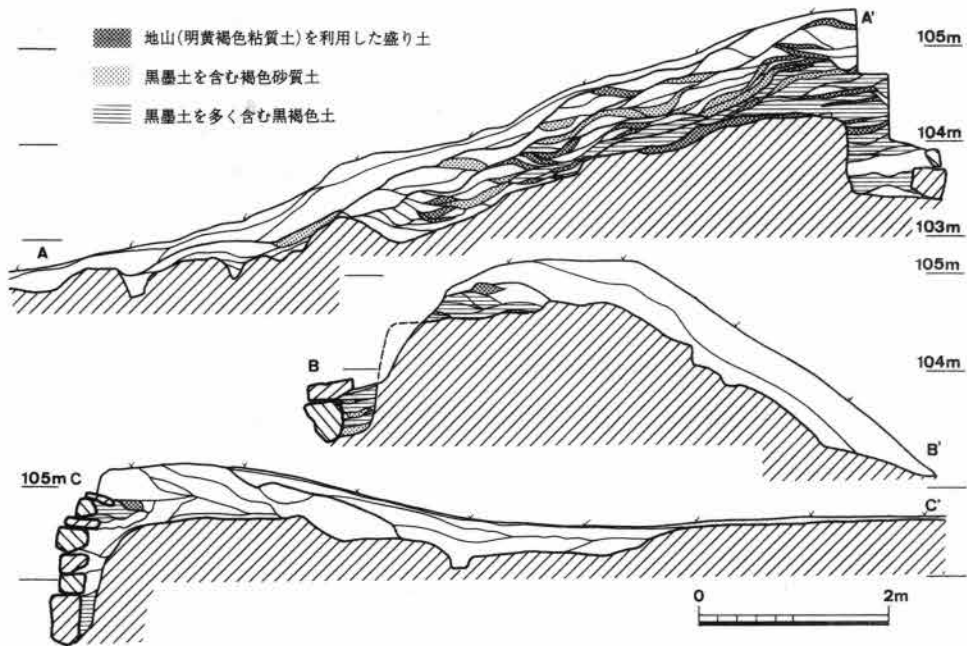


第79図 ジンド古墳(A地区)墳丘測量図(1/200)

したが、北側では自然丘陵の斜面傾斜が急なため、墳丘外側の周溝掘形は認められず、「L」字状に削り込むだけで墳丘を画する。溝内には、直径10cm前後の杭穴が認められた(第79図)。

墳丘東側の断ち割り(AA')の断面土層観察によると、土層は主に黄褐色砂質土を主体として、黒墨を多く含んだ黒褐色土層、黒墨粒子を含む茶褐色砂質土層、地山の明褐色砂質土層を利用した土層に分けられる(第80図)。2種類の異なる

土質の土を交互にほぼ水平に堆積させる工程を何回かに分けて繰り返している。流出した盛り土を除き、原位置を保った盛り土層の最上面傾斜角度は $22^{\circ}$ 内外であり、これをやや上回る角度で墳丘斜面が形成されていたと考えられる。また、石室中軸線から7.1mの地点まで盛り土層が堆積しており、地山の傾斜変換点までを墳丘部と見て取れば、直径16m前後の円墳と考えられる。墓壙は、玄室部分では地山面を標高104.3~104.6m付近から掘り込み、103.4m付近まで石室の形態に合わせて掘削される。AA'断面では、右壁側墓壙掘形は壁体基底裏面から0.6mほど離れているが、BB'断面では、左壁側墓壙掘形は基底石から0.3mほどしか離れてはいない。石室壁体裏込めは、ともに地山土や黒墨土を利用した縞状の堆積が認められた。ただ、CC'断面では石室奥壁裏側の墓壙掘形内の裏込め土は、縞状の堆積とはならず、締まりのない埋土が堆積していた(第80図)。



第80図 ジンド古墳墳丘断面図(1/80)

#### b. 石室

ジンド古墳の主体部は、北西方向に開口する左片袖式の横穴式石室である(第81図)。奥壁から見て右側の石室石材が石室上半部まで遺存していたが、そのほかの石材は、過去の採石によってほとんど原位置を保ってはいなかった。玄室中軸線は、磁北を基準として $38^{\circ}20'$ 西に振る。石室の全長は7.15m、玄室長は3.07m、玄室幅は奥壁と接するところで1.60m、中央部で1.54m、玄室比(玄室長/最大玄室幅)、約1.92になる。羨道長4.08m、羨門幅は玄門で1.0m、羨門で1.1m、最も狭いところで0.86mほどになる。

奥壁は、幅0.8m・厚さ0.3mほどのほぼ同じ大きさの石材を2つ立てならべて基底石を構成する。二段目より上は、板状の石材を小口積みに重ねる。壁体上部は、現位置を留めず、やや後方(南側)に移動しているようであり、元来、垂直に近く積み上げられていたものと思われる。奥壁では水平方向に目地が通るが、左右の側壁では基底石のサイズが様ではなく、目地もそろわず、やや乱雑に積まれる。奥壁と右側壁の隅角は、明瞭な狭角をなすが、遺存した最も上の一石はこの角を渡るように置かれている。両側壁の基底石は、玄室のそれよりも小振りで、平たい石材を乱雑に小口積みにする。羨道部床面は、墓道に向かってやや傾斜しており、中央に排水溝が走る。

### c. 閉塞石

羨門部に位置していた集石遺構を閉塞石とみなした(第81図)。円形の掘り込みを行った後に小児頭大の円礫を積み上げる。後世の石取り作業によって高さ50cm余りしか遺存しない。積石の羨道側は、面を意識してつくられ、途中からの積み直しも認められない。墓道部に10cmほどの埋土が堆積した後に円礫が積まれることから、最終埋葬時に基底部から積み直されたものと判断できる。

### d. 墓道部

墓道は、長さ3.5m・幅1.5m内外の掘り込みで、幅0.5m内外の底面をもつ(第81図)。埋土は、下層の暗褐色砂質土と上層の黄褐色砂質土に分かれ、下層の上に閉塞石が遺存したことから、墓道は最終埋葬時以前に掘りこまれたものが埋め戻されず、使用され続けたと考えられる。墓道床面両端には6つの杭跡が検出された。墓標のようなものを立て、結界としたのであろうか。

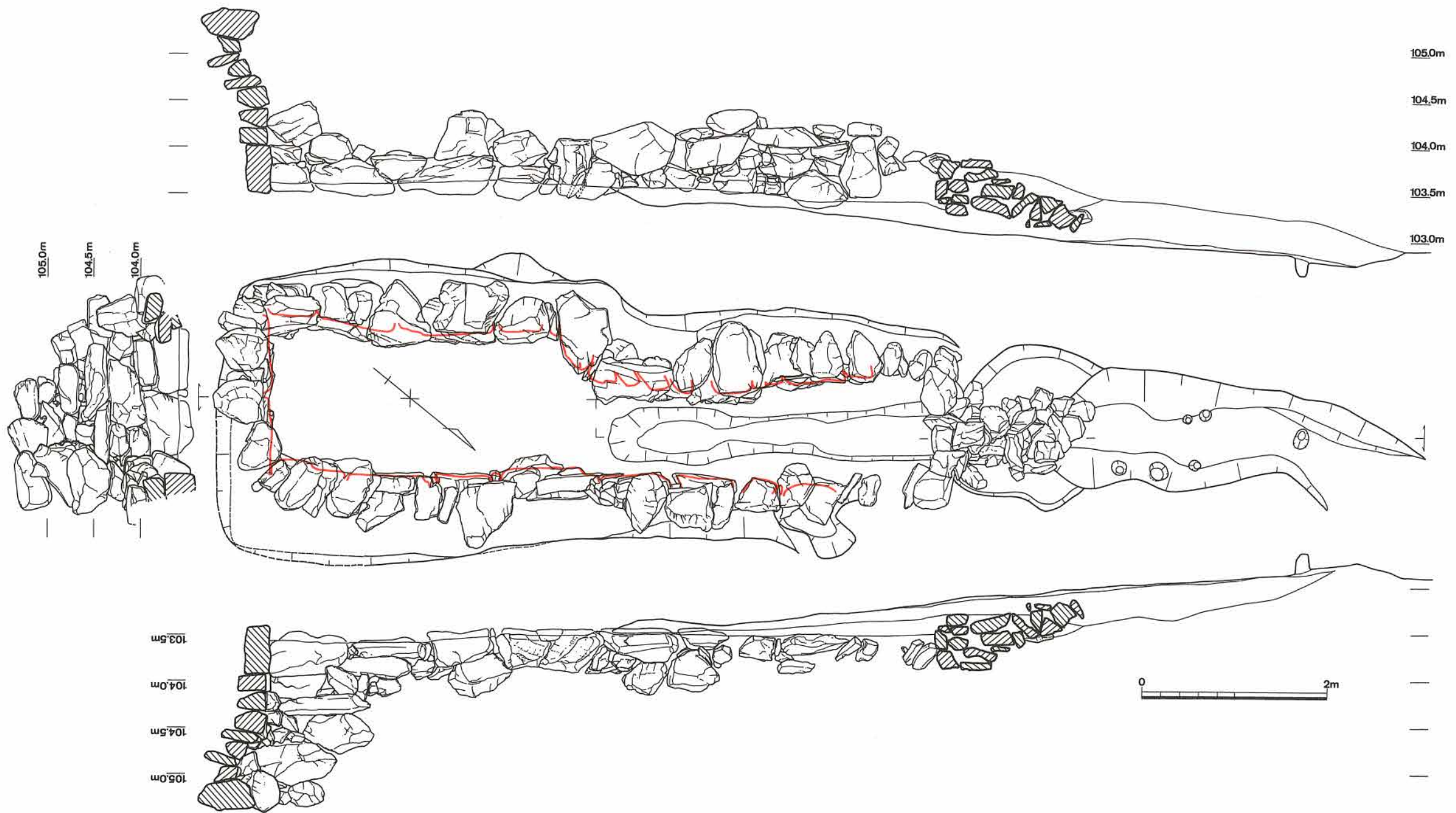
#### (2)遺物の出土状況(第82～85図)

石室内から出土した遺物は、土器や鉄器など、総数140点以上に達する。遺物の取り上げ、遺構の実測に際して、便宜的に玄室中軸線とその中点から南北に1m間隔で地区割り線を設定し、奥壁から見て石室右側をA区、左側をB区、奥壁から1区、2区とした(第83図)。

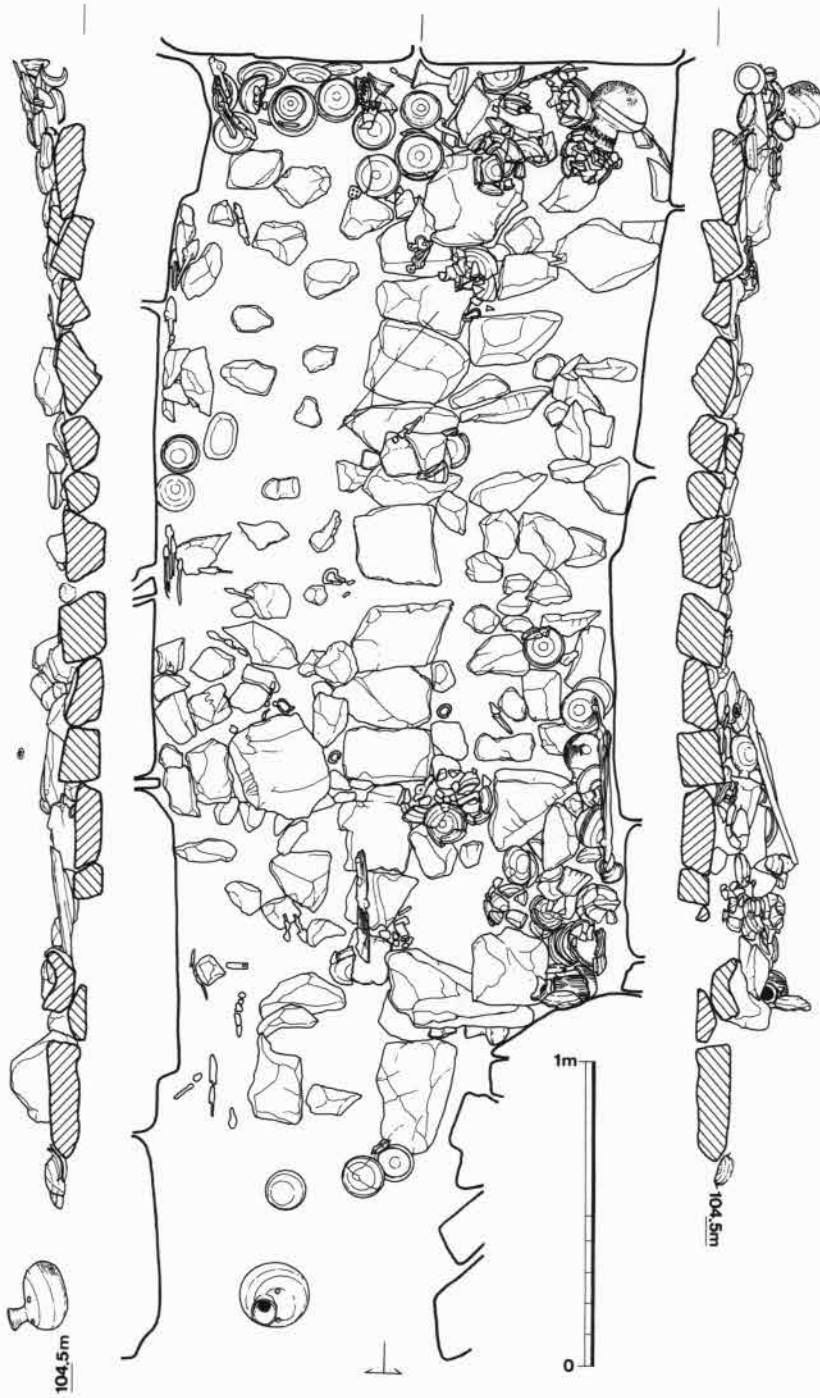
奥壁近辺の遺物は、主にA1区、B1区から出土している。

A1区には、須恵器杯、杯蓋と壺鐙、刀子などの遺物があり、杯蓋(17)、杯身(34・41)が奥壁に立てかけられた状態で出土した(第83図)。その周囲にも杯身・杯蓋が配置されており、杯蓋(12・29)の上で鐙(54)が出土した。B1区では、須恵器杯身・杯蓋のほか、長頸壺、高杯、鉄鏃、轡などが出土した。特に、長頸壺(79)、口縁部付近では杯蓋・杯身が重なって出土し、雑然と積み上げられた状態を示していた。B1区東側の奥壁中央部には棺台と考えられる二つの石の上に杯身(39・63)などが置かれていたが、この石の下にはA1区奥壁東側の鐙とセットとなると思われる轡(52)が出土した。このため、A1区で検出された土器群や馬具が副葬された後に、B1区(奥壁西側)に須恵器の一群を集積したことになろう。

左袖部の遺物は、主にB3区、B4区から出土している。須恵器杯身・杯蓋のほかに、高杯、甗、台付長頸壺、提瓶、直刀、鐙がある。杯蓋(5・13・18)、杯身(49・54)など、重ねられて出土し、提瓶や甗も雑然と積み上げられた状況で出土している。その上には、抜身の直刀を二振り、鉄刀4の茎の上に鉄刀2の切っ先を重ねるようにして置かれていた。



第81図 ジンド古墳石室及び墓道実測図



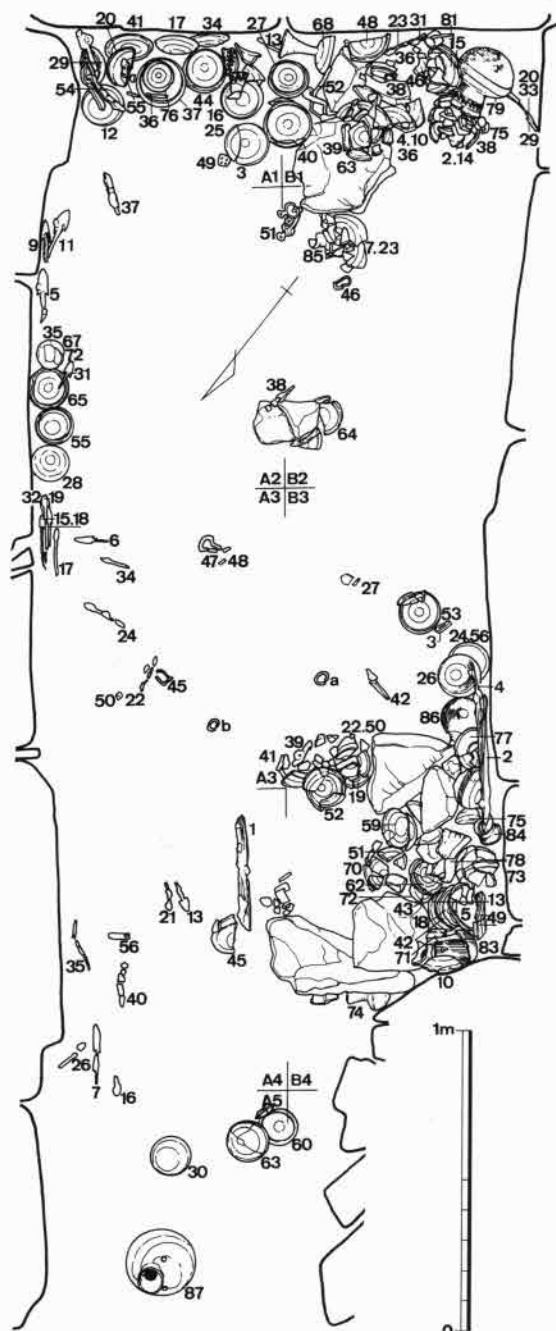
第82図 ジンド古墳石室内遺物出土状況図(1/25)

左袖部の遺物集積の周囲には玄室床面からやや浮いた状態で角礫が置かれており、副葬品の集積に際して、崩れないよう囲うために、棺台石が再利用されたものと見られる。杯蓋

10は、B 1 区と B 4 区の集積された須恵器群のなかの破片が接合したもので、この二つの集積行為が比較的近い時期に行われたことを示唆する。つまり、二つの遺物群は追葬に際して、それ以前の葬送における副葬品の片付けられた結果の集積と考えるのが妥当である。

B 3 区・B 4 区にかけて集積された遺物群の周辺には、さらに、杯蓋(19・22・24・26)、杯身(50・52・53・56)があり、床面に密着して出土した。このほか、玄室右側壁部分にも杯蓋(28)、杯身(55・65)、無頸壺(67)があり、これを挟むようにして鉄鏃群が出土している。A 2 区に位置するものは広根鏃であり、A 3 区に位置するものは尖根の長頸鏃を主体としている。これらの遺物も床面に密着した状態で出土しており、副葬後の移動がなかったものと考えても差し支えない。

また、羨道部の遺物は、玄門部からやや北側、平瓶(87)と杯蓋(30)、杯身(60・63)が出土している。羨道床面部分に接しており、鉄刀1及び耳環 a・b とともに最終埋葬に伴うものと考えられる。以上、三者の遺物群は集積された状況はなく、副葬された原位置をとどめているものと



第83図 遺物出土状況対応図(番号は図版番号に対応)

考えられる。

玄室の床面には、玄室中軸線に平行して、石列が検出され、その左右に棺台と思われる拳大の石が配列されていた。

(3)出土遺物

a. 須恵器(第86~90図1~79・81・83~87)

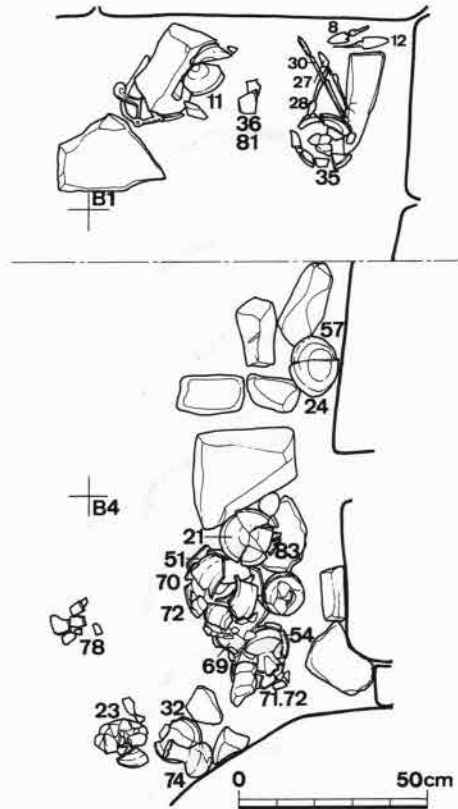
ジンド古墳から出土した須恵器は、石室内では個体数として、85点以上を数える。その構成は、須恵器杯蓋32点、杯身34点、無蓋高杯2点、甕4点、台付長頸壺3点(蓋1点)、無頸壺、短頸壺、広口壺、直口壺各1点、提瓶4点である。図版の杯蓋・杯身実測図の配列は、口径を基準としている。器体が八分の一以上残存しているものについて図化した。その多くは完形に近いものである。法量・胎土・色調・出土位置などは、付表7を参照されたい。

杯蓋(1~32)

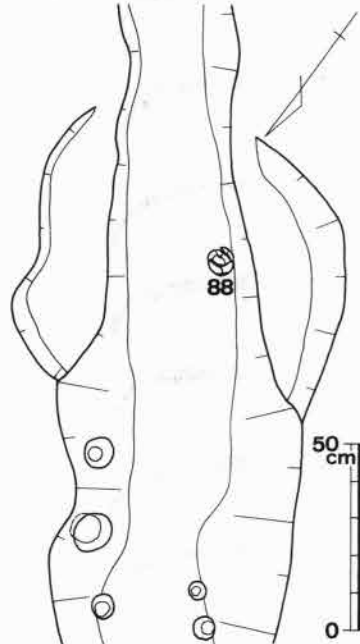
玄室内及び墳丘流出土から出土したものは、個体数にして32点以上である。その大半が玄室内から出土しているが、一部に墳丘流出土内から出土した細片と接合する例がある。各個体の微細な形態差や胎土・焼成によって細分類することは可能であるが、一応口径及び断面の形態の特徴から次の3類に大別する。

a類 口径が大きく、口縁部と天井部の間に強い屈曲がなく、全体として丸みをもつ。口縁端部は垂直にならず、水平線に斜交する(1~3・7~10・20・22・23)。

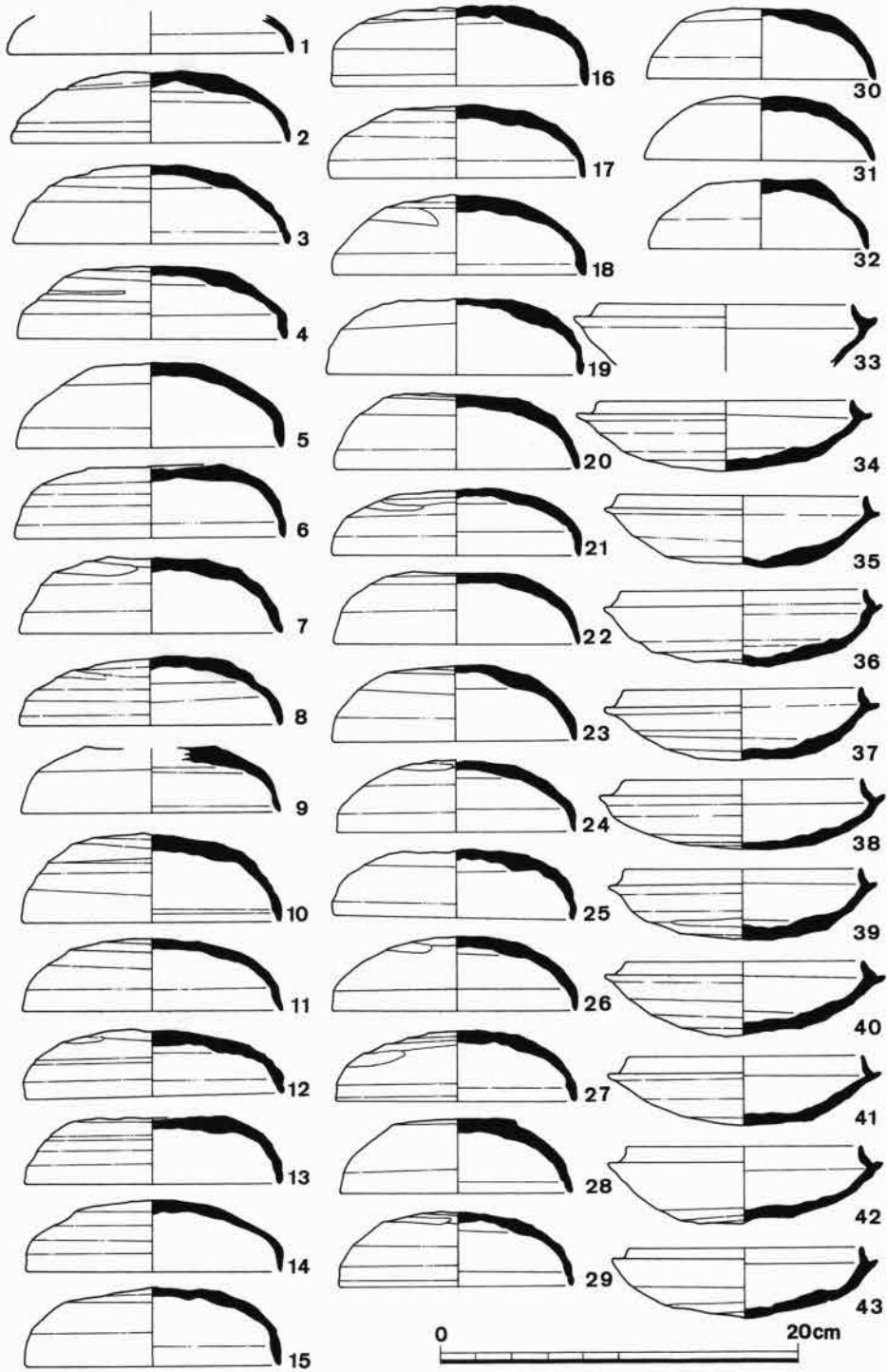
b類 口縁部と天井部の間に強い屈曲をも



第84図 奥壁左隅・左袖部遺物出土状況図(1/20)



第85図 墓道部遺物出土状況図



第86図 出土土器実測図(1) 蓋杯



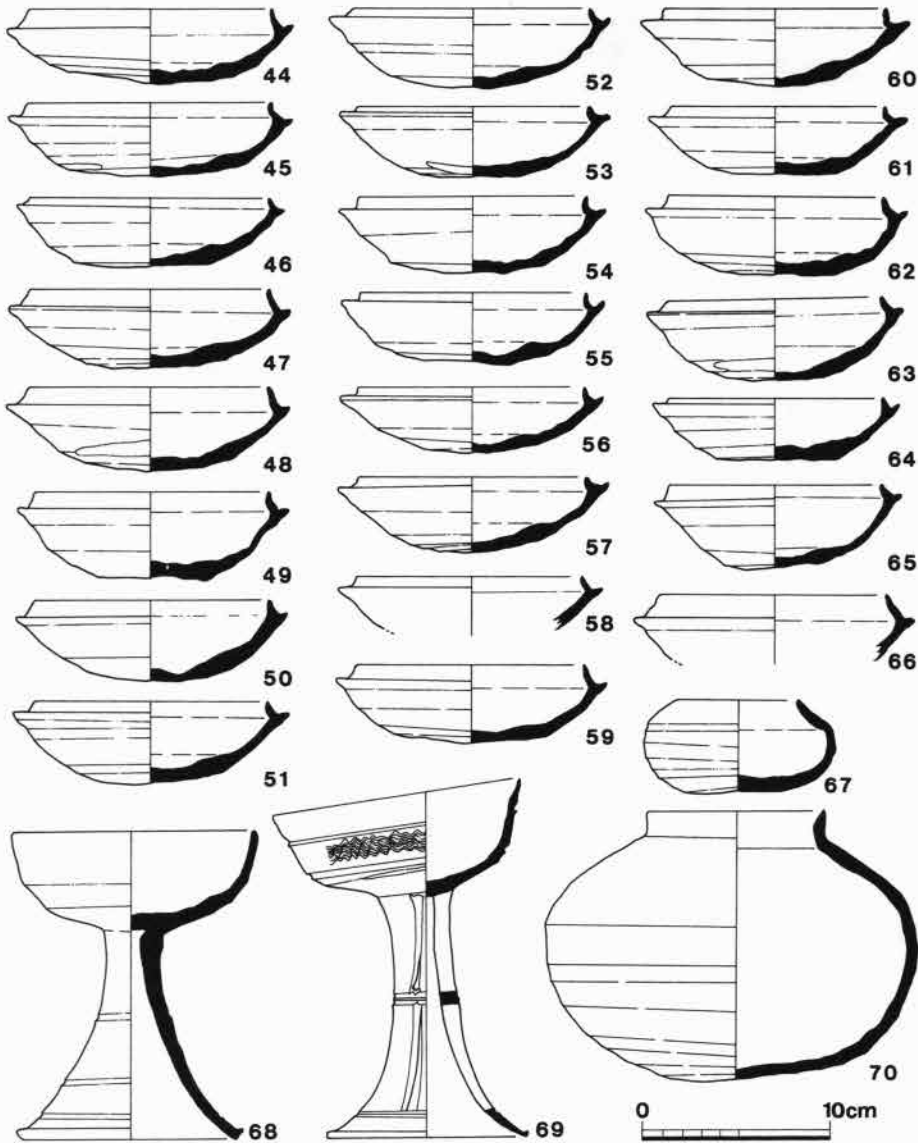
ち、後円端部が垂直に下がる(4~6・11~19・21・24~27)。

c類 口径が矮小化し、そのため半円球状に近い形態をもつ。天井部はヘラ切り未調整か、わずかにヘラ削りを施す(28~32)。

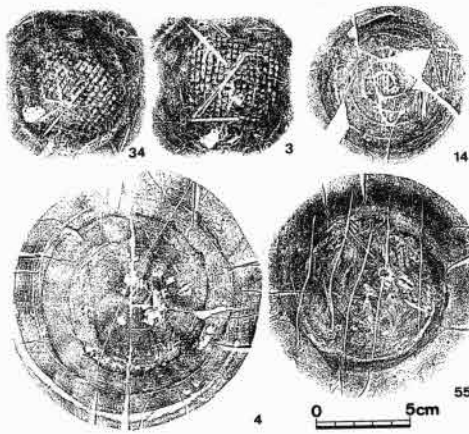
杯身(33~66)

杯身も同様に口径と断面形態の特徴から次の3つに分ける。

a類 口径が全体的に大きく、器高が高い。口縁部はやや外反しつつ斜めに立ち上がる。



第87図 出土土器実測図(2) 蓋杯・高杯・壺



第88図 拓本(タタキ痕・ヘラ記号)

その際、口縁部と受け部との間にわずかな断面「V」字状の溝を作り出す(36・38・42・49・62)。

b類 口径はa類同様であるが、器高が低くなり、口縁部と受け部の間に溝はなく、なだらかに繋がる大半のもの(33・35・37・39～41・43～45・47・48・59・66)。

c類 口径は小さくなり、全体に矮小化する。口縁部はわずかに立ち上がるのみで、断面形態が「Y」字状になる(46・50～58・60・61・63～65)。

口縁が広がる杯蓋a類は、口縁部が強く内傾する杯身a類に合致する形態である。同様に口縁が垂直に終わる杯蓋b類は、口縁部が垂直に近く立ち上がる杯身b類に合致し、口径の小さくなった杯蓋、杯身c類も合致するものとする。

胎土は、肉眼観察では大きく8群(a～h群)に分類した。<sup>(注8)</sup> 石英微細粒を含み焼成良好なa群と、白色の細粒(2～3mm)を多く含み、軟質の黒色微細粒子がヘラ削りによって尾を引くb群が最も多い。また、杯身c類には、乳白色の焼成不良なh群が多いという特徴がある(付表7参照)。

#### 高杯(68・69)

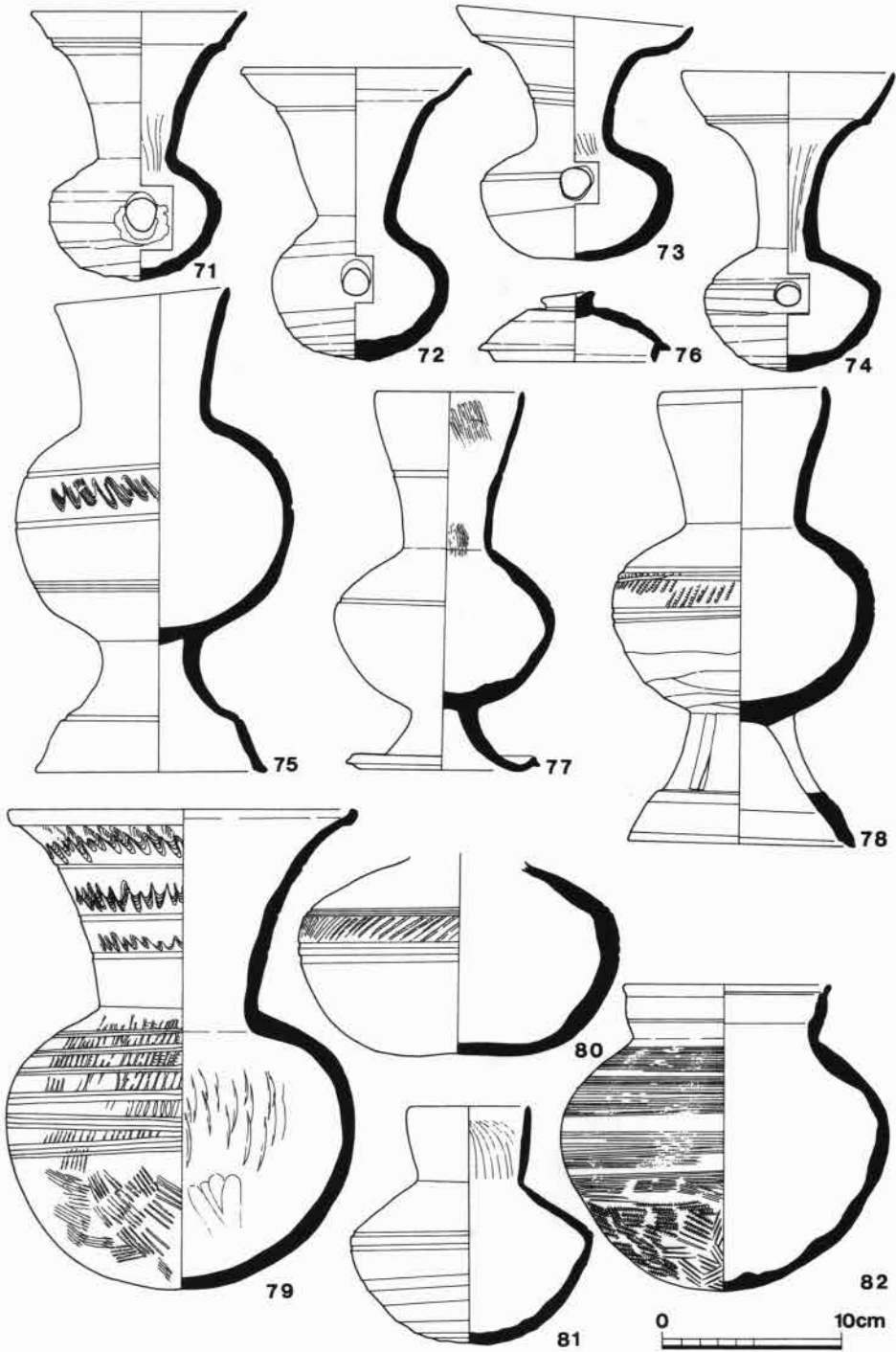
68は、脚が3条の凹線によって四段に区画されるが、透かし孔をもたない。杯部は、杯蓋を逆にしたようで全体として器壁が厚い。69は、脚部が2条の凹線によって二段に区画され、3方向に2段の透かし孔をもつ。杯部は、鋭い凹線によって三区分され、中央帯に波状文を施す。

#### 壺(71～74)

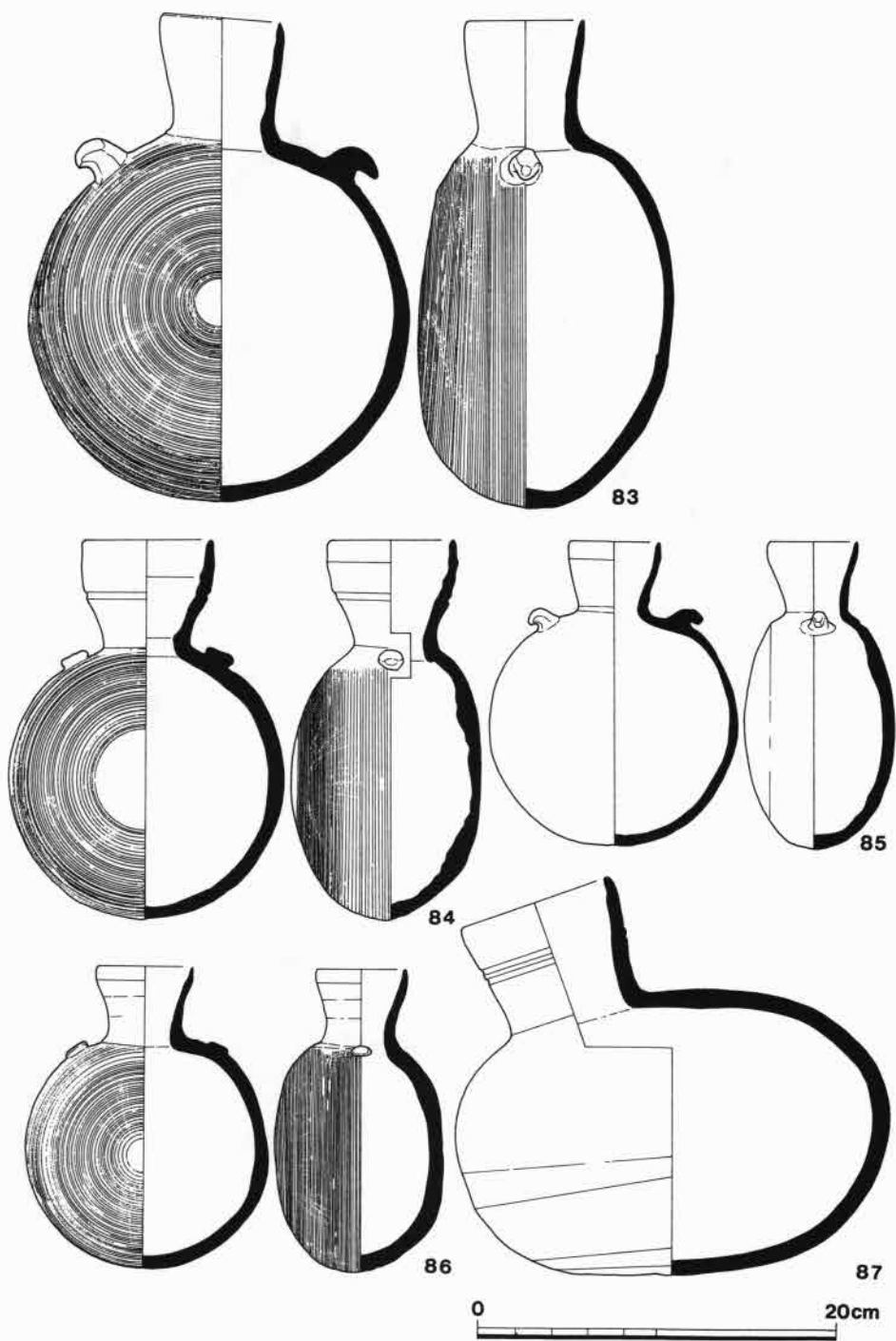
口縁部は大きく開き、受け口状になり、口頸部と区分される。71・74は、明瞭な段が作り出されるが、72・73は屈曲による。73を除いて胴部下半にはヘラ削りが施される。

#### 脚付長頸壺(75～78)

球形の胴部をもつ75と、扁平な胴部とわずかに内湾しつつ立ち上がる口縁部をもつ77・78がある。脚部の形態はそれぞれ異なり、75・78は壺の口縁部を倒立させたようで、77は定脚の高杯の脚に類する。蓋76は、色調・胎土が異なるが、口径や出土位置から75とセットになる可能性がある。



第89図 出土土器実測図(3) 甕・壺



第90図 出土土器実測図(4) 提瓶・平瓶

壺類(67・70・79・81)

無頸壺67、短頸壺70、広口壺79、直口壺81がある。広口壺79は、B1区で出土。ラッパ状に大きく広がる口縁部をもつ。3条の緩慢な凹線によって区画された部位に斜位の波状文を施す。直口壺81は、焼成があまく、瓦質に近い。玉葱状の偏平な胴部は、土師器の直口壺を連想させる。

提瓶(83~86)

把手が鉤状に曲がるもの(83・85)と、釦状になるもの(84・86)がある。いずれも口縁部には施文がなく、端部付近で内湾しつつ垂直に立ち上がる。84のみが緩慢な凹線を施す。

平瓶(87)

器高22.3cm・胴部径24cmを越す大形品である。内部に流入土は認められなかった。提瓶同様、釦状の把手をもつ。

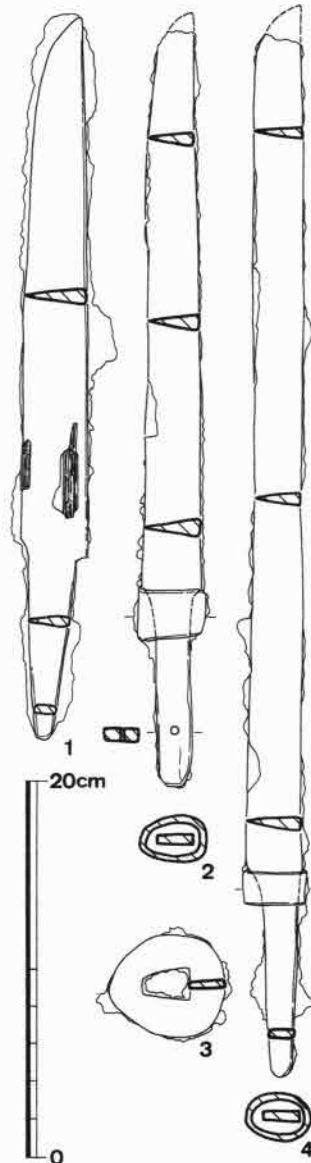
b. 武器(第91図1~4・第92図5~20・第93図21~35)

鉄刀(第91図1~4)

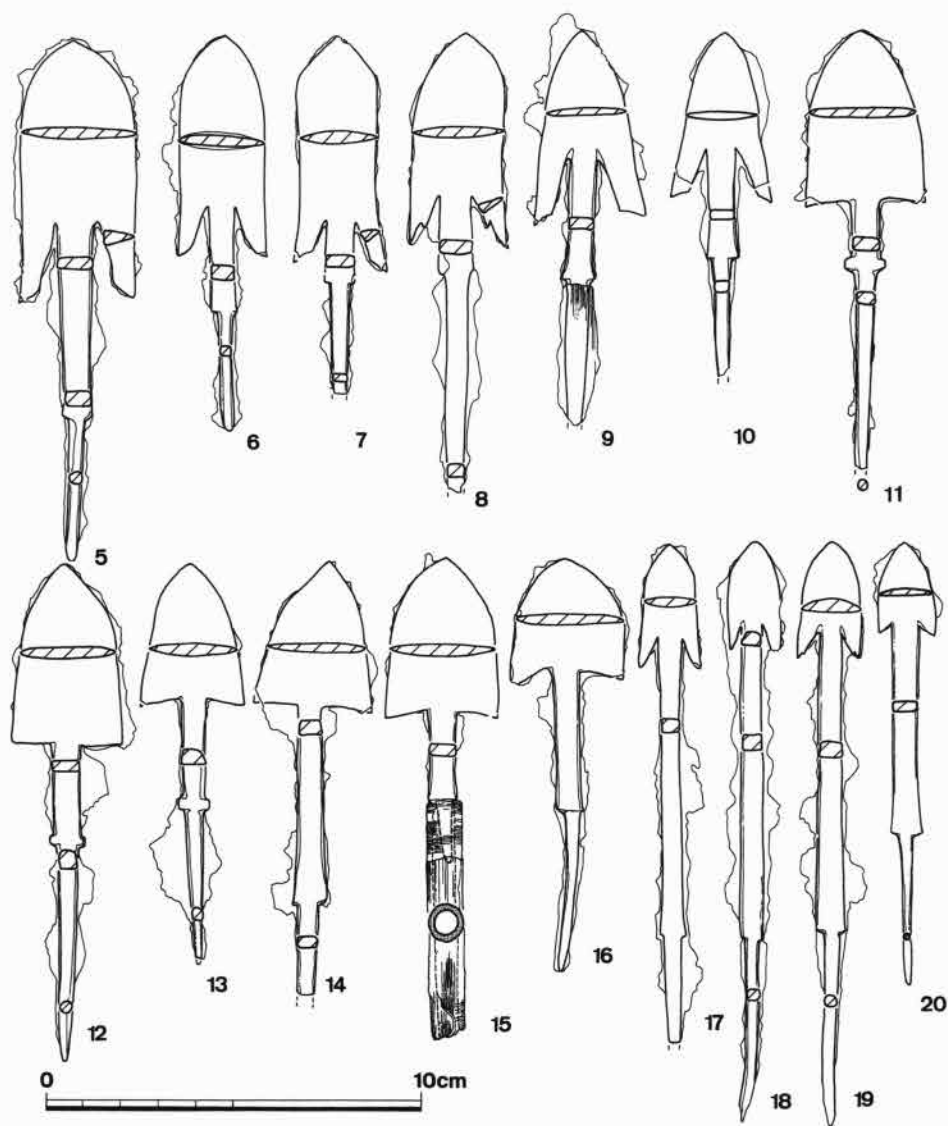
鉄刀は、3振り出土した。1は、石室北側中央部、中央石列の上からやや浮いた状態で、切っ先を北に向けて出土した。鞘の木質が遺存している。刀身は、平造りで切っ先はふくらをもたず、背関、刃関は撫肩状に造られる。茎胴部は先細りになり、栗尻でおわる。2・4は、石室左袖部で4の茎に2の切っ先を重ねた状態で出土した。ともに、刀身には木質が遺存しておらず、抜身でかたづけられたものと思われる。2は平造りで、背関、刃関ともに均等に配され、撫角の両関に造られる。断面倒卵形の鐔が付属する。4も平造りで、切っ先の一部を欠損する。背関がわずかに認められ、断面楕円形の鐔が着装される。茎は、2よりも細く、栗尻におわる。1・4は、肉眼での目釘孔の観察ができなかった。

鉄鎌(第92図5~20・第93図21~35)

鉄鎌は、平根鎌(5~16)と長頸鎌(17~35)に大別される。平根のものには腸袂が深く切り込まれるもの(5~10)と、腸袂がなく関部が直角に切り込まれるもの(11~



第91図 出土鉄器実測図(1)  
刀・鐔



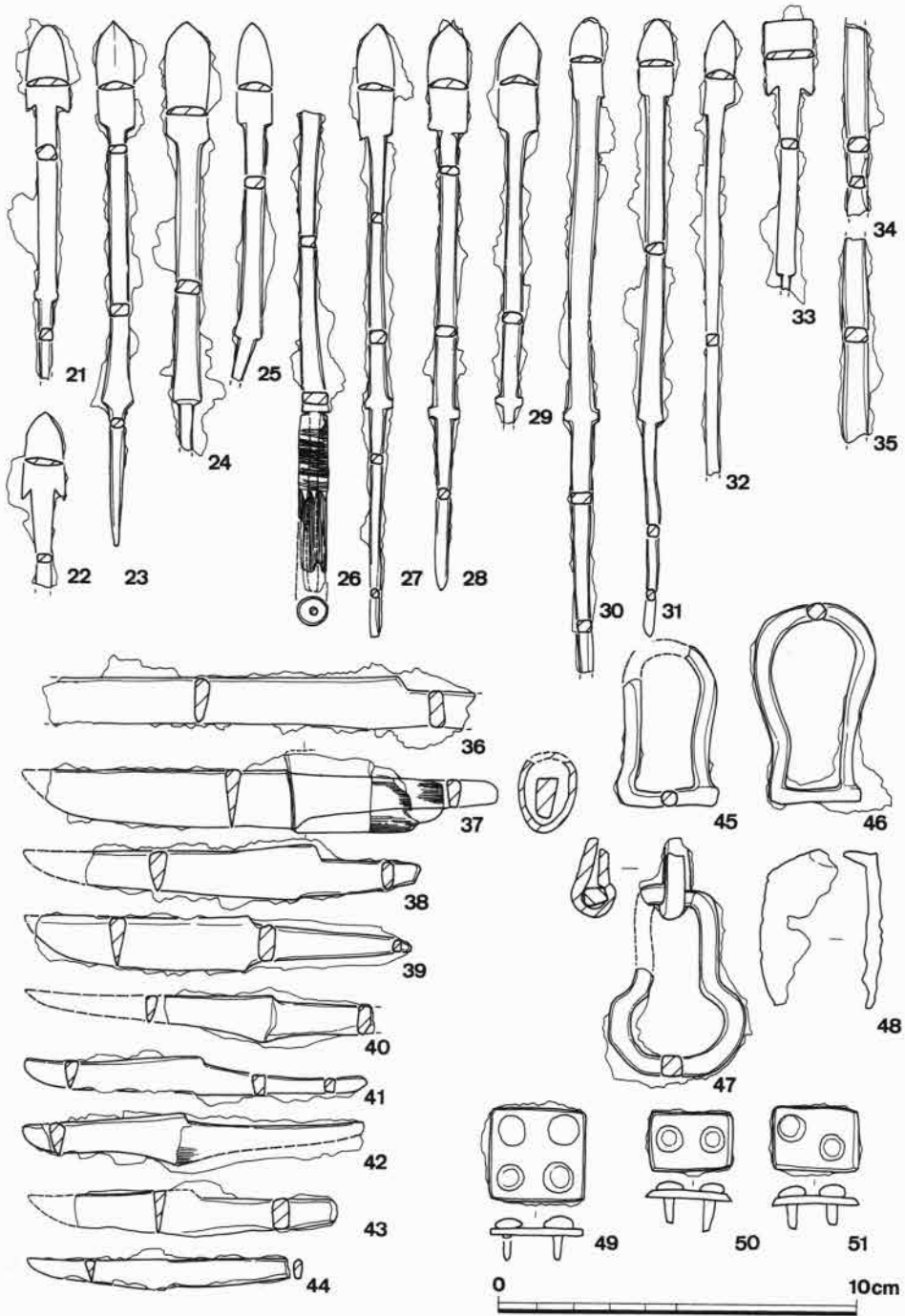
第92図 出土鉄器実測図(2) 鉄鏃

16)とがある。長頸のものにも腸袂のあるもの(17~22)と、腸袂がない尖根系のもの(23~32)、方頭に腸袂をもつもの(33)などがある。広根鏃、長頸鏃を問わず、箆被は台形状と棘状に分けられる。腸袂をもつものは台形箆被であり、もたないものは棘箆被が主体となる。

c. 工具

鉄刀子(第93図36~44)

背関のあるもの(36~43)と、ないもの(44)がある。背関をもつものの中でも、関を明瞭に造りだすものは36・38・39のみである。鹿角装のものはない。

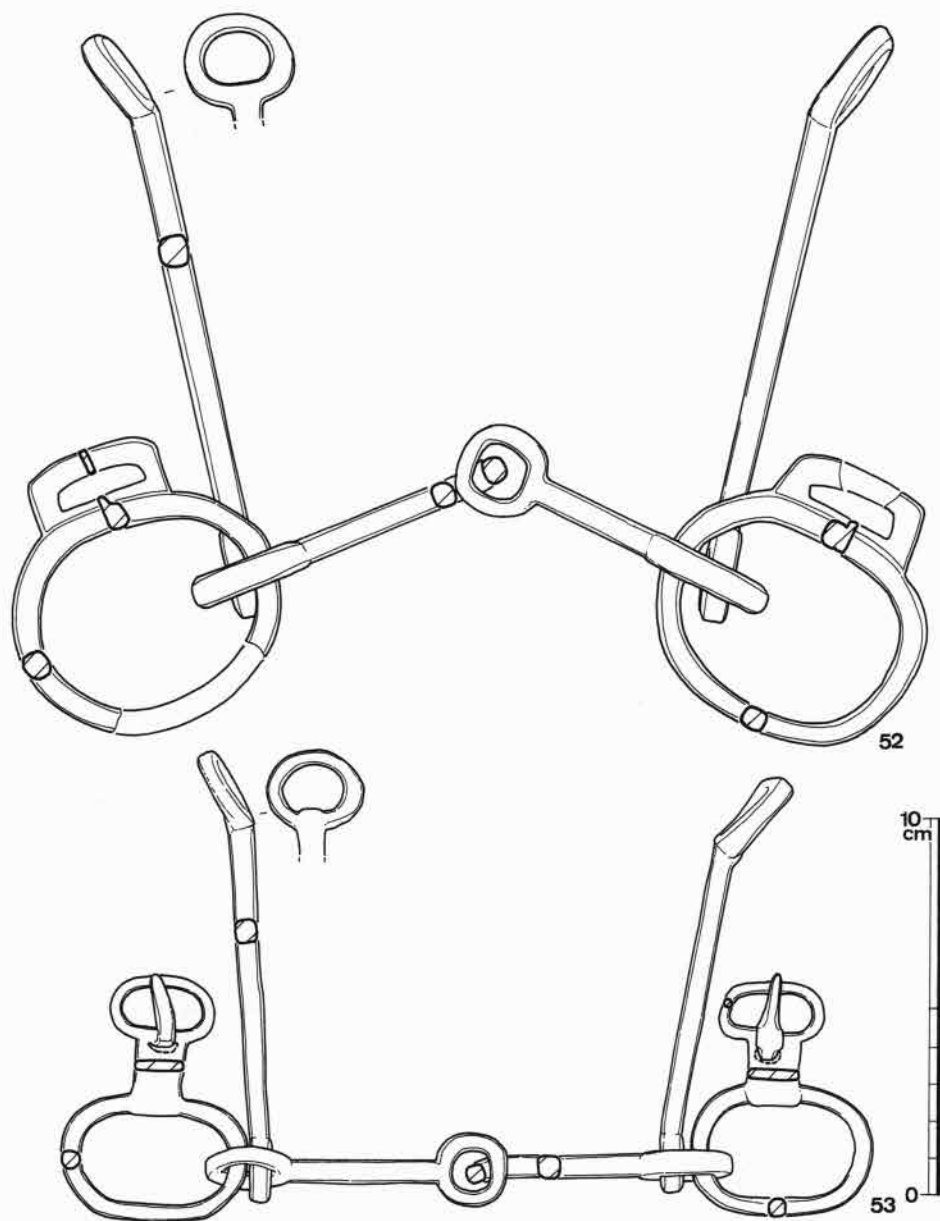


第93図 出土鉄器実測図(3) 鉄鏃・刀子・馬具

d. 馬具(第93図45~51・第94図52・53・第95図54~56)

鉸具(第93図45・46)

基部に刺金を蕨手状に巻きつけるものであるが、遺存しなかった。基部の一角で断面円形の鉄棒が鍛接される。



第94図 出土鉄器実測図(4) 轡



鞆(第93図47・48)

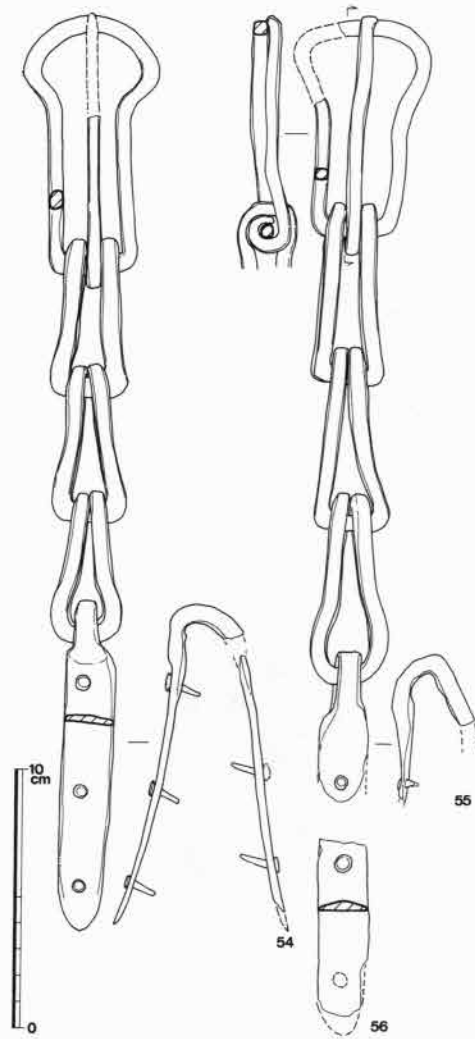
凸字の輪部分のみであるが、脚の両端を居木に差し込む二脚式のものである。断面方形の鉄棒を成形しているが、鍛接部は認められない。

革金具(第93図49～51)

3点とも鉄地金銅貼である。49は、ほぼ正方形で4鉾を打つが2鉾は脱落している。50・51は長方形で2鉾を打つ。51は、対角線上に鉾を配置する。

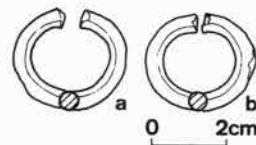
轡(第94図52・53)

方形立開素環鏡板付轡1、鉸具付立開素環鏡板付轡1が出土している。方形立開素環鏡板付轡(52)は、石室奥壁中央部分の棺台と考えられる礎の下側から出土した。鏡板は、直径6mmの鉄棒を長径7.4cm・短径5.9cmほどの楕円環にし、その上部に幅3.7cm・4.0cmの板状立開を鍛接する。立開孔は環体から離れており、幅2.4cmである。引手は、銜の端環に連結される。環の扁平率のみからは、7世紀初頭とされるが、若干古くなる点も認められる。<sup>(注9)</sup>



第95図 出土鉄器実測図(5) 鏡

一方、鉸具付立開素環鏡板付轡(53)は、石室奥壁から50cmほど離れた位置、中央石列の上から出土した。鏡板は、直径5mm前後の鉄棒で造った長径4.9cm・短径3.5cmほどの扁平な楕円環に、長径2.8cm・短径1.6cmの輪金をもつ鉸具を鍛接する。鉸具の刺金は蕨手状で、切部に切り込みが入るようである。錆のため不明である。引手は轡52同様、銜の外側端環に連結される。鏡板の全長は、



第96図 銀耳環実測図

6.4～6.6cmの小型品で、鉸具の帯金も長くなる。型式的に後出のものである。

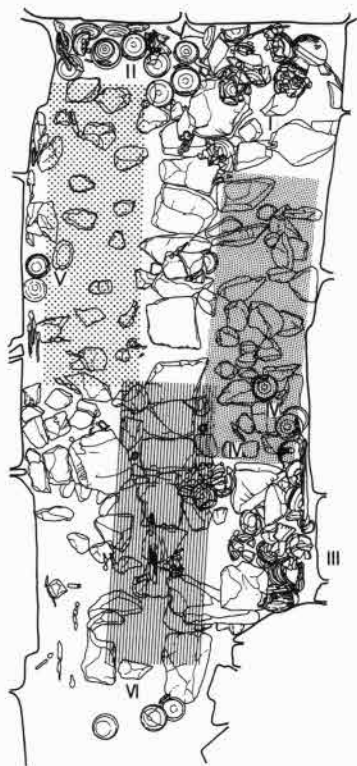
壺鐙(第95図54～56)

石室奥壁東隅から出土した。力革に連なる鉸具付の3連の兵庫鎖<sup>みすお</sup>の鐙鞆に、二又の柄先

金具を取り付け、木製壺鐙を吊り下げる。柄先金具は、両方とも3本ずつの鋸によって木製壺鐙を固定するものである。

銀耳環(第96図)

銅芯銀貼。玄室北側中央部で検出。直径5mmの中実銅棒を長径2.95mm・短径2.6mmに造る。銀箔は、遺存状態が良好で、剝離した部分が少ない。a・bは対をなすと考えられ、鉄刀1と同じ棺内副葬品であろう。

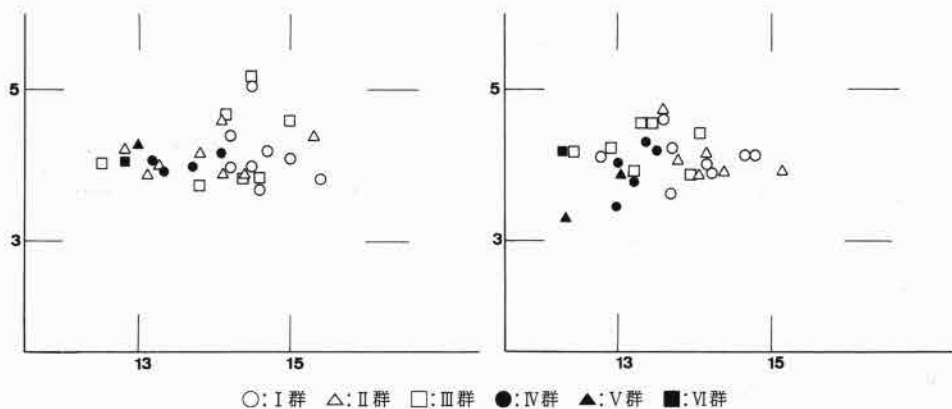


第97図 棺配置想定図

(4) 棺の配置と追葬の状況

玄室床面に遺存した多くの礫は、棺を安置するための施設として、使用されていたものと考えられる。棺台と考えられる床面の拳大の石と、出土土器群から棺配置を推定復原したい。出土土器群は、先述したように、B1区、A1区、B4区に集積された状況で出土し、それぞれを順にI群、II群、III群とする。また、III群周囲のB3区、右側壁のA2区、玄門部のA5区の土器群は、副葬された当時の状況を示して出土している。それぞれIV群、V群、VI群とする。

蓋杯では、I群、II群、III群はほぼ法量が大きく、IV群、V群、VI群の法量はそれに比べて小さくなる(第98図)。IV群、V群、VI群は、杯蓋c類、杯身c類で構成されることから、これらは追葬時、最終埋葬時の副葬品と推測できる。位置的にはIV群、V群、VI群は、別の棺に伴うと考えるのが無理なく、棺台石の



○: I群 △: II群 □: III群 ●: IV群 ▲: V群 ■: VI群

第98図 蓋杯法量図(左. 蓋, 右. 身)

位置も考え合わせれば第97図のようになろう。最終埋葬は、Ⅵ群の副葬された棺で、4石の棺台石にのる。

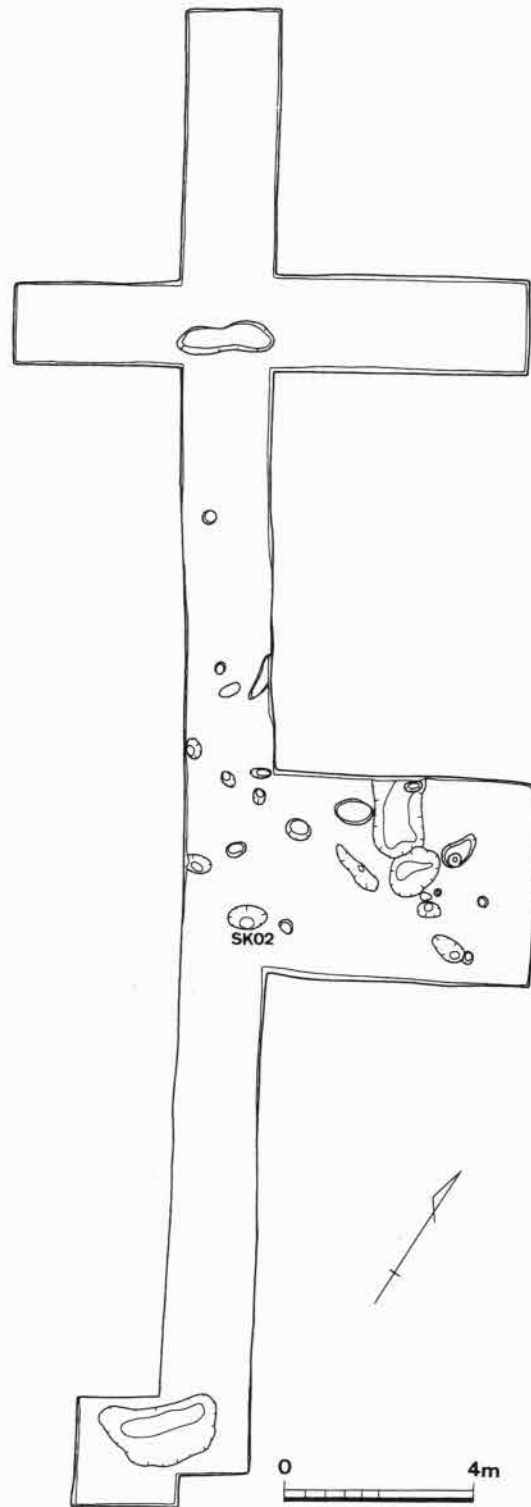
一方、Ⅰ群、Ⅲ群はいわゆる片付けに伴う集積と考えられ、棺の位置を示す可能性は少ない。

Ⅰ群、Ⅲ群に伴う角礫石は初葬時あるいは一度目の追葬時の棺台と考えられ、棺台石からも位置を復原することは、すでに不可能である。しかし、Ⅱ群はⅠ群、Ⅲ群に伴うような棺台石が認められないことや、馬具の位置からも、Ⅰ群の集積に先行することが判明しており、初葬時に副葬されたままの土器も含まれると見ることができる。このため、玄室右側付近に初葬時の棺が収められた可能性を指摘できる。

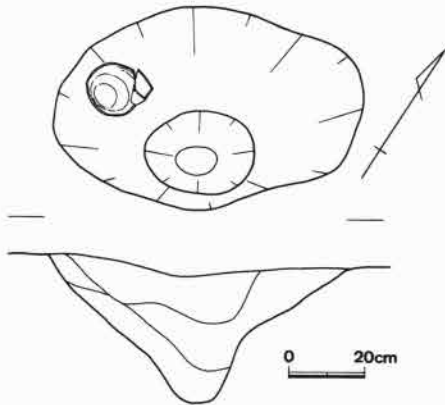
(5) その他の遺構と遺物

B地点は、当初、測量時点では小規模な独立丘陵のため、古墳の可能性のあるものと見てトレンチを設定し、掘削したが、表土直下に赤褐色の地山土が堆積しており、遺構・遺物は認められなかった。

C地点では、明瞭な掘形にならないピットを検出したが、それに伴う遺物はほとんど認められず、谷地形表土下で須恵器壺(第89図80)、表土直下で土師器細片を採



第99図 D地区南トレンチ実測図



第100図 D地区南トレンチ土坑SK02実測図

集したに留まった。D地点でも、顕著な遺構は存在しなかったが、D地点南トレンチではジンド古墳と同時期と考えられる土坑を検出しており(第99図)、おそらく墓として利用されたのではないかと考えられる。

D地点南トレンチSK02土坑(第100図)

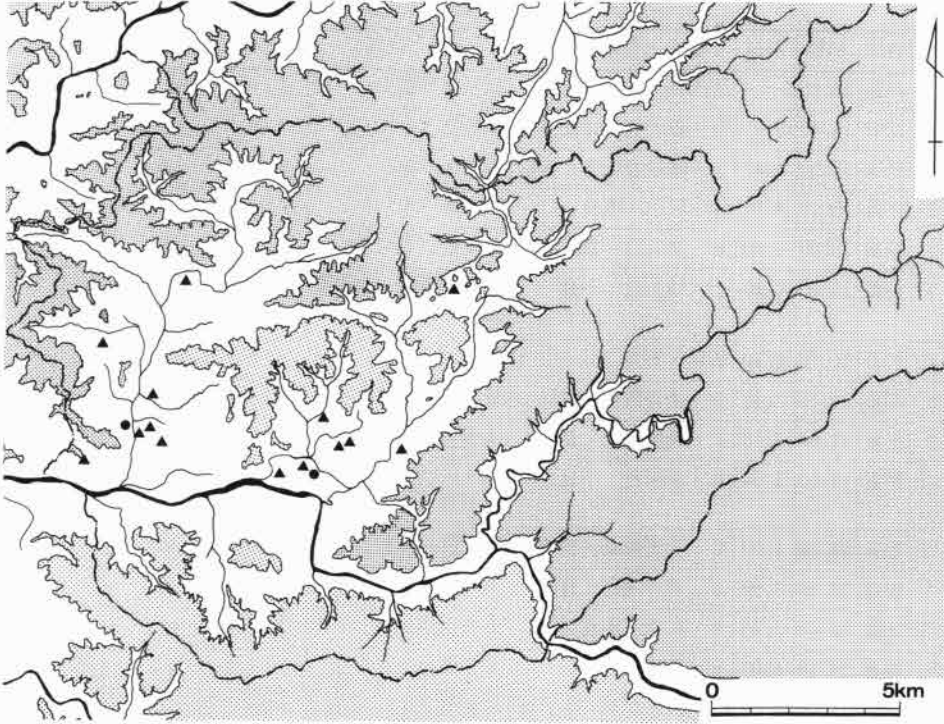
長軸80cm・短軸50cm余になる長楕円形の土坑である。掘形は、播鉢状を呈し、検出面で須恵器壺(第89図82)が出土した。

### 3. 小結

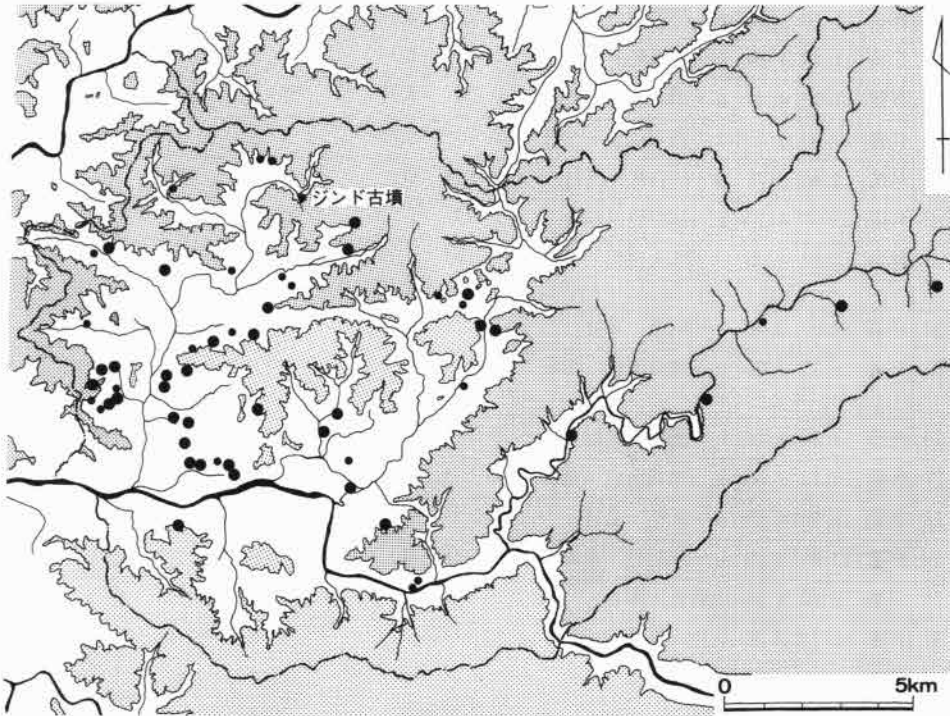
今回のジンド古墳の調査では、多くの副葬品を検出することができ、この地域の6世紀後葉から7世紀初頭の地域首長の副葬品を知ることができた。綾部市域では、古墳時代前半期には由良川本流の北岸の河岸段丘上に高塚墳が築造され始める(第101図)。可耕地の広さや水利上の選地であろうが、古墳時代後期には由良川支流の犀川、八田川、上林川最上流域においてさえも石室墳を造営するようになる(第102図)。今回調査したジンド古墳や神宮谷古墳群の調査結果からも、当該地区では6世紀後葉に横穴式石室を伴う造墓活動が行われるようになることが判明した。しかし、群集するには至らず、単独あるいは数基に留まらざるを得なかったようである。ジンドD地区南トレンチの土坑SK02が墓として利用されたとすれば、当該地域では1基の石室墳の周辺に須恵器を1点副葬するだけの土壙墓が点在して営まれていた状況が想定される。古墳時代後期の畿内中枢から見れば、非常に社会的階層の未分化な地域とせざるを得ない。しかし、神宮谷3号墳やジンド古墳で見られた馬具類は、列島で広範囲に認められ、量産化された規格品と類する型式のものであり、畿内中枢の管轄下で生産されたものである。

このような調査結果は、6世紀以降、畿内中枢による地方の土地所有とその生産物の収奪支配の体制が強化され、畿内中枢の直接的な支配体制に当該地域が組み込まれたことを如実に示すものである。

(野島 永)



第101図 綾部市域における前期・中期古墳(前期.●印、中期.▲印)



第102図 綾部市域における後期古墳(群集墳.大印、単独墳.小印)

付表7 ジンド古墳出土土器法量表

番号	器種	口径	器高	胎土・色調・焼成	出土位置	残存率	記録番号	備考
1	杯蓋	15.80	2.2~	淡灰色・良好	玄室奥壁埋土	7/8	H	
2	杯蓋	15.40	3.85	b・青灰色・良好	B1区(I)	7/8	5・6・69	
3	杯蓋	15.30	4.40	a・暗淡青灰色・良好	A1区(II)	8/8	18	叩き目痕跡
4	杯蓋	15.10	4.10	a・灰色・不良	B1区(I)	7/8	11・13・71	ヘラ痕
5	杯蓋	15.00	4.60	b・黒灰色・良好	B4区(III)	8/8	42	
6	杯蓋	15.00	4.10	c・暗灰色・不良	墳丘南東部・玄室奥壁埋土	5/8	K	
7	杯蓋	14.70	4.20	灰色・不良	B2区	8/8	4	
8	杯蓋	14.60	3.85	b・淡青灰色・良好	B4区(III)?	8/8	92	
9	杯蓋	14.60	3.70	c・淡灰褐色・良好	玄室奥壁埋土	1/8	F	
10	杯蓋	14.50	5.05	b・淡灰色・不良	B1区(I)・B4区(III)	8/8	13・49	鉄錆付着
11	杯蓋	14.50	4.00	b・淡青灰色・良好	B1区(I)	7/8	70	
12	杯蓋	14.40	3.90	a・淡青灰色・良好	A1区(II)	8/8	26	
13	杯蓋	14.40	3.90	b・灰色・不良	B4区(III)	7/8	46	
14	杯蓋	14.20	4.00	a・灰色・不良	B1区(I)	7/8	5・6	ヘラ記号
15	杯蓋	14.20	4.40	f・淡橙褐色・良好	B1区(I)	8/8	66	
16	杯蓋	14.10	4.60	a・淡青灰色・良好	A1区(II)	8/8	17	
17	杯蓋	14.10	3.90	g・暗青灰色・良好	A1区(II)	8/8	20	
18	杯蓋	14.10	4.60	b・青灰色・良好	B4区(III)	7/8	43・44	
19	杯蓋	14.10	4.20	g・淡青灰色・不良	B3区(IV)	7/8	58・59	
20	杯蓋	13.80	4.15	d・淡茶灰色・良好	A1区(II)	8/8	24	自然釉付着
21	杯蓋	13.80	3.75	b・灰白色・良好	B4区(III)	8/8	75	
22	杯蓋	13.60	4.20	g・灰白色・不良	B3区(IV)	6/8	58	
23	杯蓋	13.60	4.10	h・乳灰白色・不良	B1区(I)・B4区・A4区	8/8	4・68・86	
24	杯蓋	13.30	3.95	c・灰色・良好	B3区(IV)	8/8	33・74	
25	杯蓋	13.25	4.00	a・淡青灰色・良好	A1区・B1区(II)	7/8	16	
26	杯蓋	13.20	4.10	b・灰色・良好	B3区(IV)	7/8	32	鉄錆付着
27	杯蓋	13.10	3.90	a・淡青灰色・良好	B1区(II)	8/8	14	
28	杯蓋	13.00	4.30	d・灰色・良好	A2区(V)	8/8	29	
29	杯蓋	12.80	4.20	b・灰白色・良好	A1区(II)	8/8	25	
30	杯蓋	12.80	4.10	灰白色・不良	A5区(VI)	8/8	63	
31	杯蓋	12.70	3.50	灰色・良好	墳丘採集	1/8	T	
32	杯蓋	12.25	4.00	h・乳白色・不良	B4区	7/8	83	
33	杯身	14.20	3.40	淡灰色・良好	玄室奥壁埋土	1/8	C	

京都縦貫自動車道関係遺跡平成5年度発掘調査概要

34	杯身	14.20	3.90	a・青灰色・良好	A1区(Ⅱ)	8/8	19	叩き目
35	杯身	13.80	4.10	f・淡橙褐色・不良	B1区(Ⅰ)	8/8	69・88	
36	杯身	13.70	4.10	f・淡乳褐色・不良	B1区(Ⅰ)	7/8	8・11・72	
37	杯身	13.40	3.90	d・淡灰色・良好	A1区(Ⅱ)	8/8	22	
38	杯身	13.25	3.90	b・乳灰色・不良	B1区(Ⅰ)	7/8	6・7	
39	杯身	13.20	4.00	b・灰色・良好	B1区(Ⅰ)	8/8	12	
40	杯身	13.20	4.10	b・灰色・良好	A1区・B1区(Ⅱ)	8/8	15	
41	杯身	13.10	3.90	g・暗青灰色・良好	A1区(Ⅱ)	8/8	23	
42	杯身	13.10	4.40	g・青灰色・良好	B4区(Ⅲ)	7/8	44	
43	杯身	13.00	3.90	g・淡青灰色・良好	B4区(Ⅲ)	8/8	45	
44	杯身	12.80	4.05	e・黒灰色・良好	A1区(Ⅱ)	8/8	21	
45	杯身	12.70	4.00	b・淡青灰色・良好	A4区	8/8	60	
46	杯身	12.70	3.60	f・乳橙褐色・不良	B1区(Ⅱ)	8/8	67	
47	杯身	12.70	4.20	b・淡灰色・不良	B4区(Ⅲ)	7/8	92	
48	杯身	12.60	4.60	e・黒灰色・良好	A1区(Ⅱ)・B1区(Ⅰ)	8/8	10・16	
49	杯身	12.50	4.55	a・淡青灰色・良好	B4区(Ⅲ)	8/8	40	
50	杯身	13.70	4.00	h・淡灰色・不良	B3区(Ⅳ)	7/8	58	
51	杯身	12.40	4.55	b・灰白色・不良	B4区(Ⅲ)	7/8	53・76・78	
52	杯身	12.40	4.30	c・暗灰色・良好	B3区・B4区(Ⅳ)	8/8	57	自然釉付着
53	杯身	12.20	3.80	b・淡青灰色・良好	B3区(Ⅳ)	8/8	31	
54	杯身	12.20	3.90	a・緑青灰色・良好	B4区(Ⅲ)	8/8	79	
55	杯身	12.05	3.90	a・青灰色・良好	A2区(Ⅴ)	8/8	28	ヘラ記号
56	杯身	12.00	3.50	a・灰色・良好	B3区(Ⅳ)	8/8	33	
57	杯身	12.00	4.00	a・暗青灰色・良好	B3区(Ⅳ)	8/8	73	
58	杯身	12.00	2.80	青灰色・良好	墳丘採集	1/8	T	
59	杯身	11.90	4.20	d・灰色・良好	B4区(Ⅲ)	8/8	55	破片融着
60	杯身	11.75	4.10	h・乳灰白色・不良	A5区(Ⅵ)	8/8	61	
61	杯身	11.60	3.70	淡青灰色・良好	墳丘南側	1/8	A	
62	杯身	11.40	4.15	a・淡青灰色・良好	B4区(Ⅲ)	8/8	52	
63	杯身	11.30	4.30	h・灰白色・不良	A5区(Ⅵ)	8/8	12・62	
64	杯身	11.30	3.30	h・乳白色・不良	B2区(Ⅴ)	7/8	30	
65	杯身	11.30	4.50	a・灰色・良好	A4区?	8/8	89	
66	杯身	11.20	3.40	c	玄室奥壁埋土	1/8	D	
67	無頸壺	6.25	5.05	淡青灰色・良好	A2区(Ⅴ)	7/8	88	
68	高杯	13.00	16.35	e・黒灰色・良好	B1区(Ⅰ)	8/8	3	自然釉付着

69	高杯	13.20	19.10	b・淡青灰色・良好	A 4区?	7/8	80・81・91	
70	短頸壺	9.40	14.40	灰色・良好	B 4区(Ⅲ)	8/8	53・76・78・80	
71	甗	11.90	14.90	c・青灰色・良好	B 4区(Ⅲ)	7/8	47・8	
72	甗	12.50	16.25	b・灰色・良好	B 4区(Ⅲ)	7/8	65・80・81・88	
73	甗	13.05	14.00	h・乳白色・不良	B 4区(Ⅲ)	7/8	51	
74	甗	12.00	16.60	b・淡青灰色・良好	B 4区	7/8	84	
75	長頸壺	9.80	26.65	暗青灰色・良好	B 1区(Ⅰ)・B 4区(Ⅲ)	7/8	5・37・38・39	
76	長頸壺	8.80	3.90	b・淡青灰色・良好	A 1区(Ⅰ)	8/8	27	
77	長頸壺	8.10	21.20	b・淡灰白色・良好	B 3区(Ⅲ)	7/8	35	三方透かし
78	長頸壺	9.00	25.40	b・灰色・良好	B 4区(Ⅲ)	7/8	38・39・51・87	
79	広口壺	19.00	26.40	暗青灰色・良好	B 1区(Ⅰ)	7/8	1・5・6	
80	壺			淡灰色・良好	C地区出土	6/8	B	口縁部欠損
81	長頸壺	6.60	13.30	瓦質・淡灰色・不良	B 1区(Ⅰ)	7/8	2・7・72	
82	短頸壺	11.40	17.20	青灰色・良好	D地区南S K02出土	6/8	J	
83	提瓶	6.60	26.90	乳白褐色・不良	B 4区(Ⅲ)	7/8	48・75	
84	提瓶	6.2~	21.20	b・淡青灰色・良好	B 4区(Ⅲ)	7/8	38	自然釉付着
85	提瓶	5.00	17.10	a・青灰色・良好	B 2区	8/8	4	
86	提瓶	5.30	17.00	b・淡青灰色・良好	B 3区(Ⅲ)	8/8	34	
87	平瓶	8.50	22.30	c・淡青灰色・良好	A 5区(Ⅵ)	8/8	L	



付表8 ジンド古墳出土鉄器量表

番号	鉄器名	残存長	出土位置	記録番号	番号	鉄器名	残存長	出土位置	記録番号
1	刀	38.4	A 4	32	19	鉄鏃	11.05	B 1	10
2	刀	40.1	B 3・B 4	34	30	鉄鏃	18	B 1	49 c・52
3	鐺	6.2	B 3	35	31	鉄鏃	17	B 1	8・41
4	刀	55.5	B 3・B 4	33	32	鉄鏃	12.5	B 3	25
5	鉄鏃	13.8	A 2	17	33	鉄鏃	7.5	B 1	9
6	鉄鏃	10.5	A 3	22	34	鉄鏃	5.3	A 3	28
7	鉄鏃	9.5	A 4	43	35	鉄鏃	5.7	A 4	41
8	鉄鏃	12.2	B 1	46	36	刀子	12	A 1	14
9	鉄鏃	10.6	A 2	15	37	刀子	12.45	A 1・A 2	13
10	鉄鏃	11.6	B 1	54	38	刀子	9.3	A 2・B 2	12
11	鉄鏃	11.6	A 2	16	39	刀子	10.4	B 3	20
12	鉄鏃	13.2	B 1	47	40	刀子	5.8	A 4	42
13	鉄鏃	10.4	A 4	38	41	刀子	9.6	A 3・B 3	19
14	鉄鏃	11.4	A 1	6	42	刀子	9.5	B 3	18
15	鉄鏃	12.7	A 3	27 b	43	刀子	7.3	埋土	玄室東壁
16	鉄鏃	10.8	A 4	45	44	刀子	7.3	B 3	最下層 b
17	鉄鏃	13	A 3	23	45	馬具	4.4	A 3	31
18	鉄鏃	15.25	A 3	26	46	馬具	5.5	B 2	11
19	鉄鏃	15.4	A 3	24	47	馬具	6.6	A 3	21
20	鉄鏃	11.6	B 1	9	48	馬具	4.4	A 3	21
21	鉄鏃	9.8	A 4	39	49	馬具	2.5	A 1	2
22	鉄鏃	4.9	A 3	30	50	馬具	2.3	A 3	37
23	鉄鏃	14.5	B 1	7	51	馬具	2.4	A 1	53
24	鉄鏃	11.8	A 3	29	52	馬具	—	B 1	3
25	鉄鏃	9.9	B 4	最下層 a	53	馬具	—	B 2	1
26	鉄鏃	13.2	A 4	44	54	馬具	30.5	A 1	4
27	鉄鏃	16.9	B 1	48・51	55	馬具	26.2	A 1・A 4	40.4
28	鉄鏃	15.6	B 1	45 a・50	56	馬具	5.8	A 1	4

## (5) 池ノ谷遺跡

### 1. 調査概要

池ノ谷遺跡は、七百石遺跡の南約200mの低丘陵先端部に位置する。以前に瓦器片が採集され、遺跡の存在が予想された。丘陵先端部の東側をAトレンチ、西側をBトレンチと呼ぶ。以下、各トレンチごとに調査結果を報告する。

**Aトレンチ** 面積は、約130㎡である。丘陵先端部に向かって十字形のトレンチを設定して、遺構・遺物の残存状況を確認した。その結果、地表下、約20cmで黄褐色礫土の地山を確認した。ピットを検出したのみであった。

**Bトレンチ** 面積は約60㎡である。Aトレンチと同様の状況である。

### 2. まとめ

調査地の周囲は、畑地に開墾されている現状である。開墾や造成による削平のため、遺構が消滅した可能性が高いと考えられる。 (尾崎昌之)



第103図 トレンチ配置図

## (6) 木坂古墓

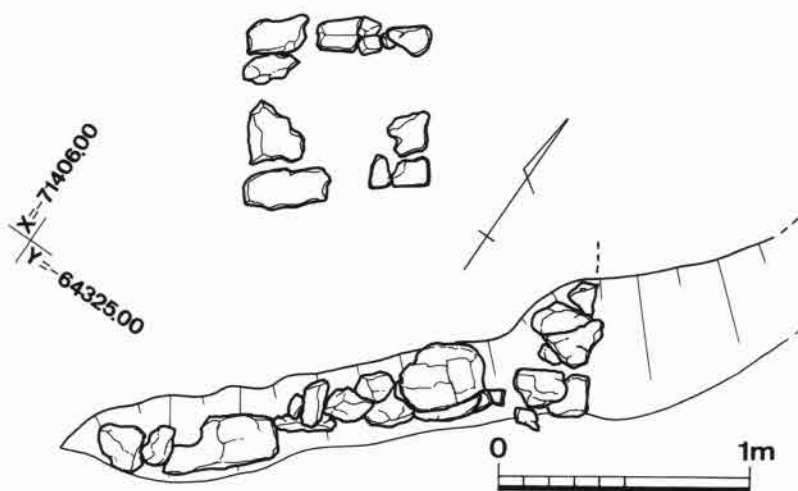
調査地は、今回調査を行った七百石遺跡の北方、蓮華寺峠から派生する丘陵の南面する先端部斜面中腹にある。標高は、約110mである。

調査を開始した当初は、小さな石材が散乱していたため、なんらかの石組施設などの遺構が存在するものと予想された。そこで、字名をとって「木坂古墓」という名称を付して調査を開始した。

石材の散乱していた地点から一辺70cm四方の石敷と、その南側斜面に石列を検出した(第104図)。方形の石敷の下に土坑などの遺構が検出される可能性があったため、一部を除去して南北方向に断ち割りをいれたが、人為的な掘削の痕跡は認められなかった。石列も、赤褐色の地山土を等高線に平行して削り落とした斜面に石を置いただけのもので、土などは盛られていなかった。

列石下部から近世以降の絵付徳利の破片が出土しており、小さな稲荷社の祠跡と判断した。

(野島 永)



第104図 祠跡平面図(1/30)

## (7) 七百石遺跡

### 1. 位置と環境

七百石遺跡は、綾部市七百石町東中野に所在する。綾部市は、丹波高地に開かれた福知山盆地の東方に位置し、市域の約8割が山地に囲まれている。丹波高地は、定高性の隆起準平原で、この高地に多くの峡谷が刻まれた。その一つの由良川が市の南端部を貫流している。三国岳に源を発した由良川は、丹波高地の小河川を併合して日本海に注いでいる。綾部市域では、八田川・犀川などの各支流と合流して西流する。七百石遺跡は、その支流の一つである八田川の上流域に属し、標高約95m前後の洪積台地に築かれている。

この八田川流域は、牧川・犀川と並んで遺跡の豊富なところとして知られている。古墳時代中期～後期にかけての在り系の大規模古墳が分布する。その下流に属する吉美盆地には一辺約54mの方墳である聖塚古墳と、一辺約32mの方墳である菖蒲塚古墳が点在する。その南約1kmのところには総数60余基の久田山古墳群が営まれている。また、上流域には綾部市最大の前方後円墳(全長約54m)の高槻茶臼山古墳や上杉1号墳などの首長墓が所在し、周辺には政次古墳群・塚廻り古墳群・蛇行剣が出土した奥大石古墳群などが散在する。

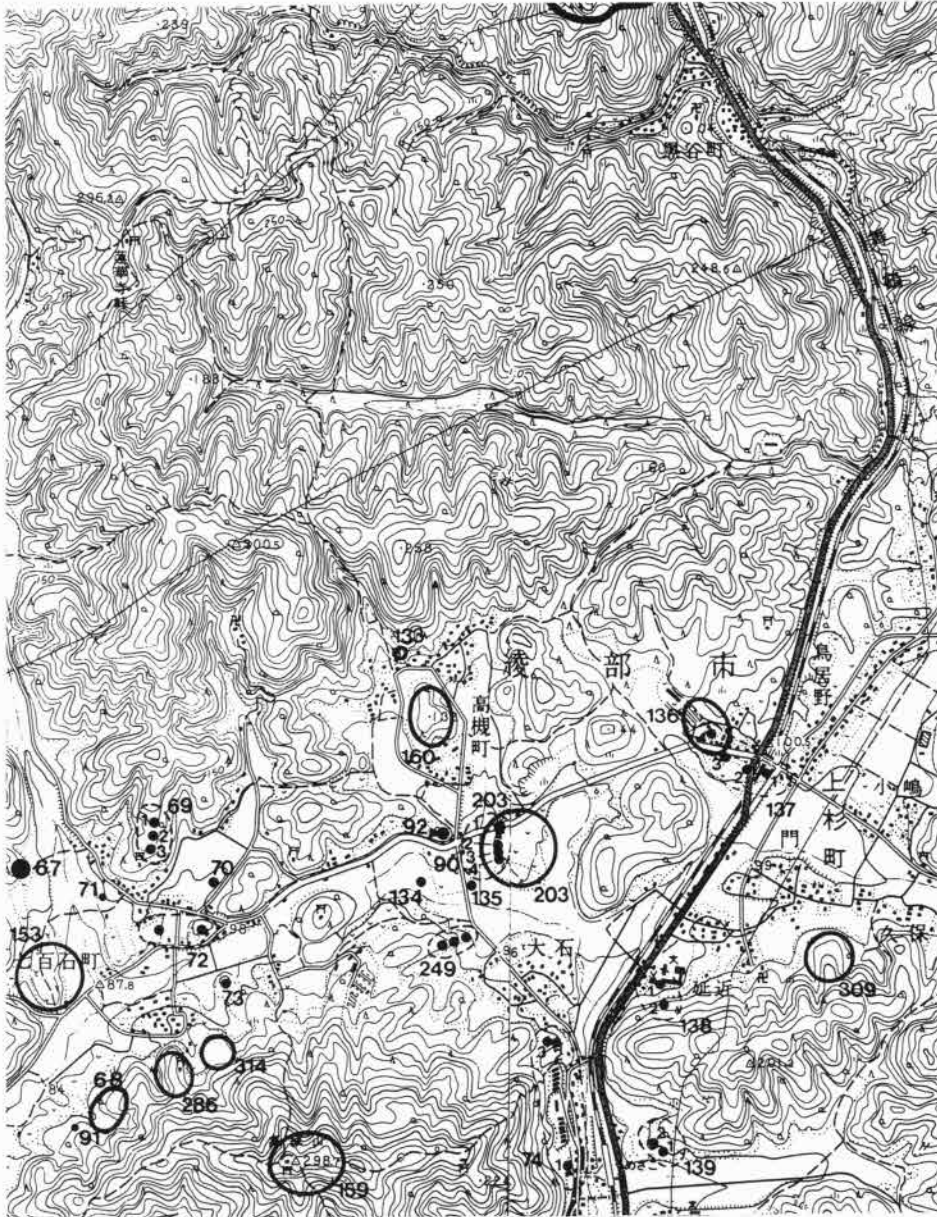
さらに、中世には綾部市七百石町に所在する平山城跡が知られる。高城山の北裾に位置し、15～16世紀にかけての城郭である。畝状堅堀群が検出されたところとしても著名である。

このように、この地域が古墳時代～中世では重要な地域であったことがわかる(第105図)。

### 2. 調査経過

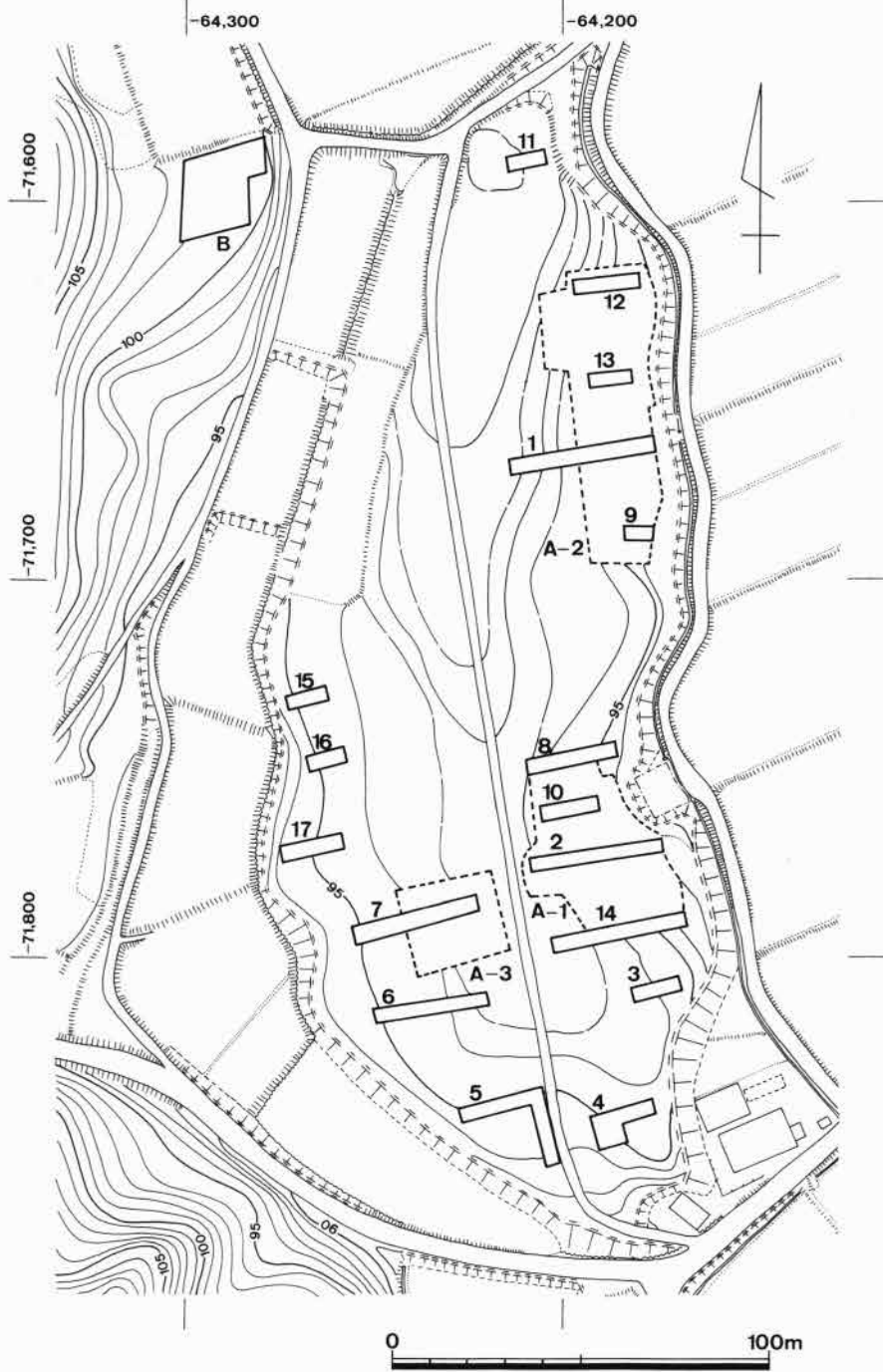
七百石遺跡は、古墳時代後期の土器散布地として『京都府遺跡地図』に記載されている周知の遺跡である。調査地は、台地部と台地北西の丘陵裾部に分かれる。前者をA地区、後者をB地区と呼称する。特に、A地区は、昭和40年代に雲竜桑やサングミズキなどを栽培する「花木団地」として造成された経緯をもつ。このため、台地縁辺部にまでのびる17本のトレンチを設定して、遺構・遺物の残存状況を確認した。その結果、台地縁辺部付近に遺構・遺物が良好に残っているため京都府道路公社、京都府教育委員会と協議のうえ、B地区も含め拡張して本調査に入った(第106図)。

なお、調査地の基本層序は次のとおりである。上層は黄褐色礫土の盛り土、中層は黒褐色土または茶褐色土の包含層、下層は黄褐色粘土(地山)となる。この地山上面が遺構検出面となっている。



第105図 調査地及び周辺遺跡分布図(『京都府遺跡地図(1987)』から引用、1/25,000)

- |            |             |            |                |            |
|------------|-------------|------------|----------------|------------|
| 67. 木坂古墓   | 68. 池ノ谷遺跡   | 69. 八幡宮古墳群 | 70. 塚廻り古墳      | 71. 塚廻り古墓  |
| 72. 七百石古墳群 | 73. 平山古墳    | 74. 上杉古墳群  | 91. 鍛冶屋谷古墓     | 92. 茶白山古墳  |
| 133. 篠神社経塚 | 134. 白田古墳   | 135. 狐塚古墳  | 136. 旗投遺跡      | 137. 焼森古墳群 |
| 138. 中島古墳群 | 139. 石子古墳群  | 153. 七百石遺跡 | 159. 高城城跡      | 160. 高槻城跡  |
| 203. 野崎遺跡  | 249. 奥大石古墳群 | 286. 平山城跡  | 309. 名称なし(平山城) |            |
| 314. 中城館跡  |             |            |                |            |

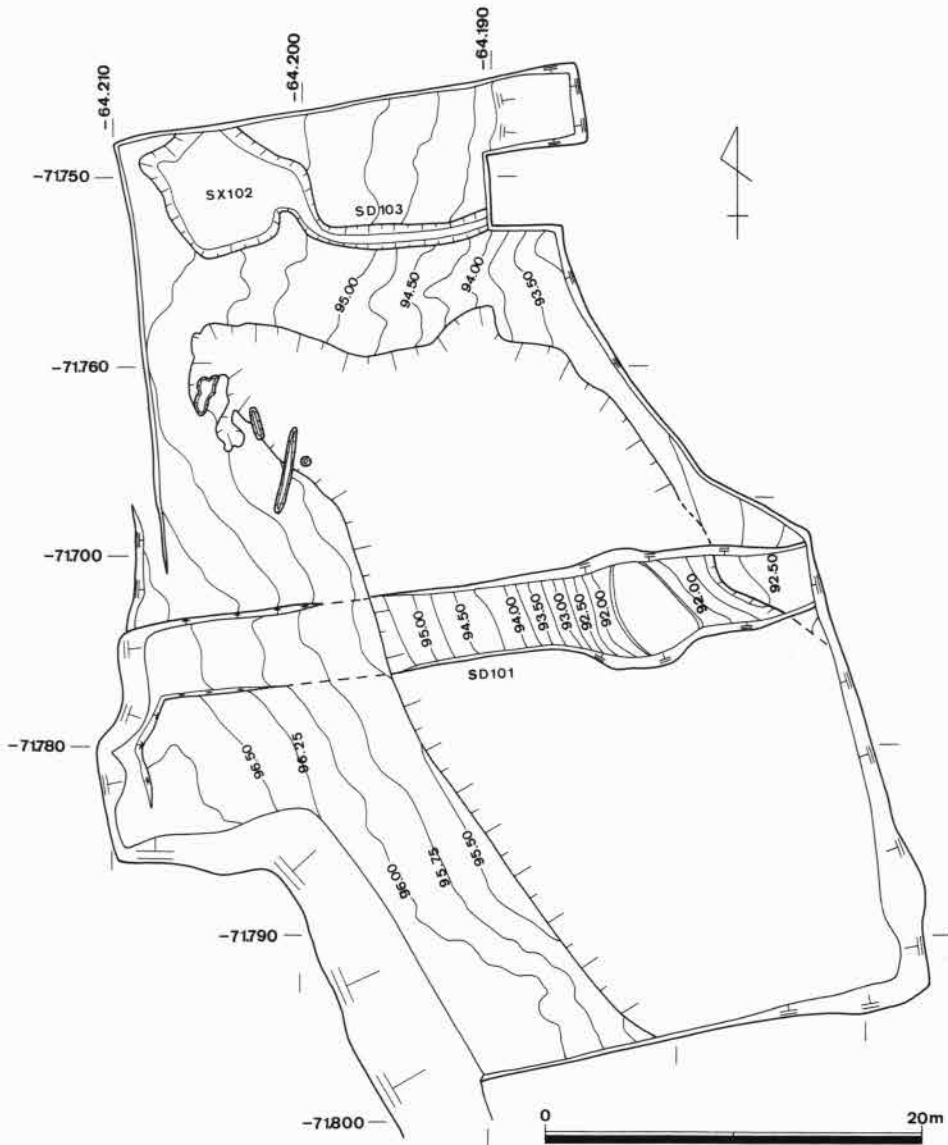


第106図 トレンチ配置図

### 3. 検出遺構

A-1地区 A-1地区は、台地東側斜面南側のトレンチで、面積は約1,650m<sup>2</sup>である。トレンチの西端と東端の比高差は約4mとなっている。また、トレンチの西端は黄褐色粘土の地山であり、遺構・遺物はなかった。それに比べ、東側一帯は包含層が広範に堆積し、須恵器や土師器の細片が多量に採集される。

このトレンチのほぼ中央から幅約20m・深さ約2.5mの谷SD101を検出した。谷の土層



第107図 A-1地区遺構配置図

は、大きく3層に分層することができる。上層は茶褐色粘質土であり、6世紀後半頃の須恵器の杯や杯身などの土器片が多量に出土した。中層は、有機質の黒褐色シルトであり、遺物の出土は見られなかった。下層は灰褐色シルトとなる。このことから、古墳時代後期頃には、この谷は埋まっておやや窪んだ地形になっていたものと考えられる。この谷は、包含層の広がりから長さ約40mの規模になると思われる。

その他に、このトレンチの北西隅で池状遺構S X102を検出した。平面形は方形で、長辺約7m・短辺約5m・深さ約40cm前後を測る。S X102は、溝S D103につながる。出土した土器片から13~14世紀頃の遺構と考えられる(第107図)。

**A-2 地区** A-2 地区は、台地東側斜面北側のトレンチである。面積は約1,900m<sup>2</sup>である。トレンチの西端と東端の比高差は約3mとなっており、かなりの傾斜地である。また、最東端側は急崖となっている。

遺構分布の特徴をみるため、このトレンチを大きく3地区に区分する。北地区はS H202以北である。包含層が広範に厚く堆積し、遺構検出の密度も高い。竪穴式住居跡は、東側縁辺部に集中する。中央地区はS D05・06以北である。この地区の南側は、造成による削平のため、遺構・遺物の検出状況はよくない。それに比べ、北側には竪穴式住居跡や土坑などが集中する。南地区では北地区と同様に、竪穴式住居跡が東側縁辺部に集中する。また、検出地の標高がこの地区内では最も低い。

このトレンチ内から、古墳時代前期頃の竪穴式住居跡1基、古墳時代後期頃の竪穴式住居跡7基、多数の溝、柱穴、中世の溝、時期不明の落とし穴状土坑2基などを検出した。以下、各遺構ごとに概略を報告する(第108図)。

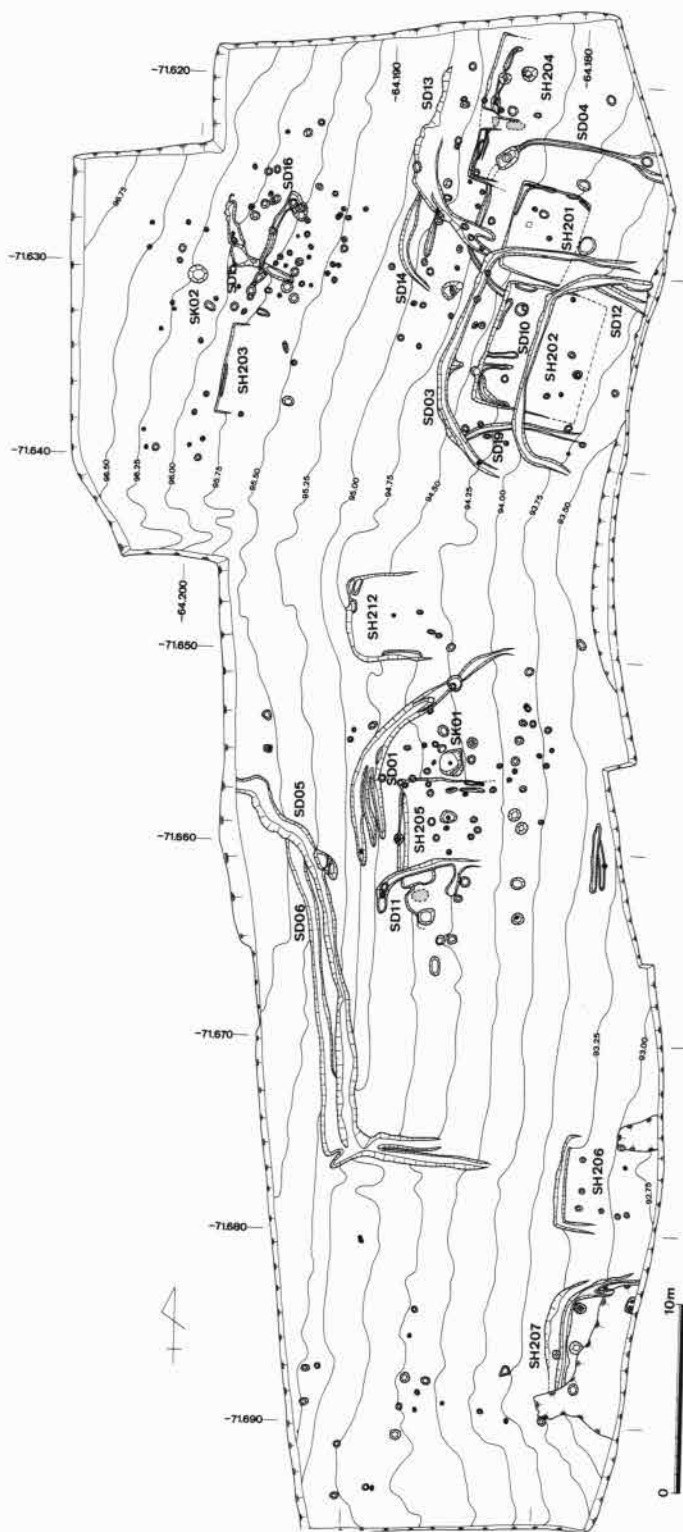
**竪穴式住居跡S H201** このトレンチの北側縁辺部に集中する住居跡の1棟である。西側から東側にかけての傾斜地に位置する。削平のため、東側の壁は不明であるが、平面形は約4.8m×3.6mの方形と考えられる。残存壁高は約32cmである。途切れ気味に周壁溝がめぐる。床面中央に焼土塊が残っており、炉跡と思われる。東側支柱穴は、削平のため不明である。

この住居跡の周囲に溝S D04が「コ」の字形にめぐる。溝の規模は、幅30cm前後・深さ10cm前後を測り、途切れ気味に続く。住居跡の北西・南西の各隅と対応するように屈曲している点や出土した土器からも、この住居跡に付属する遺構と考えられる。

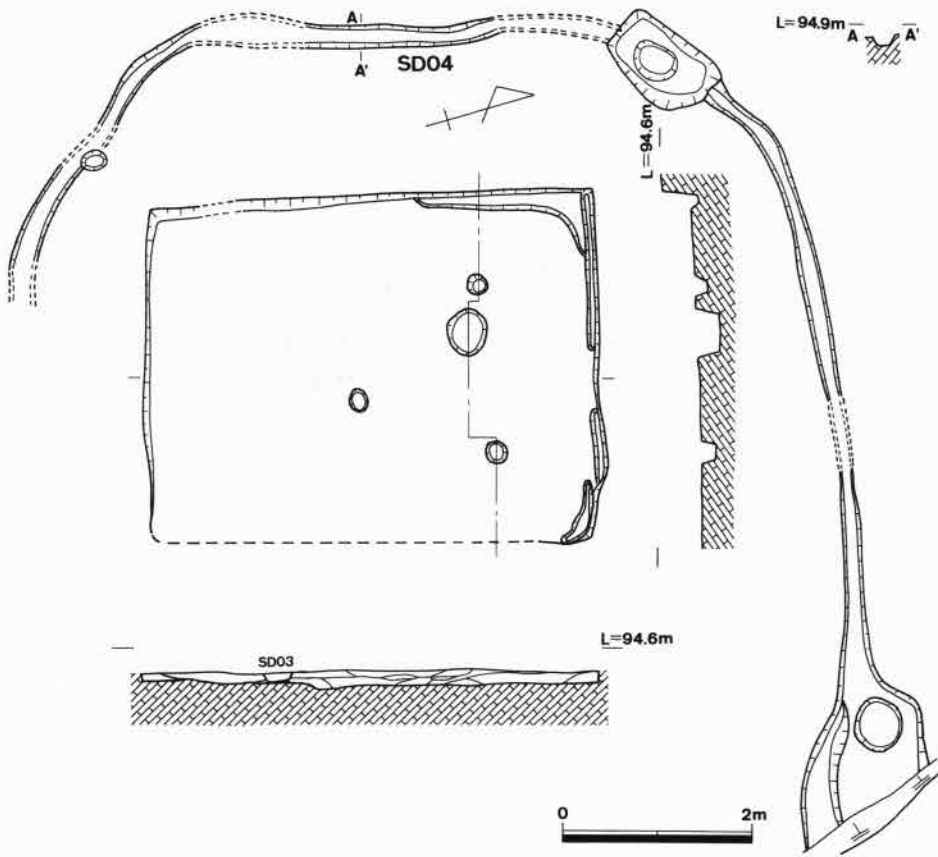
住居跡が斜面地に築かれていることから、住居内に雨水などが入らないようにするための「排水溝」と考えられる。住居跡の時期は、出土した土器片から6世紀後半頃と考えられる。住居跡をめぐる溝も同時期と考えられる(第109図)。

**竪穴式住居跡S H202** S H201の南隣りに位置する。ここも東側の壁は不明であるが、





第108図 A-2地区遺構配置図

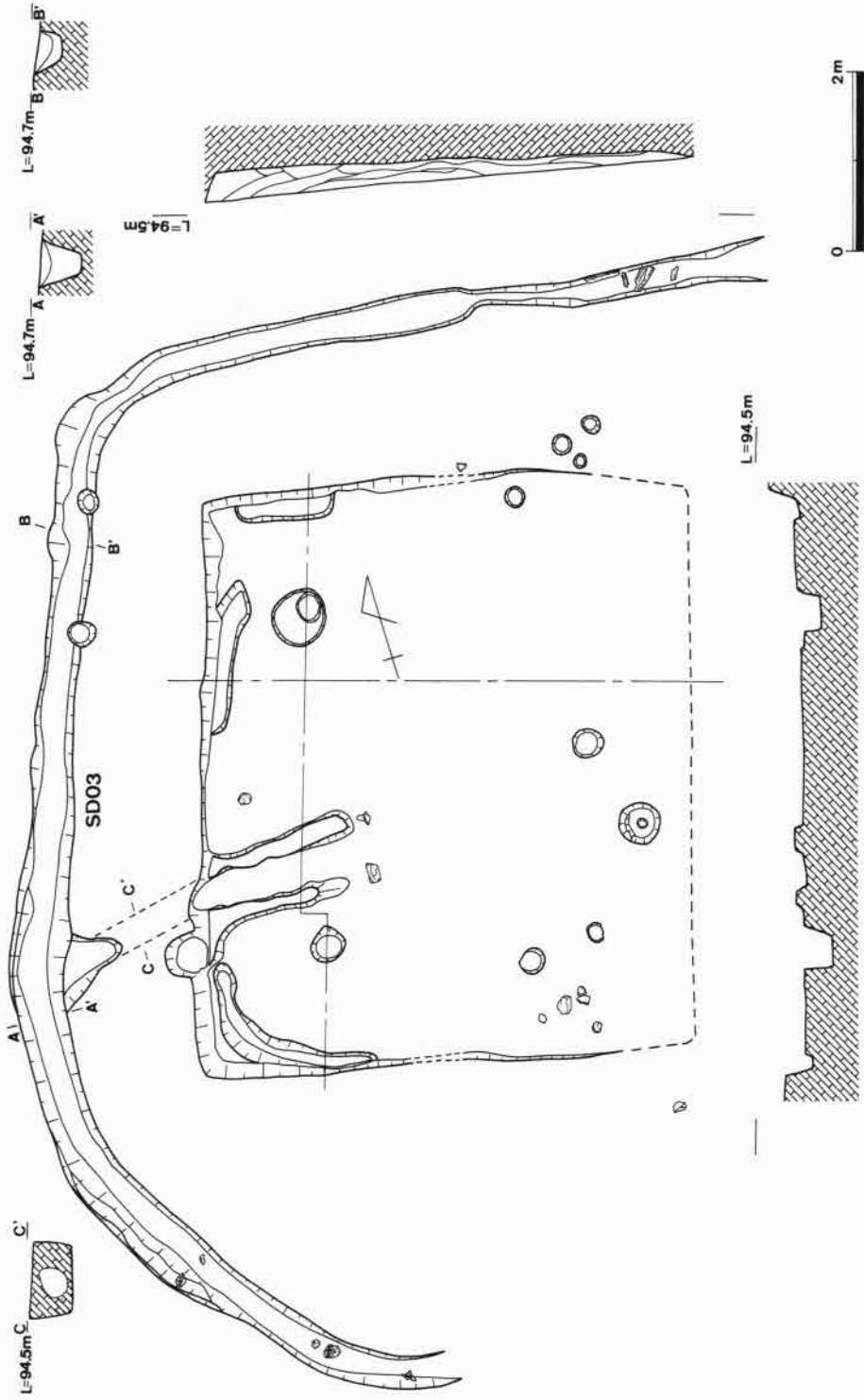


第109図 SH201実測図

平面形は約6.5m×5.5mの方形と考えられる。西側残存壁高は、約34cmとなっている。主柱穴は、西側では検出できたが、東側は削平され残存していなかった。

西壁中央の馬蹄形の竈には、直径約38cm・残存長約1.2mのトンネル状に壁を掘り抜いた煙道が伴う。煙道内は、黒褐色土が堆積し、西壁と溝SD03との中間点から勾配を変える。この住居跡の周囲にSD03が「コ」の字状に住居跡を取り囲む。この溝の規模は、幅約50～70cm・深さ約30～50cmを測る。これも、SD04と同様に「排水溝」と考えられる。この住居跡の床面にSD10が横断する。周辺の遺構配置や傾斜地に築かれている点などから、住居跡を囲む排水溝と考えられる。しかし、住居跡の全容は、削平や急崖となっているため不明である。住居跡・溝の時期は、出土した土器から6世紀後半頃と考えられる(第110図)。

**竪穴式住居跡SH203** このトレンチの北西辺で検出し、最も標高が高いところに位置する。西側の一辺しか検出できなかった。住居跡の時期は6世紀後半頃と考えられる。



第110図 SH202実測図

**竪穴式住居跡 S H204** S H201の北隣りに位置し、最も北側で検出したものである。西側の一辺は約7.6mであるが、東側の壁が残存しないため、全体の大きさは不明である。主柱穴は4本で、その心々距離は4.3m前後である。床面の西壁付近に縦にのびた焼土塊が見られることから、竈の跡と思われる。

この住居跡を取り囲むように溝 S D13がめぐると考えられる。その規模は幅約0.6~1.2m・深さ20cm前後を測る。これも S D04と同様に「排水溝」と考えられる。住居跡・溝の時期は、出土した土器片から6世紀後半頃と考えられる(第111図)。

**竪穴式住居跡 S H205** このトレンチ中央部で検出したものである。住居跡の東半部が削平されているため大きさは不明であるが、西側の一辺は約8.2mである。主柱穴は判然としない。南西隅で焼土塊が見られることから、造り付けの竈の跡と思われる。床面埋土土層の北西端で土師器高杯が脚部を上にした状態で出土した。

また、この住居跡の西側から東側にかけて、溝 S D01を検出した。溝の南端が3条になっているが、その内のどの溝が住居跡と関連するかは明瞭ではなかった。他の住居跡の形態からみて、排水溝と考えられる。溝の規模は、幅0.4~1.52m・深さ20cm前後となっている。住居跡・溝の時期は、出土した土器から6世紀後半頃と考えられる(第112図)。

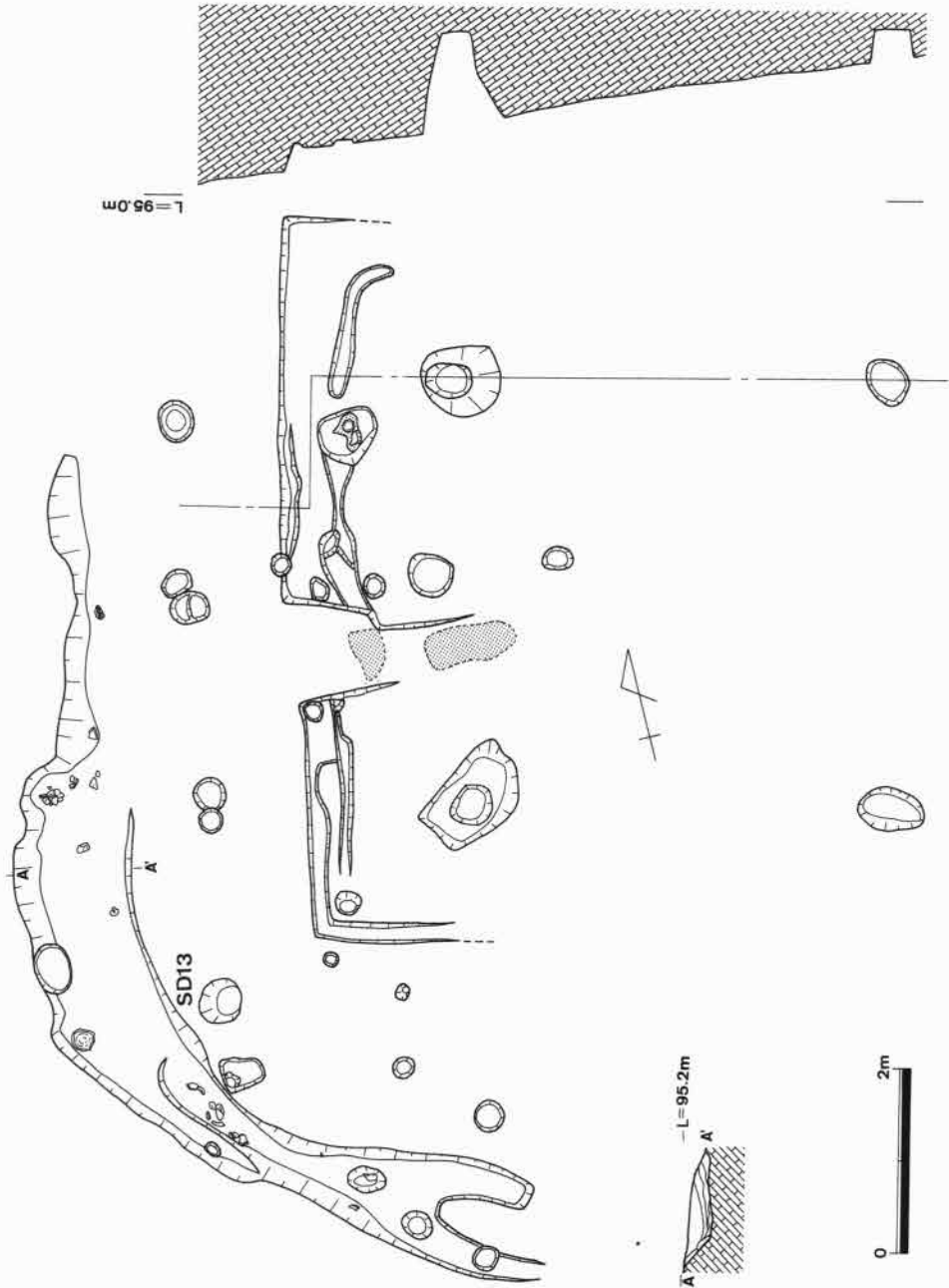
**竪穴式住居跡 S H206** このトレンチ南側の東側縁辺部で検出したものである。ほとんどが削平されているため、残存状況はよくない。わずかに西側の一辺が検出されただけである。その一辺の長さは約4.92mである。主柱穴は4本で、その心々距離は約2.6mである。他の住居跡で見られる、住居跡を取り囲む溝は検出されていない。住居跡の時期は、出土した土器片から6世紀後半頃と考えられる(第113図)。

**竪穴式住居跡 S H207** S H206の南隣りで検出し、7基の竪穴式住居跡の中では、最も標高の低いところに位置する。住居跡の半分以上が攪乱されているため、残存状況はよくない。住居跡の検出長は約4.5mである。

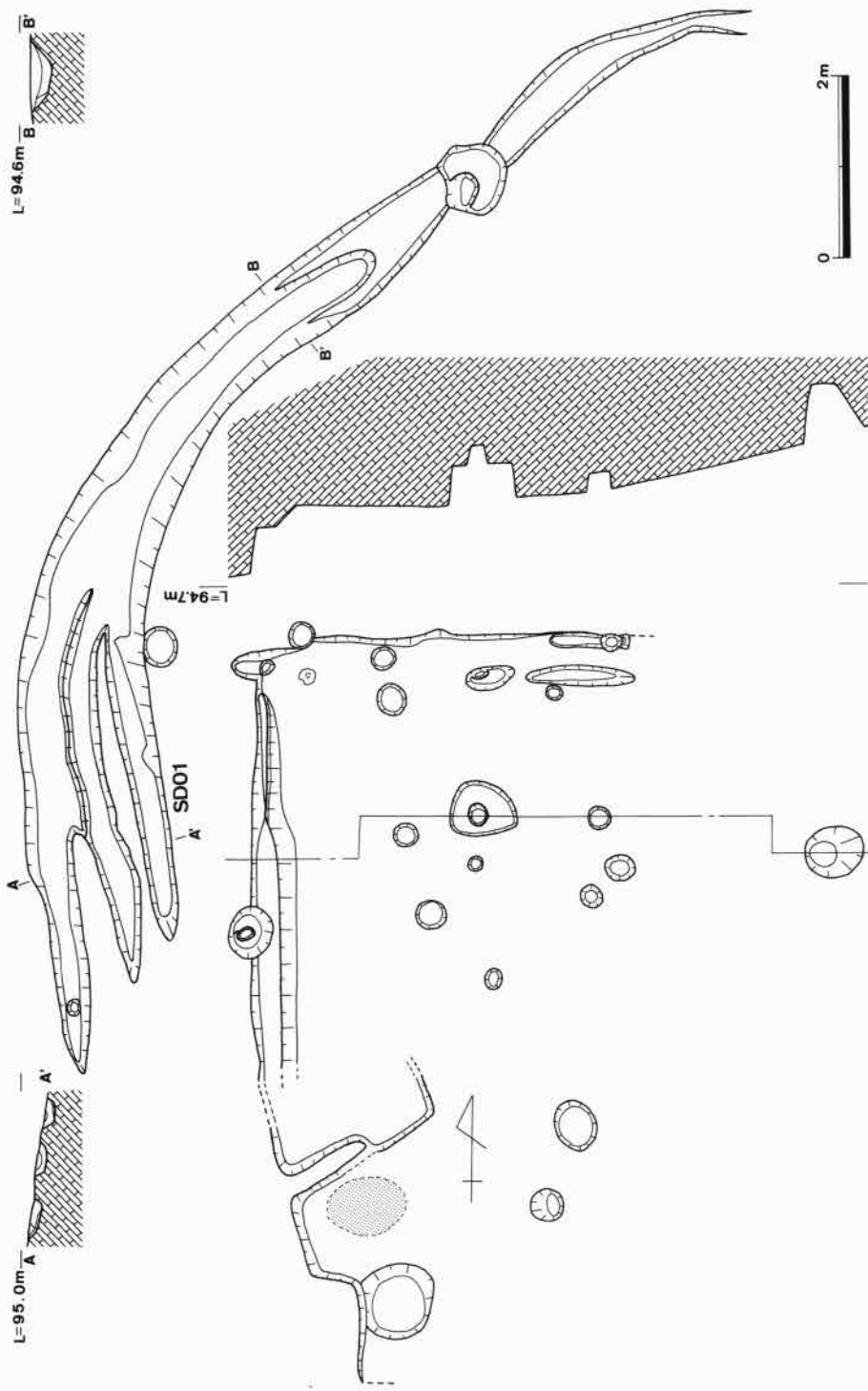
主柱穴は3本で、その心々距離はそれぞれ2m前後であることや、主柱穴の直径が50~60cmであることなどから、大型の住居跡となる可能性が高い。床面の周囲に周壁溝がある。住居跡を取り囲む溝は検出できなかった。住居跡の時期は、出土した土器の細片から6世紀後半頃と考えられる(第113図)。

**竪穴式住居跡 S H212** S H205の北隣りに位置する。包含層が厚く堆積し、地表下約1.1mのところを確認した。残存状況はよくないが、床面の傾斜変換点から考えて、約4.2m×4.6mの方形と考えられる。西壁の周囲に途切れ気味に周壁溝が続く。主柱穴は、判然としない。床面の南側付近から完形な甕が出土している。住居跡の時期は、出土した土器から庄内併行期頃と考えられる(第114図)。

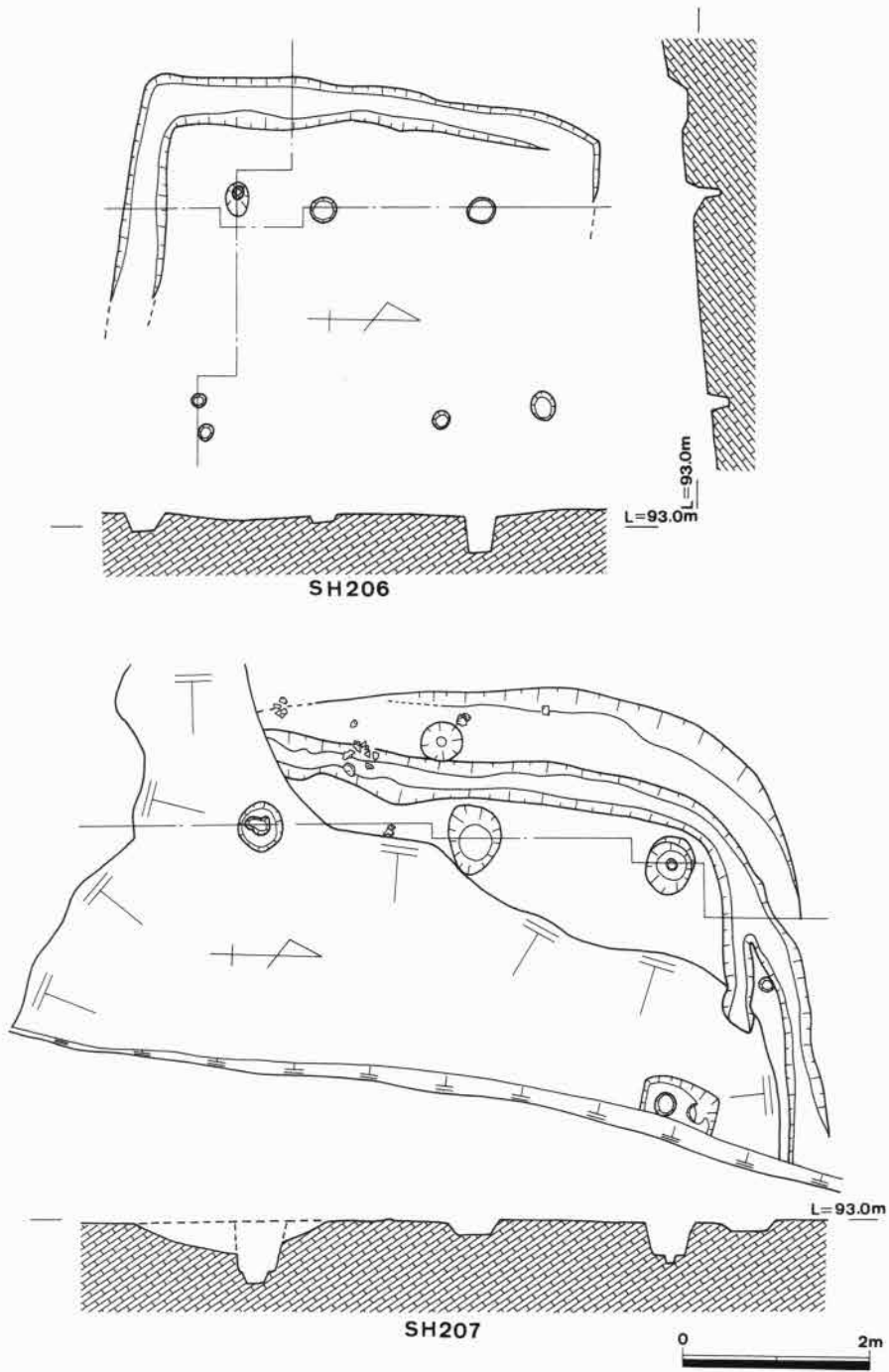
以上がA-2地区で確認した竪穴式住居跡群の概略である。この地区の住居跡の特徴は、排水溝を伴う点である。また、冒頭でも記述したように、住居跡が3地区に集中する結果となっている。SH212以外は、6世紀後半頃の中に収まる。溝の切り合い関係から、6世紀後半頃の中で時期差が存在する。その結果、SH201→204→202の順に時期が新しく



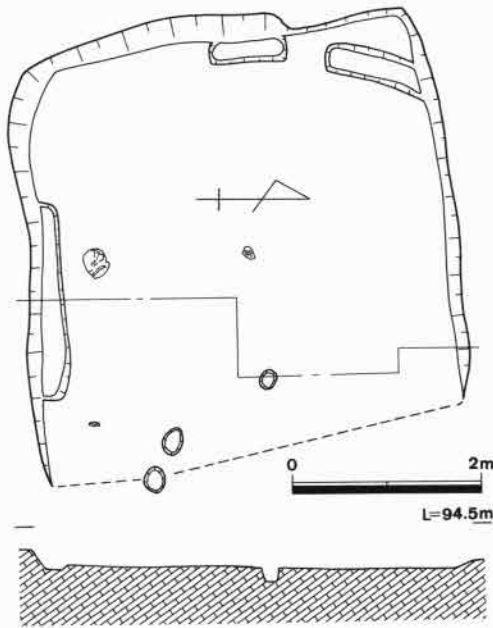
第111図 SH204実測図



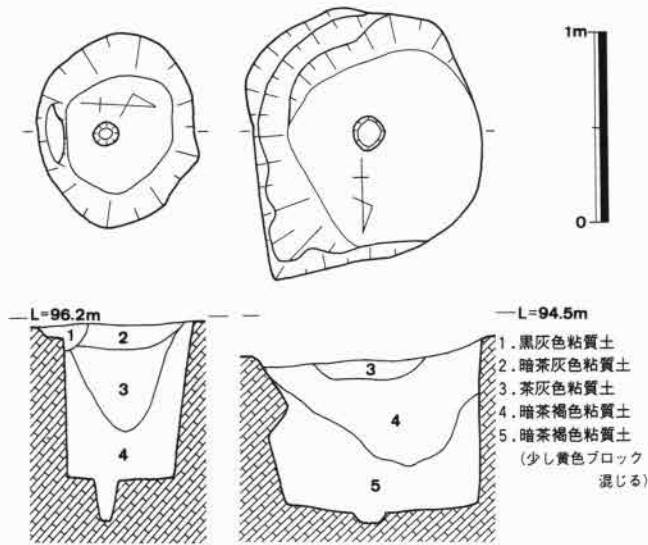
第112図 SH 205実測図



第113図 S H206・207実測図



第114図 S H212実測図



第115図 A-2地区 S K02(左)・S K01(右)実測図

A-3地区 A-3地区は、台地西側緩斜面南側のトレンチである。面積は、約630m<sup>2</sup>である。トレンチの東端と西端の比高差は1.2m前後となっており、かなり平坦地に近いところである。トレンチの東半部は削平が激しく、西半部は遺構・遺物が良好に残存している。ここもA-2地区と同様、西側縁辺部付近に竪穴式住居跡が集中する。

なる。S D10を住居跡に伴うものと考えた場合、S H201と204の間か、204と202の間にもう1基入りこむことになる。

**落とし穴状土坑 S K01** S H205の北隣りに位置する。平面形はいびつな楕円形で、長軸約1.3m・深さ約98cmを測る。底部中央に直径約16cm・深さ約6cmのピットがある。出土遺物がなく時期は不明だが、落とし穴として利用していた可能性がある(第115図)。

**落とし穴状土坑 S K02** S H203の北西に位置する。平面形は楕円形で、長軸約1m・深さ約1.02mを測る。底部南側に直径約14cm・深さ約22cmのピットがある。

出土遺物がなく、時期は不明である。落とし穴として利用していた可能性がある(第115図)。

**溝 S D05** トレンチの北辺中央部から西方に流れる。陶磁器類の細片から13~14世紀頃と考えられる。

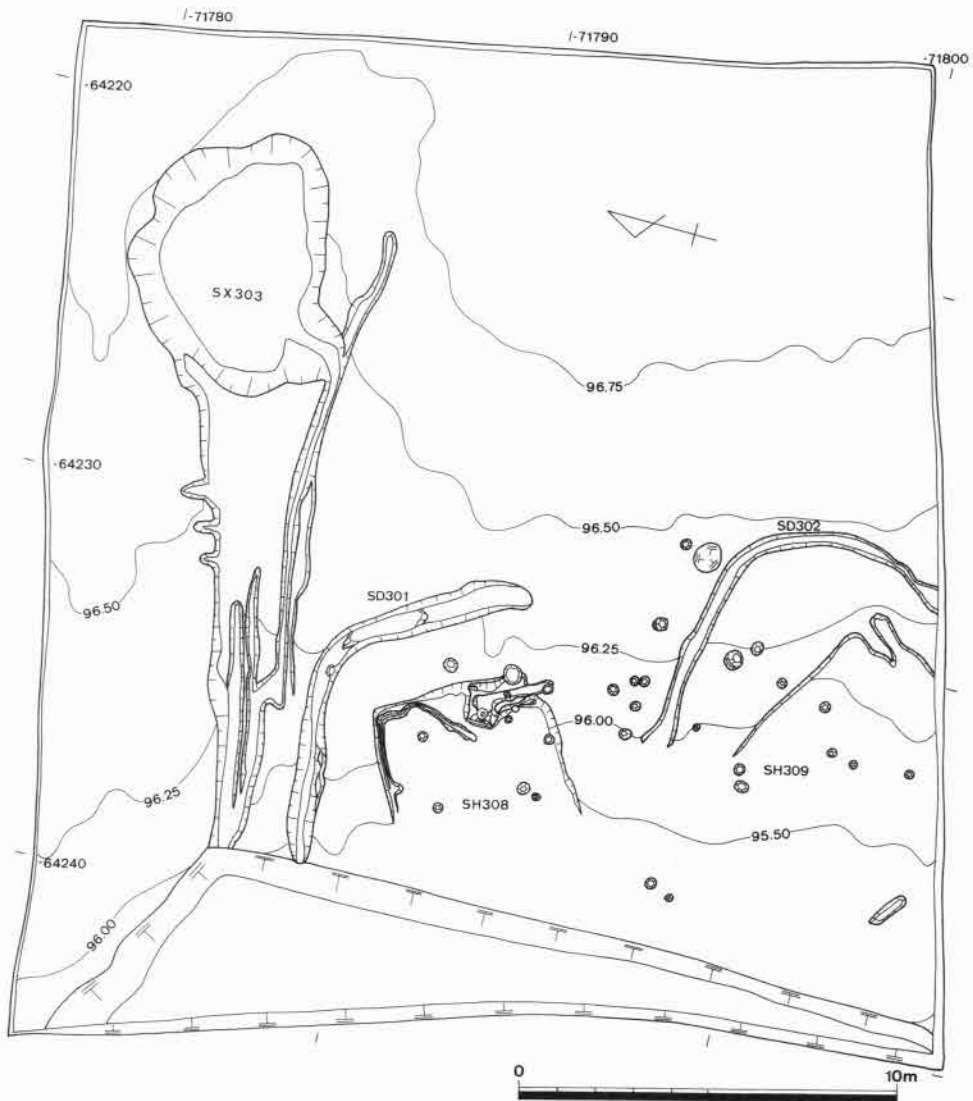
**溝 S D06** S D05の西隣りに位置する。出土遺物がなく時期は不明である。



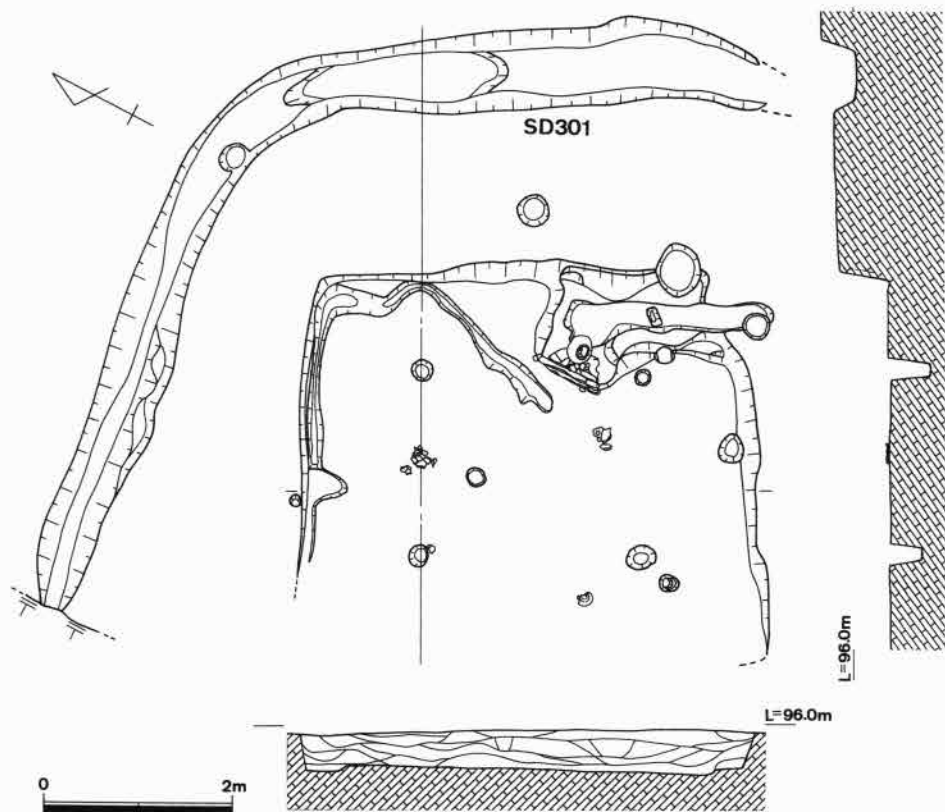
ここからは、古墳時代後期頃の溝を伴う竪穴式住居跡2基・中世の池状遺構などを検出した。以下、各遺構ごとに概略を報告する(第116図)。

**竪穴式住居跡S H308** トレンチ中央西端で検出したものである。西側は削平のため、正確な住居跡の大きさは不明であるが、約4.6m×4mの方形と考えられる。残存壁高は、東側で残りがよく約52cmを測る。北壁の裾に周壁溝がある。支柱穴は4本で、径20cm前後・深さ40cm前後となっている。

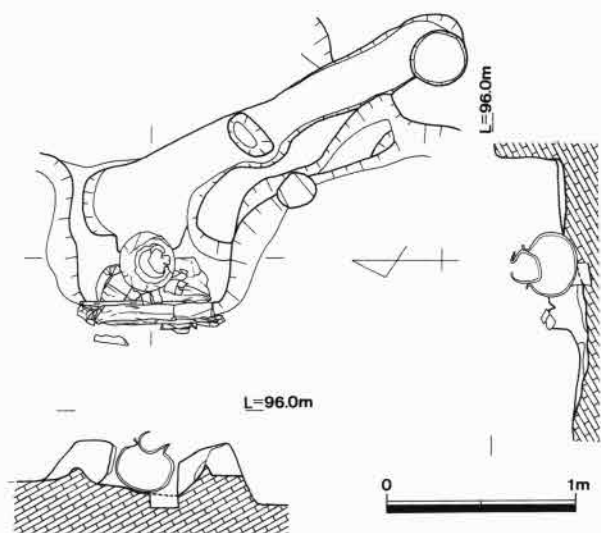
この住居跡は、南東隅に地山を掘り残し、そこに造り付けの竈を築く、いわゆる「青野



第116図 A-3地区遺構配置図



第117図 S H308実測図



第118図 S H308竈実測図

型住居」と呼ばれるものである。竈の構造は次のとおりである。地山を山形状に残し、そこに扁平な自然石を土台にする。そのまわりに、濁黄褐色粘土で竈を形づくる。竈の大きさは、幅約50~52cm・高さ約20~22cmである。甕2個体が竈にかけられた状態で出土している。住居跡の東側から西側にかけて溝SD301がほぼ半周する。その規模は、幅約50~80cm・深さ40cm前後である。SD301の屈曲した

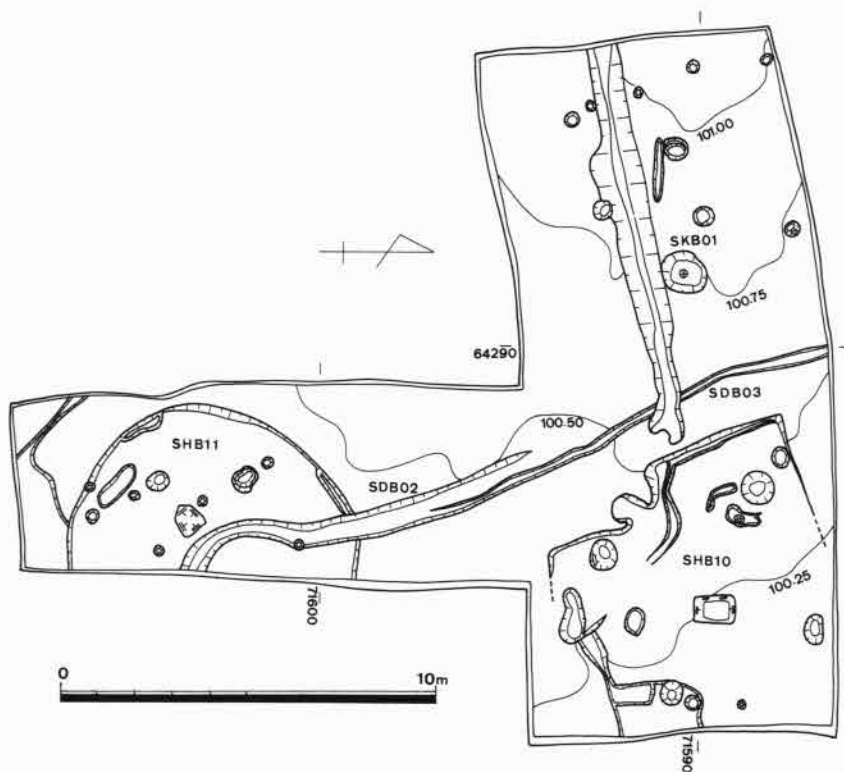
付近の埋土上層から土師器の甕が出土している。住居跡・溝の時期は、出土した土器から7世紀前半頃と考えられる(第117・118図)。

**竪穴式住居跡309** トレンチ南端で検出した。残存状況が悪く、大きさは不明である。こちら、「青野型住居」と思われる。住居跡を取り囲む溝S D302は、幅約20~50cm・深さ40cm前後である。どちらも、排水溝として利用されていたものと考えられる。住居跡・溝の時期は、出土した土器から6世紀後半頃と考えられる。

**池状遺構S X 303** トレンチ北東隅で検出したものである。平面形は楕円形である。長軸約7m・深さ約40~60cmである。瓦質の播鉢が池状遺構からのびる溝内で出土した。15~16世紀頃と考えられる。

**B地区** B地区は、A地区の北西の丘陵裾の平坦部である。面積は約410m<sup>2</sup>である。標高100m余りで、東側は急崖を形成している。ここからは、古墳時代前半頃の竪穴式住居跡1基、古墳時代後半頃の竪穴式住居跡1基、時期不明の落とし穴状土坑1基などを検出している(第119図)。

**竪穴式住居跡SHB10** トレンチ北東隅付近で検出したものである。東側の壁は、削平



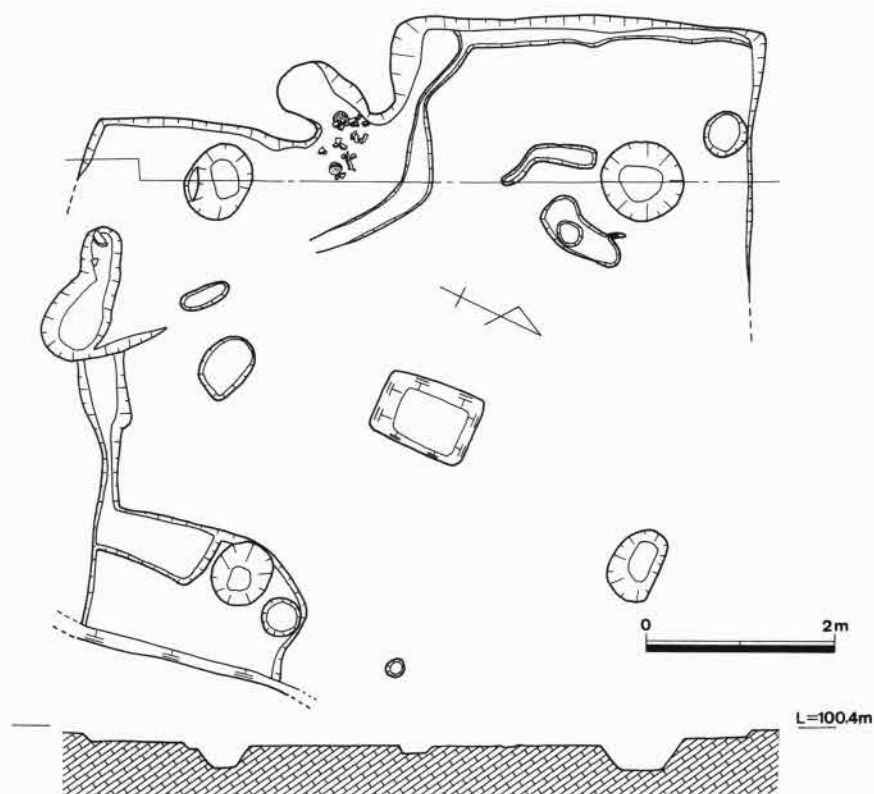
第119図 B地区遺構配置図

のため残存していない。西側の一辺は、約6.4mを測る。主柱穴は4本で、残存壁高は約25cmである。住居跡の形態から「青野型住居」と呼ばれるものである。竈から甕が出土した。住居跡の時期は、出土した土器から6世紀中頃と考えられる(第120図)。

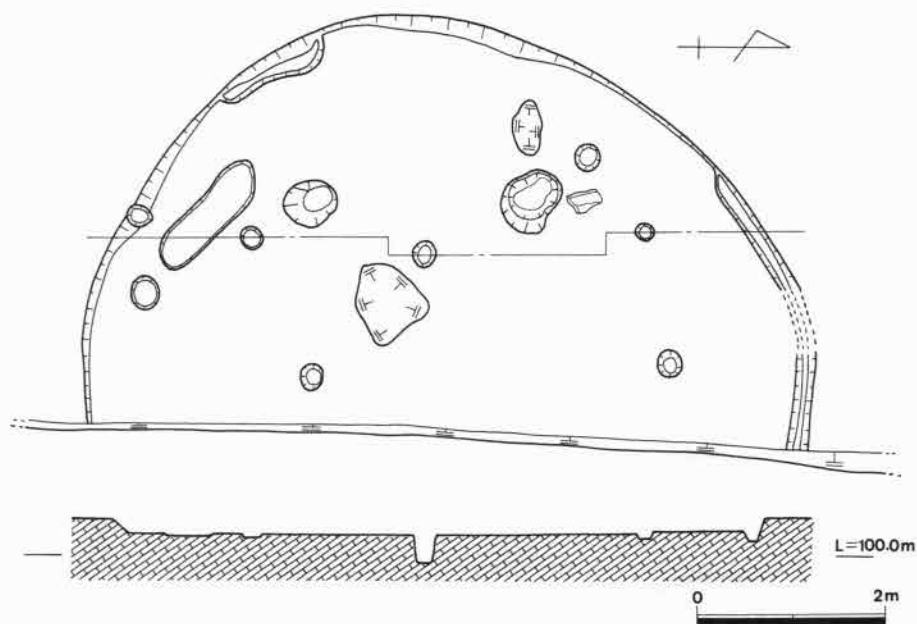
**竪穴式住居跡 SHB11** トレンチ南側で検出したものである。検出状況から、直径約7.6mの円形の住居跡になると思われる。残存する壁高は約16cmで、その周囲に途切れ気味ながらも周壁溝がめぐる。住居跡の時期は、出土した土器からみて、庄内式併行期頃と考えられる(第121図)。

**落とし穴状土坑 SKB01** トレンチ中央部で検出したものである。平面形は楕円形で、長軸約94cm・深さ約54cmを測る。底部中央に径約20cm・深さ約4cmのピットがある。時期は不明である。落とし穴として利用されていた可能性がある(第122図)。

**溝 SDB02** SHB11を横切り、検出長約10mを測る。溝の大きさは幅約70~80cm・深さ10cm前後である。溝の北端付近で土師器の甕が出土した。細片が多く、時期は決定しがたいが、各遺構の関係から6世紀頃になると推定できる。



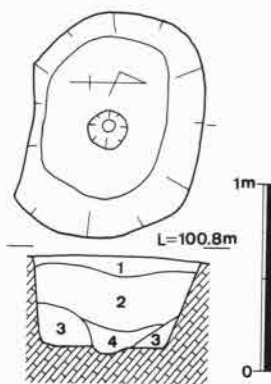
第120図 SHB10実測図



第121図 SHB11実測図

#### 4. 出土遺物

A-1地区 1～5は、谷SD101の包含層出土遺物である。1・2は、TK43～209並行期、3はTK43並行期のものと考えられる。1は、須恵器の杯蓋で、口縁端部を丸くおさめる。2は、須恵器の杯蓋で、口縁端部をシャープにおさめる。3は、須恵器の杯身で、受け部を水平気味に仕上げ、口縁端部を丸くおさめる。4は、土師器の甕の口縁部である。口縁部をゆるやかに外反させている。5は、土師器の鉢である。底径約15.9cmを測る。6～9は、池状遺構SX102出土遺物である。6・7は青磁、8は白磁、9は陶器片である。時期は決定しがたいが、13～14世紀頃のものと考えられる(第123図)。

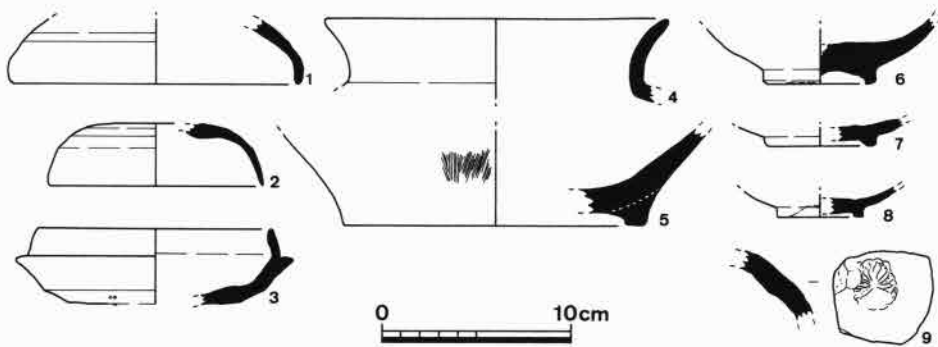


第122図 SKB01実測図

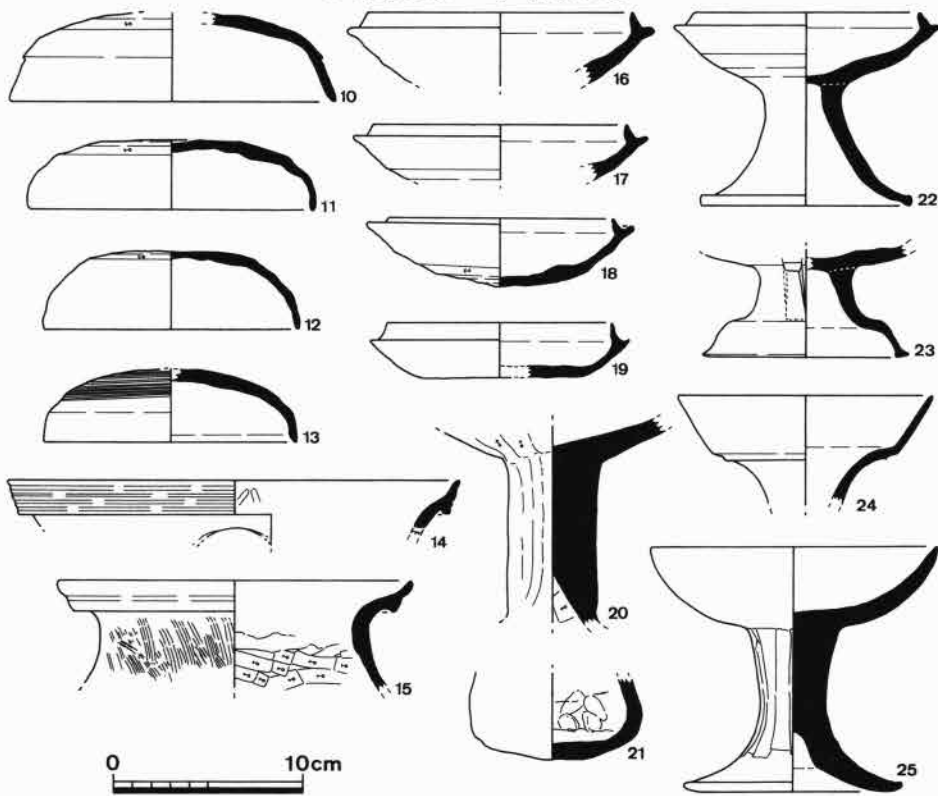
1. 表土
2. 濁黄褐色土と褐色土が斑点状に混じる
3. 黄褐色粘質土
4. 灰色粘質土

#### A-2地区

**包含層遺物** この地区の包含層が堆積している地域を、12トレンチを含む一帯と9トレンチを含む南端に大別している。前者を北包含層地域、後者を南包含層地域と呼ぶ。北包含層地域の遺物は10・14・15・17・21・23で、南包含層地域の遺物は11～13・16・18～



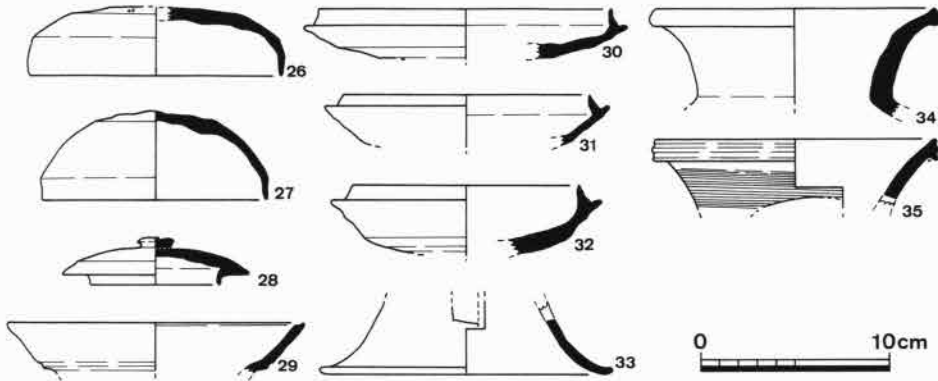
第123図 A-1地区出土遺物実測図  
1~5. S D101 6~9. S X102



第124図 A-2地区包含層遺物実測図

10・14・15・17・21・23. A-2北包含層 11~13・16・18~20・22・24・25. A-2南包含層

20・22・24・25である。10はTK43併行期、13・19はTK43~209併行期、12・17はTK209併行期のものと考えられる。10は、須恵器の杯蓋で、体部と口縁部とを分ける稜に一条の沈線を施し、口縁部は外方に広がる。11は、須恵器の杯蓋で、口縁部をやや内傾気味に仕上げています。12は、須恵器の杯蓋で、天井部全体に右まわりのヘラ削りを施す。13は、



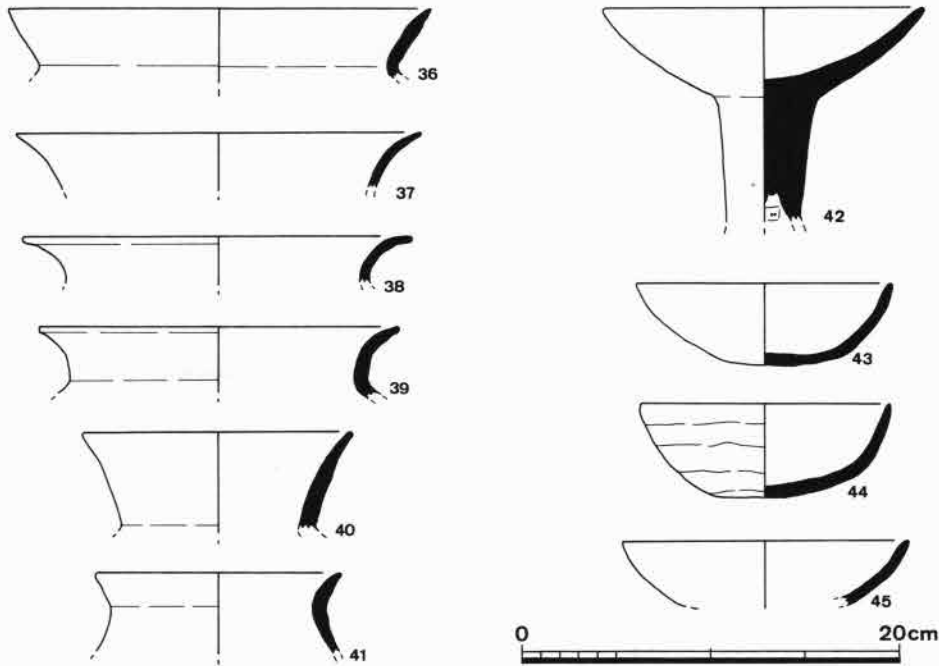
第125図 A-2地区住居跡出土遺物実測図(1) 須恵器

26・28・32・34. S H207 27・33. S H205 29. S H201 30・31. S H202 35. S H203

須恵器の杯蓋で、器高の約1/2あたりまでカキ目を施している。16～19は、須恵器の杯身である。16・17・18は、受け部を肥厚させている。19は、受け部をややシャープに仕上げている。14・15は、畿内第V様式併行期のもと考えられる。14は、裝飾器台の口縁部片である。口縁に4条の擬凹線を施し、直径約3cmのスカシが確認される。15は、甕の口縁部である。体部に斜め方向のハケ目を施す。20・25は、土師器の高杯で、脚部に縦方向のヘラ削りを施す。21は、土師器の小型の椀状のものである。残存器高は、約4.25cmを測る。22・23は、須恵器の短脚の高杯である。時期は特定しがたい。24は、須恵器の甕の口頸部である(第124図)。

**竪穴式住居跡出土遺物(須恵器)** 26・30・31・32はTK43～209併行期、27はTK209併行期と考えられる。28は時期不明。26は杯蓋で、天井部と口縁部を分ける稜が明瞭に残る。27は杯蓋で、体部から口縁部にかけてナデを施す。28は、長頸壺の蓋である。天井頂部に扁平な宝珠つまみがつく。30～32は、杯身である。30は、口縁端部を丸くおさめる。31・32は、ややシャープ気味に仕上げている。29は、甕の口頸部である。33は、高杯の裾部である。短脚1段透かしと思われる。34は、甕の口頸部で、口縁端部を丸く肥厚させる。35は、甕の口頸部で、口頸部下方に径約4cmの穿孔を施している(第125図)。

**竪穴式住居跡出土遺物(土師器)** 36～39・41は、甕の口縁部である。36～41は、一緒に出土した須恵器から6世紀後半頃のもと考えられる。36は、口縁部を外方に開く。37は、口縁部を外反気味に仕上げている。38は、さらに外反が激しくなる。39は、口縁端部を丸くおさめる。41は、口縁端部をゆるやかに外反させている。40は、壺の口縁である。口縁部を直線上に仕上げ端部を丸くおさめる。42は、裾部を欠いた高杯である。磨耗が激しく調整は不明である。43～45は、杯である。43・45は、口縁端部を丸くおさめるのに対して、



第126図 A-2地区住居跡出土遺物実測図(2) 土師器

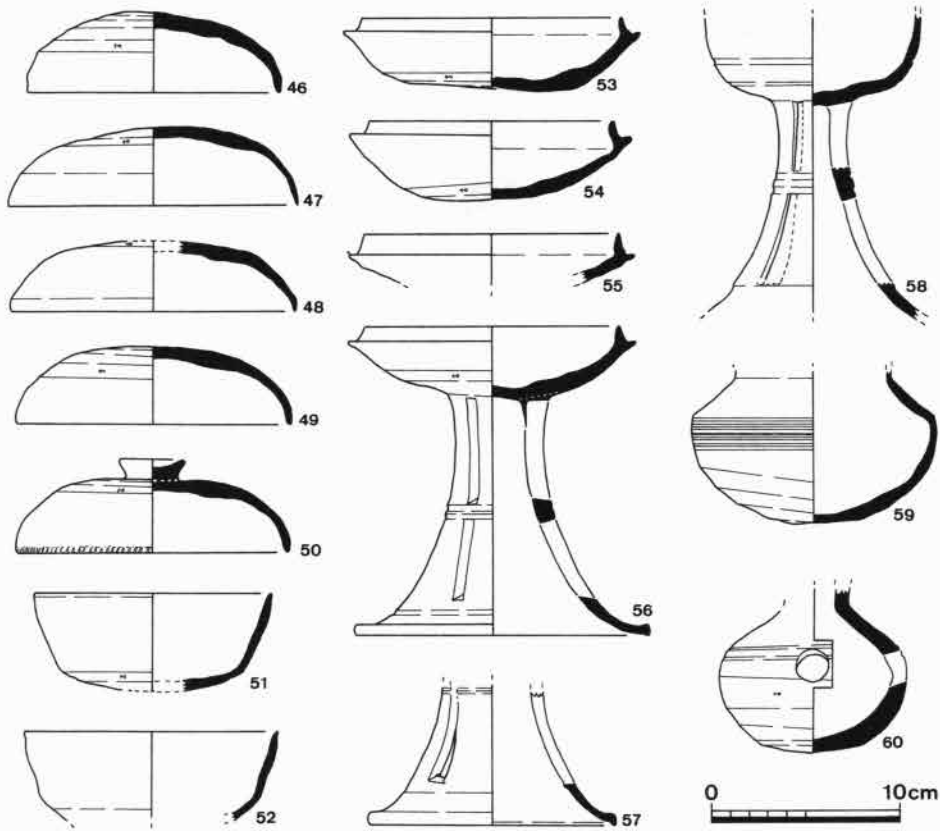
40・41. S H201 37~39・43・45. S H202 36. S H203 44. S H204 42. S H205

44はシャープにおさめている(第126図)。

溝出土遺物(須恵器) 51・52はT K209併行期、55はT K43併行期、46~49・53・54はT K43~209併行期、50・56・58はT K209併行期と考えられる。57・59・60は残存状態が悪く時期は不明である。51・52は、杯身である。51は、口縁端部を丸く仕上げるのに対して、52はやや外反気味に口縁端部を先細く仕上げている。50は、天井頂部に扁平なつまみがつく。口縁部にヘラガキ状の調整を施している。55は、受け部を水平気味に仕上げている。46・48は、口縁部が垂下する。47は、口縁部が外方になだらかに広がる。49は、それらの中間と思われる。53・54は、どちらも口縁端部を丸く仕上げている。56は、有蓋高杯で、裾部を大きく外方に広げる。58は、杯部が消失しているため、有蓋か無蓋かは不明である。56に比べて杯の稜が急激に外方に向かう。57は高杯の裾部である。60は、甕の体部である。体部中央に直径約1.7cmの円孔がある(第127図)。

溝出土遺物(土師器) 61~70は、一緒に出土した須恵器から6世紀後半頃と考えられる。61~64は、椀である。61は、底部から体部にかけて急激に立ち上がる。62~64は、球形に近い体部をもつ。65は、甕の口縁部である。口縁部から体部にかけての稜は、受け口状になる。66は、高杯である。全体に磨耗が激しく、調整は明確ではない。67は、器種不明。



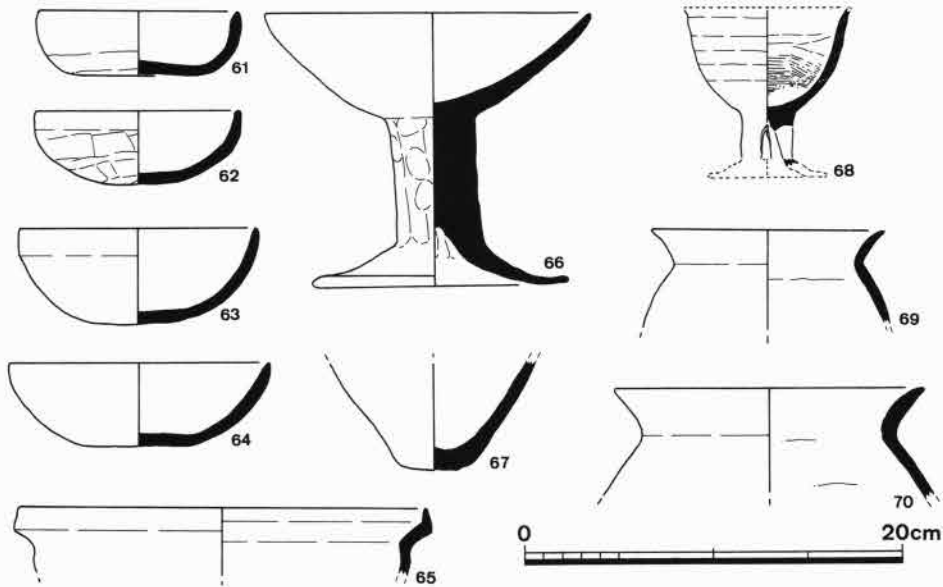


第127図 A-2地区溝出土遺物実測図(1) 須恵器

48・53. S D01 47・54. S D03 46・50・56~59. S D10 60. S D11  
49・51・55. S D13 52. S D15

内面は、黒褐色を呈する。68は、台付き椀である。脚部に細長い三角形状のスカシがある。69・70は、甕の口縁部である。69は、口縁部をやや外反気味にしている。70は、口縁部を上下に肥厚させている(第128図)。

竪穴式住居跡SH212出土遺物 71~73・77~81は、庄内式併行期と考えられる。74~76は、時期を決めかねる。71は、甕である。体部の最上部から横方向の削りが体部下半まで、さらに底部にかけては縦方向の削りが施される。底部は、わずかに平底が残る。72は、口縁端部が上下に肥厚した甕である。73は、広口壺の口縁部である。受け口状の口縁部は端部をやや上下に肥厚させている。体部内面に横方向の削りを施す。74は、平底の鉢か甕の底部断片である。外面にはわずかにハケ目が残る。75は、球形に近い体部をもつ土師器杯である。76は、器台の脚部から受け部にかけての断片である。77~80は、高杯である。77は、裾部を欠いているが、脚部外面に縦方向のミガキが施される。78・79は、口頸部片



第128図 A-2地区溝出土遺物実測図(2) 須恵器

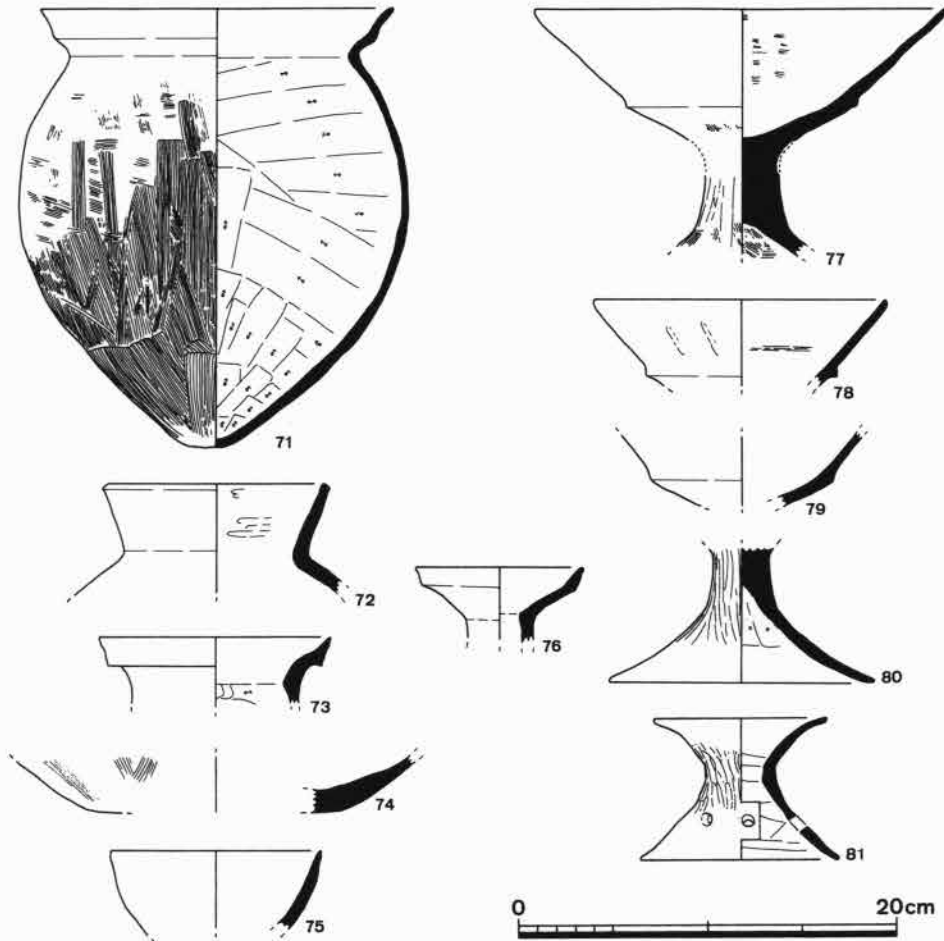
61・67. S D01    62・66. S D03    69・70. S D10    63. S D11  
64・65. S D13    68. S D16

である。80は、脚部から裾部にかけての断片で、脚部外面に縦方向のミガキが施されている。81は、器台である。体部下方に直径約5mmの透かし穴が2か所認められる(第129図)。

#### A-3地区

**竪穴式住居跡出土遺物** 88はTK217併行期、89はTK209~217併行期と考えられる。88は、須恵器の杯蓋で、体部と口縁部との稜は不明瞭である。89は、須恵器の杯身である。口縁端部と受け部とも肥厚させている。82~84・90・91は、土師器の甕である。82は、口縁端部を丸く肥厚させているのに対して、83は、やや先細り気味に仕上げている。84は、口縁部全体が厚く仕上げられている。90は、体部全体に斜め方向のハケ目を施している。91は、体部外面に縦方向のハケ目を施す。体部中央に縦約10cm・横約13cmの範囲に煤が付着している。甕91の上に甕90を乗せた状態で出土した。85~87は、土師器の杯である。85・87は、球形に近い体部をもつが、86は口縁部から体部にかけての稜が直線的になる。92は、甌である。体部全体に指ナデ後縦方向のハケ目を施し、体部最下方に直径約5mmの円孔が4か所認められる(第130図)。

**溝出土遺物** 93~102は、一緒に出土した須恵器から7世紀前半頃のものと考えられる。103は同じ理由から、6世紀後期頃と考えられる。93~101までは、土師器の甕である。93は、体部外面に縦方向のハケ目を、内面にハケ後削りの調整を施す。94は、体部外面に縦方向のハケ目を、内面は上段に横方向のハケ目を、下段に横方向の削りを施す。95は、体

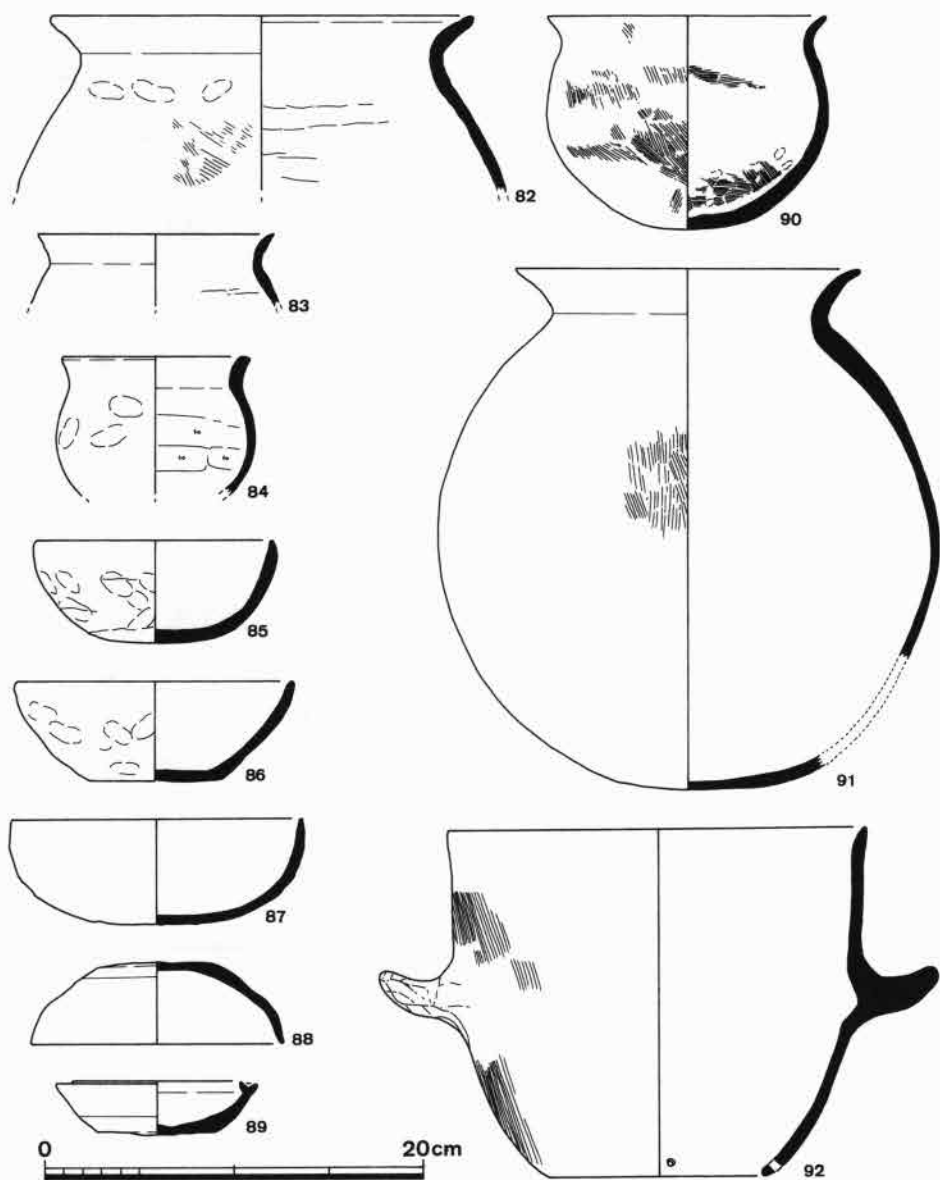


第129図 S H212出土遺物実測図

部外面に縦方向のハケ目を施す。96・97は、口縁端部を肥厚させている。96は、なだらかな体部をもつが、97はやや直線的な体部をもつ。98・101は、ともに口縁端部を肥厚させているのに対して、99・100は先細りな口縁端部をもつ。102は、土師器の杯である。体部下方から上方にかけて斜め方向のヘラ削りが認められる。103は、土師器のミニチュア土器である(第131図)。

#### B地区

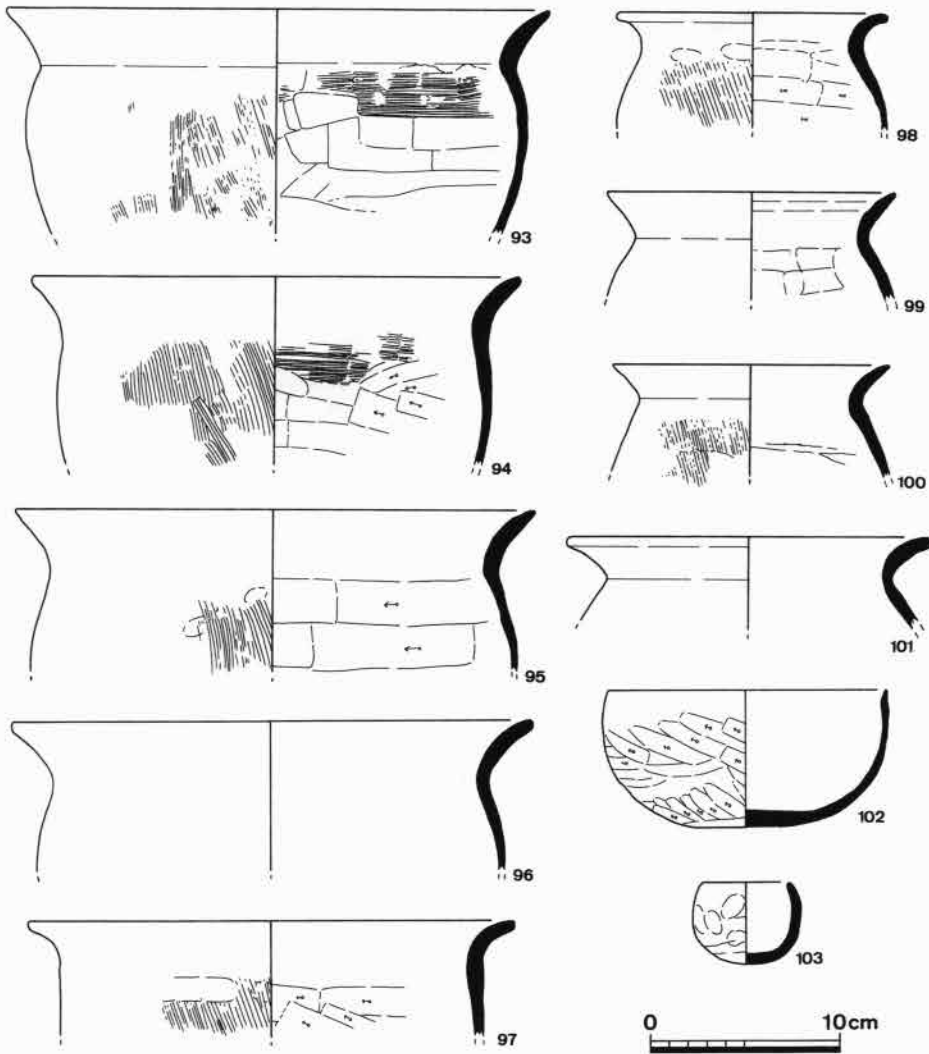
104は、TK43併行期と考えられる。天井部と口縁部を分ける稜に一条の沈線が見える。105は、土師器の椀である。磨耗が激しいため、調整は不明。106は、土師器の甑である。体部外面に斜め方向のハケ目を、内面に斜め方向の削りが施される。107は、磨耗が激しいため、調整などが不明瞭だが、庄内式併行期と考えられる。わずかに、口縁部に2条の擬凹線が認められる。108は、土師器の裾部を欠いた高杯である。脚部に縦方向のミガキ



第130図 A-3地区住居跡出土遺物実測図

82・83・85・88・90~92. S H308 84・86・87・89. S H309

が認められる。109は、土師器の甕の口縁部から体部にかけての断片である。体部外面に縦方向のハケ目が施される。105・106・108・109は、一緒に出土した須恵器片から6世紀前半頃のものと考えられる(第132図)。

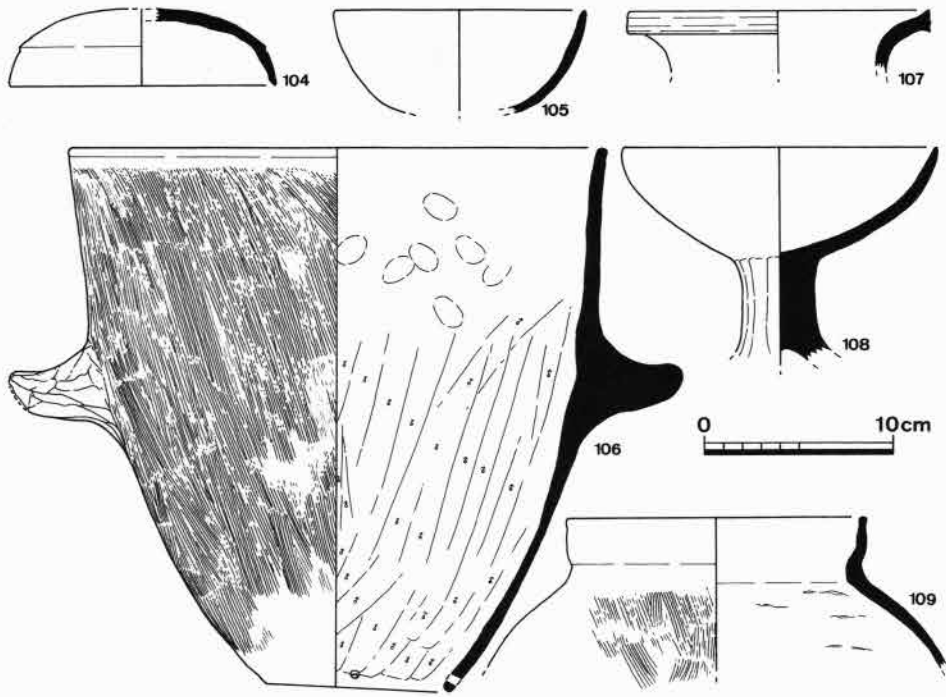


第131図 A-3地区溝出土遺物実測図  
93~101・103. S D301 102. S D302

#### 4. 小結

由良川の支流である八田川の流域には、先に述べたように、数多くの古墳が分布している。七百石遺跡の周辺にも、綾部市最大の前方後円墳である高槻茶臼山古墳をはじめ、奥大石古墳群・政次古墳群・野崎古墳群・塚廻り古墳群など、古墳時代中期から後期にかけての古墳が散在している。このように、古墳の存在は知られていたが、集落跡についてはほとんど未知の状況であった。今回調査した七百石遺跡は、八田川流域で確認された集落跡の初例といえる。

今回検出した住居跡は、弥生時代終末または古墳時代初期頃と古墳時代後期のTK43～



第132図 B地区出土遺物実測図

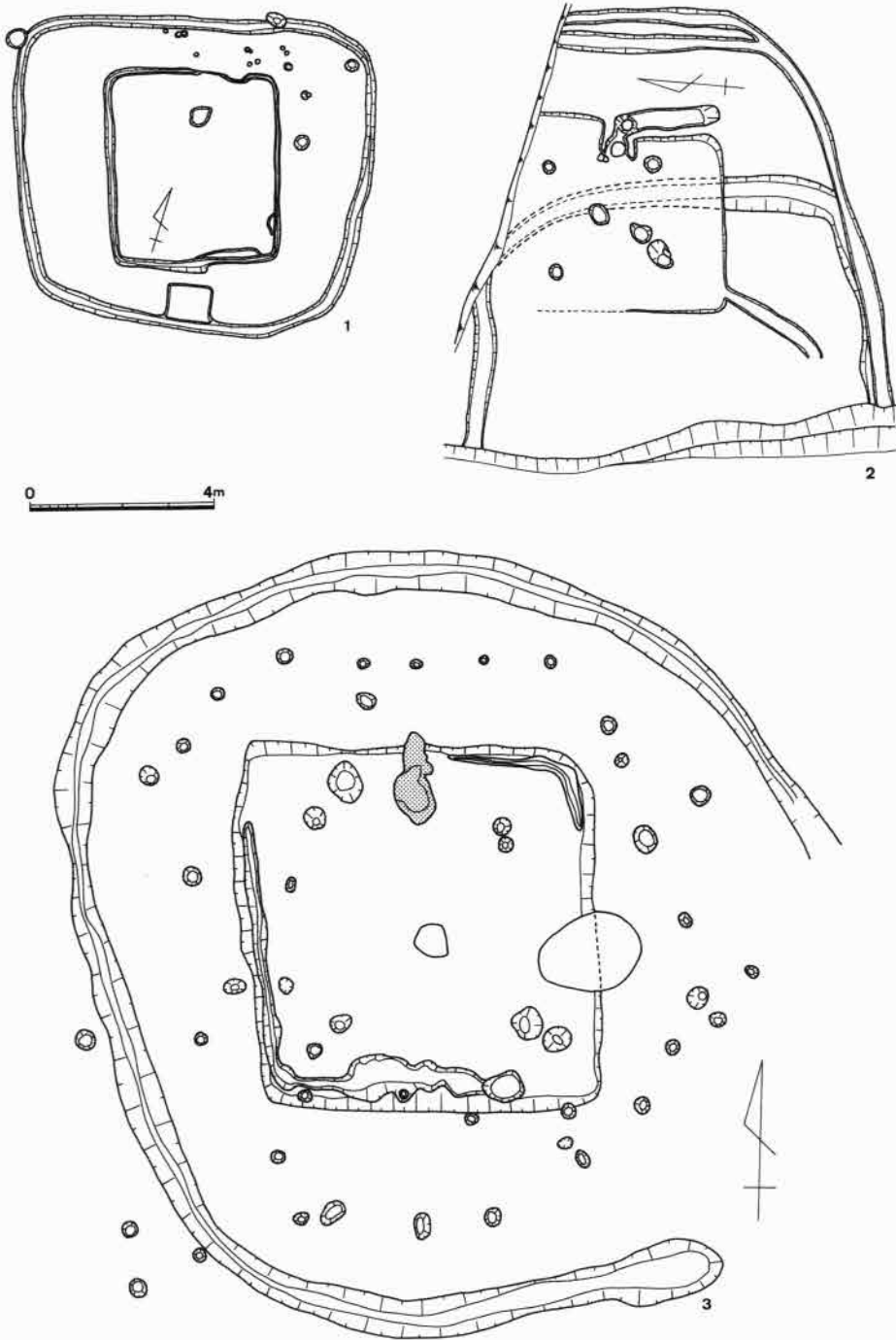
104・105・109. S HB10 106. S DB02 107. S DB11

TK209型式併行期頃の2時期に大別できる。今回の調査地から、谷をへだてた東側の洪積台地には塚廻り古墳群が点在している。このうち、過去に調査された塚廻り3号墳は後者の時期にはほぼ併行しており、時期的にも位置的にも今回検出した集落跡と塚廻り古墳群とは何らかの関連があるものとも考えることもできる。このように、七百石遺跡は周辺の古墳時代を考える上で重要な遺跡といえる。

今回検出した住居跡の中には「青野型住居」と通称されているものが含まれる。このような住居跡は、由良川中流域に位置する青野遺跡で検出されていたが、近年、その他の地域にも分布することが確認されつつある。今回は、由良川支流の八田川を北側にかなりさかのぼった地域にも分布することを確認した。

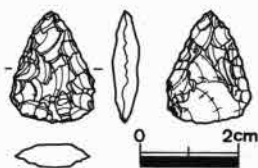
A-2地区から出土した石鏃は、縄文時代のもと考えられる。今回の調査では時期不明の落とし穴状土坑を検出しているが、これらも、あるいはその時期のもとも考えることもできる。この遺跡の始まりは、さらに縄文時代までさかのぼる可能性がある(第134図)。

七百石遺跡の遺構の特徴の一つに、竪穴式住居跡の周辺に溝をめぐらせることがあげられる。住居の周囲に溝をめぐらす例は、京都府内で5例目となる(第133図)。他の例は、古墳時代前期の上人ヶ平遺跡<sup>(E12)</sup>、古墳時代後期の温江遺跡<sup>(E13)</sup>・三宅遺跡<sup>(E14)</sup>・広峯遺跡<sup>(E15)</sup>である。こ



第133図 外周溝を伴う住居跡参考図

1. 上人ヶ平遺跡 2. 三宅遺跡 3. 広峯遺跡



第134図 A-2地区南  
包含層石鏃実測図

のうち、七百石遺跡と三宅遺跡は、丘陵や台地の斜面部に位置している。斜面部の集落の場合は、住居に雨水が入らないようにするための施設と考えるのが自然である。すなわち、立地条件が住居の形態を決定する一因になっているといえよう。上人ヶ平遺跡・温江遺跡・広峯遺跡では、丘陵や台地・低位段丘上の平坦地に位置している。これらの例は、単に立地条件のみに規定されているとは言えず、住居の形態など、

他の要素も考慮する必要がある。周囲に溝がめぐる住居跡は、主として西日本の弥生時代中期から後期にかけて増加し、古墳時代には急減する<sup>(註16)</sup>。このような住居跡については、時期・形態・立地などさまざまな方向から検討する必要がある。

(尾崎昌之)

注1 調査参加者

橋本 稔・前田暁宏・久保田琢磨・波部 健・佐々木勝・松浦郁乃・杉本直子・藤村瑞穂・清水千秋・清川彩子・石黒明美・片岡美絵・達田美枝・村上ひろみ・木村隆之・吉岡 譲・真下晴美・谷口成美・中村ひろみ・長田京子・白井宏美・田中美恵子・荻野富紗子・唐木裕香里・小滝初代・山中道代・林 秀子・牧野當子・松下道子・岡本美和子・村上典子・佐々木直・大島紀子・高田真由美・森川敦子・四方千佳子・塩尻陽子・福井裕子・白波瀬留美・立藤恵美子・佐藤健一・土井康雄・吉岡勇治・佐藤弘美・土井淑子・野田友子・真下朝野・真下幸江・水口和子・中西俊夫・岸田千鶴枝・小林孝枝・白波瀬とめ・白波瀬よしの・河北芳野・白波瀬繁夫・河北マサ子・加柴 保・加柴美知子・加柴フミ子・加柴花子・辻村伊太郎・辻村みね・志賀マサエ・梅原策太郎・梅原シゲ・梅原みつ子・梅原マツノ・坂根茂宏・辻村初男・梅垣カノエ・梅垣隆雄・辻村八郎・辻村ツタノ・志賀マスエ・千原芳和・辻村節子・坂根昭美・千原鈴子・倉橋俊雄・加柴正二・梅原幸江・梅原一枝・倉橋善美・千原マキノ・辻田志信・辻村道子・加柴京子・岡 稔・梅原トミ・加柴道代・倉橋ユキ枝・村木信子・梅垣文枝・氷室キクエ・堀川はま枝・神田スエ・逆瀬川健治・沖 保男・沖ヨシエ・渡辺みちえ・村上栖仁・藤田久枝・浪江昌子・村上芳子・関 勇・立藤則昭・白波瀬ヒサエ・三和てる・渡辺 功・渡辺千代子・岡垣太一・岡垣尚枝・谷口ツヤ子・福井和子・古沢ヨリエ・能勢栄一・相根寿美子・村岡きよ子・村岡一枝・佐々木三義・佐々木しず(順不同・敬称略)

注2 肥後弘幸・細川康晴「桑飼上遺跡昭和62年度発掘調査概要(第1次調査・試掘調査)」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注3 細川康晴・岸岡貴英ほか『京都府遺跡調査報告書』第19冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993

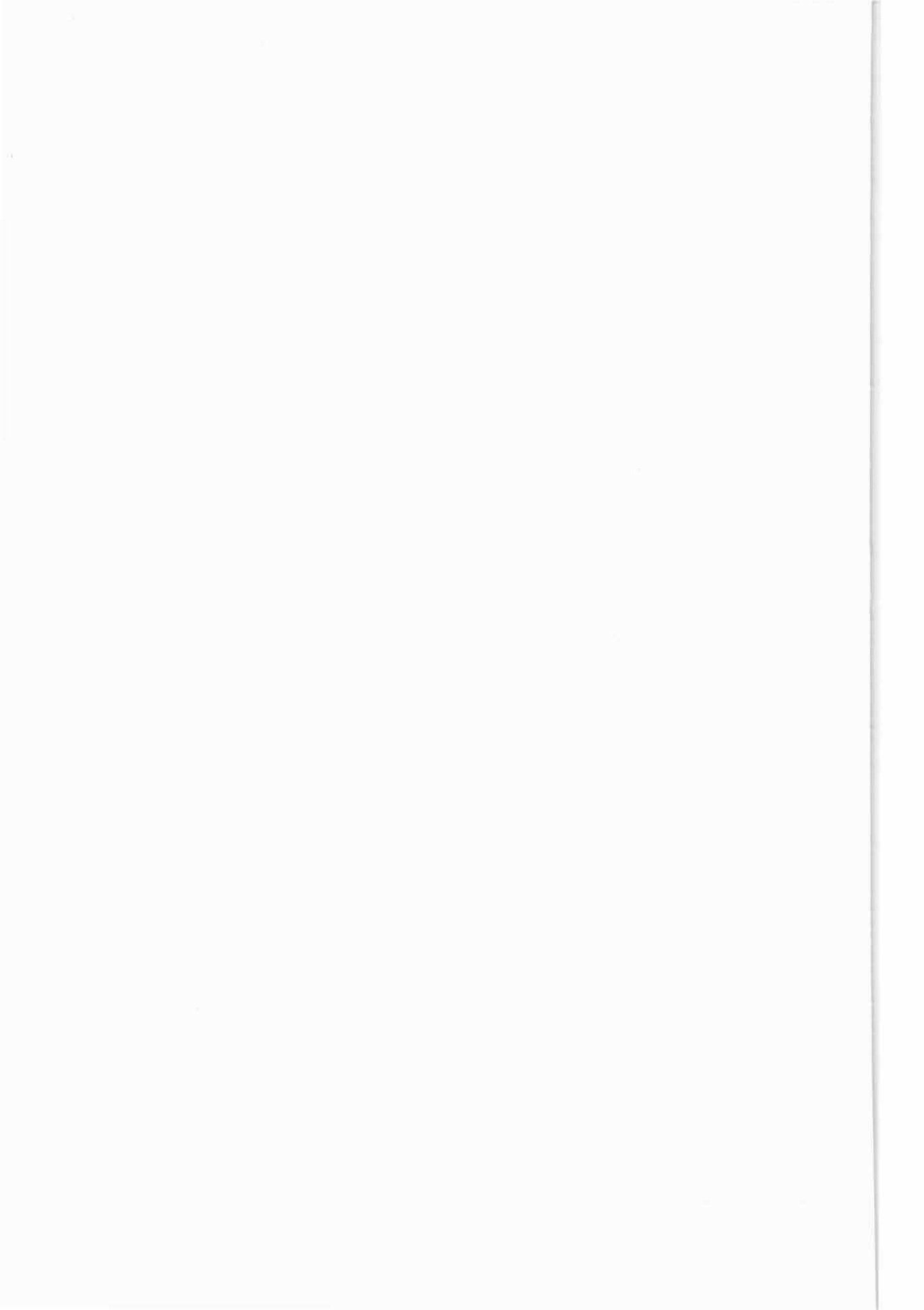
注4 注3に同じ。



- 注5 注1に同じ。
- 注6 岸岡貴英ほか「神宮古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注7 須恵器胎土の肉眼観察による分類は以下のとおりである。
- a群; 乳白色の角礫(1~2mm)を非常に多く含み、青灰色で焼成良好、堅緻。
  - b群; 黒色の光沢のある微細粒と白色の微細粒を含み、緑がかつた特徴のある青灰色で、焼成良好、堅緻。
  - c群; 乳白色の角礫(3~5mm)を含み、器表面に小さな黒斑状のにじみが無数にある。焼成良好、堅緻。
  - d群; 白色の角礫(1mm)を含み、黒色粒子がヘラ削りによって、尾を引く。淡青灰色、焼成やや良好。
  - e群; 白色及び乳白色の微細粒子を含み、胎土に砂が多い。肌色に近い淡灰褐色を呈し、焼成不良。
  - f群; 胎土が砂がちで粗く、焼成不良で表面が剝離するほど脆い。
- 以上の分類は土器観察表に記載した。
- 注8 須恵器の胎土の肉眼観察による分類は以下のとおりである。
- a群; 白色微細粒をわずかに含むほかは、造岩鉱物を含まない素材で焼成される。淡青灰色系の色調。
  - b群; 石英粒(2~3mm)を多く含み、その表出によって器表面に細かい亀裂が生じる。軟質の光沢のある黒色微粒子がヘラ削りによって、尾を引く。灰色系の色調。
  - c群; 白色砂粒(2~3mm)を非常に多く含み、これによって器表面に凸凹が生じる。
  - d群; 黒色タール状の物質が焼成時に吹きでる。緻密な胎土。
  - e群; 白色微細粒が含まれ、やや粗い胎土だが、焼成良好。漆黒色に近い特徴的な色調。
  - f群; 褐色のクサリ礫を多く含む。焼成はあまく、乳橙褐色系の色調。
  - g群; 堅い黒色鉱物を含む微細粒の多い胎土。器表面はこの微細粒の脱落で、あばた状に細かい穴が無数にある。
  - h群; 砂粒が含まれず、土師質に近い。焼成不良。灰白色、肌色に近い。
- 注9 坂本美夫「板状立開素環鏡板付鬚」『甲斐考古』21-2 1984
- 注10 第102図には横穴式石室が須恵器の確認された古墳のみを後期古墳として記入した。石室の形態や須恵器出土が未確認の群集墳などは記入していないため、後期古墳の実数はさらに増加するものと思われる。
- 注11 『京都府綾部市文化財調査報告』第7集 綾部市教育委員会 1980
- 注12 石井清司ほか「上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第15冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注13 温江遺跡で検出されたSH201の外周溝は排水溝か区画溝と考えられているが、七百石遺跡で検出されたものと同形態という点で排水溝を伴う住居跡とした(『京都府遺跡調査概報』第37

- 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990)。
- 注14 竹原一彦・三好博喜「近畿自動車道敦賀線関係遺跡 8次区間」(『京都府遺跡調査報告書』第18冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注15 「駅南地区発掘調査報告書」(『福知山市文化財調査報告書』第16集 福知山市教育委員会) 1989
- 注16 宮本長二郎「ベッド状遺構と屋内施設」(『季刊考古学』第32号 雄山閣) 1990

圖 版



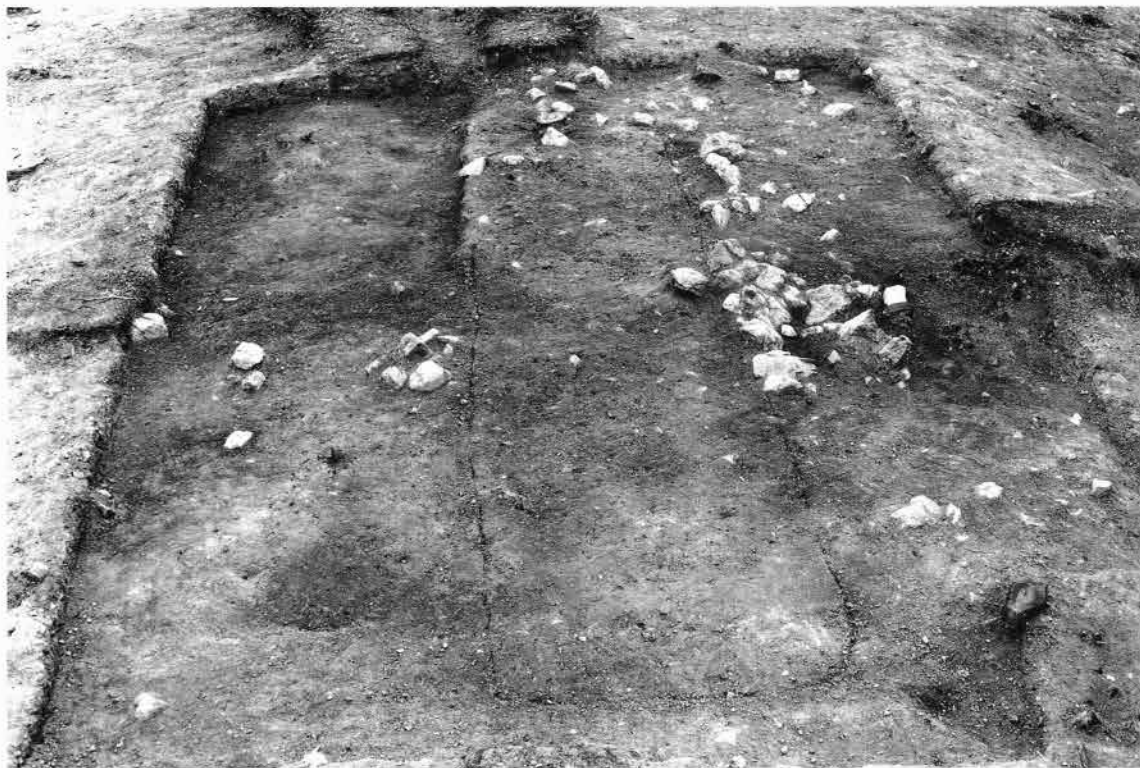
図版第1 今林古墳



(1) 調査前全景(北東から)



(2) 伐採後全景(北東から)



(1) 集石検出状況（西から）



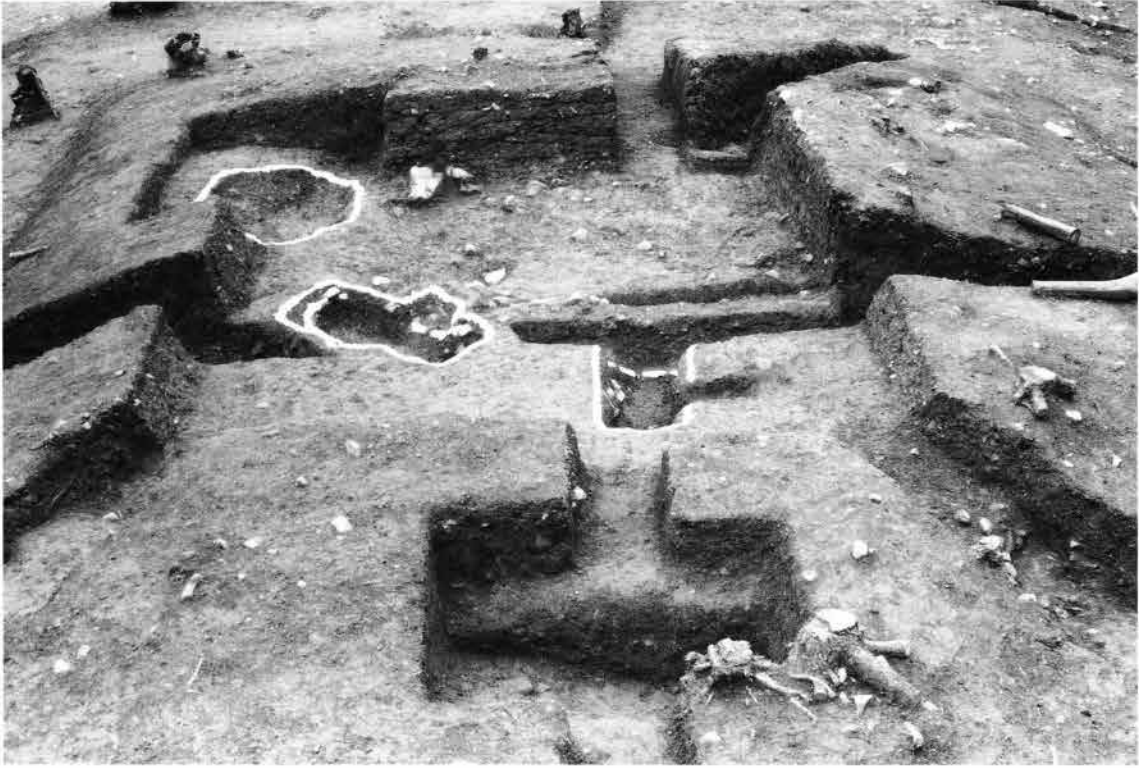
(2) 主体部検出状況（西から）



(1) 主体部検出状況 (西から)



(2) 主体部全景 (西から)



(1) 下層遺構検出状況（西から）

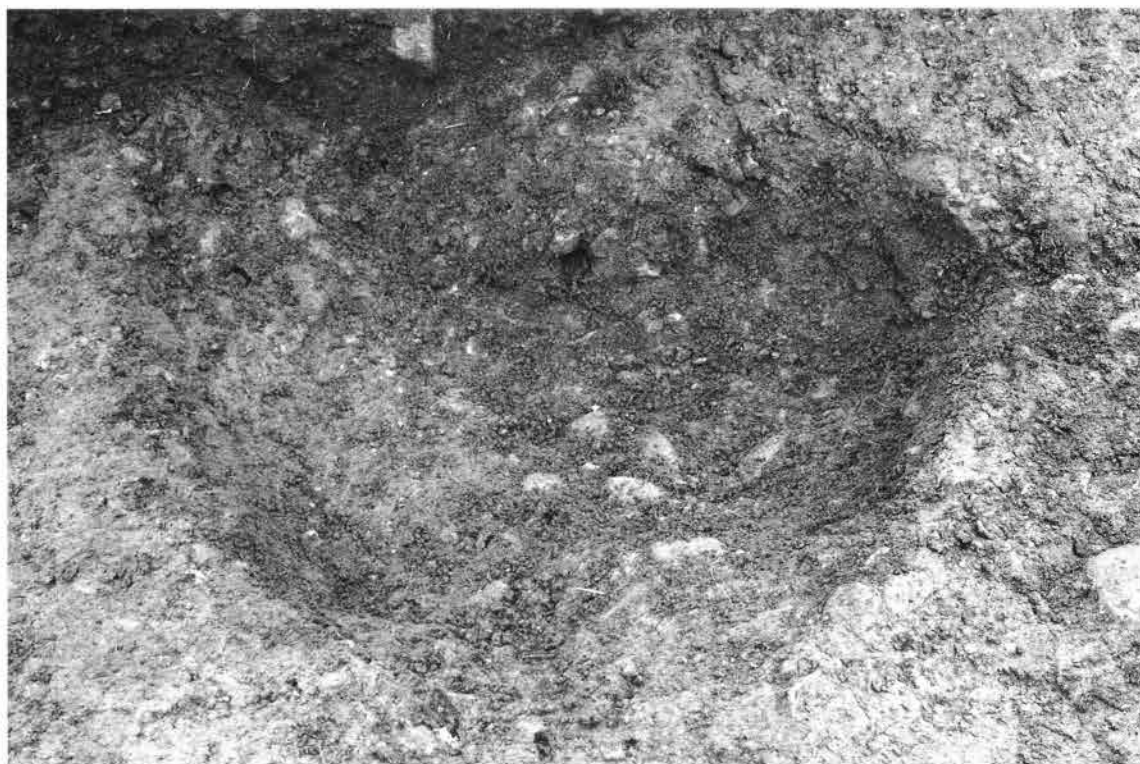


(2) 土坑（SK 05）検出状況（南から）





(1) 上面土器取り上げ後の状況（西から）



(2) 土坑（SK 05）完掘状況（西から）



1



5



4



8



11 a



10



11 b



12

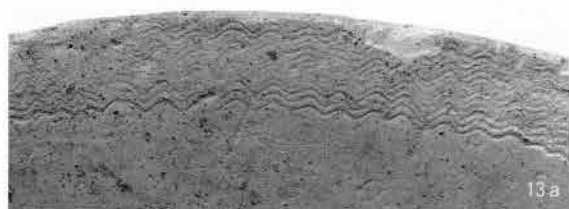
図版第7 今林古墳



13



7



13a



13b



3



9



6

図版第8 沢ノ谷遺跡



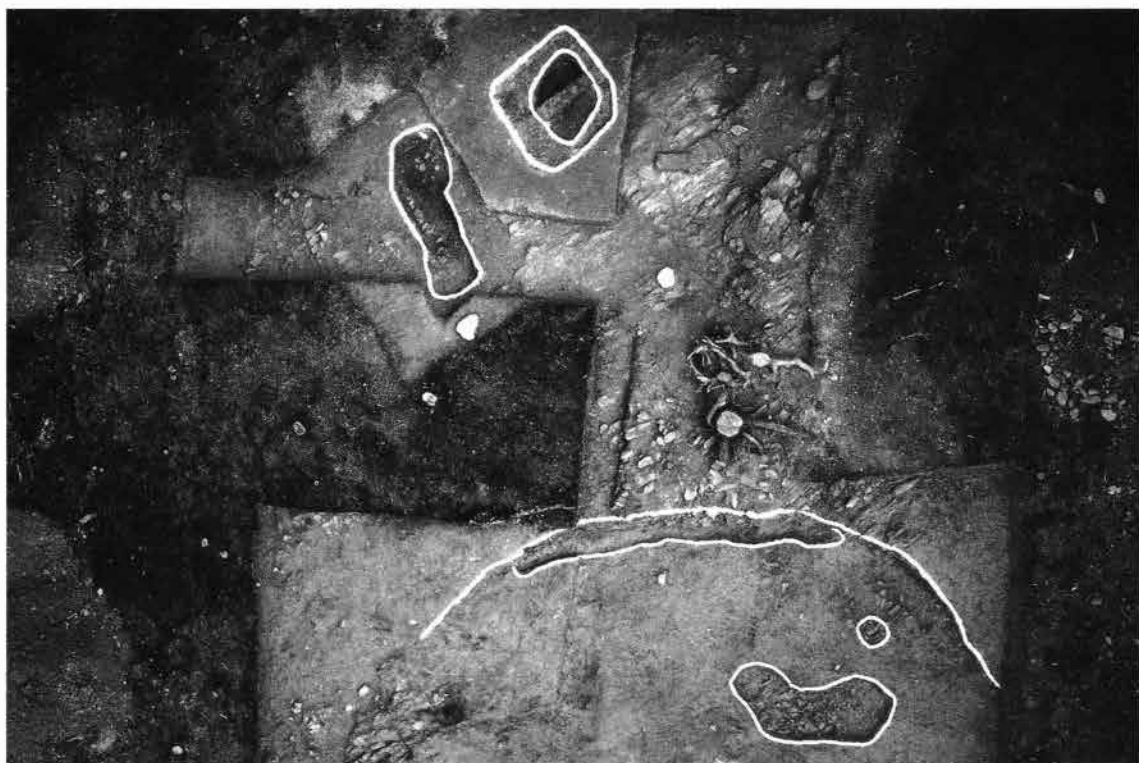
(1) 遺跡遠景（北東から）（矢印が調査地）



(2) 調査前の状況（北西から）



(1) 調査地全景（北西から）



(2) 遺構検出状況（上から）



(1) 竪穴式住居跡 (SH 04) 検出状況 (北から)



(2) 竪穴式住居跡 (SH 04) 検出状況 (南から)



(1) 土壇墓 (SK 02) 遺物出土状況 (北西から)



(2) 土壇墓 (SK 02) 完掘状況 (北西から)



1



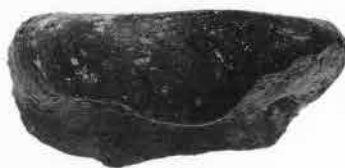
5



2



7



4



3



8





(1) 調査前全景 (南東から)



(2) 調査前全景 (右下が北)



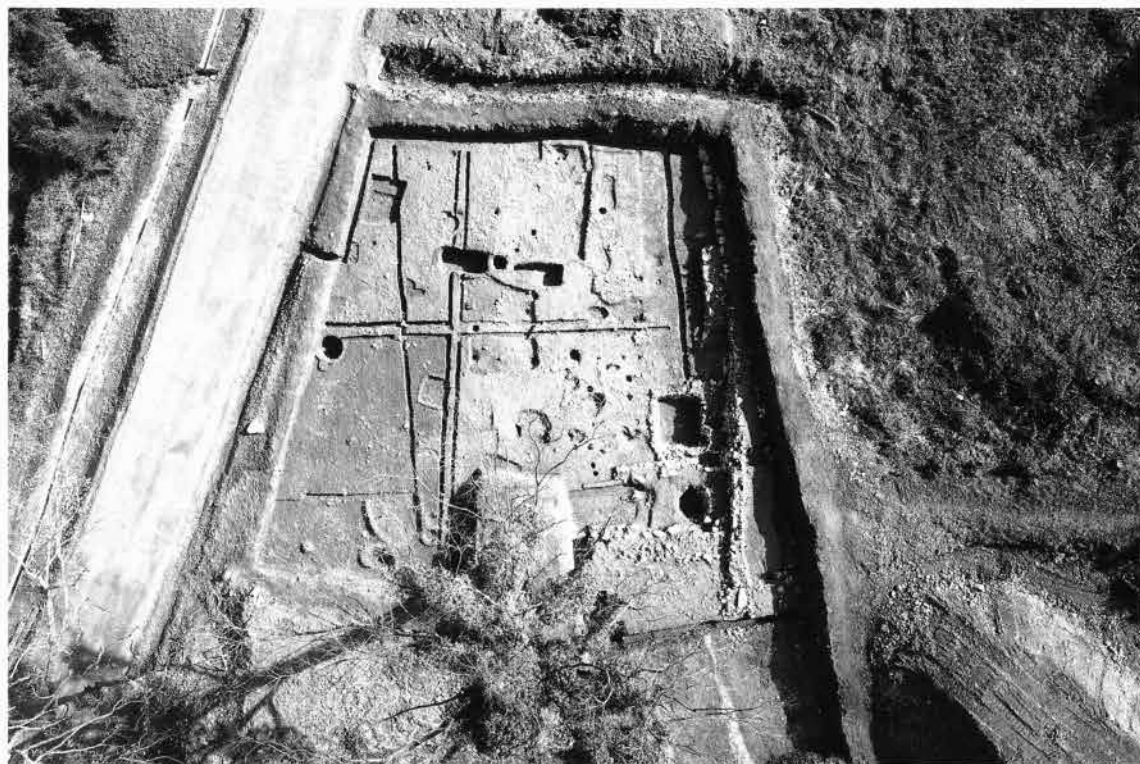
(1) 調査前全景（北西から）



(2) 調査地遠景（北から）



(1) 第1・6地点 調査前全景（南東から）



(2) 第6地点 全景（左下が北）



第6地点(北東から)



(1) 第1地点 全景（北西から）



(2) 第6地点 土坑群（北から）



第6地点検出遺構（東から）



第6地点検出遺構(北から)



(1) 第6地点 土坑 SK 07 (北東から)



(2) 第6地点 土坑 SK 06 (南西から)





(1) 第6地点 井戸 SE 33 (北東から)



(2) 第6地点 井戸 SE 33 (北東から)



(1) 第6地点 石垣54 (北西から)



(2) 第6地点 石垣54 (北東から)



(1) 第3地点 全景（北西から）



(2) 第3地点 全景（北東から）



(1) 第3地点 井戸 SE 501 (北東から)



(2) 第3地点 井戸 SE 801 (北東から)



(1) 第3地点 石臼状石製品 (南東から)



(2) 第3地点 曲輪8・9 (北から)



(1) 第3地点 (北東から)



(2) 第3地点 (北から)



(1) 第7地点 調査前全景 (北西から)



(2) 第7地点 調査地全景 (右下が北)



第7地点(北東から)





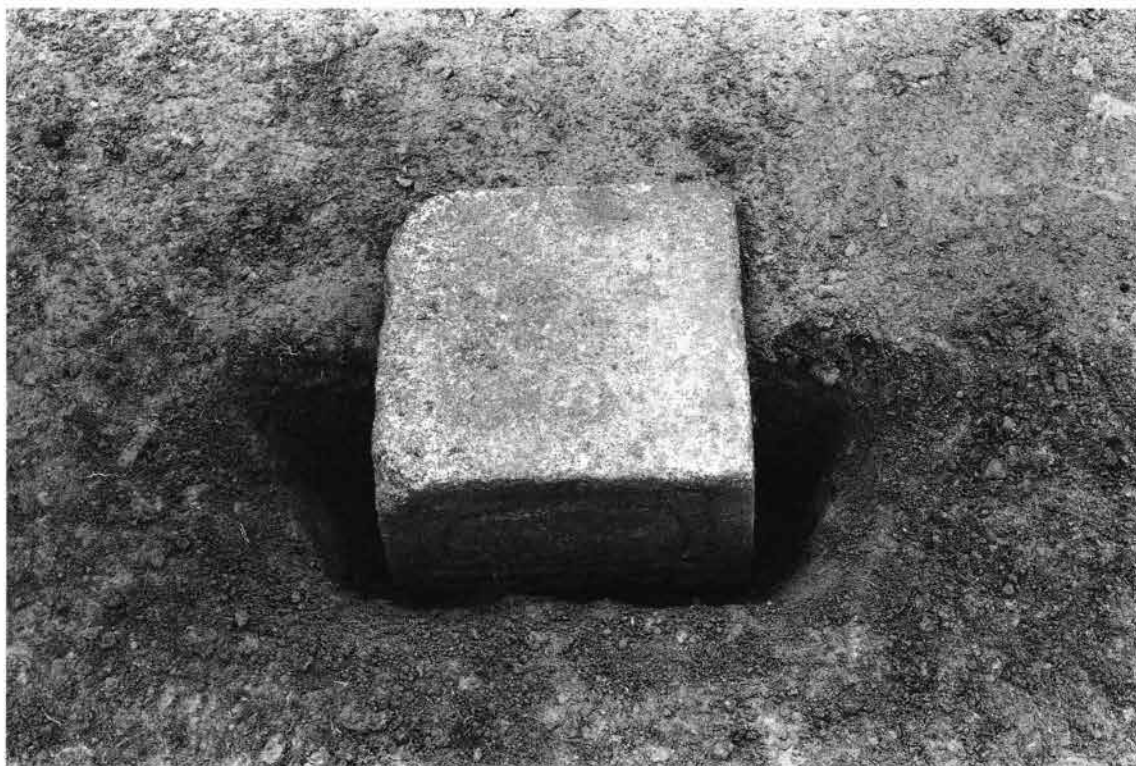
(1) 第7地点 石垣 (北から)



(2) 第7地点 曲輪4 (東から)



(1) 第7地点 曲輪4 (南東から)



(2) 第7地点 曲輪4 礎石 (北東から)



(1) 第8地点 調査前全景（南東から）



(2) 第8地点 全景（左下が北）



(1) 堂山2号窯全景（北から）



(2) 堂山2号窯遺物出土状況（北から）



(1) 堂山2号窯 (北から)



(2) 堂山2号窯窯体断面 (北東から)



309



11



58



22



35



217



7



336



10



188



244



155



367



191

121



196

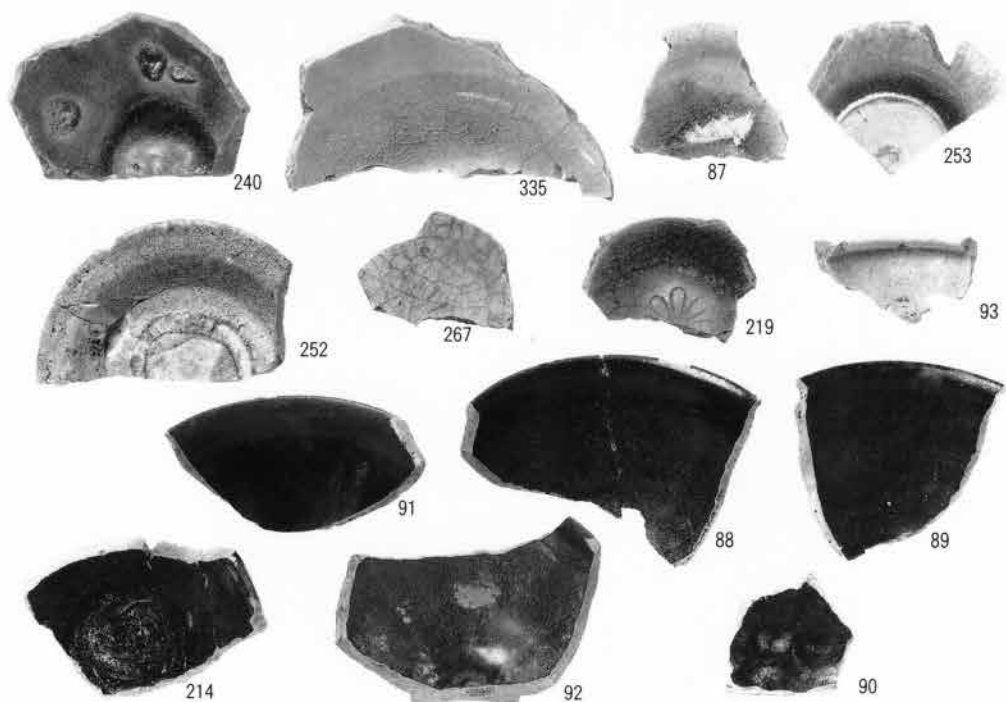


232

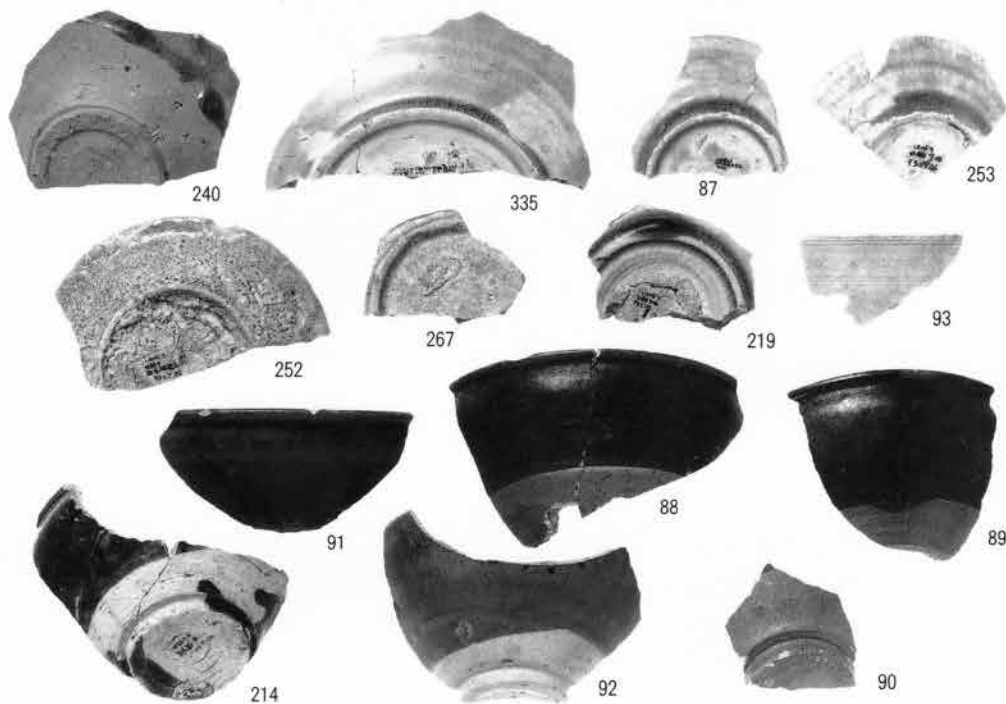


246



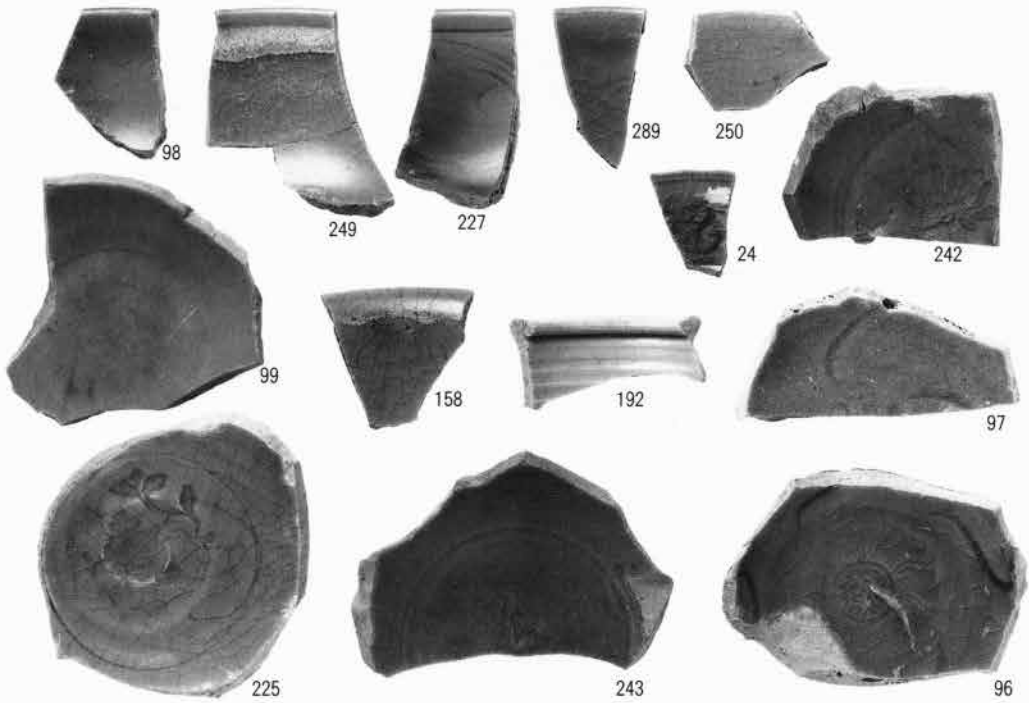


内面

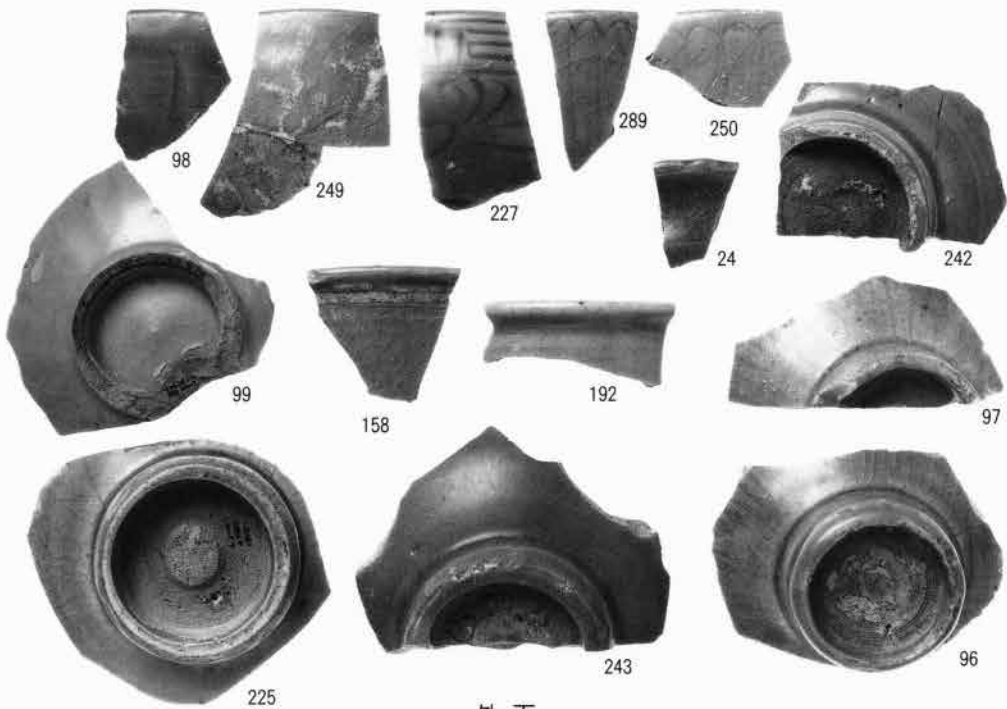


外面

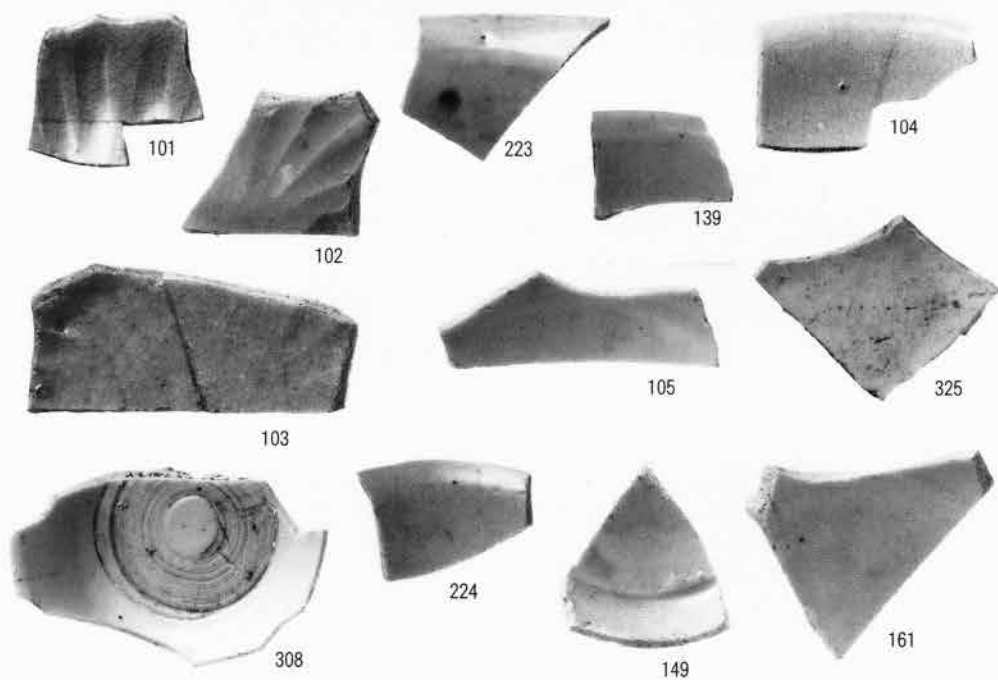




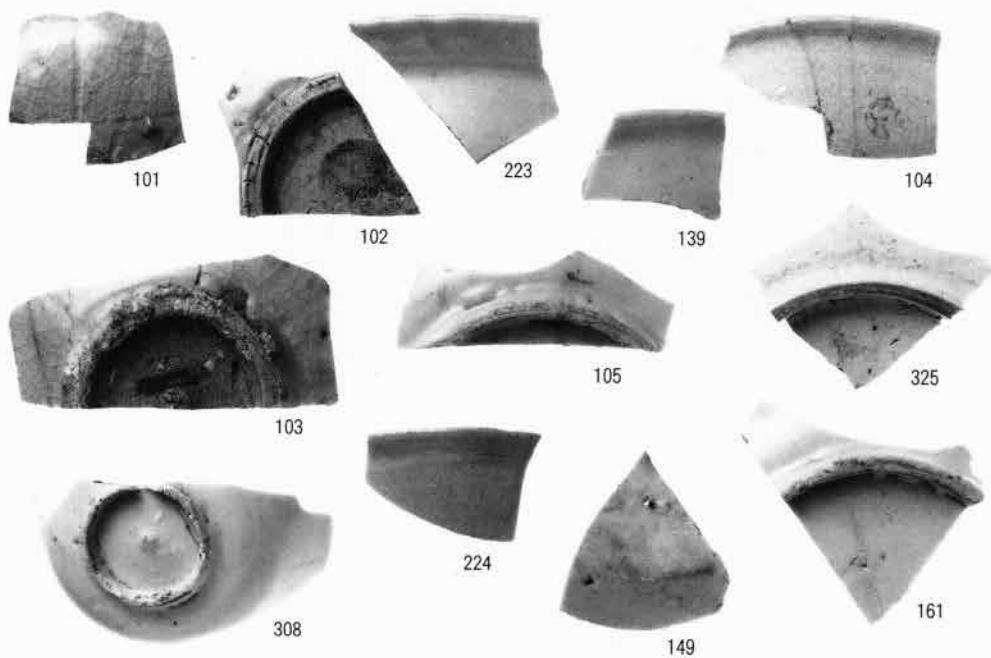
内面



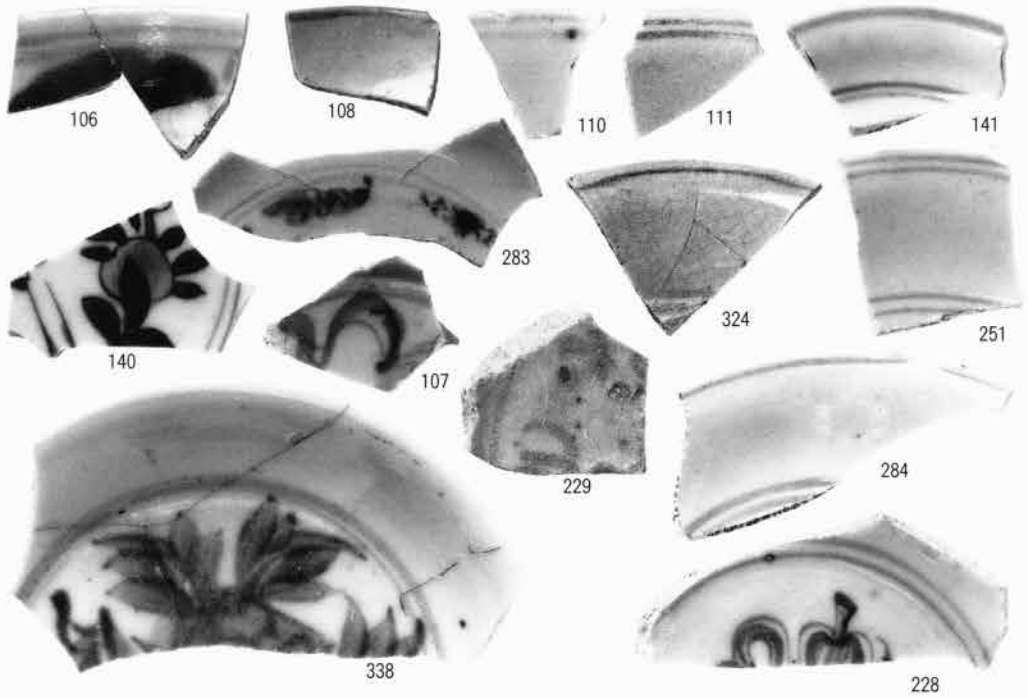
外面



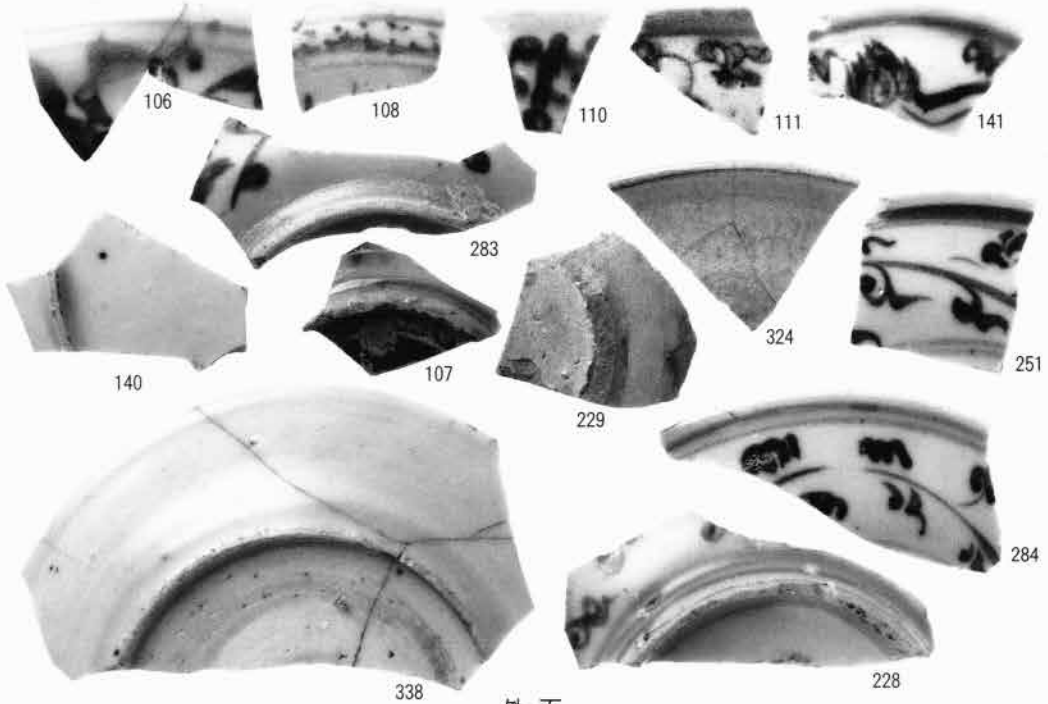
内面



外面



内面



外面



385



392



379



398



423



404



426



427

(1) 出土遺物(7) 春日神社跡



431



444



438



456



448

(2) 出土遺物(8) 堂山2号窯



(1) 調査地遠景（北から）



(2) 調査地全景（北から）



(1) 調査地遠景 (南から)



(2) 横穴式石室検出状況 (南東から)



(1) 石室奥壁部 遺物検出状況 (南東から)



(2) 石室奥壁部 玉類検出状況 (南東から)



(1) 石室奥壁部 遺物検出状況（上から）



(2) 石室右袖部 遺物検出状況（北から）





(1) 石室左袖部 遺物検出状況 (南から)



(2) 石室羨道部 遺物検出状況 (南から)



(1) 石室羨道部 遺物検出状況 (西から)



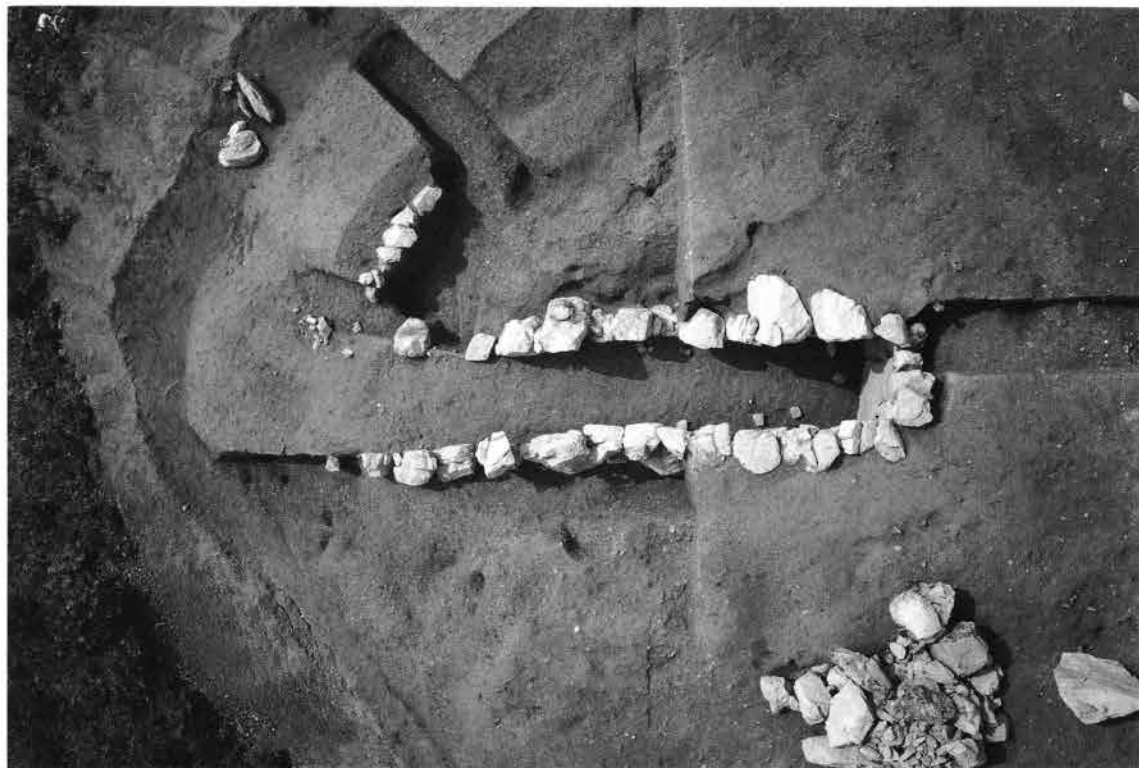
(2) 石室羨道部 遺物検出状況 (南から)



(1) 墳丘北側墓室内裏込め土堆積状況（西から）



(2) 墳丘南側墓室内裏込め土堆積状況（西から）



(1) 横穴式石室及び外護列石検出状況（上から）



(2) 横穴式石室及び外護列石検出状況（西から）



1



7



2



8



3



9



4



10



5



11



6



12



13



19



14



20



15



21



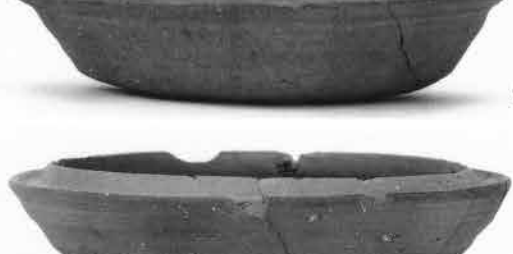
16



23



17



24



18



26



27



35



28



36



29



37



30



38



31



39



32



40



33



41



34



42



43



44



45



46



47



48



49



52



53



54





51



56



55



58



59



70



71



63



64



65

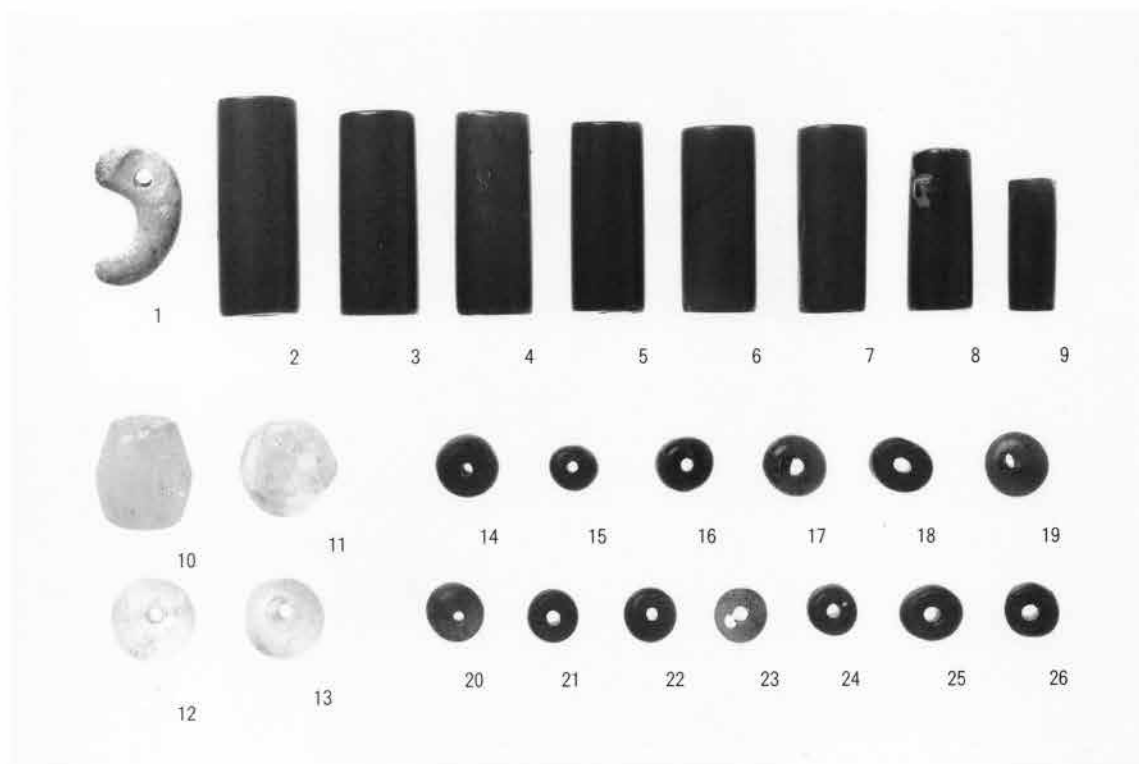


66





(1) 出土遺物(7) 須恵器甕・土師器高杯



(2) 出土遺物(8) 玉類



出土遺物(9) 刀子・鉄鏃



(1) 神宮谷古墳群近景 (平成4年度調査時)



(2) 調査開始状況 (平成4年度調査時)



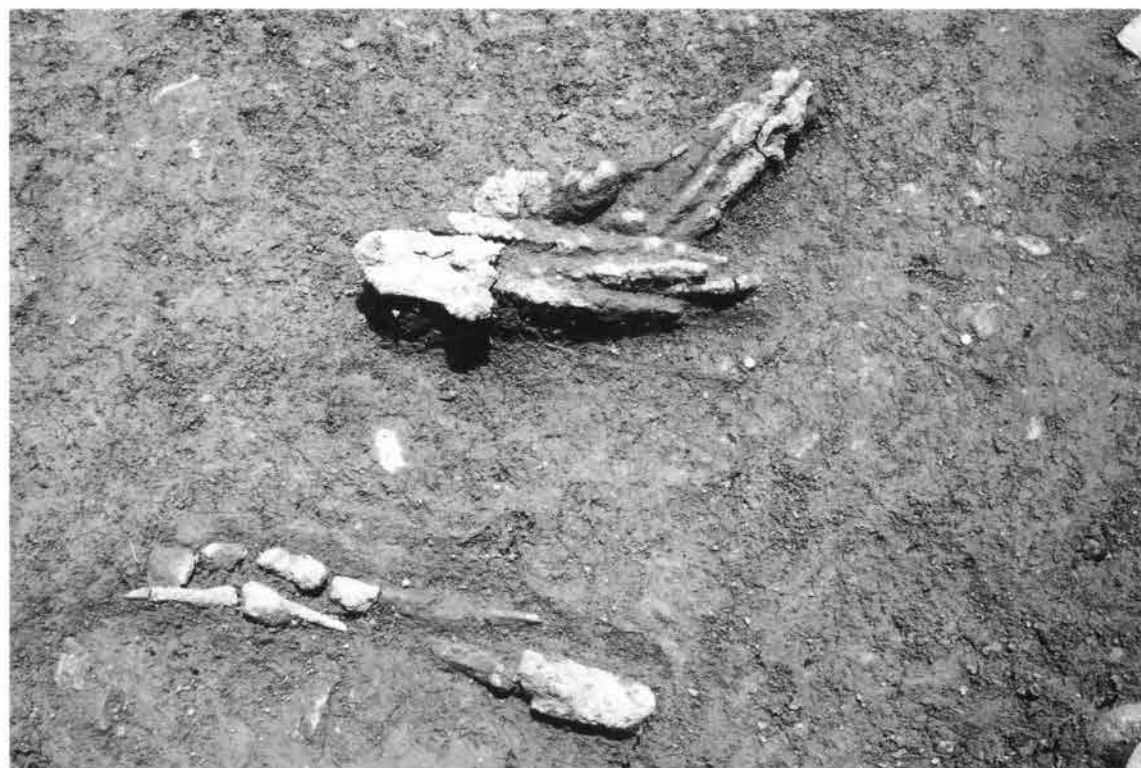
(1) 石室内遺物出土状況



(2) A4区須恵器出土状況(1) (南西から)



(1) A4区須恵器出土状況(2) (北西から)



(2) B4区鉄鏝出土状況 (北西から)



(1) B4区玉類出土状況（北西から）



(2) B4区鉄鏃出土状況（南東から）





(1) B1区土製練玉出土状況(1) (南東から)



(2) B1区土製練玉出土状況(2) (北東から)



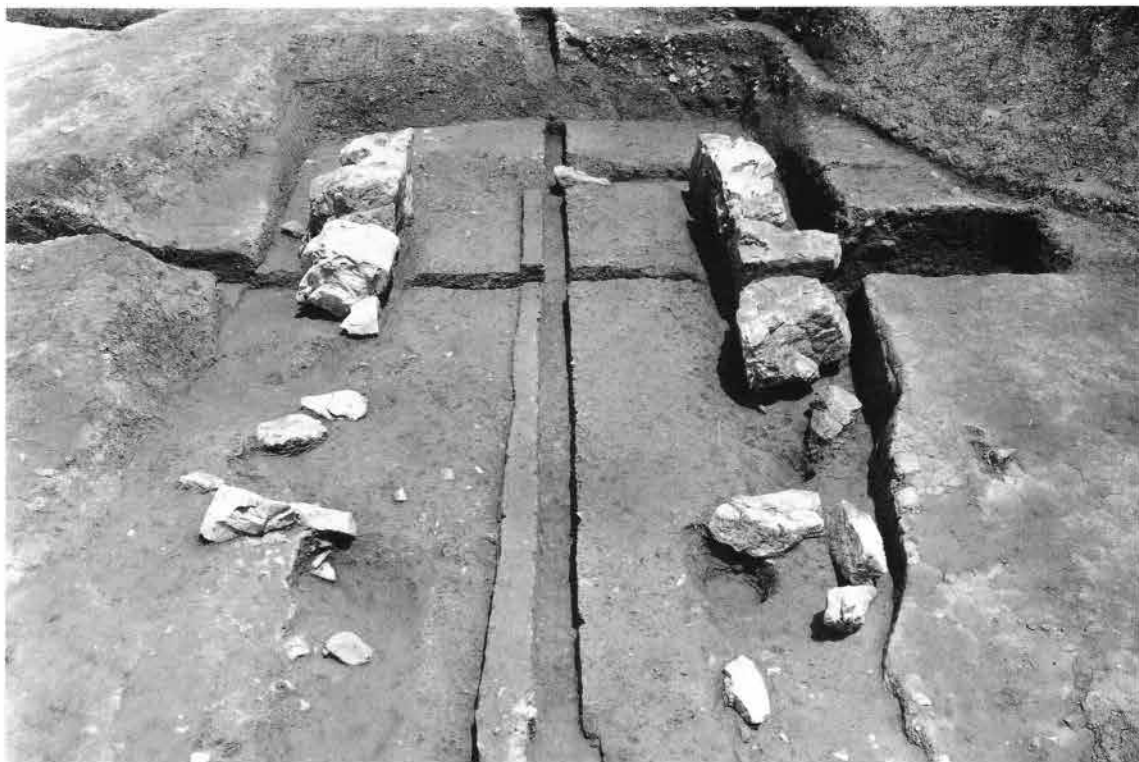
(1) 石室内棺台出土状況(1)



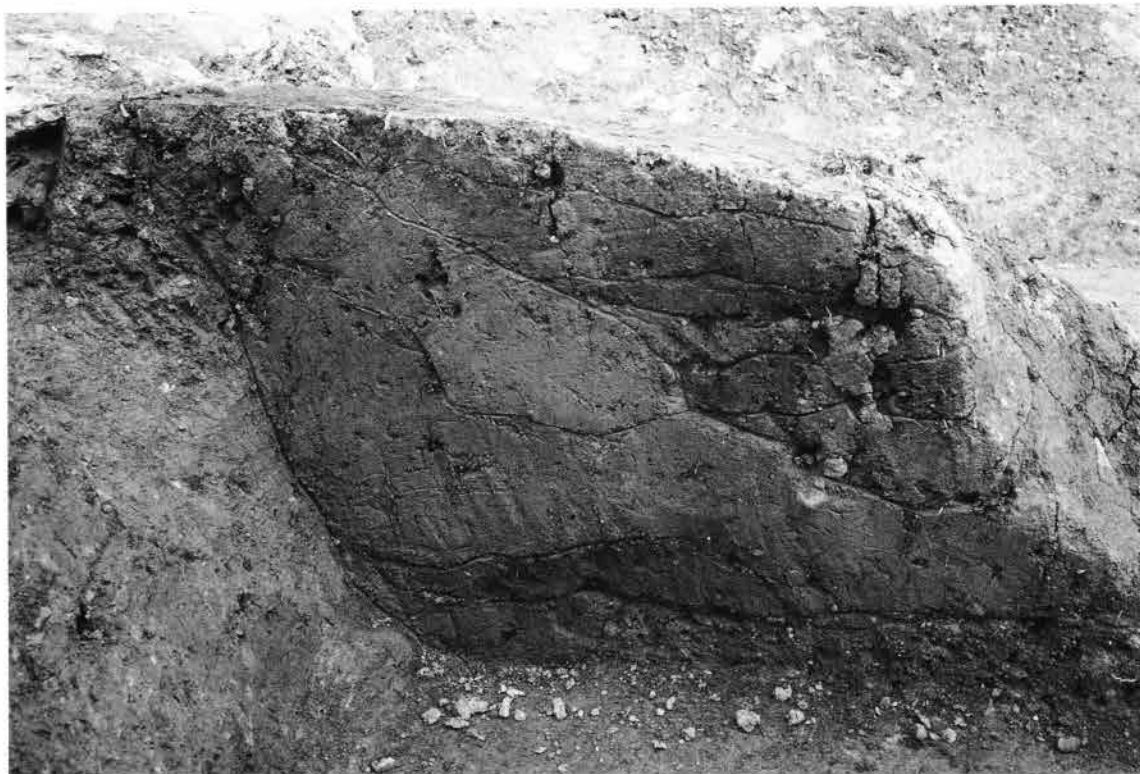
(2) 石室内棺台出土状況(2)



(1) 袖石抜き取り痕跡



(2) 石室完掘状況



(1) 奥壁部墓壇裏込め土



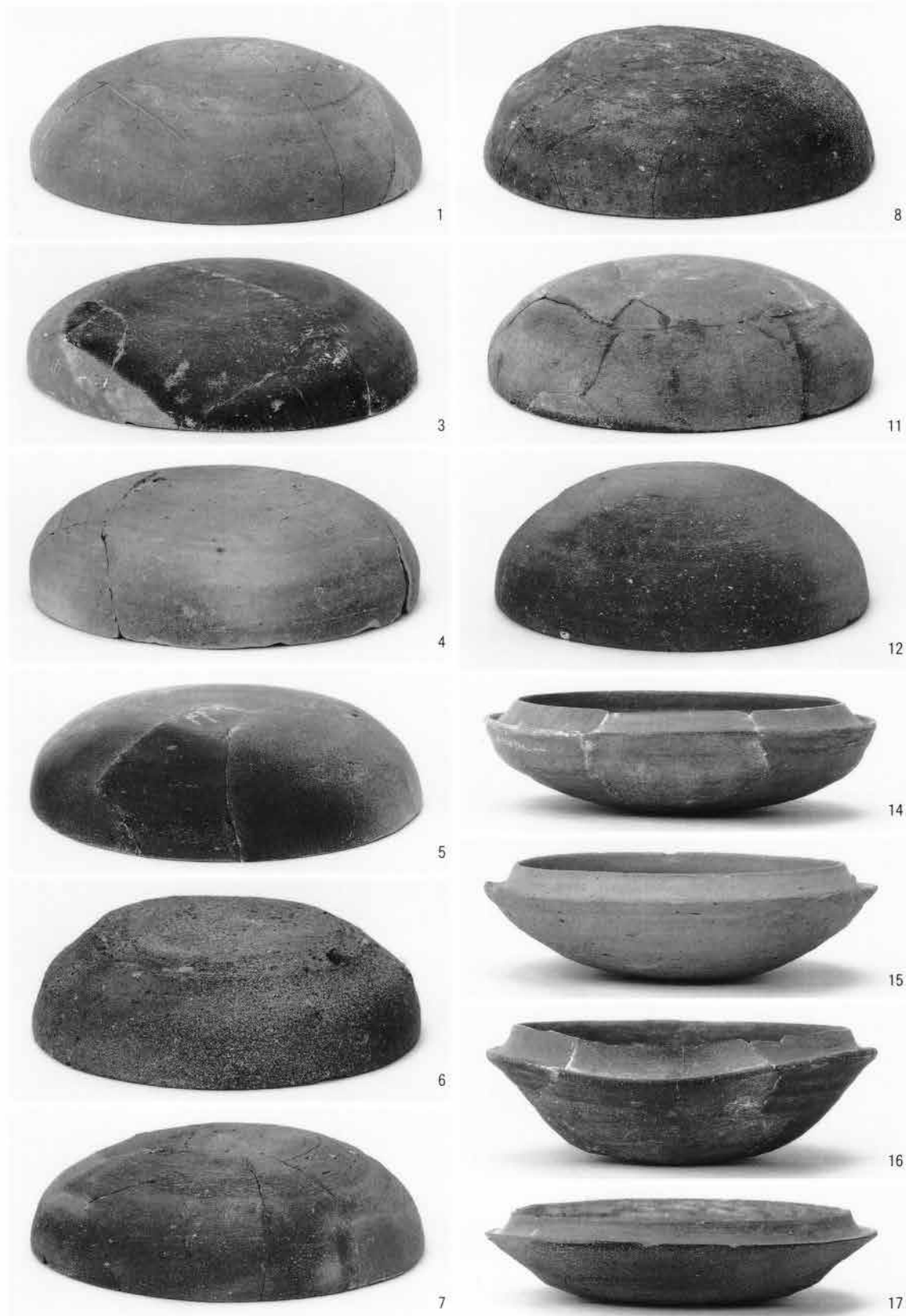
(2) 西壁部墓壇裏込め土



(1) 石室東壁基底石



(2) 石室西壁基底石



出土遺物(1) 須恵器 蓋杯



18



26



19



27



20



28



21



29



22



31



23



32



24



33



25



34



39



35



37



40



38



42





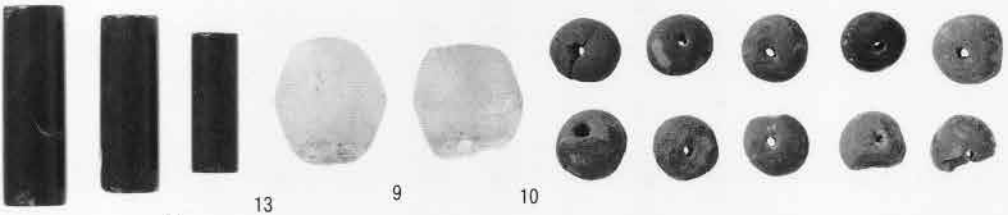
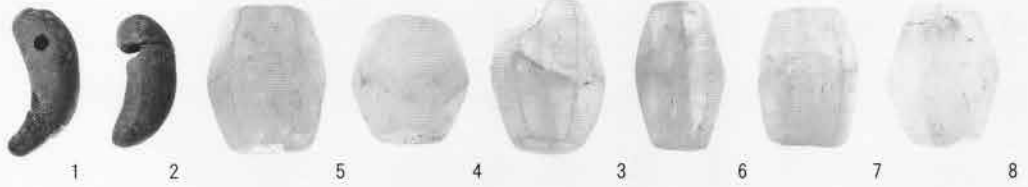
43

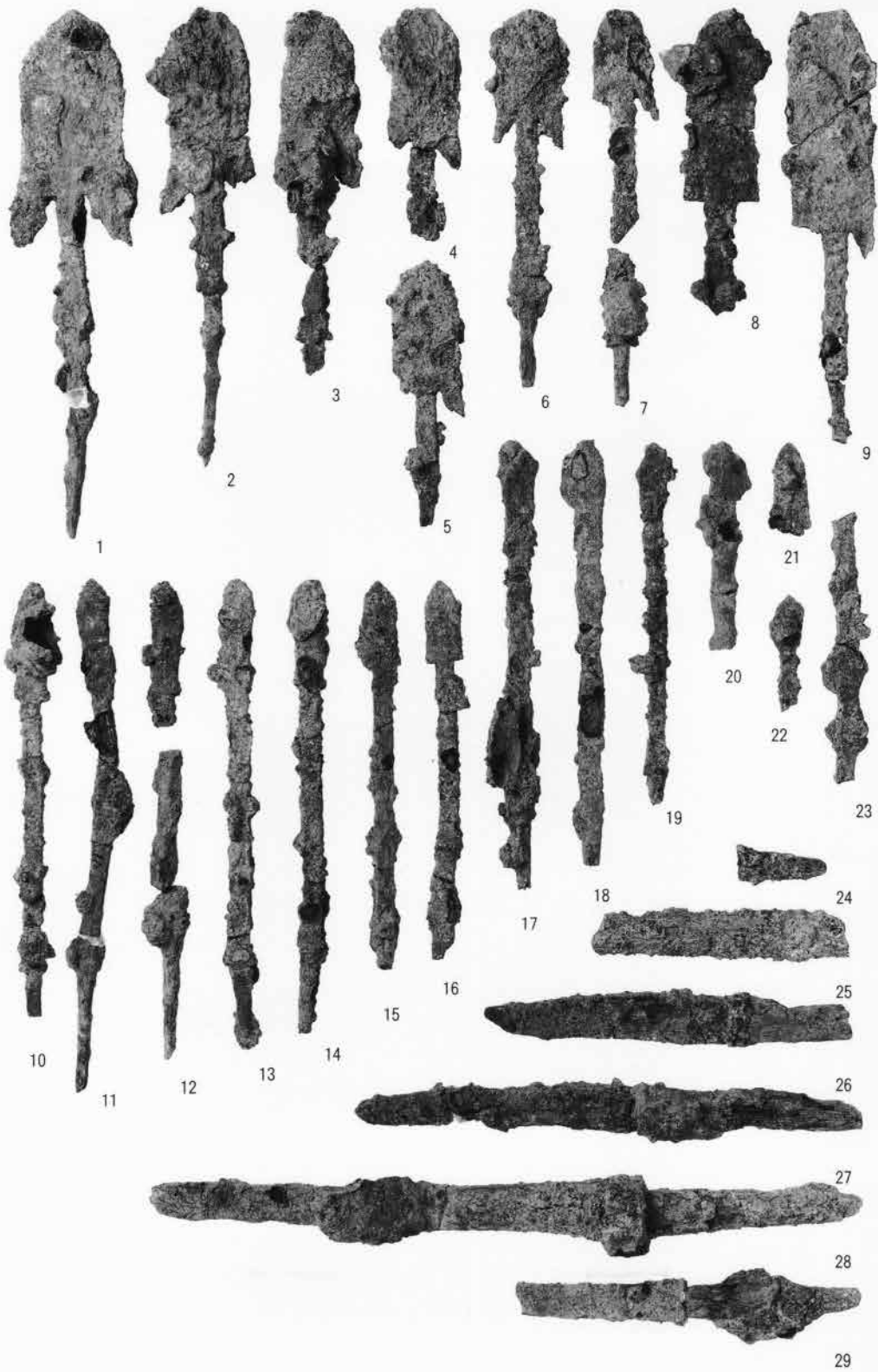


45



44







(1) 調査地全景（西から）



(2) ジンド古墳（A地区）近景（西から）



(1) 石室内掘削状況（北から）



(2) 石室壁体出土状況（西から）



(1) 石室近景 (北から)



(2) 石室内遺物出土状況 (北から)



(1) 石室奥壁 遺物出土状況 (北から)



(2) 奥壁東側A1区 遺物出土状況 (北から)



(1) B4区 須恵器出土状況 (東から)



(2) B3・B4区 鉄刀出土状況 (東から)



(1) B4区 須恵器出土状況（東から）



(2) A3区 遺物出土状況（西から）





(1) B2区 馬具出土状況（北から）



(2) A4区 鉄器出土状況（東から）



(1) 墓道部土層堆積状況（東から）



(2) 閉塞石出土状況（西から）



(1) 墳丘東側断ち割り（盛り土堆積状況（北から））



(2) 墳丘南側断ち割り（墓壙検出状況（西から））



(1) 墳丘東側断ち割り（裏込め土検出状況（北から））



(2) 墳丘西側断ち割り（裏込め土検出状況（北から））



(1) 石室内棺台出土状況



(2) 石室内排水施設出土状況



(1) 奥壁東隅石室構築状況



(2) 墳丘北東部 杭跡検出状況



(1) ジンド古墳石室完掘状況（北西から）



(2) ジンド古墳近景（南東から）

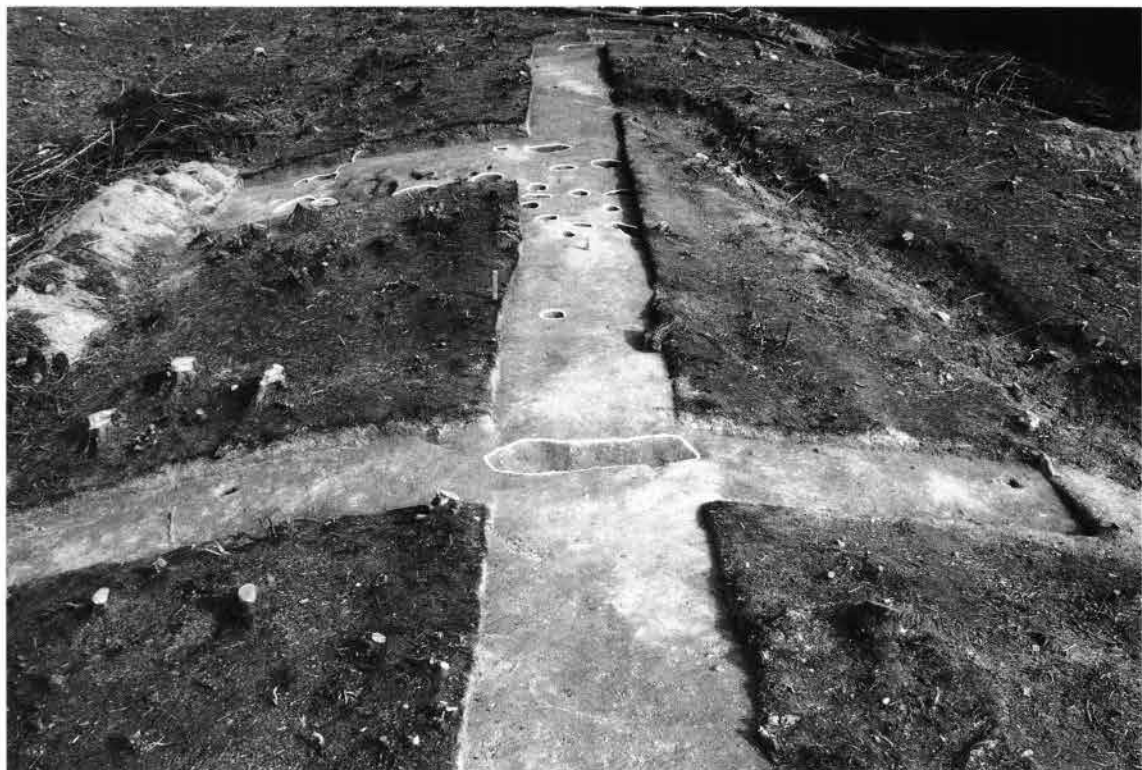


(1) C地区遺構検出状況(1) (東から)



(2) C地区遺構検出状況(2) (南東から)





(1) D地区トレンチ（北西から）



(2) SK 01遺物出土状況



(1) B地区トレンチ配置状況(南から)



(2) 調査地近景(東から)



2



10



3



11



4



12



5



13



7



14



8



15



16



23



17



24



19



25



20



26



21



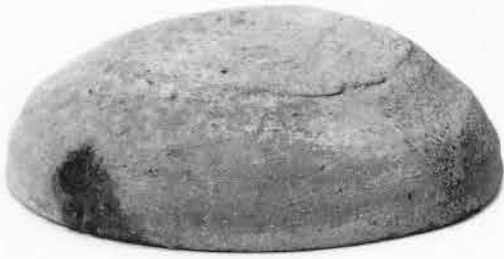
27



22



28



29



30



32



34



35



36



37



38



39



40



41



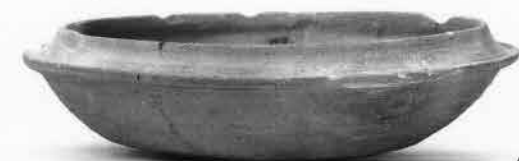
42



43



44



45



46



54



47



55



48



56



49



57



50



59



51



60



52



62



53



63



64



65



70



67



71



68



69



72



74



73



75



76







77



81



a



b



87

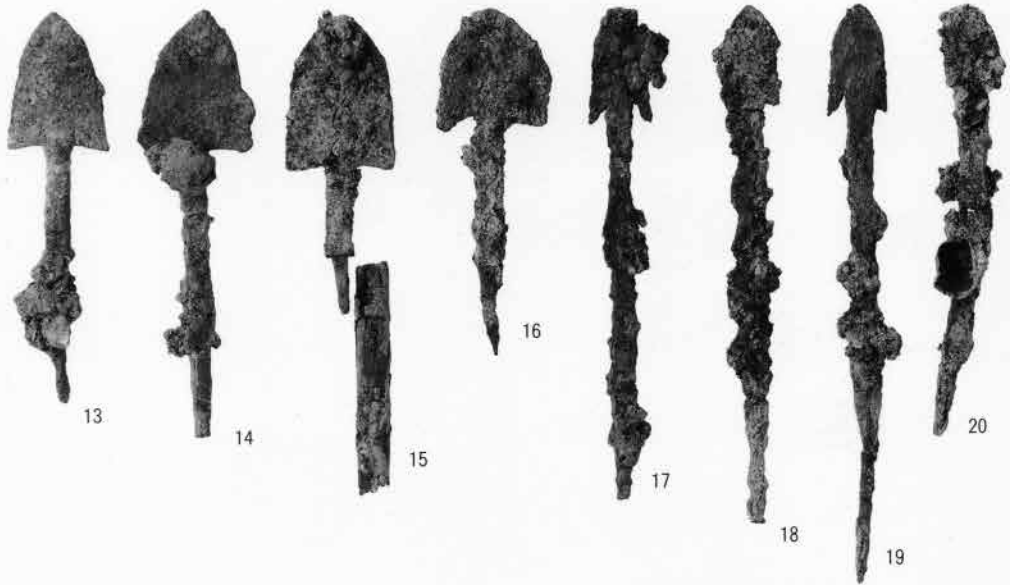
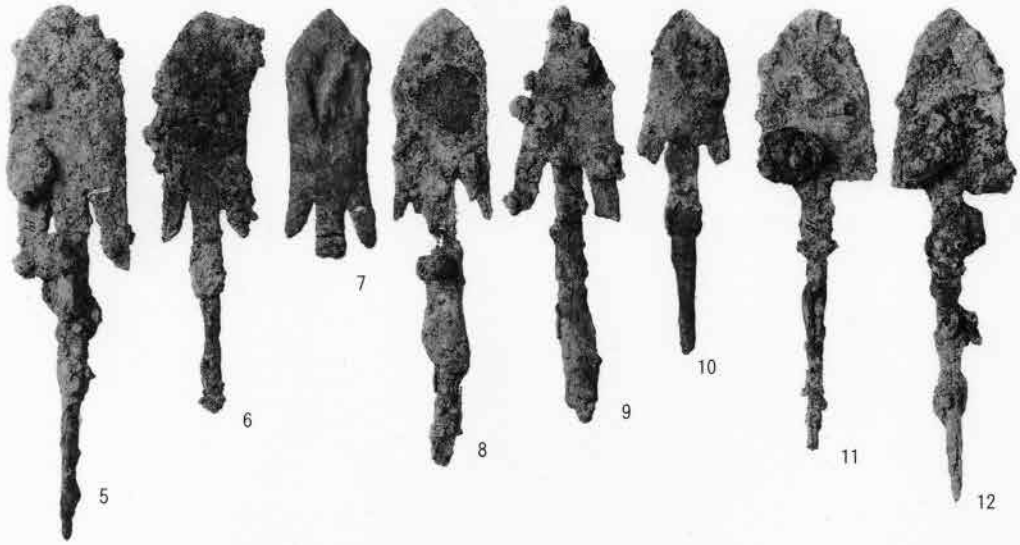


78



79







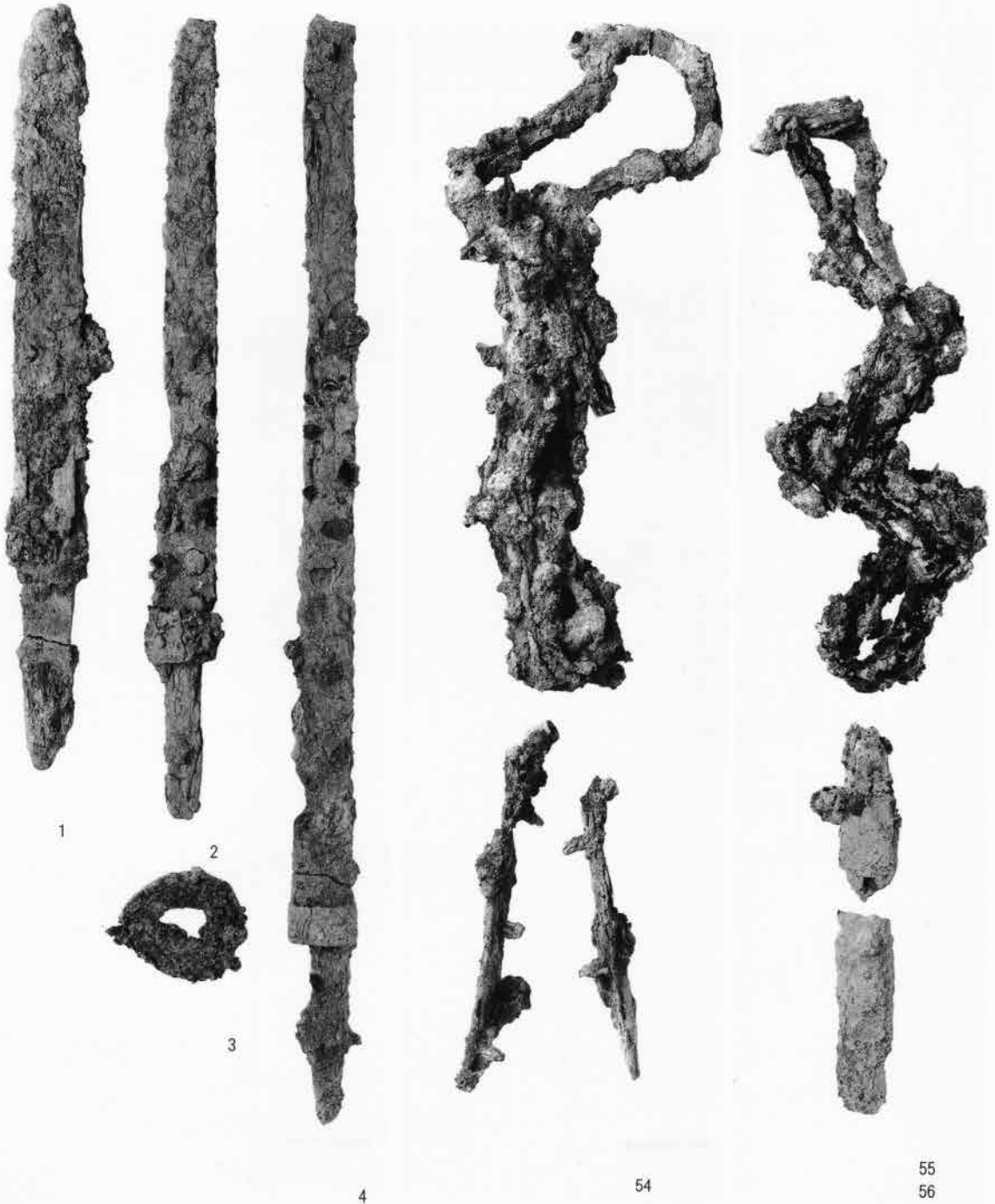
出土遺物(10) 鉄鏃・刀子・馬具



52



53





(1) 調査前全景 (南から)



(2) Bトレンチ全景 (東から)



(1) 調査前風景



(2) 調査地内祠跡石組検出状況





(1) 調査前全景（南から）



(2) 調査前全景（東から）



(1) A-1 地区全景 (右が北)



(2) A-1 地区 SD101 土層断面 (南東から)



(1) A-2地区全景 (右が北)



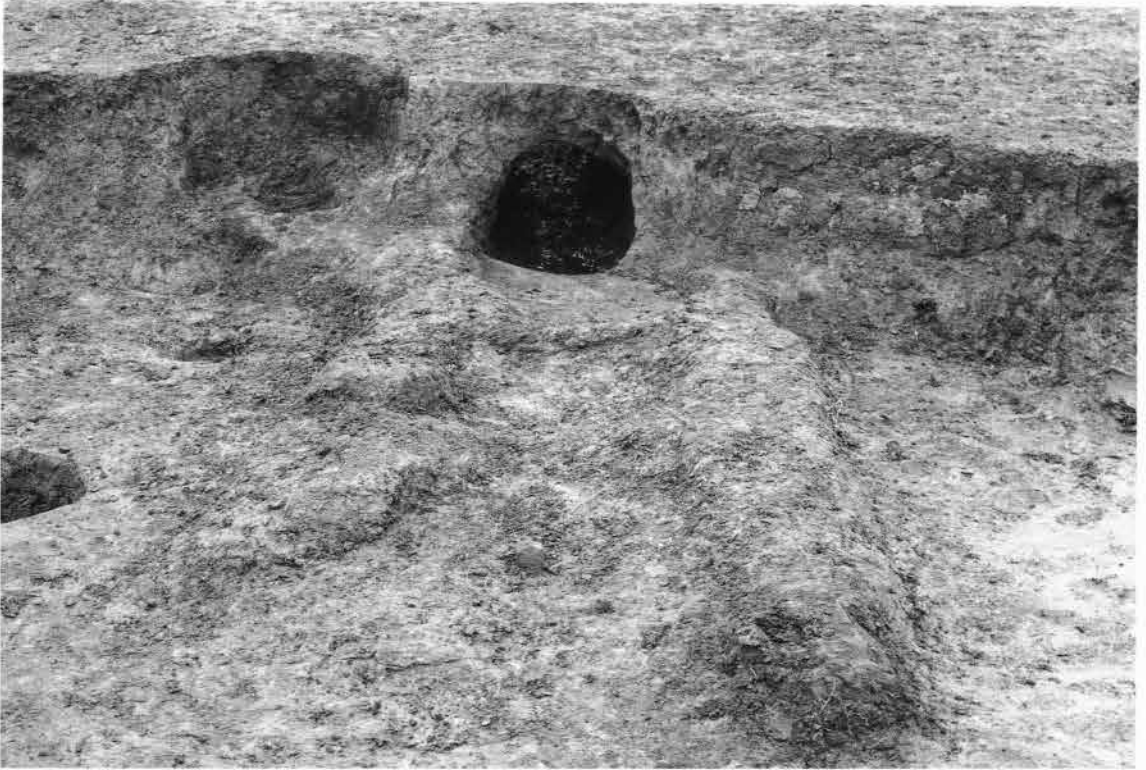
(2) A-2地区北半部 (右が北)



(1) A-2地区 SH 204(手前)・201(中)・202(奥) 全景(北から)



(2) A-2地区 SH 202(手前)・201(奥) 全景(南から)



(1) A-2地区 SH 202竈全景（東から）



(2) A-2地区 SK 01完掘状況



(1) A-2地区SK 02完掘状況



(2) A-2地区SH 212土器出土状況(南から)



(1) A-2地区 SH 205土器出土状況



(2) A-2地区 SD 12土器出土状況 (北から)

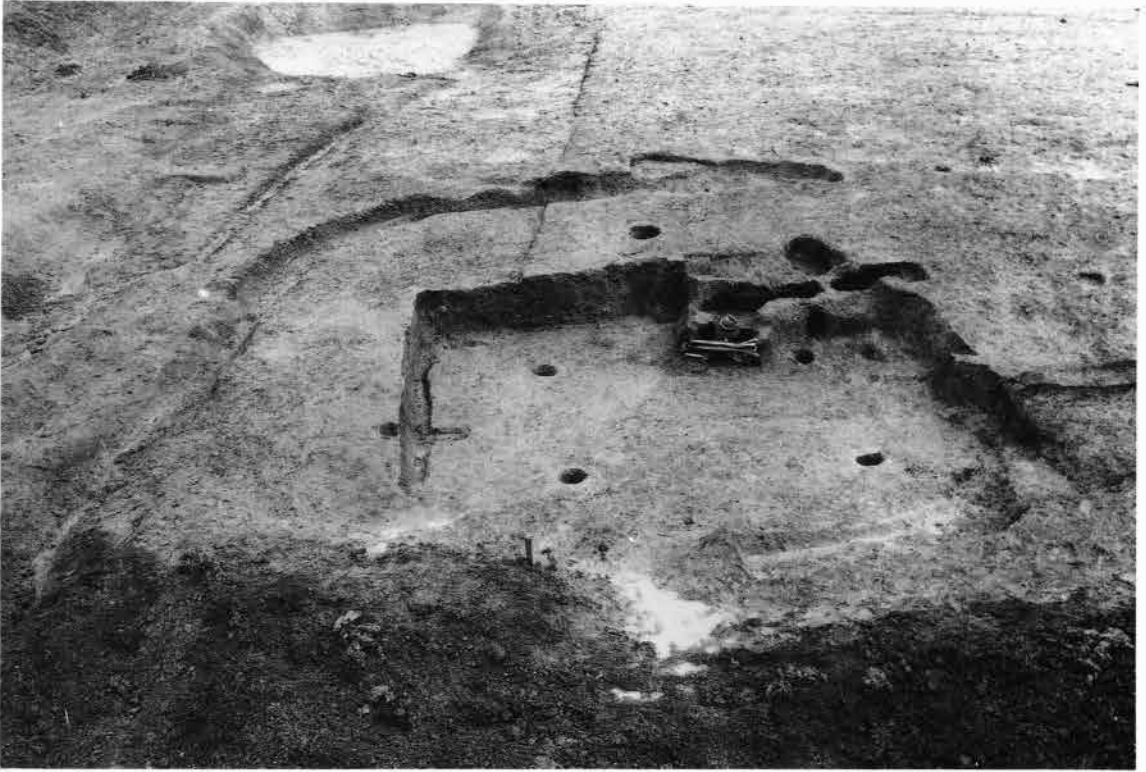


(1) A-3地区全景



(2) SH 308(左)・SH 309(右) 全景





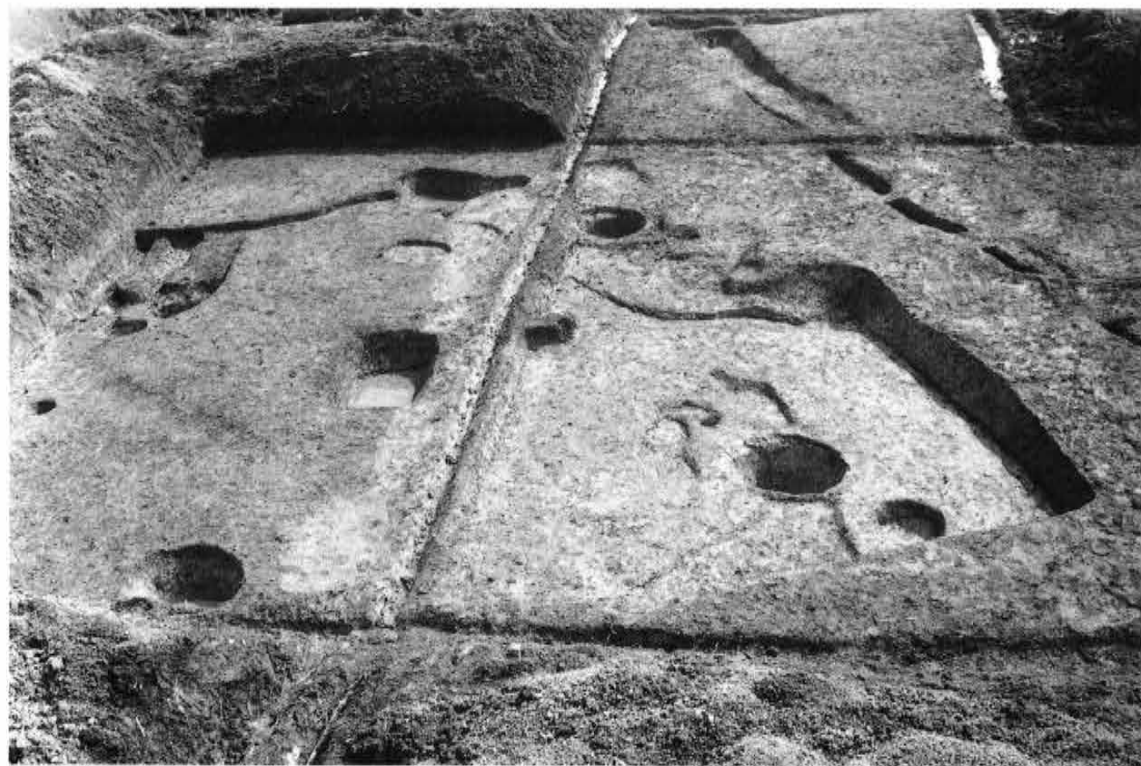
(1) A-3地区 SH 308全景 (西から)



(2) A-3地区 SH 308竈近景 (西から)



(1) B地区全景 (右が北)



(2) B地区 SHB 10全景 (北から)



(1) B地区 SDB 02甎出土状況（東から）



(2) B地区落とし穴状土坑 SKB 01（東から）



26



27



28



32



44



45



71



77



78



81



49



46



54



50



53



56



62



63



68



66



91



106



90



108



92



104

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	62							
編著者名	引原茂治・柴 暁彦・三好博喜・野島 永・尾崎昌之							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 向日市寺戸町南垣内40-3 TEL 075(933)3877							
発行年月日	西暦 1995 年 3 月 27 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いまばやしこ ふん 今林古墳	ふないぐんその べちょううちば やし 船井郡園部町内 林	401	71			19930426 ～ 19930715	600	道路建設
さわのたにい せき 沢ノ谷遺跡	ふないぐんやぎ ちょうたまのい さわのたに 船井郡八木町玉 ノ井沢ノ谷	402	12			19930719 ～ 19930910	200	道路建設
やぎじょうあ と 八木城跡	ふないぐんやぎ ちょうほんごう 船井郡八木町本 郷	402	27			19920518 ～ 19930305 19930407 ～ 19930924	4,100	道路建設
くわがいかみ いせき 桑飼上遺跡	まいづるしくわ がいかみ 舞鶴市桑飼上	202	198			19930616 ～ 19930628	200	道路建設
やまねこふん 山根古墳	まいづるしじと う 舞鶴市地頭	202	114			19930709 ～ 19931022	500	道路建設
しんぐうだに 4 号ふん 神宮谷 4 号墳	あやべしべっ しよちょうしん ぐうだに 綾部市別所町神 宮谷	203	104			19930419 ～ 19930514	100	道路建設

じんどこふん ジンド古墳	あやべしうちく いちちょう・かね ごちちょう 綾部市内久井 町・金河内町	203	101			19930512 ～ 19931014	720	道路建設
いけのたにい せき 池ノ谷遺跡	あやべししち ひゃっこくちよ ういけのたに 綾部市七百石町 池ノ谷	203				19931221 ～ 19940121	400	道路建設
きさかこほ 木坂古墓	あやべししち ひゃっこくちよ うきさか 綾部市七百石町 木坂	203				19940118 ～ 19940121	32	道路建設
しちひゃっこ くいせき 七百石遺跡	あやべししち ひゃっこくちよ うひがしなかの 綾部市七百石町 東中野	203	153			19930802 ～ 19940304	5,000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今林古墳	古墳	古墳初	土壙墓・土器棺墓	土師器	
沢ノ谷遺跡	集落跡・古墓	弥生中期・奈良	竪穴住居・墓壇	弥生土器・須恵器	遺跡地図の 名称は、大 鳥羽池古墳
八木城跡	城館跡	室町～安土・桃山	郭・石垣・井戸	土器・国産陶器・ 輸入磁器	
桑飼上遺跡	集落跡	縄文～奈良	なし	須恵器	
山根古墳	古墳	古墳後期	横穴式石室	須恵器・土師器・ 玉	
神宮谷4号墳	古墳	古墳後期	横穴式石室	須恵器・土師器・ 玉	
ジンド古墳	古墳	古墳後期	横穴式石室	須恵器・土師器・ 鉄製馬具	
池ノ谷遺跡	散布地	不明	ピット	なし	
木坂古墓	祠跡	近世	小祠基壇	近世磁器片	
七百石遺跡	集落跡	弥生末～古墳後期	竪穴住居・溝・落と し穴状土坑	土師器・須恵器	



京都府遺跡調査概報 第62冊

平成7年3月27日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel (075)441-3155 (代)